

実在する集団における内集団協力 とその心理メカニズムの検討

2018 年度

(2018 年 12 月 20 日)

人文科学研究科 心理学専攻

1682102

中川 裕美

指導教員 中西 大輔

広島修道大学大学院

実在する集団における内集団協力とその心理メカニズムの検討

目次

本研究の要約	vi - x
--------------	--------

序章

研究の背景	2-5
本論文の目的	6
本論文の構成	7-8

第1章 内集団ひいきに関する古典的な研究

第1節 個人の意識メカニズムからのアプローチ

権威主義的パーソナリティ	10-12
欲求不満攻撃仮説	12-15
相対的剥奪理論	15-16
資源動員論	16-17

第2節 集団構造からのアプローチ

現実的葛藤理論	18-19
相互作用の予期	19-21
システム正当化理論の構築	21-26
自己の正当化	22-23
集団の正当化	23-24
システム正当化理論の提唱	24-26

第2章 内集団協力を説明する2つの理論

第1節 社会的アイデンティティ理論 (SIT)

現実的葛藤理論に対する批判	28-29
MGPの構築	29-34
内集団ひいきに影響する要因	33-34
SITの誕生	34-42
集団間の競争性	35-39
MGPにおける地位	39-41
実在集団における地位	41-42

第 2 節 閉ざされた一般互酬仮説 (BGR)

BGR の背景となる理論的立場：互惠的利他主義	44-46
BGR を実証した実験研究	46-49
報酬分配課題による検討	46-47
PD ゲームによる検討	47-49
BGR の誕生	49-51
BGR の提唱	49-50
BGR の頑健性	50-51
BGR の理論的基盤：社会的交換の感覚と互惠性	51-53

第 3 節 状況に応じて働く SIT と BGR の心理過程

状況要因の特定	54-58
相互依存性	54-55
外集団脅威	55-57

第 3 章 実在集団における内集団ひいきと関連変数

第 1 節 実在集団の特徴

同一化の強さ	61-63
ライバルに対する攻撃性	63-65
言語的な攻撃	63-64
フーリガンの原因	64-65
チームの勝利から得る栄光浴	65-66
葛藤に反応する身体的変化	66-69
集団内の互惠性	69-70

第 2 節 様々な実在集団における研究

SIT に基づく内集団ひいき	72-104
スポーツファン	73-75
国籍	75-77
使用言語	77
宗教	77-78
医療従事者	78-79
先行研究の問題点	79-80
両理論の妥当性を同時に検証した研究	81-84

第 4 章 実在集団を対象とした研究の問題点と改善策

交絡要因の影響	86-87
交絡要因を統制する実験デザイン	87
実在集団の選定	87-88
実在集団の対象を野球ファンに変更	88-89
同一化の測定方法	90
同一化尺度の導入	90-91
同一化の程度の違い	91
同一化の促進	91-92
内集団ひいきの行動と評価	92-93
協力行動にかかるコストの明示	92-93
金銭提供のコスト	93

第 5 章 協力のコストを明示しない場面想定法実験

- 予備的研究 / 研究 1 -

第 1 節 実験デザインの構築（予備的研究）

広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験

目的	97-98
方法	99-106
結果	106-111
考察	111-112

第 2 節 研究 1

広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験

実験デザインと質問紙の改善	116-118
目的	118-121
方法	121-124
結果	124-126
考察	126-129

第 6 章 協力にコストがかかる場面想定法実験と行動実験

- 研究 2 / 研究 3 -

第 1 節 研究 2

Web 調査による一般人の野球ファンを対象とした場面想定法実験

目的	131-132
方法	133-135
結果	135-141
考察	141-144

第 2 節 研究 3-1

広島東洋カープファンを対象とした囚人のジレンマゲーム

目的	145-146
方法	146-149
結果	149-152
考察	152

第 3 節 研究 3-2

広島在住の野球ファンを対象とした囚人のジレンマゲーム

目的	153-154
方法	153
結果	154-157
考察	157-158

第 4 節 研究 3-3

兵庫在住の野球ファンを対象とした囚人のジレンマゲーム

方法	159
結果	159-162
考察および総合考察	163-165

第 7 章 SIT の心理過程の働きを活性化する状況要因の検討

- 研究 4 / 研究 5 -

第 1 節 研究 4

協力にコストがかからないことを強調した場面想定法実験

目的	167-168
方法	168-169
結果	169-172

考 察	172-174
第 2 節 研究 5-1	
集 団 間 地 位 を 提 示 し た 場 面 想 定 法 実 験	
目 的	175-177
方 法	178-185
結 果	185-190
考 察	190-192
第 3 節 研究 5-2	
Web 調 査 に よ る 外 集 団 を 設 定 し た 場 面 想 定 法 実 験	
目 的	193-194
方 法	194
結 果	194-198
考 察	198-199
第 4 節 研究 5-3	
Web 調 査 に よ る 外 集 団 を 設 定 し た 場 面 想 定 法 実 験	
目 的	200
方 法	200-202
結 果	203-207
考 察	207-209
 第 8 章 総 合 考 察	
第 1 節 研 究 結 果 の ま と め	211-218
第 2 節 状 況 に 依 存 す る SIT と BGR	219-222
第 3 節 今 後 の 課 題 と 展 望	223-225
第 4 節 結 語	226-227
 引 用 文 献	228-247
Appendix	I - II
謝 辞	III - IV

本研究の要約

本論文の目的は自分と同じ集団に所属する成員に対する協力行動（＝内集団協力／内集団ひいき）に関してこれまで社会心理学の領域で行われてきた研究を整理した上で，現実には存在する集団（以下，実在集団とする）を対象とした内集団協力／内集団ひいきがいかなる心理過程のもとに行われるのかを明らかにすることである。内集団協力とは内集団ひいきの一部であり「内集団成員に対して集団所属性の分からない相手よりも協力的・好意的になること」と定義される（Tajfel & Turner, 1986）。内集団ひいきは内集団協力に加え外集団に対しては非協力・差別的になることが同時に生じることを指す。本論文では研究 4 まで内集団協力の検討を行い，研究 5 からは内集団ひいきの検討を行う。

内集団ひいきに関する研究では，些細な基準によって実験室に一時的な集団間状況を設定する最小条件集団パラダイム（Minimal Group Paradigm: 以下，MGP とする；Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971）が使用されることが多い。この MGP を用いれば，実在集団に特有の相互作用や葛藤などを実験的に統制することが可能になる。実験統制の容易さといった利便性を含め，MGP では相互作用や葛藤を一切排除した純粋な内集団協力を検討できるという大きな利点がある。そのため，MGP における内集団ひいきの研究は数多く蓄積されてきた（Brewer, 1979；神・山岸，1997；清成，2002；Simpson, 2006；Tajfel & Turner, 1979, 1986；Yamagishi, Jin, & Kiyonari, 1999；Yamagishi & Kiyonari, 2000；Yamagishi & Mifune, 2008, 2009）。

この MGP を用いた検討を通じて，内集団ひいきは自己と集団の存在を同一視することで生じると主張する社会的アイデンティティ理論（Social Identity Theory: 以下，SIT とする；

Tajfel & Turner, 1979) が提唱された。その後、他の内集団成員からの互惠性の期待が内集団ひいきを引き起こすと主張する閉ざされた一般互酬仮説 (Bounded Generalized Reciprocity hypothesis: 以下、BGR とする; Yamagishi & Kiyonari, 2000) によって SIT の反証が行われた (清成, 2002; Yamagishi & Mifune, 2008)。すなわち、SIT では同一化した内集団に協力をして他の集団よりも優越させるため、BGR では自身の協力に対する集団内からの返報性 (互惠性) を期待して内集団ひいきが生じると説明された。さらに、従来の研究では両理論のどちらが内集団ひいきの説明として妥当であるかという相互背反的な検討がなされてきたが、近年では両理論それぞれが独立した説明力を持つと主張する研究もある (中川・横田・中西, 2015, 2019; Stroebe, Lodewijckx, & Spears, 2005; 横田・結城, 2009)。すなわち、MGP における内集団ひいきでは両理論の妥当性が保証されており、精緻化された心理モデルが確立されている。

しかし、実在集団を対象に両理論の妥当性を検討した研究では MGP と一貫しない結果が得られている (牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船・牧村・山岸, 2007; Yamagishi et al., 2005)。前述の通り、MGP には内集団ひいきに影響を及ぼす要因を実験的に統制して協力行動を検討できるという利点がある。ただし、その利点と同時に MGP で得られた結果のみでは現実場面における内集団ひいきを説明できないという限界が生じる。これまでの MGP を用いた研究では、BGR が内集団ひいきの説明が優勢であるとの結論に収束している (Yamagishi & Mifune, 2008)。その一方で名目上のカテゴリーよりも同一化が強くなりやすい実在集団であれば、SIT に基づく内集団ひいきが生じる傾向にある (Gallagher & Cairns, 2011)。

このように実在集団を対象として内集団ひいきを検討した

研究は数多く存在するが、MGP を用い行われた実験で得られた知見と必ずしも結果が一致しないという問題がある。本論文ではこの問題に着目した議論を展開していく。MGP を用いた実験で検証された内集団ひいきの心理過程が実在集団にあてはまらないとしたら、実験の生態学的妥当性が疑われることになる。本論文では、社会心理学の中でこれまで内集団ひいきを説明する上でよく用いられてきた SIT と BGR という二つの理論を採り上げ、現実場面における再現可能性を端緒として内集団ひいきを引き起こす要因について実験的に検討する。

両理論の生態学的妥当性を検討した研究（牧村・山岸，2003a，2003b；三船他，2007；Yamagishi et al., 2005）は存在するものの、これらの研究では実在集団に交絡する要因が適切に統制されておらず、その交絡要因が両理論の心理過程の働きを阻害していた。そこで、本論文内の研究 1 で交絡要因を統制した実験デザインを用い、実在集団における内集団協力を検討した。その結果、両理論の心理過程それぞれが同時に働く内集団協力がみられ（中川他，2015）、続く研究 2（中川他，2019）でも交絡要因を適切に統制すれば、協力行動のコストによって BGR の心理過程が相対的に強く働く内集団協力が生じた。すなわち、これらの研究から交絡要因を統制すれば、MGP と実在集団で得られる結果の比較ができ、両理論の生態学的妥当性及び心理過程の働きを規定する状況要因の検討が可能であると考えられる。

研究 3 では研究 1 及び研究 2 が全て場面想定法実験であるという限界を踏まえ、野球チームのファンを対象に 1 回限りの囚人のジレンマ（Prisoner's Dilemma: 以下、PD とする）ゲームにて内集団協力行動を検討した。研究 3 の目的は、MGP という状況を越えて両理論に基づく内集団協力行動が生じる

かを確認すること，加えてどのような状況下で両理論の心理過程が働きやすくなるのかを検討することであった。実験の結果，PDゲームという行動指標でも協力行動にコストがかかる場合には，BGRに基づき互惠性を期待できる状況で内集団成員に対する提供金額が最も高くなった。研究4はコストがかからない状況（場面想定法実験）における内集団協力の検討として行ったが，参加者が野球チームのファンではないため直接的な比較は困難であった。

研究1から研究4によって，実在集団においてもSITとBGRそれぞれに基づく内集団協力が生じることと，協力のコストがBGRの心理過程の働きを強くすることが明らかになった。研究5ではSITの心理過程の働きを強くする状況要因（外集団の存在の顕現化）を検討した。SITに基づく内集団協力の前提には，集団間の関係性があるため同一化も外集団の存在による影響を受ける。また，これまで得られた内集団協力に関する説明を内集団ひいきに当てはまるには，外集団を設定して協力の差を検討する必要があるあった。

研究1から研究4では実在集団に交絡する要因を統制するため，特定の外集団の存在を顕現化していなかった。MGPよりも集団カテゴリーに現実味のある実在集団では，デフォルトの外集団が想起される可能性は高いが，実際に外集団を設定すれば，より同一化が強くなると考えられる。したがって，研究5では交絡要因を統制するため具体的な外集団を想起させない形式で外集団を設定した結果，両理論に基づく内集団ひいきが生じた。ただし，SITの心理過程の働きが強くなることはなかった。

横田・結城（2009）はSITの心理過程を活性化する状況要因の一つに外集団脅威を挙げている。彼らの主張を踏まえると，

外集団の存在だけではなく，その外集団が内集団の存在を脅かすとの脅威を想起させなければ SIT の心理過程の働きが活性化されないのかもしれない。外集団脅威が SIT の心理過程の働きを活性化するか否かは，今後の検討課題である。

序章

研究の背景

複数のチーム間で勝敗を競い合うスポーツには、チームを応援するファンを熱狂的にさせる力がある。ファンの熱狂度は、娯楽としてスポーツ観戦の楽しみを増加させるだけではない。これまでの様々な社会心理学実験により、あるスポーツに「熱狂」しているファンたちは、応援するチームの勝敗によって自身の感情が左右されやすく (Gaunt, Sindic, & Leyens, 2005; Wann & Grieve, 2005), 時には競技の枠を超えてライバルチームのファンに対して攻撃性を示すこと (Harrell, 1981; Kelly & McCarthy, 1979) も知られている。また生理指標からも上記の現象は確認されており、応援するチーム／相手チームの勝敗の予期を提示すると喜び・痛み・怒りの評価が勝敗に応じて変動し、評価に関連する脳の神経系が同時に反応していた (Cikara, Botvinick, & Fiske, 2011)。

野球チームのファンは、ライバルのファンに対して攻撃的になるだけではなく、同じチームを応援する者であれば協力的になることも明らかにされている (Levine, Prosser, Evans, & Reicher, 2005; 中川・横田・中西, 2015, 2019)。このように、スポーツファンには応援するチームで集団を形成し、「我々」と「彼・彼女ら」という集団境界性を明確に認識しやすいという特徴がある。また、集団目標が「チームの勝利」一択であり集団にコミットしやすい (Yoshida, Gordon, Heere, & James, 2015) ことでスポーツファンたちは集団に準拠した行動 (内集団ひいきなど) をとりやすい傾向にある。

内集団ひいきに関する研究では、実験室内に一時的な集団間状況を設定する最小条件集団パラダイム (Minimal Group Paradigm: 以下, MGP とする; Tajfel, Billig, Bundy, & Flament,

1971) が使用されることが多い。内集団ひいきとは、自分の所属する内集団に対して好意的・協力的に振る舞う一方で、外集団に対しては非好意的・差別的に振る舞うことと定義される (Tajfel & Turner, 1986)。内集団ひいきは、内集団に対して集団所属性の分からない相手よりも協力的になる内集団協力と外集団に対して非協力的になる外集団差別という 2 種類の行動に分けられる。本論文では研究 1 から研究 4 までは内集団協力、研究 5 では内集団協力に加えて外集団と協力を差をつける内集団ひいきを検討する。

当初、集団所属性の認識のみができる MGP では、集団との同一化を協力の先行要因とする社会的アイデンティティ理論 (Social Identity Theory: 以下、SIT とする; Tajfel & Turner, 1979) から内集団ひいきが説明されてきた。しかし、この MGP を用いた実験 (Tajfel et al., 1971) では、内集団ひいきの指標として行われた報酬分配課題による相互依存性が生じていた。この課題では自分と内／外集団成員 (相手) それぞれが相手の報酬を決定するため、自分の報酬は相手の決定に依存する状況であった。SIT を反証する閉ざされた一般互酬仮説 (Bounded Generalized Reciprocity hypothesis: 以下、BGR とする; Yamagishi & Kiyonari, 2000) は、この相互依存性に着目し他の内集団成員からの互惠性を期待することで内集団ひいきが生じたと主張した。さらに、両理論の妥当性は MGP を用いた実験によって頑健に保証されてきた (Billig & Tajfel, 1973; Hartstone & Augoustinos, 1995; 神・山岸, 1997; 清成, 2002; Tajfel & Turner, 1979, 1986; Yamagishi, Jin, & Kiyonari, 1999; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi & Mifune, 2008, 2009)。

その一方で、現実に実在する集団 (以下、実在集団とする) を対象として内集団ひいきを検討した研究 (牧村・山岸,

2003a, 2003b; 三船・牧村・山岸, 2007; Yamagishi et al., 2005) では, MGP で得られた知見と必ずしも結果が一致していないという問題があった。実在集団を対象として両理論の妥当性を同時に検討した研究は数少なく, 国籍 (牧村・山岸, 2003b; 三船他, 2007; Yamagishi et al., 2005) や大学の実習班 (牧村・山岸, 2003a) のみの検討であった。国籍にはそれぞれの国の歴史的な背景, ステレオタイプや規範などの交絡要因が存在し, それら交絡要因が協力行動を阻害していたことで MGP における内集団ひいきが実在集団では再現されなかったといえる。加えて, 集団の規模が大きい国では個人が集団にコミットしにくく自己と集団の存在を同じとみなす同一化が起こりにくい。

国籍以外にも実在集団を対象とした研究は少なからず存在する (Abrams, Rutland, & Cameron, 2003; Reizábal & Ortiz, 2011)。ただし, それらの研究ではいくつかの問題点があった。まず大きな問題点は, SIT の妥当性のみしか検討されておらず, BGR に基づく内集団ひいきが生じていたかが明らかではないことである。その次に, 研究間の実験デザインが統一されておらず, 内集団ひいきの指標が評価課題 (例: 内／外集団成員に対する態度など) のみであることが多く行動レベルで結果が再現されるかが検討されていないことである。SIT が差別・偏見を説明する概念であるという背景から, 子どもを実験対象として同一化の発達を検討する研究が多いことにも注意が必要である。

さらに, SIT の妥当性を主張する研究者たちは, 実在集団のサイズや集団特性の比較, 同一化の強弱のみに着目し, SIT に基づく内集団ひいきを検討していないことも多い (Reysen & Branscombe, 2010)。例えば, Reysen & Branscombe (2010) はス

スポーツファンと音楽・趣味・政党に関するファン集団の性質を比較する検討が行い、スポーツファンは他のファン集団に比べ、集団実体性の知覚や集合的な幸福感が比較的強く生じることを明らかにした。このことは、スポーツを応援するファンは、集団との同一化が強いことを示唆しているが、この同一化から内集団ひいきが生じるか（何が引き起こされるのか）は検討されていなかった。

上記の通り、MGPとは異なり実在集団を対象とした研究では、両理論の妥当性を同時に検討するための統一された実験デザインがなかった。両理論の妥当性を検討した先行研究（牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船他, 2007; Yamagishi et al., 2005）はあるものの、これらの研究では実在集団の交絡要因が適切に統制されていなかった。内集団ひいき研究の最大の問題は、MGPでは頑健性が保証されている両理論が実在集団では支持されず、生態学的な妥当性が保証されていない点にある。

本論文の目的

国や大学の実習班でしか内集団ひいきの検討が行われていない背景を踏まえ、本論文では一貫して「特定の野球チームを応援するファン（以下、野球ファン）」を実在集団の対象として採用した。その詳細な理由は第4章で後述するが、野球ファンはSITとBGRの心理過程がどちらも働く集団と仮定できるため、対象とした。本論文の目的は、社会心理学の領域で行われてきた内集団ひいきの研究を整理した上で、実在集団を対象とした内集団協力／内集団ひいきが、いかなる心理過程のもとに行われるのかを明らかにすることである。具体的には、どのような状況下でSITとBGRそれぞれに基づく内集団協力／内集団ひいきが生じるのかを検討する。

内集団ひいきに関する研究にはMGPが用いられることが多く、実在集団を対象とした研究も存在する（牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船他, 2007; Yamagishi et al., 2005）が、MGPで得られた知見と必ずしも結果が一致しないという問題がある。本論文ではこの問題点に着目した議論と研究を展開していく。MGPで検証された内集団ひいきの心理過程（SITとBGR）が、実在集団では適用されないとしたら両理論の生態学的妥当性が疑われることになる。現実場面における内集団ひいきの再現可能性を端緒として、SITとBGRの妥当性とそれらの心理過程の働きを活性化させる状況要因を実験的に検討する。

本論文の構成

本論文は全 8 章で構成される。主に第 1 章から第 3 章では、MGP ならびに実在集団における内集団ひいきを検討してきた先行研究をレビューする。第 4 章では第 1 章から第 3 章で取り上げた先行研究の問題点を指摘し本論文で試みる改善策を述べる。第 5 章から第 7 章では第 4 章で述べた問題点を改善するために、著者が行ってきた一連の研究を紹介する。第 8 章では本論文の結果のまとめと展望を含めた総合考察を行う。以下に各章ごとの内容を簡単に説明する。

第 1 章では内集団ひいきと関連のある古典的な研究から、個人の主観的な態度、欲求不満などに焦点を当てて集団間行動を説明した理論（権威主義的パーソナリティなど）をレビューする。続いて、集団の文脈から内集団ひいきの説明を試みた理論（システム正当化仮説など）をレビューする。

第 2 章では内集団ひいきの心理過程を説明した SIT と BGR という 2 つの理論を紹介する。さらに、SIT と BGR それぞれの妥当性を主張する研究者たちが、MGP を用いて内集団ひいきを検討した研究をレビューする。また、両理論の妥当性を検討するにあたって、どのような実験方法や手続きで検討がなされてきたのかを説明する。そして第 2 章の最後では、これまでの MGP における内集団ひいき研究のレビューを踏まえて本論文の大きな目的を述べる。

第 3 章では実在集団を対象として SIT／BGR それぞれの視点から内集団ひいきを検討した研究を紹介する。国籍や使用言語のように集団カテゴリーの規模が相対的に大きいものから、スポーツファンのように小さいものを対象とした様々な研究をレビューし、集団の規模や同一化する集団の違いが内集団ひいきに影響を及ぼすか否かについて議論する。

第 4 章では第 2 章と第 3 章でレビューした MGP／実在集団を対象とした研究をまとめた上で，それらの実験デザインにおける問題点，SIT／BGR に基づく内集団ひいきが生じなかった原因と考えられる交絡要因を挙げる。それらの問題点と交絡要因に対応するそれぞれの改善策を述べ，本論文内のどの研究によって明らかにするのかを説明する。

第 5 章では協力行動のコストを明示しない実在集団（広島東洋カープファン）を対象とした内集団協力の研究内容（予備的研究及び研究 1；場面想定法実験）を紹介する。第 6 章では第 5 章を踏まえ，BGR の心理過程の働きを活性化する状況要因を協力行動のコストであると仮定した検討を行った。場面想定法のシナリオ内に協力行動のコストを明示した研究 2 と行動実験で研究 2 の結果を再現されるかを検討した研究 3 を紹介する。第 7 章では SIT の心理過程の働きを活性化する状況要因を探索的に検討した。まずは，協力行動にコストがかからないことが SIT の心理過程の働きに影響すると仮定した研究 4 を紹介した後，集団間地位の提示及び外集団の存在の顕現化が SIT の心理過程の働きを活性化させると仮定した研究 5 を紹介する。最後の第 8 章ではこれまでの研究結果をまとめた上での総合考察を行う。

第 1 章

内集団ひいきに関する古典的な研究

第 1 節 個人の意識メカニズムからのアプローチ

集団間での差別行動や偏見の研究では当初、個人レベルの動機づけやパーソナリティに焦点を当てた検討がなされてきた。そうした理論の代表的なものとして、権威主義的パーソナリティ (Adorno, Frenkel-Brunswik, Levinson & Sanford, 1950 田中・矢沢・小林訳 1980)、欲求不満行動仮説 (Dollard, Doob, Miller, & Sears, 1939 宇津木訳 1959) などが挙げられる。以下では、内集団ひいきにつながる差別行動や偏見を個人の生得的な態度、イデオロギーなどから説明しようと試みた研究を簡単に紹介する。

権威主義的パーソナリティ

ナチスによるユダヤ人迫害といった社会的な差別行動の事例を受け、個人がなぜ差別や偏見を抱くのかを紐解く研究が活発に行われ始めた。アメリカにある反ユダヤ主義と戦う委員会が Adorno et al. (1950 田中他訳 1980) に調査協力を依頼したことで研究が進められた。彼らは潜在的にファシズム的な心理傾向を表す権威主義的パーソナリティ (authoritarian personality) が、差別や偏見の生起に起因すると主張した。

Adorno et al. (1950 田中他訳 1980) は権威主義的パーソナリティを確立する以前に、反ユダヤ主義を測定する尺度 (A-S スケール) と人種排外主義を測定する尺度 (E スケール) という二つの偏見を測定する尺度を開発していた。しかし、これらの尺度では特定の人種や偏見、差別に関する質問項目が直接的な尋ね方であった。例えば、ある参加者の A-S/E スケールで測定された偏見を抱く程度は相対的に低かったものの、親密な関係が保たれた面接では偏見を吐露したという事例があ

った。この臨床事例を踏まえると，人々の潜在的な偏見を測定するために，より妥当性の高い尺度を構築する必要があった。そこで，Adorno et al. (1950 田中他訳 1980) は新たに政治経済的保守主義尺度 (PEC) スケールの導入を試みた。しかし，2つの尺度 (A-S/E スケール) との相関が低く PEC スケールにも偏見を直接的に測定する項目が含まれていた。彼らはこの失敗を踏まえ，上記の知見や臨床的資料を通して偏見を直接的に測定するのではなく，パーソナリティの深層にある権威主義的な傾向を明らかにできるファシズム尺度 (F スケール) を構築した。Adorno et al. (1950 田中他訳 1980) が開発した F スケールは，以下の 9 つの諸変数が合体した一つの症候群であると仮定された (Table 1-1)。

Table 1-1

F スケールの諸変数

変数名	内容
因襲主義	慣習化した中産階級的な価値に対する固執
権威主義的従属	内集団の理想化された道徳的権威への追従的，批判しない態度
権威主義的攻撃	慣習化した価値に違反する人を見つけ，非難，排除，処罰しようとする敵対心
反内省的態度	主観性，想像力及び柔軟な精神に対する敵対
迷信とステレオタイプ	個人の運命に関する神秘的な規定への信仰，固定的なカテゴリーで思考する傾向
権力と剛直	権力者への同一化，自己の因襲的な属性を過度に強調する
破壊性とシニシズム	人間的なものへの一般化された敵意と悪意
投射性	粗野で危険なものが世界に増大しつつあると信じ込む傾向
性	性的な行為への誇張された関心

さらに、彼らはこうした偏見や寛容に関わるパーソナリティの確立には早期の親子関係が重要であると主張した。質問紙や面接法による調査の中で、権威と脅威を持つ父親（強者）が子ども（弱者）に対して権威主義的で利己的な態度を示したり、しつけをしたりすることで権威主義的な偏見が形成されやすい子どもへと成長することが明らかにされている。このモデルはフロイトのエディプスコンプレックスの概念を反映しており、典型的な偏見のない男性は母親への愛着がきわめて密着でその愛着が女性への好ましい態度、父親あるいは権威主義一般に対する反抗を促進すると彼らは解釈している。

また、Adorno et al. (1950 田中他訳 1980) によると権威主義的パーソナリティの形成に伴い、父親に反抗したいができないという相反感情を子どもが抱くほど、社会的地位が低い弱者などを代替対象として偏見が促進される傾向にあるという。さらに、反抗する相手を代替する概念はステレオタイプの形成ならびに内／外集団の関係性の悪化にもよく表れており、権威主義的パーソナリティは親子関係のみならず社会的な関係にまで応用できると考えられた。

しかし、前述の通り、権威主義的パーソナリティの形成には親子関係が重要であるにもかかわらず、家族形成に関連する社会的、経済的な要因は考慮されていなかった。つまり、個人的なパーソナリティと環境要因がどのように相互作用するかが明らかにされていなかった。権威主義的パーソナリティによって外集団に対する偏見や差別を紐解く示唆は与えられたが、実際の行動としてその差別や偏見に基づく内集団ひいきが生じるかは不明なままである。

欲求不満行動仮説

内集団ひいきの中でも外集団への差別／攻撃的な行動は欲

求不満行動仮説 (frustration-aggression hypothesis ; Dallard et al., 1939 宇津木 訳 1959) から説明されている。欲求不満行動仮説には全ての攻撃が常に欲求不満の結果であるとの基本的な仮定がある。Dallard et al. (1939 宇津木 訳 1959) によると、欲求不満 (フラストレーション) はある目標を達成しようとする行動の途中に何らかの干渉を受けた場合に生じるという。例えば、寮生活において寮母の不備により夕食の提供時間が遅れてしまったり、病気にかかったせいで歩けなくなったりすることが挙げられる。いずれも特定の活動 (食べる, 歩く) が何らかの形 (寮母, 病気) で妨害されている状況であり、そうした状況下で欲求不満を抱き攻撃性が表出されやすくなる。

また、Dallard et al. (1939 宇津木 訳 1959) は欲求不満と攻撃行動の関係性には3つの特徴があると主張した。1つ目に、攻撃性を表出する可能性は欲求不満の量に正比例することである。2つ目に、攻撃行動の制止には行動を表出することで予期される罰の程度に正比例することである。ここでの罰とは、苦痛を感じさせる状況、第三者 (家族や恋人など) に被害が加わるような状況、失敗の予期などが含まれる。3つ目に、欲求不満の程度が一定ならば、罰の予期が大きいほど攻撃行動は起こりにくい一方で、罰の予想が一定ならば欲求不満の程度が高いほど攻撃行動が起こりやすいことである。すなわち、欲求不満と攻撃性の表出には罰を受けるか否かの予期が大きく関連すると考えられた。

さらに、Dallard et al. (1939 宇津木 訳 1959) は外集団に対する攻撃性が欲求不満行動仮説で説明される置き換えの原理に当てはまると考えた。置き換えの原理とは、欲求不満を引き起こす源を直接的に攻撃することが困難な場合、その他の対象に攻撃性が移行されることを指す。この置き換えの原理に

当てはめると，個人が内集団の中で慢性的な欲求不満を抱いている場合，その欲求不満からくる攻撃性を外集団に向ける。なぜなら，集団内で直接的な攻撃性を表出し欲求不満を発散することで他の内集団成員の罰を受けるからである。内集団成員に攻撃性を表出すれば規範を逸脱したとして集団内から排除され，直接的な仕返しを受ける可能性もある。したがって，人々は内集団に対する欲求不満及び攻撃性を外集団に置き換えて表出するという。

Miller & Bugelski (1948) はこの置き換えの原理を検討するため，実在集団を対象に欲求不満状況を設定し，外集団に対する態度が欲求不満を抱く前と後で変化するかを測定した。彼らは，キャンプ場で働く少年たちを対象に長時間の退屈で難しいテストを行わせ，そのテストのせいで少年たちが楽しみにしていた催し物に参加できなくなったという欲求不満状況を設定した。この欲求不満状況が発生する前と後に，メキシコ人と日本人に対する態度（〇〇人は賢い，汚いなど）をそれぞれ評定させた。日本人とメキシコ人はどちらもアメリカ人の少年たちにとっての外集団である。実験の結果，欲求不満状況の後の方が，外集団に対して非好意的な態度に変化していた（ただし，攻撃性そのものではない）。

しかし，Pastore (1950) は欲求不満行動仮説の中では攻撃性を表出する状況や個人の判断による影響が説明されていないと批判した。例えば，欲求不満攻撃仮説では「寮生活の中で決まった時間に食事が出てこなかった場合，個人が欲求不満を抱き攻撃性が表出される」と説明されているが，この例の中では食事を作る寮母の事情（状況）が全く考慮されていない。つまり，Pastore (1950) は寮母が定時に食事を作れなかった正当な理由を説明すれば欲求不満が攻撃性を導く可能性は低く，

むしろ攻撃性は個人の状況に対する判断（寮母の説明が正当ではないなど）の影響を受ける可能性が高いと主張した。

Pastore (1950) は Miller & Bugelski (1948) の実験でも同じく、参加者の欲求不満が外集団に対する非好意的な態度につながった可能性はあるが、個人が楽しみを妨害された状況にどのように反応や理解を示したかの方が重要であると批判した。このように欲求不満行動仮説では、個人が状況をどのように判断するかといった要因が考慮されておらず、内集団に対する欲求不満が外集団に対する非好意的な行動に置き換えられるとは言い切れない。また、攻撃の代替対象がなぜ外集団に限定されるかは明らかではなく、個人の欲求不満のみから内集団ひいき（外集団差別行動）が生じると説明することは困難であった。

相 対 的 剥 奪 理 論

相対的剥奪 (relative deprivation) とは他人と自分の境遇を比較した時に感じる欠乏感や不満のことをいう (石田, 2015)。獲得していない対象物を X と置き、相対的剥奪の概念を条件化したのが Runciman (1966) である。Runciman (1966) は相対的な剥奪を自己本位的 (egoistical) な剥奪と準拠集団と関連づけた友愛的 (flateral) な剥奪に区別した。準拠集団とは個人の価値観や信念などに強い影響を与える集団のことであるが、必ずしも自身が所属している集団とは限らない。

Runciman (1966) が主張した条件に新たな条件を加え、自己本位的な相対的剥奪を最終的に定義化したのが Crosby (1976) である。Runciman (1966) および Crosby (1976) によると、a) 個人が必要とする X を持っておらず、b) 他の誰かが X を所有することを確認し、c) X を欲しいと望む、d) X を持つことが

可能であると思い， e) Xを持つ資格があると感じる， f) Xを持たないことによる個人的な責任は存在しないと考えることが，自己本位的な相対的剥奪の発生条件であると定義された。

一方の友愛的な剥奪とは準拠集団と他の集団を比べること (Runciman, 1966) であり集団レベルの説明がなされた。友愛的な剥奪は社会心理学分野でもよく取り上げられ， Grant (2008) による近年の研究で相対的剥奪理論と社会的アイデンティティ理論との関連が検討されている。Grant (2008) のカナダの移民を対象とした研究から，不平等に関して強い感情的な反応（怒り，欲求不満など）を抱く集合的・相対的な剥奪があるほど，同一化が高まり集団間に差をつける傾向にあることも明らかになっている。しかし，相対的剥奪理論のみからでは個人が準拠集団としてどの集団を認定したかが分からず，また集団全体で保有する資源量が考慮されていないと資源動員論からの批判を受けた。

資源動員論

内集団ひいきのような社会的行動には集団内の資源が重要であると主張する資源動員論 (resource mobilization theory) がある。資源動員論の始まりは「不満だけでは社会運動は生じない」と集合行為を論じた Olson (1965) の考えが基盤となっている。McCarthy & Zald (1977) は Olson (1965) の主張を基に理論を精緻化して資源動員論を確立した。これまで社会運動は，非合理的・感情的・暴力的な心理傾向の強い集合行動であると見なされていた。一方で，McCarthy & Zald (1977) は資源動員論の中で不満，不平は社会の中で一定数存在するが，社会運動の成否を決めるのは運動組織がコントロール（利用）できる資源量（人，金，コネ-ネットワーク，専門知識）に依存

すると主張した。つまり，資源の有無や連帯性から不満や行動は生じるのであり，個人の経済的な合理的選択が行われることが社会運動の前提にあると考えられた。しかし，資源動員論では社会運動が成功するか否かのみが着目されており，なぜ社会運動が起こるのかなどの心理的要因を十分に取り扱えていない限界があった。したがって，資源動員論から内集団ひいきの生起頻度を類推できる可能性はあるが，内集団ひいきが生じる心理過程を明らかにすることはできない。

第 2 節 集団構造からのアプローチ

集団内／間の関係性から内集団ひいきにアプローチした研究の古くは Sumner (1906 青柳・山本・園田訳 2005) が発見した自民族主義に遡る。自民族主義では、内集団を外集団よりもポジティブに扱う傾向があることが示されており、内集団ひいきは集団が生き残るために全ての人間が行う普遍的な行動の特徴であると主張された。しかし、このアプローチでは異なる集団間を設定すると内集団ひいきが起こることは示されているものの、何が内集団ひいきを引き起こす説明変数であるかが明らかではなかった。そこで、自民族主義を踏まえた上で様々な視点から内集団ひいきを引き起こす要因について検討が重ねられてきた。以下では、集団内／間の関係性に関連して内集団ひいきを引き起こす要因を検討した研究を紹介する。

現実的葛藤理論

現実場面に葛藤状況を設定し内集団ひいきから派生する差別、偏見にアプローチしたのが Sherif, Harvey, White, Hood, & Sherif (1961) の研究である。Sherif et al. (1961) の行なった泥棒洞窟実験 (The robbers cave experiment) で得られた結果から、自民族主義 (Campbell, 1965) を説明する現実的集団葛藤理論 (Realistic Conflict Theory: 以下, RCT とする) が提唱された。泥棒洞窟実験はサマーキャンプに参加した少年たちを 2 つの集団に分け集団間葛藤状況を引き起こす競争的な課題を行わせると、内集団の結束が高まり外集団には敵対心を抱くようになったことを示した研究である。RCT では希少資源・土地財物などを巡る集団間の競争／敵対的な関係性の結

果として、集団間に差異がつけられると仮定されている。この仮定を踏まえ、実在集団を対象として集団間の協力／差別行動や態度のパターンを検討した研究はいくつか存在する (Diab, 1970; Shamir & Sullivan, 1985; Sherif et al., 1961)。

Sherif et al. (1961) の研究によって個人を競争的な集団間の状況下へ短期間でも置くことによって、内／外集団成員の認識が再形成されること、差別的な行動を引き出すことは容易であることが明らかになった。泥棒洞窟実験ではあらかじめ形成されている友人関係を取り除くために、内集団よりも外集団に友人が多い状況になるように集団分類が行われた。その上で、集団間が葛藤状況に陥る課題や活動を行わせると友人であると申告した数は内集団から選択される方が多くなった。集団同士での相互協力が必要になる上位目標を導入し葛藤が解消された場合には、外集団から友人を選択する割合が高くなり、両集団が互いに協力的になった。しかし、RCTが提唱された段階から集団間における差別化に競争は必要条件ではないとの主張が台頭してきた (Ferguson & Kelly, 1964)。

相互作用の予期

Ferguson & Kelly (1964) の研究では、集団間に競争関係がない状況でも外集団よりも内集団のパフォーマンスをより好意的に評価する傾向が見られた。Rabbie & Horwitz (1969) の研究でも集団間が競争状況になくとも内集団ひいきが起こることが確認されている。この研究では、内／外集団への異なる評価が生じるのは、集団内や集団間で「相互作用の予期 (interdependence of group fate) がある」時のみであるとの予測が検討された。相互作用の予期は、集団が報酬を得るチャンスを持つか否かで操作された。MGPを用いた実験では2つの

集団のうち、どちらかのみ 25 ギルダール (7 ドル) のラジオを得られる報酬条件と両集団ともにももらえない統制条件が設けられた。報酬条件ではどちらの集団がラジオを得るかを決める方法に 3 条件 (コイントスの結果, 実験者の独断, 決定権を持つ集団を投票で決める) が設定された。この決定自体には, 集団間競争は含まれない。その結果, 統制条件では集団間に評価の差はつけられなかったが, 報酬条件ではいずれも内集団を好意的に評価するバイアスが生じた。つまり, 内集団ひいきは集団に分類するだけでは生じず, 内集団に報酬をもらえるか否かといった相互作用の予期の有無が, 内集団ひいきの発生には重要であると主張された (Rabbie & Horwitz, 1969)。

Rabbie & Wilkens (1971) も Rabbie & Horwitz (1969) と同じく競争性が内集団ひいきを強める可能性はあるが, 相互作用の予期こそが必要条件であるとの立場を採用した。集団間の競争があり／なし条件と成員同士を相互作用させない (集団カテゴリー化のみを行う) 条件で内集団ひいきを検討した。実験では各集団の成員同士で協力して 30 分以内にビル模型を作る課題 (相互作用) を行なった。競争ありの条件では, 相手の集団より良いものであれば 7.50 ギルダール (2 ドル) もらえ悪ければ何ももらえない。競争なし条件では, 集団課題の良し悪しと報酬量の過多は関係ないと教示された。競争条件の方が内集団の評価はより高くなったが, 課題を行なった条件ではどの条件でも内集団に対する評価が高まった。ただし, 集団間の評価の差は小さく, 内集団よりは低いものの外集団に対する評価も課題後に高まっていた。

これら二つの実験結果 (Rabbie & Horwitz, 1969; Rabbie & Wilkens, 1971) から, ある集団に分類されるだけでは評価や行動に差をつけるには不十分で相互作用の予期が必要であると

主張された。また、Rabbie & Horwitz (1969) は相互作用の予期から生じる内集団ひいきの特徴を以下のように説明した。参加者を些細な基準で集団に分類した後に相互作用の予期により集団実体性（集団らしさ）が形成される。そして、集団間に差をつけることには社会的あるいは文化的な規範は影響しない。MGPを用いた彼らの研究によって集団規範などを排除しても、相互作用がある社会的な状況においては内集団ひいきが生じることが明らかになった。

RCT や相互作用の予期では、集団内／間の関係性に焦点を当てた検討が行われてきた。それぞれの理論では集団間葛藤、相互作用の予期が内集団ひいきを引き起こすと主張された。しかし、両理論から内集団ひいきが生じる状況下は明らかにされたものの、そうした状況下で働く心理過程が説明されていないかった。

システム正当化理論の構築

「正当化」とは、ある行動形態や概念をサポートするまたは正当性を持たせるために使われる感覚であり、社会心理学の中でも重要な役割を果たしている (Jost & Banaji, 1994)。人々が彼ら自身と他者の立ち位置を正当化する傾向にあることは、社会的アイデンティティ理論 (Hogg & Abrams, 1988)、社会的比較 (Festinger, 1957)、自己知覚理論 (Bem & McConnell, 1970) などの様々な研究で明らかにされている。Jost & Banaji (1994) は「自身の正当化」と「集団の正当化」を検討した先行研究を体系化し、社会的な影響を考慮したシステム正当化理論 (system justification theory) を提唱した。彼らは、特に正当化に影響を与える社会的な要因としてフォールスコンセンサスとステレオタイプを挙げ、両者の関係性をシステム正

当化理論で説明している。フォールスコンセンサスとは自分の意見が一般的で多数派であると思い込む誤認のことである。そして、ステレオタイプとは社会集団についての広義の思い込みであり、人々の役割、階級、地位などを正当化する信念を持つことである。以下では、まずシステム正当化理論の確立に先立って自己と集団に焦点を当てた正当化の説明を紹介する。

自己の正当化 機能論的なアプローチからステレオタイプには自己を正当化する機能があり、差別や偏見に影響することが分かっている (Adorno et al., 1950)。しかし、自己の正当化による説明には社会的な影響を軽視しているとの批判 (Bettelheim & Janowitz, 1964) があり、また実証的な証拠が不十分なことから社会心理学では一般的に受け入れられなかった。一方で、システム正当化仮説は自己の正当化に反して、ある役割を持つ特徴（態度など）への帰属は個人的な動機づけからくるものではなく、イデオロギーのある環境で形成された情報からくるステレオタイプであると概観している。

自己の正当化には3つの限界点がある。まず、1つ目は自己の正当化からは多くのネガティブ（彼ら自身や所属集団にも損害を与える）なステレオタイプを説明できない点にある。例えば、低地位集団のように不利な状況にある集団では自己否定的なステレオタイプが生じ (Tajfel, 1982)、自己を正当化することは困難である。2つ目に、自己の正当化からのアプローチでは正当化が必要とされる地位や個人的な行動との間に関連するステレオタイプが弱いことがある。3つ目に、ステレオタイプは社会で共有された同意によって特徴づけられるため、個人レベルでは説明できないことである。もし、自己の正当化が正しいのなら、個人レベルのステレオタイプは集団内／間で共有されず、合理性を得ることもできないはずである。した

がって、システム正当化仮説では個人単位ではなく集団単位からのアプローチを試みた。

集団の正当化 Tajfel らの研究では社会的アイデンティティ理論 (SIT) や集団の文脈からステレオタイプが論じられた。特に、ステレオタイプは外集団に対抗する内集団の行動を正当化するために扱われると主張された。集団の正当化は自己の正当化を踏まえ、集団レベルまで説明の幅を拡大したものである。内集団成員は外集団に対するネガティブなステレオタイプを持つことを正当化しており、それにしたがって社会的比較を行ったり内集団に多くの利益を与えたりする。すなわち、SIT に基づけば内集団にはポジティブ、外集団にはネガティブなステレオタイプを持つように人々は動機づけられている。また、SIT では集団間の競争関係が強調されるため、劣位集団がネガティブなステレオタイプを持ちやすくなる (地位の正当性や安定性が関係する)。たとえば、劣位集団がネガティブなステレオタイプを持っていたとしても、集団間で内集団が勝つと思われる新たな比較次元を設ける (社会的創造) ことで集団を正当化できる。

しかし、集団を正当化するステレオタイプは、ステレオタイプがなぜ異なる集団間で共有されるのかについては説明できないという課題がまだ残されている。例えば、男女の違いをステレオタイプ化するジェンダーステレオタイプ (Greenwald & Banaji, 1995; Banaji, Hardin, & Rothman, 1993), 白人と黒人の違いといった人種ステレオタイプ (Bayton, Austin, & Burke, 1965; Katz & Braly, 1933) などがあり、こうしたステレオタイプは一般的に異なる文化圏でも広く共有されていることが示されている (Katz & Braly, 1933; Vázquez, Panadero, & Zúñiga, 2017)。集団の正当化は自己の正当化で説明できなかった、ス

テレオタイプの共有とネガティブなステレオタイプを持つ状況を説明したが、異なる集団間でなぜステレオタイプが共有されていくかは明らかではなかった。

システム正当化理論の提唱 システム正当化理論 (Jost & Banaji, 1994) では自己／集団の正当化を検討した先行研究を踏まえ、集団内のステレオタイプを超えたイデオロギーとしての機能やそのイデオロギーがどのように波及していくのかの説明が試みられた。システム正当化理論とは、直接的に自己／集団の正当化の説明を強調するものではなく、フォールスコンセンサス (自分の考えが大多数の意見だと誤認すること) の観点からアプローチを行なった。社会的な支配傾向に焦点を当てた研究者たち (Eagly & Steffen, 1984; Pratto, Sidanius, & Levin, 2006) も同様にイデオロギーのメカニズムに着目した検討を行なっている。

例えば、Pratto, Sidanius, & Levin (2006) は不平等な社会システムは集団間で同意のあるステレオタイプを通じて正当化される場合もあり、人々はそのシステムを「不可避」なものとして受け入れると主張した。自己／集団の正当化では心理的な適応メカニズム (自分や集合体としての自己防衛) にしたがってステレオタイプが働くとされていたが、システム正当化理論におけるステレオタイプは自己／集団を守る中で変化すると考えられている。また、人々は地位や立ち位置などをステレオタイプに帰属してその違いを正当化する傾向にあるという (Eagly & Steffen, 1984)。例えば、ジェンダーステレオタイプを提唱した Eagly & Steffen (1984) は、人々には「女性が家庭を守るもの」、「男性は社会で働くもの」、「女性はパートタイムで働くことが多く、男性はフルタイムで働くことが多い」と判断するステレオタイプがあることを挙げた。そして、ステ

レオタイプには男女の性質や体力の違いを含め、それぞれの社会的な役割を説明、正当化するためにあるという (Hoffman & Hurst, 1990; Skrypnek & Synder, 1982)。これらの研究から、ステレオタイプは社会的・政治的なシステムに従って形成され、地位・役割・システムを正当化するために生じることが示唆された。

システム正当化理論から示唆されるステレオタイプのポイントは4つある。1つ目にステレオタイプによってスティグマ化された劣位集団は、他の人々のネガティブな期待通りに行動し優位集団の卓越性を認める場合がある。ステレオタイプの基準には社会的な地位や立ち位置、役割が参照される。ネガティブにステレオタイプ化された場合は、上記の地位などは正当であると認識して積極的な抵抗は行わない (Sunar, 1978)。2つ目はSITに関連してステレオタイプは物質的 (資源など) な現状が変われば再形成されることである。集団間の社会構造の関係性が変化すれば、ステレオタイプも同時に変容しうる。3つ目に劣位集団であっても (どんな立場でも) システム正当化理論の観点から、自己／集団を正当化しないステレオタイプを共有することがある。4つ目にステレオタイプは真実である必要はなく、ステレオタイプは社会的な配列を正当化するために生じる。

システム正当化仮説は、内集団ひいきを正当化することにも関連している。内集団ひいきは、内集団を優位に扱うことで相対的に外集団が損をするため公平・平等な行動とはいえない。社会的規範に反して公平・平等に扱わない正当性を確保するために、システム正当化理論に基づくステレオタイプが形成される可能性がある。特に、低地位集団がネガティブなステレオタイプから外集団ひいきをする行動は、システム正当化

理論から説明することができる。

第 1 章では、個人の意識メカニズム（権威主義的パーソナリティ，欲求不満行動仮説，相対的剥奪理論，資源動員論），集団構造（RCT，相互作用の予期，システム正当化理論）から内集団ひいきにアプローチした研究を紹介してきた。これらの理論から個人が集団間の状況をどのように捉え内集団ひいきをするのか，どのような集団内／集団間の状況下で内集団ひいきが生じるのかが明らかにされた。しかし，これらの理論では社会的な影響や要因が考慮されておらず，さらに「なぜ人が内集団ひいきをするのか」という理由は，個人的な精神／イデオロギー／状況要因からの説明に限られている。

そこで，本論文では集団の枠組みから内集団ひいきが生じる心理過程を説明した社会的アイデンティティ理論（Social Identity Theory: 以下，SIT とする；Tajfel & Turner, 1979）と閉ざされた一般互酬仮説（Bounded Generalized Reciprocity hypothesis: 以下，BGR とする；Yamagishi & Kiyonari, 2000）を取り上げる。SIT では自己と集団の同一化，BGR では他の内集団成員からの互惠性の期待が内集団ひいきの原動力であると説明される。各理論の心理過程は次の第 2 章で説明する。

第 2 章

内集団ひいきを説明する
2つの理論

第 1 節 社会的アイデンティティ理論 (SIT)

第 2 章では本論文で取り上げる社会的アイデンティティ理論 (Social Identity Theory: 以下, SIT とする; Tajfel & Turner, 1979) と閉ざされた一般互酬仮説 (Bounded Generalized Reciprocity hypothesis: 以下, BGR とする; Yamagishi & Kiyonari, 2000) それぞれの妥当性を検討してきた研究をレビューする。両理論の妥当性の検討には, 集団状況を統制できる最小条件集団パラダイム (Minimal Group Paradigm: 以下, MGP とする) が一般的に用いられてきた。まず, MGP という実験技法を構築した研究 (Tajfel et al., 1971) を紹介した上で, SIT の妥当性を検討した研究を紹介する。実在集団に特有の相互作用や葛藤を排除して集団カテゴリーのみを共有する MGP では, 内集団ひいきの説明原理として SIT が有力であると考えられてきた。

現実的葛藤理論に対する批判

SIT の妥当性を主張する Tajfel & Turner (1986) は, 現実的葛藤理論 (Realistic Conflict Theory: 以下, RCT とする) を提唱した Sherif et al. (1961) の実験では明瞭にされていない点があくつかあると批判した。Tajfel & Turner (1986) は集団生活の中に競争関係を入れ込むことによって集団間葛藤が自然に発生することは認めているが, 葛藤のみで集団行動を理論的・実験的に実証するには不十分であると主張した。つまり, 集団間に存在する現実的な葛藤が敵対的な関係を作り出すだけではなく, 強い同一化を引き起こすことで内集団ひいきが生じたと説明した。RCT では同一化を主観的／自動的に発生するものとみなしており, 同一化と内集団ひいきとの関連は検討

されていなかった。

また、RCT では社会移動（個人が所属集団を変える）に関する信念体系を説明できていなかった。さらに、個人で移動する事のできない明確な階層化が集団に存在する場合もある。例えば、経済的な貧富格差やカースト制度などで分けられる集団には明確な階層化が存在する。そして、そうした集団では個人が劣った集団から脱する機会がほぼないため、低地位集団としての社会システムを受け入れるしかない。SIT によれば社会移動ができない場合には、社会的創造という行動戦略がとられる (Tajfel & Turner, 1986)。低地位集団は地位に関連しない比較次元を創造し、地位の文脈では自分の集団の劣勢は合意の上であると認識し高地位集団（外集団）に協力的になることもある (Sachdev & Bourhis, 1991)。

RCT では上記のような外集団ひいき現象を説明することが不可能である。RCT に基づけば低地位集団は優勢な集団に対して敵対心を持ち、差別的な振る舞いをするはずである。地位を含めた集団間に関係する変数の効果を検討するためには、MGP を用いて集団状況を統制した検討を行うことが適切であると主張された (Tajfel et al., 1971; Tajfel & Turner, 1979, 1986)。

MGP の構築

MGP とは集団間行動における集団カテゴリーの効果を検討するために編み出された実験手法である。集団間行動については、現実的葛藤や競争、集団内・間での相互作用、内・外集団の構造、集団内での個人の立ち位置、集団成員の性格などの様々な関連要因が検討されてきた。RCT のように現実存在する実在集団を対象とした研究もあるが、MGP のように集団

内・間状況を実験的に統制した方が、純粋な内集団ひいきの心理過程を検討する上で適切であると考えられた。そこで、集団に特有の相互作用や葛藤などを最小限にすることができるMGPが一般的に用いられるようになった。MGPの「minimal」とは、あらゆる集団の影響（集団間葛藤，敵意，経済的な利益）を限りなく小さくしたという意味である。

MGPの基礎となる研究はTajfel (1970) やTajfel et al. (1971) であり，多くの研究がそのMGPを用いた検討を行なってきた (Branthwaite, Doyle, & Lightbown, 1979; Brown, Tajfel, & Turner, 1980; Hartstone & Augoustinos, 1995; Tajfel & Turner, 1979)。また，個人的な類似性を排除して些細な基準で集団を分類した時でも内集団ひいきが見られ，MGPにおけるSITの妥当性は頑健に保証された (Billig & Tajfel, 1973; Brewer & Silver, 1978)。Tajfel et al. (1971) の実験では集団カテゴリーを共有するだけで内集団ひいきが生じたことから，自分と集団の存在を同一視すれば内集団ひいきが生じるには十分であると主張された。

Tajfel et al. (1971) は集団間行動に関連して「社会的な環境（内／外集団）に存在する「我々 (us)」と「彼ら (them)」といった分類は，適切な社会的基準の観点でカテゴリー化される必要があると考えている。言い換えると，社会的なカテゴリー化が起これば確立した社会を創造したり，一般的な内／外集団に対する態度が変容する可能性があるということである。社会心理学において「適応的な認知的機能に関する集団カテゴリー化が社会的な状況を明確にする」との仮定は一貫して示されている (Turner, 1975)。そこには，個人に対する教育や感情移入に関係なく集団カテゴリーが分類基準として成り立ちさえすれば集団間に差異をつけると強調された (Tajfel et

al., 1971)。MGP の定義に基づく実験手続きのポイントは下記の 6 つがある (Table 2-1; Tajfel et al., 1971)。6 つ目からも分かるように、厳密な MGP における内集団ひいきの検討には、報酬分配課題のような行動指標を用いる必要がある。

Table 2-1

MGP における実験状況の定義

ポイント	手続きの内容
カテゴリーの認識	参加者同士が対面することがなく内／外集団 (集団間状況) であるとの情報のみ与える
匿名性	個人の情報をコード化するなど集団のメンバーシップの匿名性が保持される
カテゴリーの基準	集団間のカテゴリー化の基準や内／外集団の性質が、参加者の道具的・理性的な概念と結びつかないようにする
カテゴリーの価値	参加者の「功利主義」としての価値 (経済的な利益) が表出されないようにする
戦略の判別	内集団ひいきに関連した戦略と全体の利益を最大化する戦略 (理性や功利主義者の概念をベースとしたもの) のどちらが選ばれるのかを把握できるようにする。SIT に基づき内集団の利益を減らしても外集団と差をつける差の最大化戦略 (Maximam Difference) がとられているかを検討する
行動指標	参加者には評価の次元ではなくて、実際の報酬に関わる現実的な分配であると思わせる

Tajfel et al. (1971) の MGP を用いた実験 1 では、イギリスの公立学校に通う 14-15 歳の男子学生 64 名を 1 グループ 8 名に分けた報酬分配課題が行われた。点の数を見積もる課題を行わせ、点を過剰に見積もる者と過少に見積もるもので集団

を分類した。また，その際に中立条件と価値条件を設定した。中立条件の4グループには「点の見積もりの過多と判断の正確性には何も影響はありません」，価値条件の4グループには「皆さんは他の人よりも点の見積もりの判断が正確でした」と教示した。集団分類後，報酬分配マトリクスを使用して内集団ひいきを検討した。

参加者は報酬分配マトリクスを用いて自分の報酬や罰を決定するのではなく，他の参加者へ与える額を決定する。14列2行のマトリクスには上行と下行の両方またはいずれかの列に，内／外集団成員それぞれに対する分配ポイントが記載されており，参加者は14列の中からどれか1列を選ぶ。その結果，まず価値条件と中立条件で違いは見られなかったが，参加者の多くは内集団ひいき行動を取っていた（84%）。

続く実験2は実験1の追試として行われ，集団カテゴリーの種類が変更された¹。実験2では，集団間の決定を引き出す要因のみを体系化させようと試みた。マトリクスはポイント数を操作することによって，両集団の和を最大化する戦略（Maxmam Join Payoff or Penalty: 以下，MJPとする），内集団利益の最大化戦略（Maximum Ingroup Payoff: 以下，MIPとする），差の最大化戦略（Maximum Difference: 以下，MDとする）という3つの戦略のどれかを採用できるように設定されていた。公平戦略は中央に配置されていた。参加者は実験1と同じ学校・学年の男子学生48名である。集団のカテゴリー化には，クレーとカンディンスキーという2人の画家が描いた絵画の好み課題を使用した。実験の結果，参加者は他のどの戦略よりもMD戦略に当てはまる内集団ひいきをすることが明

¹ 点の見積もり課題では，参加者個人の能力が反映されたと捉えられる可能性があったため，実験2では美的感覚により集団分類を行った。

らかになった。ただし，MD 戦略以外の MIP と MJP 戦略はどちらにも当てはまるポイント配置がなされており，両戦略のどちらが重要視されたかを比較できないという限界があった。

上記の実験により開発された MGP では集団カテゴリーの共有のみで内集団ひいきが生じることが示された。特に，参加者は内集団が得られる利益を犠牲にしても，内集団が外集団より勝つことが重要であると判断していた。また，内集団 1 名，外集団 1 名といった単独で行わせる決定（集団間を比較させない状況）では，公平戦略を採用する頻度が高いことが分かった。Tajfel et al. (1971) は MGP の結果から反証となりうる要因をあらかじめ挙げ，以下のような議論を展開した。

内集団ひいきに影響する要因 集団との同一化以外に内集団ひいきを説明する要因として，実験者効果 (experimenter effect; Rosenthal & Jacobson, 1968) が挙げられる。実験者効果とは実験者の行動意図を参加者が汲み取って，その意図に従って行動することを指す。しかし，実験室内のみで機能する名目上のカテゴリーに何らかの規範的な背景や結果への期待が付随する可能性は低く，実験者効果は影響しないと考えられる。ただし，参加者は「集団情報しか」与えられていないため，集団行動を期待している実験者の意図を汲み取ったという代替説明もできる。しかし，この代替説明に対しても実験者効果であるなら MD 戦略以外の戦略（公平や MJP 戦略）を取るはずであり，それらの戦略が選ばれなかったということは実験者効果が影響しないと主張された (Tajfel et al., 1971)。

2 つ目に相互作用の予期の効果である。Rabbie & Horwitz (1969) の研究結果から，集団内の相互作用により外集団と競争的ではない時にも内集団成員の魅力が増大することが分かっている。互いの集団同士での直接的なやりとりのない MGP

では，集団内に相互作用はなく内集団ひいきの必要条件ではないと主張された。

3 つ目は集団成員の類似性がある。MGP の集団分類ではクレーとカンディンスキーという絵画の好み課題，点の見積もり課題が使用された。課題には個人的な能力は反映されないが，参加者が同じ結果を示した集団成員として類似性を感じ取る可能性もあった。この可能性を検討するために，Billig & Tajfel (1973) が Tajfel et al. (1971) の手続きを採用して同一化でき類似性のある／ない条件，同一化できないが類似性のある／ない条件を設定した追試を行なった。その結果，類似性のある／ないに関係なく同一化できる条件のみで内集団ひいきが生じた。Billig & Tajfel (1973) の追試から内集団ひいきは類似性ではなく同一化から生じることが示された。

最後はマトリクスの提示方法による影響である。Tajfel et al. (1971) のマトリクスは MJP／MIP／MD／公平戦略をそれぞれ検討できるものであったが，Brewer & Silver (1978) はこのマトリクスでは全ての戦略を同時に比較して選択することができないと考えた。そこで，彼女らはペアマトリクスという新たな内集団協力の指標を考案し，全ての戦略が同時に選択できるようにした。改良したマトリクスにおいても同様に内集団ひいきが生じ，マトリクスの種類（戦略の提示方法）の違いは内集団ひいきに影響しなかった。

SIT の誕生

Tajfel & Turner (1979) は MGP を考案した Tajfel et al. (1971) の結果から SIT を提唱し，さらに Tajfel & Turner (1986) が SIT による内集団ひいきの説明を精緻化した。まず，彼らは集団を「集団のメンバーとして知覚した個人の集まり，共通の感

情にのめりこむ場合もあるもの」と概念化した。さらに，社会的カテゴリー化には社会環境の中で序列や分類をする認知的な機能があると主張した。カテゴリー化によって社会での自分の居場所を認識する「自己参照」が起こり，集団との同一化すれば他の集団と比べて良いか悪いかといった個人的な定義が付与される (Tajfel & Turner, 1986)。Tajfel & Turner (1979) は同一化の発生条件とその特徴，SITの定義，比較となる外集団の存在意義という3つの視点からSITに基づく内集団ひいきを説明した (Table 2-2)。Tajfel & Turner (1979, 1986) は，上記の条件や特徴を満たすことが，同一化によって内集団ひいきが生じるための前提条件であると定義した。

集団間の競争性 SITによれば集団間での差を維持・獲得しようとするのは，内集団を外集団より優越させるためである。よって，元々の競争関係が存在しなくとも集団間に差をつける過程で自動的に競争関係が生じると考えられる。集団間競争から導かれる葛藤の存在で集団内の凝集性や価値づけが高まり，内集団ひいきが増大したという結果も報告されている (Blake & Mouton, 1961)。実際の葛藤やその予期をコントロールした実験 (Rabbie & Wilkens, 1971) では，3名ずつの集団に分類し，他の集団と課題の出来・不出来を競争させる条件，他の集団とは競争させない条件を設定した。その結果，競争の有無に関係なく全ての条件で内集団に対して好意的な評価をする内集団ひいきが生じた。つまり，競争性を特段強調しなくとも内集団ひいきが生じることが示唆された。その他の集団と協力的または競争的な予期があるか否かを操作した実験 (Ryen & Kahn, 1975) では，両条件ともに内集団ひいき (評価) が生じたが，競争的な方が内集団ひいきの程度は強かった。

Table 2-2

SITに基づく内集団ひいき

ポイント	同一化の発生条件
基本的欲求	個人はポジティブな自己概念（自己肯定感）を維持・高揚させようとする動機がある。
カテゴリーの価値	社会的カテゴリーおよび集団のメンバーシップには，ポジティブ／ネガティブな価値づけがある。
同一化の特徴	
集団からの評価	社会的アイデンティティは集団成員（内／外集団）の評価を通して自己をポジティブ／ネガティブにする。
社会的比較	内集団の評価は社会的比較によって規定され，特定の外集団が表現する態度や特徴を通じて行われる。
集団間の差の評価	内／外集団に差をつけることで，内集団が優越／劣勢かが判断され高い／低い評価が生み出される。
SITの定義	
自己肯定感の維持	個人はポジティブな社会的アイデンティティを維持，獲得しようとする。
集団間比較	ポジティブな社会的アイデンティティは，内／外集団の比較によって保持できる。そのため，外集団に関連して必ず内集団が優越できる指標を用いる。
同一化の再取得	社会的アイデンティティに不満を抱いた場合は，内集団を離れる（社会移動），集団間を新たな次元で再度比較する（社会的創造）ことなどの方略が取られる。
外集団の存在意義	
同一化	個人には集団のメンバーシップを自己概念として内在化する同一化が生じる
属性の共有	社会的比較にあたり比較できる状況や属性を共有する（例：Medeiros（2017）の研究では，英語又はフランス語のどちらを母語とするかといったことが集団の区別になった）。内集団と比較次元で関連のない外集団は参照しない。類似性，近接性，状況の判断についても外集団との比較によって生じる。

また，競争により決められた勝敗を内集団がどのように認識するかは研究間で相違がある。一般的に負けた集団は資源

を奪われるため外集団と葛藤状況に陥るが、劣勢である内集団を差別的に扱ったり (Commins & Lockwood, 1979)、外集団に好意的な評価をしたりする研究もある (Wilson & Miller, 1961)。この現象は、勝敗はフェアに決められたものだとの認識し、勝った集団の優位性を認めた結果だと考えられる。同一化して内集団ひいきが生じる中で競争による勝敗をどのように捉え、内集団ひいきの生起に影響するかについては不明な点が多い。なぜなら、集団間の勝敗をフェアかそうでないと捉えるかは、何を勝敗の基準にするか、集団が持つ性質、状況（歴史的背景など）など様々な要因が影響するからである。

集団間の競争性が高い Sumner (1906 青柳他訳 2005) や Sherif et al. (1961) の研究では、内集団協力と外集団差別は表裏一体であると見なされてきた。内集団ひいきは内集団に対する協力と外集団に対する差別の2種類の行動に分けられる。Brewer (1999) はこれら内集団協力と外集団差別が必ずしも同時に生じるわけではないと主張した。Sherif et al. (1961) の実験で設定された状況は集団間で資源を奪い合うゼロサム状況であった。ゼロサム状況とは一定の決められた資源に対して、ある集団が資源を獲得すれば、もう一方の集団は資源を獲得することができないことをいう。このゼロサム状況では内集団に協力すれば、相対的に外集団は必ず損をする。しかし、集団に対する態度や評価などはゼロサム状況には当てはまらず、たとえ内集団を好意的に評価をしても外集団に対して敵意を抱き差別をするとは限らない。Brewer (1999) は少なくとも集団が葛藤状況になれば、SITに基づく内集団ひいきが必ずしも外集団差別につながるとは限らないと主張した。

さらに、同一化や内集団のポジティブ性（信頼できる、フレンドリー、誠実など）の認識は、外集団のネガティブ性の認識

又は差別的行動と関連がないことも示されている (Brewer, 1979)。また, Buhl (1999) によるポジティブ-ネガティブ非対称性効果をメタ分析した結果では, MGP の報酬分配課題などの決定にネガティブな結果やコストが含まれる場合, 内集団ひいきが弱まることも示されている。つまり, 外集団に直接的な危害を加える行動はあまり生じていなかった。特に, 実在集団では内集団協力につながる内集団のプライドや愛国主義は, 外集団攻撃とは区別される (Struch & Schwartz, 1989)。

Brewer (1999) は進化的な視点からも内集団協力は外集団差別よりも容易に起こりやすいと主張した。我々は長期的に生き延びるために情報, 援助, 資源などを他者に要求しながら生きていく必要がある。また, 反対に他者に資源を提供することも重要である。個人レベルの相互協力では他者からもらえる利益と他者に提供する資源というコストが関連するため, 協力的な相互作用には一定の限界がある。すなわち, 見境のない協力の決定は有効な戦略とは言えない。そこで, 集団レベルで相互協力を達成し利益を獲得するために用いられる一つの指標が, 集団の境界性という社会的な違いである。内集団の範囲では他の人が自分と同じように協力してくれる可能性が高いため, 利他主義的な行動を取りやすく相互協力を導く信頼関係も形成されやすい (Brewer, 1999)。

しかし, 社会環境や状況によっては集団間の差異が葛藤や憎しみを生む場合もあり, 内集団への忠誠心を維持するため外集団に対して憎しみや敵意を抱くこともある。外集団に対する敵意が生じる理由の一つには, 外集団脅威の知覚が挙げられる。Sherif et al. (1961) の実験では, 外集団との接触がかえって敵意を増加させることが分かっている。なぜなら, 内集団と類似した外集団との接触は, 内集団成員との区別が曖昧

になり同一化が脅かされる脅威状況が作り出されるからである。実在集団においては同一化する集団と脅威との関連によって内集団ひいきの現れ方が異なる可能性がある。このように、集団間の競争性が外集団脅威を導き SIT に基づく内集団ひいき（外集団差別）を引き起こすとの知見も存在する。

MGP における地位 現実的葛藤理論（RCT）に基づくと集団間葛藤（競争）状況に陥れば、外集団に対する敵意から外集団差別が生じると考えられる。しかし、SIT では集団間葛藤は集団に元々存在するものではなく、集団間に差をつける過程で副次的に発達していくものだと主張されている。さらに、SIT では競争関係を想起させる地位と同一化の関連について詳細な説明を試みられた（Tajfel & Turner, 1986）。SIT では集団間競争の結果が地位であり、地位は集団の立ち位置を反映する評価の次元につながるとされる。しかし、低地位集団は地位の次元から集団間を比較してもポジティブな同一化を獲得することはできない。このことを踏まえ、Tajfel & Turner (1986) は低地位集団ではポジティブな同一化を獲得するためにどのような方略がとられるかを、社会移動／社会的競争／社会的創造の観点から説明した。

集団状況を容易に変えることができない低地位集団の成員は高地位集団に移動したいと望み、内集団と同一化しなくなる。明確な階層化が存在する状況ではこの社会移動が起こりやすい。ただし、低地位集団が高地位集団と地位を逆転できる状況であるなら、社会的競争が生まれ内集団ひいきにつながる。競争に伴って外集団との葛藤や敵対心も生じやすくなる。もう一つの社会的創造は、外集団よりも優越できる内集団の新たな比較次元を作ることによって自己と集団のポジティブ性が保つ戦略である。ただし、実際に集団の社会的な立ち位置や関係

性が変わるわけではない。また，社会的創造には細かくは以下の 3 つの方略がある (Tajfel & Turner, 1986)。a) 内集団と外集団を比較する新しい次元を創造する。b) 比較次元の価値を見つめ直しネガティブからポジティブへと考え直す。c) 地位では勝てない外集団を避け，比較対象を変える (下方比較)。

ここまで地位に関連した 3 つの行動方略を紹介した。地位が集団間葛藤状況を導くか否かは，社会移動の可否に規定される。集団に満足せず自由に社会移動できる状況では，集団との同一化，凝集性，愛着も低く，集団間の境界性も曖昧であることから葛藤状況に陥る可能性は低い。反対に集団からの離脱が難しい場合にも社会的創造によって他の比較次元が変われば集団間葛藤は減少する。つまり，社会移動と社会的創造の戦略がとられる場合，集団間葛藤が生じにくい。

それでは，集団間葛藤を引き起こす社会的競争が起こるのはどのような状況か？ SIT では地位の不安定／正当性に着目してこの問いに回答した。低地位集団か高地位集団かにかかわらず，地位が不安定／正当性のないものと認識されれば，集団の行動や態度が競争的になり，SIT に基づく内集団ひいきが生じる。例えば，Van den Berghe (1967) の研究では，戦後の南米で情勢が変わり白人にとって奴隷だった黒人が脅威となった時に，敵意を持ち差別したことも知られている。

Mullen, Brown, & Smith. (1992) は 137 の内集団ひいき研究 (参加者総数 5746 名) のメタ分析を行い，地位を含めた内集団ひいきに関連する変数を検討した。メタ分析の目的は，内集団ひいき現象が一般的に発生することの妥当性と内集団ひいきとの関連変数 (集団の規模，集団カテゴリーの現実性，地位) を検討することである。Mullen et al. (1992) のメタ分析の結果，人々は一般的に内集団を好意的に評価をする内集団ひい

きを行い，その傾向は外集団成員よりも内集団成員の割合が少ない時／実在集団の時に強くなった。さらに，地位が高くなる（高地位集団の時ほど）につれ，強い内集団ひいきが生じていた。上記の通り，MGPでは地位と内集団ひいきに関連があったが，実在集団では地位の効果が弱かった。このメタ分析で明らかになったことは，a) 内集団ひいきは一般的によく見られる現象であること，b) 実際の富（資源）に影響する場合でも内集団ひいきは生じること，c) 高地位集団では強い内集団ひいきがみられるが低地位集団ではみられなかったこと，d) 高地位集団の内集団ひいきはMGPでしかみられないことが多いことの4点である。

実在集団における地位 Brewer, Manzi, & Shaw (1993) も同じく内集団ひいきに影響する地位や集団の規模，没個性化の重要性を検討した。没個性化とは自己が集団と同一化することによって個人的としての自己意識などが低減している状態を指す。Brewer et al. (1993) は，実在集団のカテゴリー全てが内集団の忠誠心を持たせ，強い感情と結びつけられるものではないと考えた。その上で個人が同じカテゴリーで分けられた集団と同一化する過程で重要となる要因を検討した。一つの要因として挙げられるのは，集団の規模である。カテゴリー内の人数は他の集団との比較材料にもなり，少数派の集団の方が容易に同一化しやすくなると考えられる。

Brewer et al. (1993) は大学生 244 名を対象に 2 (没個性化／統制) × 2 (多数派／少数派) × 3 (高地位／中立／低地位) の実験デザインによって内集団ひいきを検討した。没個性化の効果を検討するため，大学生の集団としての同一化を教示によって顕現化させる条件を設けた。集団は点の見積もり課題で分類された。MGPにより集団を分類するが，参加者には

自分の課題の結果が 80%の多数派又は 20%の少数派であったことを教示された。次に参加者には集団ごとの好みのパターンをみる課題と知能テストすると伝えた。実際の得点とは関係なく知能テストがよくできた人（高地位集団）とできなかった人（低地位集団）であるというフィードバックを与えた。

実験の結果，実在集団では地位条件ごとに有意な差はなく内集団ひいき（評価）はどの条件でも生じた。低地位集団の成員は内集団の能力や知性（地位に関連した次元）の側面を外集団よりも低く見積った。さらに，地位と集団の規模との関連をみると没個性化しない統制条件では，高地位集団／内集団が多数派であるときに評価が高くなった。最後に，SITに基づく集団間競争／地位と内集団ひいきとの関連を Figure 2-1 に示す。

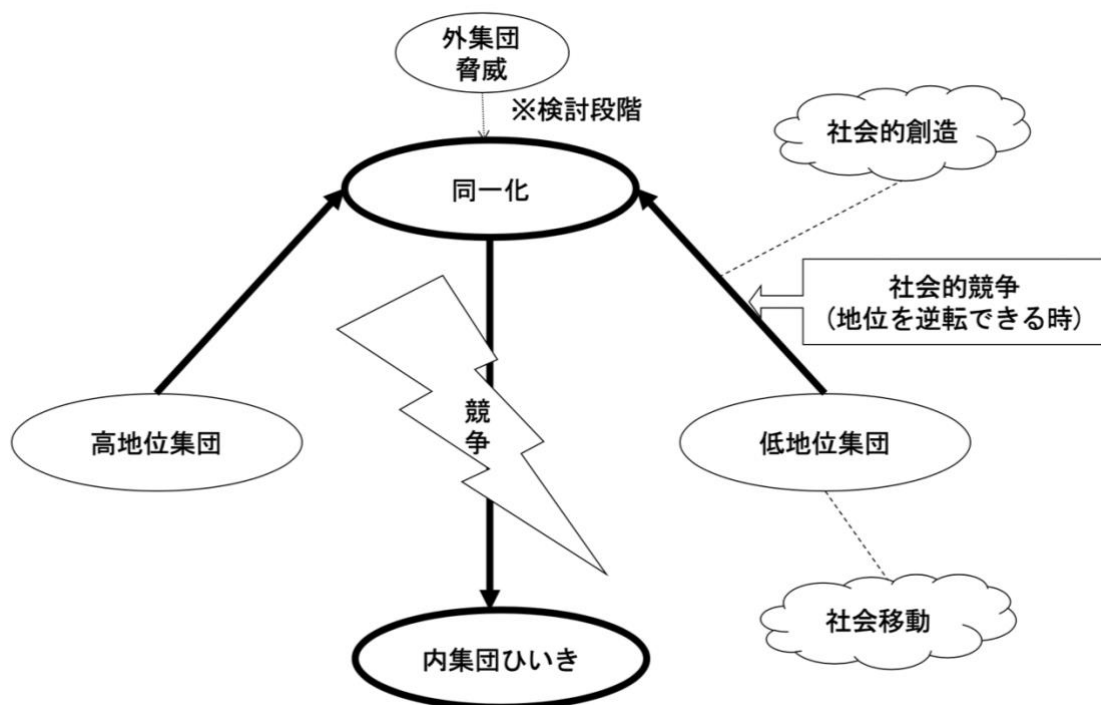


Figure 2-1. SIT と関連する諸要因のまとめ

第 2 節 閉ざされた一般互酬仮説 (BGR)

SIT が提唱されてから数多くの研究者たちによってその妥当性が検討され、内集団ひいきの説明原理として確立された (Brewer & Silver, 1978; Brown, Tajfel, & Turner, 1980; Simpson, 2003, 2006; Tajfel & Turner, 1979, 1986)。また、第 1 節の研究レビューの通り、集団の規模／地位／没個性化などの様々な要因と SIT との関連性も同時に明らかにされた。しかし、1990 年代に入ると SIT 以外の観点から内集団ひいきの生起を説明する閉ざされた一般互酬仮説 (BGR; Yamagishi & Kiyonari, 2000) が提唱された。

MGP では集団カテゴリーを認識した後に、自分と相手 (内／外集団) が互いに報酬を分配し合う課題を行うことで内集団ひいきが検討されていた。この報酬分配課題では、自分の報酬が相手の決定に委ねられるという相互依存関係が成立していた。BGR の妥当性を主張する研究者たちは、この相互依存関係により他の内集団成員からの互惠性を期待し内集団ひいきが生じたと説明した (神・山岸, 1997; 清成, 2002; Yamagishi & Mifune, 2008)。

SIT では集団間の関係性が前提にあり「自身が望ましいと思う集団と同一化する基本的な欲求」と「集団間に差をつけること」の 2 点が内集団ひいきを説明する中核を担っている (内集団協力は前者の同一化のみで生じる)。その一方で、BGR は適応論の視点から集団内の関係性に着目した。以下では、BGR の基本的な原理や定義を説明した上で、内集団ひいきが SIT と BGR のどちらに基づくかを判別できる集団所属性の知識操作 (神・山岸, 1997) について説明する。MGP においてこの知識操作を行い、SIT と BGR の妥当性を同時に検討した研究を紹介

介する。

BGR の背景となる理論的立場：互惠的利他主義

集団の中には他者との社会的交換関係があり，一般的には互惠的な関係性が存在する。社会的交換とは，人々が物や物以外（同意や敬意など）を互いに交換して互いの関係性を構築する社会的な行動のことである（Homans, 1958）。Homans (1958) は，人々は他者に何かを与えればそのお返しがあるものと考え，かかったコストに見合う報酬が返ってくるか否かで行動を変容する可能性があるとして述べている。また，この社会的交換関係には限定交換と一般交換（Ekeh, 1974）の2種類がある（Figure 2-2）。限定交換は二者関係の直接的な返報の関係性を表し，自分が相手に協力した際にその相手からの直接的なお返しを期待できる交換関係のことを指す。一方で，一般交換は二者関係を越えた関係性を表し，自分が相手に協力をした際にその相手から直接的なお返しはないが，協力を享受した相手がその恩をまた別の他者に返していく交換関係のことを意味する。限定交換関係では自己と他者が直接的に接触する機会があり，一般交換関係ではそうした機会がない。

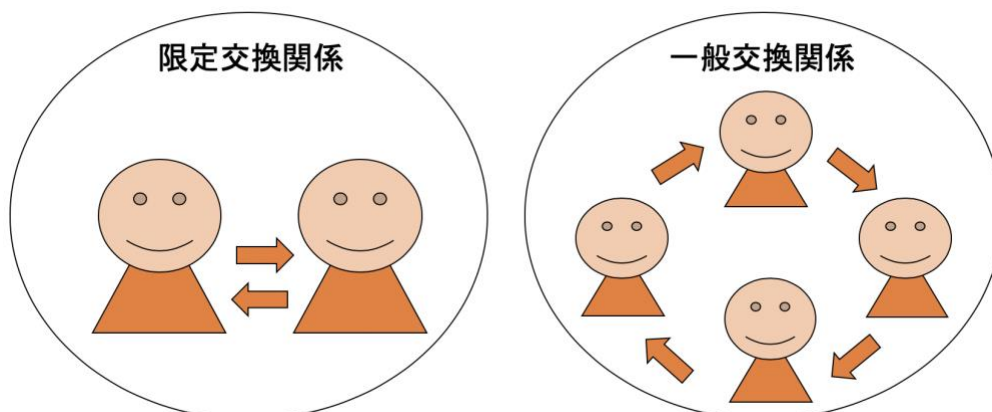


Figure 2-2. 社会的交換関係

一般交換関係が働く集団内では，自分が内集団成員に協力すれば，いつか他の内集団成員の誰か（協力した相手ではない）から協力に対する返報を受け取るだろうと互惠性を期待する。例えば，自分が献血をした場合，血が与えられる予定の相手からの直接的なお返しを受けることはないが，皆が献血を行い十分な血液量が保たれていれば自分が必要とした時に輸血してもらえするというお返しが期待できる。このように一般交換関係が働く集団内では，協力が巡り巡って自身に返ってくる。神・山岸（1997）は，集団間関係に直面した時，人々は集団内に一般交換関係を想起し，デフォルトで間接互惠性を期待して協力的になると主張した。これを集団ヒューリスティック（group heuristic）と呼ぶ。ヒューリスティックとは，経験則またはデフォルトとして存在する信念のことであり，BGRの基本的な説明と合致する。

集団ヒューリスティックは一般交換関係の中で生き残るために合理的な戦略であり，以下のように説明される（神・山岸，1997）。a）集団間状況に直面した個人はデフォルトで集団内に一般交換関係があると想定する。b）人々は集団内から追い出されないよう悪い噂（評判）がたつリスクを最小限にしようとする。協力は集団内の関係性の中に参入するための「入場券」のようなものである。もし，「入場券」を支払わない（非協力）者がいればフリーライダー（協力へのただ乗り）とみなして集団内から追い出す。Yamagishi et al. (1999) や Yamagishi & Mifune (2008) は，同じ集団の仲間に対して協力的になるのは良い評判を稼ぐための投資であると主張している。

また集団ヒューリスティックはエラーマネジメント戦略（Yamagishi, Terai, Kiyonari, Mifune, & Kanazawa, 2007）からも説明できる。エラーマネジメント戦略では，フリーライド

に失敗するエラーよりも集団内での関係性を維持するための評判を落とすエラーの方が重大であり、そのエラーを減らす戦略をとると説明される。山岸らの一連の研究では、この戦略を適用できない状況において内集団ひいきは生じなくなることが頑健に示されてきた (Foody, Platow, & Yamagishi, 2009; 神・山岸, 1997; 神・山岸・清成, 1996; Karp, Jin, Yamagishi, & Shinotsuka, 1993; 清成, 2002; 鈴木・金野・山岸, 2007; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi & Mifune, 2008, 2009; Yamagishi, Mifune, Liu, & Pauling, 2008)。上記の実験から、人々は「他の内集団成員も自分と同じように内集団を好んで協力をする」という互惠性の期待がある時だけ、内集団ひいきをすることが明らかにされた。

BGR を実証した実験研究

Yamagishi et al. (1999) は集団ヒューリスティックの妥当性を検討した実験を紹介している。これらの実験では一貫して、同一化ではなく集団ヒューリスティック（互惠性の期待）が働くことで内集団ひいきが生じることを示した。以下では、各実験の結果を報告することで BGR の基盤となる説明原理をまとめていく。

報酬分配課題による検討 Tajfel et al. (1971) の MGP を用いた実験では報酬分配課題により内集団ひいきが検討されていた。そこで、神他 (1996) も同様に内／外集団 1 名ずつに報酬を分配する課題と性格を予想させる課題にて内集団ひいきを検討した。2 種類の課題を使用した理由は、彼らは内集団ひいきには「内集団に対する好意的な評価」と「実際にお金などを与える行動」の 2 種類が存在し、その背後では異なる心理過程が働くと仮定したからである。そして、報酬分配課題では双

方向依存性のあり／なしが条件操作された。双方向条件は、参加者が他者に利益を与えると同時に参加者も他者の決定により報酬が決められるという状況である。この状況では互惠性を期待できるため、BGRに基づく内集団ひいきが生じると予測される。相互依存性が存在しない一方向条件は、参加者は他者に対して報酬を分配するが、参加者の報酬は他の人からの決定と関係ないという状況である。同一化のみ生じる一方向状況でも、内集団ひいきが生じるならばSITが支持されたといえる。その結果、内集団を好意的に評価する内集団ひいきではSITが支持され、金銭の分配を行う内集団ひいきではBGRが支持された。

Yamagishi et al. (1999) の実験4では、SITに基づく集団間の差を最大化する動機から内集団ひいきが生じるか否かが検討された。実験では、内／外集団に一定の報酬（250円）を与える時に外／内集団へいくらか与えるか（0-500円）を決定させた。もし、参加者が差の最大化動機をもつなら、内集団の報酬一定条件で外集団に250円（平等分配）より少ない金額を提供するはずである。外集団の報酬一定条件には差の最大化と両集団の和の最大化動機が存在する。実験の結果、差の最大化動機に反して内集団の報酬一定条件では、外集団に約327円が提供された。外集団の報酬一定条件では、内集団に約320円が与えられた。内集団に与えた金額は条件間で有意差はなかった。すなわち、報酬分配課題における内集団ひいきは差を最大化する動機から生じたものではないことが示された。

PDゲームによる検討 神・山岸（1997）ではSITを反証する最初の実験として、集団所属性の知識操作をした上で1回限りの四人のジレンマ（PD）ゲームを行った。自分と相手の集団所属性を共有できるか否かの知識操作（Table 2-3）を行

うことで SIT と BGR の妥当性を同時に検討することが可能になった。参加者と相手が同じ集団所属性であることを共有できる内集団相互条件だけ互惠性を期待することができる。内集団相互条件のみで協力的になれば、BGR が支持されたといえる。それに比べて一方的に相手が内集団であると分かる内集団一方条件でも協力的になれば、SIT が支持されたといえる。その結果、互惠性を期待できる内集団相互条件のみで内集団ひいきが示された（条件の協力率：内集団相互 31%，内集団一方 24%，相互不明 20%，外集団相互 21%，外集団一方 19%）。

Table 2-3
集団所属性の知識操作条件（神・山岸，1997）

条件名	状況	SIT	BGR
内集団相互条件	互いに内集団成員であると分かる	○	○
内集団一方条件	参加者だけ相手を内集団成員であると分かる	○	×
相互不明条件	互いに集団所属性が分からない	×	×
外集団相互条件	互いに外集団成員であると分かる	×	×
外集団一方条件	参加者だけ相手を外集団成員であると分かる	×	×

Yamagishi et al. (1999) の研究 5 では、PD ゲームにおける内集団ひいきが互惠性の期待を統制しても同一化の働きによって生じるか否か検討された。ここでは集団所属性の知識操作は行なっていない。MGP を用いて参加者 88 名が内集団、外集団、不明の相手それぞれと 1 回限りの PD ゲーム（元手 200 円）を行なった。実験の結果、平均して内集団では 50%，外集団では 40%，不明は 46% の協力率であった。事後質問紙により「もし、あなたが彼／彼女に多く分配したら相手からより多くの提供があると思いますか？（5 件法）」と尋ね、互惠性の期待を測定した。内集団では 3.47，外集団では 2.39，不明では 2.99 の期待得点だったことから、内集団により強く互惠性を

期待していることが分かる。また、互惠性の期待を共変量として入れた時に同一化と協力の関連が消失したことから BGR が支持される結果であった。

上記の研究結果 MGP における内集団ひいきには SIT よりも BGR が支持されることが頑健に示された。MGP は実在集団に特有の葛藤などの要因が可能な限り排除されていることで、一般交換関係がより明確になる。神・山岸 (1997) の事後質問紙においても内集団成員に対する協力の期待が外集団成員よりも高く見積もられていた。これは他の内集団成員も自分と同じように協力的になるだろうという認識が共有されていることを意味する。

BGR の誕生

BGR の提唱 Karp et al. (1993) では実験の分配結果にかかわらず報酬を一定にすると内集団ひいきが生じないことが示され、神他 (1996) の追試でもその結果が再現された。しかし、報酬分配課題には MGP で用いられる集団カテゴリー以外に、分配者と受け手集団に分けられることでカテゴリーが交差する可能性があった。そこで、神・山岸 (1997) はその問題を解決するため 1 回限りの PD ゲームを行い、集団ヒューリスティックの頑健性を示した。Yamagishi & Kiyonari (2000) と清成 (2002) の PD ゲームの結果からも集団ヒューリスティックの妥当性が示され、そのヒューリスティックが働く範囲が「内集団に閉ざされている」ことから閉ざされた一般互酬仮説 (BGR) が提唱された。

SIT と BGR の妥当性は集団所属性の知識操作 (Table 2-3) によって検討されてきた。BGR の妥当性を主張する研究者たちは、主に集団所属性の知識操作を用いて SIT の反証を試み

てきた (神・山岸, 1997; 神他, 1996; 清成, 2002; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi et al., 2008; Yamagishi & Mifune, 2008, 2009)。しかし, 知識を一方的に共有する条件で内集団ひいきが生じなかったとしても, 集団所属性の共有が欠如していることで同一化が弱まったと SIT から説明することもできる。ただし, 集団所属性の知識操作は参加者内配置であるため, 同一化の程度が変化する可能性は低い。少なくとも分配者選択ゲーム (鈴木他, 2007) と順次 PD ゲーム (堀田・山岸, 2010) では知識を共有するか否かで同一化の程度に差がなかったことが示された。

BGR の頑健性 神・山岸 (1997) の行なった PD ゲームによって互いに内集団成員であると認識した時にだけ内集団ひいきが生じるという集団ヒューリスティックが働いていた。しかし, この知見のみでは内集団一方条件では同一化が弱いという可能性を完全には否定できない。1 回限りの PD ゲームで互いの知識を共有していないことが, 集団カテゴリーの現実味や集団実体性の効果を損ったのかもしれない。そこで, Yamagishi & Kiyonari (2000) は PD の種類の違いが同一化や互惠性の期待による内集団ひいきを説明する上で問題になるか検討した。Yamagishi & Kiyonari (2000) は 1 回限りの PD ゲームと順次 PD ゲームにおける内集団ひいきを検討した。1 回限りと順次 PD ゲームでは, 互惠性の期待を抱く程度は異なるが, 同一化の程度はどちらのゲームでも同じである。そのため, 同一化の強弱が内集団ひいきに影響するとの説明は成り立たない。順次 PD ゲームの参加者は全て第 1 プレーヤーで第 2 プレーヤーが協力するか否かは分からないが, 参加者の決定を見て行動すると教示された。1 回限り PD ゲームは参加者と相手が同時に決定を行う一般交換の関係であり, 順次 PD ゲームは

限定交換の関係である。

2 (1 回限り / 順次) × 2 (内集団 / 外集団) の実験デザインで 91 名を対象に実験を行なった (元手は 300 円)。その結果, 1 回限りの PD ゲームでは内集団ひいきが生じたが, 順次 PD ゲームでは内 / 外集団へ平等に提供した。順次 PD ゲームでも内集団への同一化は十分に強く, 同一化の程度が弱いことで平等分配が生じたわけではなかった。さらに, 同一化と内集団ひいきの相関を見たところ, 1 回限りの PD ゲームで正の相関関係がみられ, 順次 PD ゲームでは関連はなかった。そして, 期待を統制した重回帰分析では同一化と内集団ひいきの標準化係数が減少し有意ではなくなった。このパターンは同一化を統制しても変化しなかった。したがって, 同一化は互惠性の期待を媒介して内集団ひいきを引き起こしており, 同一化と内集団ひいきの相関は疑似相関であるといえる。この結果から, Yamagishi & Kiyonari (2000) は内集団ひいきの究極因は BGR に基づく互惠性の期待であると主張した。

BGR の理論的基盤：社会的交換の感覚と互惠性

BGR に関連した社会的交換の感覚は, 相互協力を達成するための重要な要因である (Kiyonari, Tanida, & Yamagishi, 2000)。Kiyonari et al. (2000) は 1 回限りの PD ゲームと順次 PD ゲームを行い, 社会的交換の感覚が BGR に基づく内集団ひいきを引き出すことに有効であるかを検討した。相互協力を達成するためには, 非協力者を可能な限り排除して協力者を選別する必要がある。そのため, 人々は非協力が有効な手である PD ゲームの構造を相互協力が望ましい手である安心ゲーム (Assurance Game: 以下, AG とする) の構造であると認識するエラーを起こすという (Kiyonari et al., 2000)。

渡部・寺井・林・山岸（1996）は1回限りのPDゲームにおける協力行動の結果についての望ましさ（どの程度満足するか）を7件法で測定した。その結果，相互協力を達成できる時には6.22，参加者が一方的に搾取して大きな利益を得る時には4.62という望ましさの値を示した。このことから，参加者はPD構造を相互協力が望ましいAG構造へと認識を変換させていることが分かる。アメリカ人を対象とした場合でも同様の構造変換が起っていた（Hayashi, Ostrom, Walker, & Yamasgishi, 1999）。Hayashi et al. (1999)の研究では非協力が有効な手のPDゲームの構造にもかかわらず，相手の協力を先に示すとアメリカ人は61%，日本人は75%が協力した。

Kiyonari et al. (2000)はこのPDゲームの構造からAG構造を認識するエラーに着目し，社会的交換の感覚がエラーの発生に関係すると考えた。すなわち，現実的な社会的交換である（自分と相手の決定が結果に影響を及ぼす）という感覚が引き出されるほど協力率が上がると予測した。このエラーが相互協力を望ましいと思った結果ではなく，単なるゲーム構造を理解できなかった混乱の結果であるならば，社会的交換の感覚は協力率を下げる可能性もある。1回限りと順次PDゲームにおける社会的交換の感覚を比較すると，相手の協力を知らされる順次PDゲームの方が社会的交換の感覚が引き出されやすく協力率が上がると考えられる。また，社会的交換の感覚は実験およびマトリクスのタイプによって操作された。実験室実験では決定が報酬に影響するが，場面想定法実験では報酬に影響しないため交換の感覚は弱い。さらに，金銭報酬を強調することで交換の感覚を引き出しやすいマトリクスとその感覚が弱いポイントで提示するマトリクスを使用した。したがって，実際に参加者の報酬に関わる実験室実験 > 場面想定

法実験（お金）＞場面想定法実験（ポイント）の順で社会的交換の感覚の現実味は実験室実験が最も高くなると予測した。

予測通り，実験室実験では社会的交換の感覚が強い時に協力率が一番高くなった。また，場面想定法実験のポイント条件では，順次 PD ゲーム（2 番目）より 1 回限りの PD ゲームの方の協力率が高くなった。場面想定法のポイントのように報酬に影響する感覚が弱い場合，相手が先に協力を示せば参加者は非協力的な決定をした。順次 PD と 1 回限りの PD ゲームは同じ構造であることから，ゲーム構造を理解していない混乱とは考えにくい。すなわち，現実的な社会的交換がある関係では人々は非協力による短期的な利益を得るより集団内で長期的な利益を得るという適応的な行動をとる傾向にあった。社会的交換関係の中で相互協力が達成されるうち，非協力者が排除される。最後に BGR に基づく互惠性の期待，期待に関連する諸要因及び内集団ひいきとの関連を Figure 2-3 に示す。

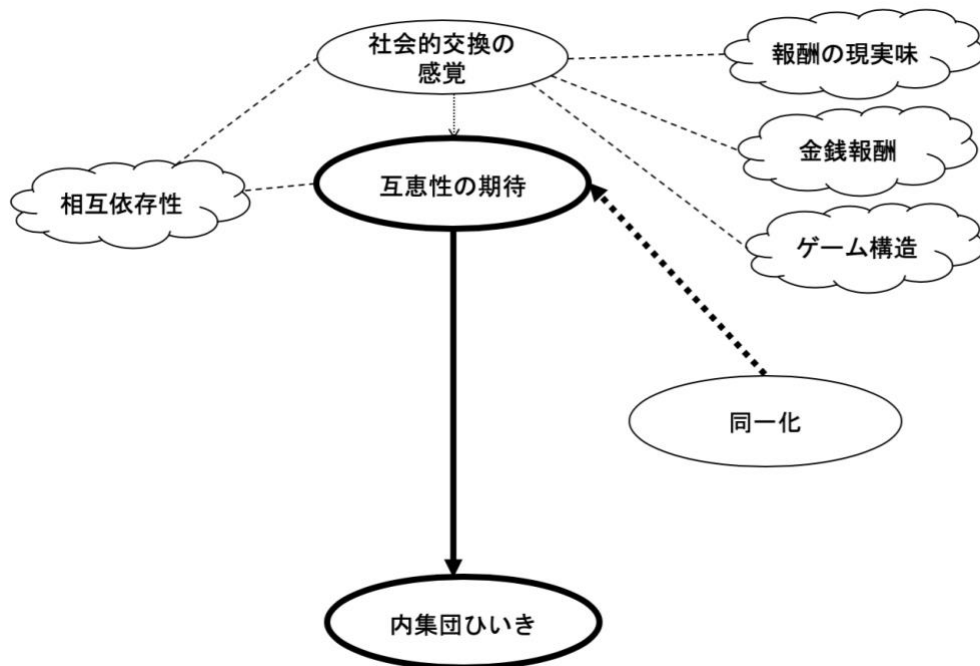


Figure 2-3. BGR と関連する諸要因のまとめ

第 3 節 状況に応じて働く SIT と BGR の心理過程

これまでの内集団ひいきの研究では，SIT と BGR は相互背反の理論としてそれぞれの妥当性が検討されてきた。しかし近年，SIT と BGR が相互背反の理論ではなく両方の心理過程がそれぞれ同時に働くことで内集団ひいきが生じるという主張がされてきた（中川他，2015，2019；Stroebe et al.，2005；横田・結城，2009）。SIT と BGR が両立するという立場から，集団が直面する状況によってどちらの心理過程が働くかが規定され，内集団ひいきが生じると考えられた（Figure 2-4）。これらの主張は，SIT が集団間の関係，BGR が集団内の関係を重視しているという非対称性から導かれている。集団内／間に対応する適応課題がそれぞれ異なり，その適応課題を顕現化させる状況要因があると予測した（中川他，2015，2019）。

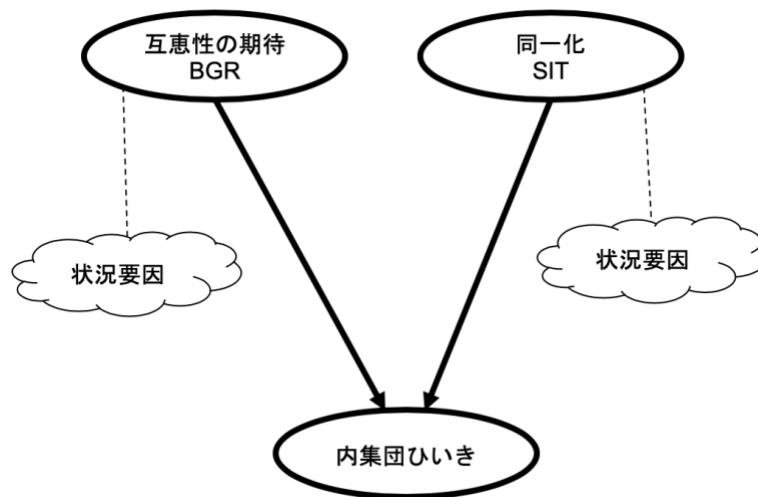


Figure 2-4. 両理論が妥当である場合のモデル図

状況要因の特定

相互依存性 相互依存性を操作しない MGP の報酬分配課題

では内集団ひいきが生じた因果関係（SIT と BGR のどちらに基づくのか）を比較できないという問題があった。さらに，Stroebe et al. (2005) は参加者の報酬分配が内／外集団と相互依存関係にあるか否かを操作し，両理論の心理過程の働きを検討した。自己の報酬が他の集団成員に決められる相互依存性があることで，互惠性を期待できると考えられる。両理論の妥当性を検討するため，Stroebe et al. (2005) は相互依存性の有無を操作する以下の条件を設定した。内／外集団のどちらかと相互依存性がある，内／外集団の両方と相互依存性がある，相互依存性はないという条件であった。相互依存性がない条件は SIT の心理過程が働く状況である。

大学生 124 名を対象に 1 セッション 20-30 名程度に分け，相互依存性（Gaertner & Insko, 2000; Rabbie, Schot, & Visser, 1989）を操作した報酬分配マトリクスを使用して内集団ひいきを検討した。相互依存性は内／外集団から報酬を受け取るか受け取らないかによって操作された。実験の結果，内集団と相互依存性がある場合，内集団ひいきが生じ外集団には分配額が減少した。また，内集団に対する互惠性の期待も高く，外集団に対する互惠性の期待は低くなった。さらに，相互依存性が存在しない条件では，同一化高群が低群よりも内集団に多く報酬を分配し，SIT が支持された。ただし，差の最大化動機とは関連がなかった。

上記の研究から，内集団成員と報酬にかかわる相互依存性がある場合，互惠性の期待が働く内集団ひいきが生じ，相互依存性がない場合，集団同一化による内集団ひいきが生じていた。すなわち，相互依存性の有無という状況要因によって SIT／BGR の心理過程のどちらが働くのが規定されていた。

外集団脅威 Stroebe et al. (2005) の知見から SIT と BGR 両

方ともが内集団ひいきの生起に寄与することが示唆された。しかし、彼らの研究の中では SIT の心理過程の働きに影響する状況要因が明らかにされていなかった。すなわち、BGR に基づく内集団ひいきが生じるか否かは、相互依存性の有無が手がかりになることが示されたが、何が手がかりとなって相互依存性がない時に SIT の心理過程が引き出されたのかは明らかにされていなかった。

そこで、横田・結城（2009）は SIT の心理過程の働きを活性化させる状況要因の検討を行なった。横田・結城（2009）は適応論的視座から外集団脅威が存在する時には SIT の心理過程から、一方で集団内の相互依存性が存在する時には BGR の心理過程から内集団ひいきが生じると仮定した。内集団の存在を脅かす外集団の脅威を知覚すれば集団間の競争関係が喚起される。こうした状況下では、内集団に協力をして勝利に導くという適応課題が顕現化される（Tooby & Cosmides, 1988）。なぜなら、集団間競争状況において限られた資源量であるならば、その資源を内集団が獲得しないと集団全体の存続が難しくなるからである。したがって、内集団を勝利に導き資源を獲得すれば個人の利益も同時に増大するため、内集団を外集団より優越させる方が適応的な行動である（横田・結城, 2009）。一方で集団間が競争状況ではない場合の適応課題（Trivers, 1971）は、集団内にとどまり長期的な利益を得るための一般交換関係を維持することである。集団内に相互依存性が存在すれば、デフォルトで互惠性の期待を抱き BGR に基づく内集団ひいきが生じると予測される。

横田・結城（2009）は MGP を用い、外集団脅威条件、相互依存性条件、統制条件を設定した上で内集団ひいきを検討した。外集団脅威の操作には、3つのエッセイの中から名詞を探

索して全てを丸でかこむ課題を使用した。名詞探索課題では外集団脅威の手がかりを提示するため、外国人（外集団）が日本人（内集団）の生活様式を強く侮辱する内容を使用した。他の条件では外集団脅威と関係ない内容を使用した。

内／外集団成員への報酬分配課題（元手 500 円）で自分の報酬が他の参加者の決定によって決められるか否かで相互依存性の有無を操作した。統制条件と外集団脅威条件では、一定報酬金額を受け取ると教示された。各条件での内集団に対する提供金額を検討したところ、統制条件と相互依存性条件では有意な差がなく、統制条件と外集団脅威条件では有意差が得られた。また、外集団脅威条件のみで提供金額と差の拡大動機に正の相関関係があった ($r = .90, p < .01$)。この結果から、外集団脅威が存在する場合には差の拡大動機から内集団ひいきが生じることが示された。一方で相互依存性の効果が弱く、相互依存性条件では内集団ひいきが生じたものの、統制条件と有意な差は得られなかった。

上記二つの研究から、内集団ひいきには SIT と BGR の心理過程が状況に応じてどちらも働くことが示唆された (Figure 2-5)。従来の内集団ひいき研究では、SIT および BGR の心理過程はどちらかのみが働くという前提で検討が行われ、BGR が内集団ひいきの説明として優勢であった。しかし、その一方で現実には存在する実在集団の内集団ひいきには、SIT の心理過程が働くこと (Bennett, Lyons, Sani, & Barrett, 1998) が示されており、MGP と実在集団で得られた結果が必ずしも一致しないという限界がある。MGP において状況要因を検討した結果 (Stroebe et al., 2005; 横田・結城, 2009) から示唆されるように、集団状況の違いによっても両理論の心理過程の働きが異なる可能性がある。そこで、本論文も一貫して SIT と BGR そ

れぞれの心理過程の両方ともが内集団ひいきの生起に寄与しており，それらの心理過程の働きはある状況要因に規定されるという立場を採用する。本論文の目的は，実在集団を対象に両理論の生態学的妥当性を検討するとともに，両理論から説明される心理過程がいかなる状況で活性化されるのかを明らかにすることである。

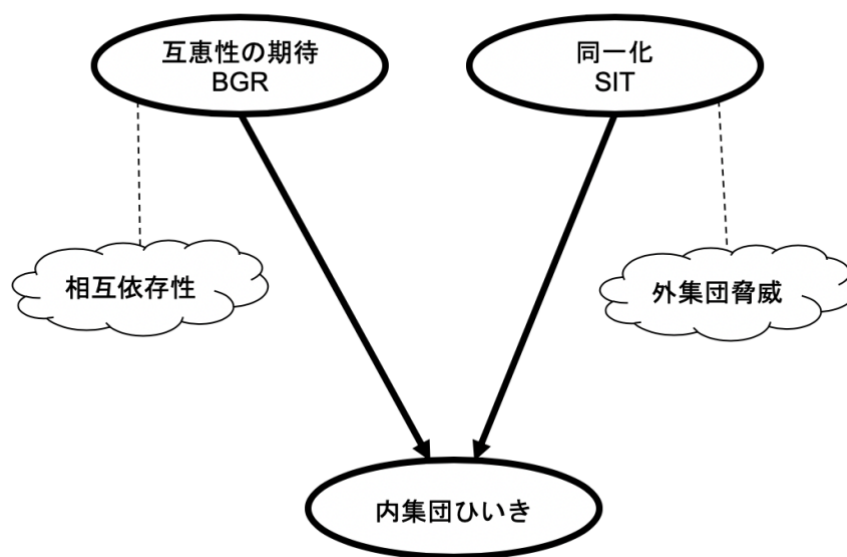


Figure 2-5. SIT と BGR の心理過程を規定する状況要因

第 3 章

実在集団における内集団ひいき と関連変数

第 1 節 実在集団の特徴

実験室で一時的な集団に分類する MGP とは異なり，実在集団のカテゴリーには特定の意味がある。このことから，自己と集団との同一化は強くなる傾向にある (Leach, Mosquera, Vliek, & Hirt, 2010)。さらに，集団関係が続き現実場面に即した実在集団を対象にすることによって，一般化された協力行動を検討することができる。MGP には内集団ひいきに影響する交絡要因を可能な限り排除できるというメリットはあるが，集団から離脱することが難しく実在集団よりも閉鎖的な集団状況であると言い換えることもできる。実在集団を対象とするメリットには，MGP では測定できない現実味（集団からの離脱可能性や愛着など）を帯びた内集団ひいきを測定できることが挙げられる。本論文では集団状況の違い (Table 3-1) を考慮して，実在集団においても両理論の妥当性が保証されるか否かを検討する。以下では，まず本論文で対象とするスポーツファンをはじめ，様々な実在集団における内集団ひいきとそれに関連する変数をレビューする。MGP と実在集団の性質の違いを明らかにした後，SIT/BGR それぞれ又は両理論の妥当性を同時に検討した研究を紹介する。

Table 3-1

MGP と実在集団におけるメリット・デメリット

	実験統制 の容易さ	現実味	先行研究 の蓄積	一般化 可能性
MGP	○	△	○	△
実在集団	△	○	△	○

同一化の強さ

実在集団の中でもチーム間に競争関係があるスポーツファンは、同一化が強いことが分かっている (Branscombe & Wann, 1991; Wann & Branscombe, 1993)。スポーツファンは応援するチームによって内集団と外集団の区別が明確化され、チームの勝利（成功経験）によって自己肯定感を得やすいという特徴がある。Wann & Branscombe (1993) は 188 名の大学生を対象に、大学のバスケットボールチームとの同一化の程度（8 件法；Table 3-2）を測定し、その中から 49 名をランダムに選んで同様の実験を 1 年後に行った。実験の結果、尺度の信頼性係数は非常に高く（ $\alpha = .91$ ），1 年後に同じ測定を行なっても 1 年前の結果と正相関（ $r = .60$ ）していた。この結果から、スポーツファンの同一化はある程度長期的に維持されることが示唆された。

Table 3-2

同一化項目 (Wann & Branscombe, 1993)

変数名	質問項目
勝利の重要性	あなたにとってチームの勝利はどのくらい重要か？
ファンの認識	あなた自身をどのくらいバスケットボールチームのファンだと感じているか？
他者評価	あなたの友達、あなたのことをどのくらいバスケットボールチームのファンだと感じていると思うか？
観戦頻度	シーズン中、いずれかの手段（観戦、テレビ、ラジオ、ニュース、新聞）を使ってどの程度（頻度）試合を把握しているか？
ファンの重要性	バスケットボールのファンであることはどの程度重要か？
ライバルの認知	ライバルチームをどのくらい嫌いなのか？
ファンアピール	チームの名前やロゴの入った服や物をどれくらい（頻度）飾ったり身につけたりしたか？

続く研究 2 では，研究 1 の同一化尺度と様々な項目との関連が検討された。大学生のバスケットボールチームのファン 358 名を対象とし，同一化のレベルに応じて三つの集団（弱／中／強）に分類した。ファンのコミットメント（ファン歴，チーム状況に対する帰属，消費したお金と待ち時間，ファンの特別性）に関する 4 項目を従属変数に使用した。その結果，同一化の強いファンほどファン歴（集団への所属年数）が長い，チームの成功に対して内的帰属をしやすい，チケットを買うお金と待ち時間を惜しまない，同じチームを応援するファンを特別な友達だと思う傾向にあることが示された。すなわち，スポーツファンとしての同一化が強いほど，自身の認知や行動に与える影響が大きいことが示唆された。

Branscombe & Wann (1991) が行なった 3 つの研究から，スポーツファンの同一化が自己に与える影響が示された。バスケットボールチームのファンの大学生 187 名を対象にした研究 1 では，同一化が強くなるほど自己をポジティブに肯定する傾向と正相関 ($r = .13$) が得られ，憂鬱を解消する傾向とも負相関 ($r = -.16$) が得られた。ただし，どちらとも相関係数はかなり低い。また，同一化と社会的望ましさに関係がなかった ($r = -.02$) ことから，スポーツファンの同一化は個人の自発的なものであるといえる。研究 2 ではバスケットボールチームのファンの大学生 261 名を対象に，同一化と感情の関連を検討した。同一化の強さとポジティブな感情（喜び，満足など）は正相関 ($r = .21$) しており，ネガティブな感情（悲しみ，後悔など； $r = -.10$)，他者からの疎外感・孤独感 ($r = -.09$) とも負相関が得られたが，相関係数はかなり低かった。研究 3 は，野球チームのファンである大学生 332 名を対象に同一化の強さとチームの順位が関連するか検討した。その結果，チームの

順位と同一化に関連はなかった。研究 3 でも同様に同一化と憂鬱を解消する傾向に負相関が得られた ($r = -.10$)。

これらの研究から、スポーツファンの同一化には SIT の心理過程が働く前提である、ポジティブな自己概念の獲得がしやすく認知や感情にも大きな影響を与えることが示唆された。また、MGP と異なり同一化が長期的に維持される点もスポーツファンの特徴であるといえる。

ライバルに対する攻撃性

言語的な攻撃 スポーツには野球やフットボールなどのようにチーム同士で競い合う競技もあれば、フィギュアスケートのように競争性の少ない個人競技も存在する。Harrell (1981) はアイスホッケーのように選手同士の攻撃的な接触があるスポーツでは、試合を観戦することによってファンの攻撃性が増すと主張した。攻撃性は倫理的な配慮から言語的な敵意 (Buss-Durkee Inventory; Buss & Durkee, 1957) を測定するまでに留められているが、怒りの増幅によってファンが実際に攻撃行動に出る可能性は十分にある。Harrell (1981) は、ホッケーの試合前後に観戦客を対象としたインタビューにより攻撃性を検討した。ホッケー 14 試合を観戦した男性 457 名 (分析対象者は 391 名) に 15 分のインタビューを試合前、1 試合後、2 試合後に行なった。インタビューでは攻撃性と同時に、「試合の重要な場面で不利になるなら戦うべきだと思うか」を尋ね、理由のある正当な攻撃を認めるか否かを評定した。実験の結果、攻撃の正当性を認めホッケーの観戦頻度の高い人ほど、試合が進むにつれてライバルチームに対する敵意や攻撃性が増すことが明らかになった。

Harrell (1981) のインタビュー結果から、集団間が競争的な

状況ではファンの攻撃性は高まることが分かった。特に，応援チームに所属する選手がライバルの選手によって直接危険に晒されたりする（怪我やラフプレーなど）競技では，攻撃性が高まりやすいことが示唆された。観戦頻度が高いほど攻撃性が高まるならば，観戦頻度が高く同一化が強いファンほどライバルへの攻撃性も高くなる可能性がある。

フーリガンの原因 スポーツファンの中でもライバルチームに対して攻撃的・暴力的な行動を起こす人をフーリガン(hooligan)と呼び，その思考をフーリガニズム(hooliganism)という(Newson et al., 2018)。従来，フーリガニズムは社会的な不適応が表出された結果であり，所得や階級の低い人の間だけで生じるとみなされていた(Wakefield & Wann, 2006)。しかし，近年ではフーリガニズムは社会的な不適応が表出された結果ではなく，集団に対して強いコミットメントや親しみを感じる「同一化の融合」によるものだと主張されている(Newson et al., 2018)。彼らはスポーツファンのフーリガニズム（暴力性）が強まる要因として集団の凝集性と外集団脅威が関連すると考え，外集団への脅威を感じた時に同一化の融合が起きた内集団を外集団から守るためにフーリガンによる暴動が生じると予測した。この予測は，進化論的な観点から男性同士は外集団脅威を察知すると資源の獲得や怒り／嫌悪感情が想起され，攻撃行動をとるという前提に基づいている。

Newson et al. (2018) はブラジルの男性サッカーファン 439 名を対象とし，誰（ライバルチーム，ライバル以外のチーム，その他）と戦うかを確認した上で，戦うことを望む程度，社会的適応尺度，同一化の融合，心理的な近親性(kinship)を測定した。同一化の融合は，ファン同士の結びつきの強さ（例：私はファンのみんなと感情的に深くつながっている，ファンだ

からこそ私は強くなれる) が測定された。心理的な近親性とは、「私の集団は家族のようなものだ」、「他のファンは私の兄弟のようなものだ」という項目で測定され、同一化の融合を媒介する変数であると考えられた。実験の結果、スポーツファンの暴力に対する動機づけは社会的不適応ではなく同一化の融合であることが示された。また、心理的な近親性が深まるほどフリーガニズムによる暴動の動機づけが高まっていた。

この研究から、日常では社会に適応しているファンであっても、ファン同士の仲間意識が過度に高まりライバルチームとの競争関係を明確に意識した途端に、暴力的な行動を起こす可能性があることが示された。その意味で、集団に強く同一化したスポーツファンは、集団間に差をつける内集団ひいきが生じやすい集団であることと考えられる。

チームの勝利から得る栄光浴

スポーツファンが同一化を獲得するにあたり、栄光欲に関わる Basking In Reflected Glory (BIRGing) と Cutting Off Reflected Failure (CORFing) という心理プロセスの影響を受けることがある (Snyder, Lassegard & Ford, 1986)。BIRGing は「チームの成功は自分を含めた内集団の成果である」と帰属することであり、反対に CORFing は「チームが失敗した時には自我を守るため集団から距離を置くようになる」ことである (Snyder et al., 1986)。栄光浴とは、同一化した集団が良いパフォーマンスをすれば自分が優れた栄光を得たように感じる現象のことを指す。

Wann & Branscombe (1990) は同一化と栄光浴との関連を検討するため、大学生のバスケットボールチームのファン 208 名を対象に、同一化が強くなるほど栄光浴の心理プロセスが働

きやすくなるかを実験した。実験の結果，同一化の強いファンほど BIRGing が起こり，CORFing が起こりにくくなっていた。これらの結果から，応援チームの勝ち負け（成功経験）は同一化と関連しており栄光浴を引き起こすことが示された。また，栄光浴に関連する BIRGing と CORFing はポジティブな同一化を維持する対処方略であると主張された（Wann & Branscombe, 1990）。バスケット以外にもサッカー（フットボール）のファンに栄光浴が適用されることが確認された（Billings, Devlin & Brown, 2016; Cialdini et al., 1976）。

葛藤に反応する身体的変化

集団間葛藤によって内集団ひいきが促進されることは古くから明らかにされてきた（Sherif et al., 1961）。スポーツマンシップに則った競争関係の上でも，ライバルとの葛藤によって内集団ひいきが促進されるという（Branscombe & Wan, 1992）。Branscombe & Wan (1992) は，質問紙調査による認知的な指標と生理指標（血圧）を測定して認知と身体的な反応が一致するか，葛藤により身体的な興奮が喚起されるかを検討した。参加者は「ロッキー IV」というボクシング映画を視聴し，その中でアメリカ人が勝つ／負ける映像を視聴した。参加者はボクシングファンではないため，アメリカ人としての同一化ができる状況である。映画の視聴したことのない女性の参加者 41 名は動画を視聴する前に血圧測定器を腕に着用した。まず，動物の動画（modern zoos）を視聴して 1 回目の血圧を測定した（視聴前）。その次に，ロッキーを視聴して 2 回目の血圧を測定した（視聴後）。加えて，外集団に対する差別的行動を検討するため，ロシアの交換留学生がアメリカに渡米した時に援助したい程度，その他の外集団（中国／フランス）の

交換留学生も同様に測定を行なった。

その結果、アメリカに強く同一化した参加者は、試合後の最高／最低血圧が試合前より上昇した。同一化の低い参加者は血圧に変動がなかった。ロシア人の時はその他の外集団よりも助けたいと思う程度が弱まる差別的行動がみられた。すなわち、ボクシングのように強い攻撃性・競争性がある競技を観戦した場合、内集団が外集団に脅かされていると感じて差別的な行動が生じやすくなることが考えられる。ただし、この実験では選手の国籍を不明にした上でボクシングの試合を見せるといった同一化ができない統制条件が検討されていなかった。そのため、競争場面によって身体的な反応が喚起されたのは、同一化による効果かが判断できない限界がある。

他の身体的な反応を見た研究として Cikara et al. (2011) は、fMRI を使用し同一化に影響する集団間競争と外集団へ危害（罰）を与える神経反応について検討を行った。SIT に基づけば、同一化によって内／外集団との間に相対的な差をつけたという欲求が高まり、集団間競争を認識するはずである。野球ファンにおける競争状況の知覚には、チームの成功と失敗の（勝敗）予期が影響すると考えられる。自分の応援するチーム（内集団）の成功あるいはライバルのチーム（外集団）が失敗しそうな時には、ネガティブな結果として知覚され、それに関連して前帯状皮質（anterior cingulate cortex）と島皮質（insula）が賦活すると予測される。一方で、内集団が成功あるいは外集団が失敗しそうといったポジティブな結果の時には、背側線条体（ventral striatum）が賦活すると予測される。前帯状皮質は情動などの認知的機能や報酬の予測、島皮質は収束した情報を処理する部位であり、痛みの経験などの基礎的な感情の経験を通じて罰を与えることと関連する。背側線条体

は報酬に依存したり快楽を感じたりすることと関連する (Cikara et al., 2011)。

Cikara et al. (2011) は個人単位での報酬と罰に反応する脳部位が，集団単位の報酬や罰でも同じく反応するかを検討した。実験は大リーグのニューヨークヤンキースとレッドソックスのファンを対象にしており，各チームの失敗と成功を提示する6条件が設定された (Table 3-3)。参加者は成功と失敗の予想について怒り，痛み，喜びを4件法で評価し，その評価と同時にfMRIによる脳の活性化部位の測定が行われた。また，実験の2週間後に外集団1 (ライバル) と外集団2に対して侮辱したいか，ライバルのファンを叩きたいかなどを尋ね，外集団に対して危害を加えたいと思う程度を測定した。

Table 3-3

Cikara et al. (2011) の実験条件

成功・失敗の組み合わせ					
内集団 (成功) vs 外集団 1					
内集団 vs 外集団 1 (失敗)					
内集団 vs 外集団 1 (成功)					
内集団 (失敗) vs 外集団 1					
外集団 1 (失敗) vs 外集団 2					
外集団 3 vs 外集団 4 それぞれ成功・失敗 (統制)					
成功の予想			失敗の予想		
1 塁打	2 塁打	3 塁打	1 塁 アウト	外野 フライ	ピッチャー 返し

注) 外集団 1 はライバル，外集団 2・3・4 は内集団と中立関係にあるチーム

実験の結果，内集団の成功／ライバルが失敗した時に喜びの評定が高くなり，反対に内集団の失敗／ライバルが成功した時には痛みや怒りが高く評定された。さらに，ライバルに対してその他のチーム (外集団 2) よりも危害を与えたいと回答

していた。そして、結果の評定と脳の賦活部位との間に相関があり、喜びや痛みの評定と賦活した脳部位（前帯状皮質と島皮質，背側線条体）にはそれぞれ正相関が得られた。

集団内の互惠性

本論文では，集団内に互惠性の期待が存在するとして野球チームのファン集団を採用した。スポーツを応援するファン同士で助け合うことに，経済的・歴史的な理由が存在する可能性は低い。そのため，内集団成員が一丸となり成果をあげることに規範化されている集団（企業など）と同じような互惠関係が構築されているかは定かではない。スポーツファンの集団内で互惠性の期待が働くのかという問いを検討した Kenny, Gomes, & Kowal (2015) によると，少なくとも野球チームのファン集団には互惠的な関係性があることが示唆された。

Kenny et al. (2015) は二者関係を説明する社会的関係モデル (Social Relation Model: 以下，SRM とする) を発展させ，集団間関係モデル (Intergroup Social Relation Model: 以下，ISRM とする) によって集団の社会的関係性を明らかにした。SRM とは，集団所属性，行為の与え手，受け手，関係性の 4 つから相手の好ましさを測る指標である。SRM には自分と他者が取る行動に互惠的な交換関係（限定交換と一般交換）があるかと強く関連している。ISRM は SRM で評価される好ましさの対象が個人から集団に拡大されただけであり，基礎概念は同じである。したがって，ISRM によって集団内に互惠性の期待が存在するかを確認することができる。彼らの実験では大リーグのボストンレッドソックスとニューヨークヤンキース（ライバル関係）のファン計 145 名を用いて内集団ひいきがみられるか，ISRM に則った集団内の互惠関係が構築されて

いるかを検討した。

まず、各チームのファンを4人ずつ（計8名）部屋に入れ、両方のチームが戦って自分の応援チームが勝つ／負けるビデオをそれぞれ見た後に、個人的な感想を言い合う議論を5分行わせた。その後、内／外集団成員の評価をするよう求めた。まず、自分以外の7名のうち誰を内／外集団成員であると認識したかを尋ねたところ、自分と同じチームを応援するファンを内集団、違うチームを応援するファンを外集団であると回答した。このことから、応援する野球チームが集団間を区別する指標であることが示された。

実験の結果、内集団を外集団よりも高く評価する内集団ひいきが見られ、各集団内には互惠的な関係が構築されていることが明らかになった。内集団2名の評価（内集団の互惠性）、外集団2名の評価（外集団の互惠性）の相関によって互惠的な関係が存在するか検討したところ、内集団成員同士の評価（ $r = .21$ ）と外集団成員同士の評価（ $r = .23$ ）は正の相関関係が得られた。上記の研究から、野球ファンは応援する野球チームごとに集団を区別しており、集団内に互惠的な関係が成立することが分かった。このことから、本論文で対象とした野球ファンの集団内にも互惠的な関係性が存在し、BGRに基づく心理過程が働く可能性がある。

これまで紹介してきたスポーツファンの内集団ひいきと関連変数の研究結果から、ファン集団の性質が明らかになった。主要な性質をTable 3-4にまとめる。本論文ではSITとBGRの心理過程が両方とも働くという立場から検討を行なっている。この立場から内集団ひいきを検討するには、両理論の先行要因である同一化と互惠性の期待を十分に起こりうる実在集団を対象とする必要があった。Table 3-4の集団性質を踏まえる

と，同一化が強く互惠性を期待できる集団として野球チームのファンは妥当であると考えられる。したがって，本論文の研究では野球チームのファンにおける内集団ひいきを測定し，両理論の妥当性とそれら心理過程の働きを規定する状況要因を検討した。

Table 3-4

スポーツファンの集団性質

参 照 文 献 名	特 徴
Kenny et al. (2015) Wann & Branscombe (1993)	長期的な関係が持続するため，同一化が維持され互惠的な関係性が構築される。
Branscombe & Wann (1991) Harrell (1981)	同一化の強さに応じて自己肯定感が高まりやすく，感情も喚起される。
Branscombe & Wann (1992) Newson et al. (2018) Wann & Branscombe (1990)	ライバルとの競争関係があることで，栄光欲や外集団脅威の影響を受けやすく同一化が強い。
Cikara et al. (2011)	チームの勝敗が重要で認知および生理的な変化が起こる。

第 2 節 様々な実在集団における研究

SIT や BGR に基づく内集団ひいきが生じたと主張するためには、両理論の先行要因である同一化と互惠性の期待を測定しなければならない。以下では、スポーツファンを対象に応援するチームによって集団が区別され、内集団成員に協力的になることを示した研究を紹介する。この研究レビューによってスポーツファンが娯楽の枠を超えて、日常場面でも内集団ひいきが行われる集団であることを確認する。その後、様々な実在集団を対象に SIT／BGR の妥当性を検討した研究を紹介し、現段階までの実在集団における内集団ひいきには SIT による説明が優勢であることを示す。

SIT に基づく内集団ひいき

実在集団を対象に SIT の妥当性を検証した研究は膨大にある。これらの研究における内集団ひいきは行動指標ではなく、評価指標で検討されることが多い。評価指標には内／外集団成員の性格や特徴（親しみやすい、怒りっぽいなど）を評定させる課題などがある。評価指標が用いられることが多い背景には、MGP で SIT が支持された先行研究から現実的な葛藤などの差別すべき理由がないにもかかわらず、集団間に差をつけたことのインパクトが大きかったことがある。つまり、人は集団と同一化さえすれば特段の理由がなくとも外集団に対して差別すると考えられ、その差別は認知的な評価の文脈で捉えられることが多い。したがって、SIT が提唱されてから表面化しづらい差別問題を検討するため、応援するスポーツチーム、国家、宗教観、使用言語などの集団を用いた検討や同一化の発達と差別の形成過程を検討することに焦点が当てられて

きた。以下では、実在集団を対象に SIT の妥当性を検討した研究を集団カテゴリー別に紹介し、どのような集団で SIT に基づく内集団ひいき（評価）が生じたのかを概観する。

スポーツファン Levine et al. (2005) はマンチェスターユナイテッドの男性ファン 45 名を対象に、困っている相手（サクラ）が着ている T シャツ（マンチェスターユナイテッド、無地、リバプール [ライバル]）により集団所属性を示した上で、相手を援助するか否かを測定し内集団ひいきを検討した。実験では参加者が応援チームとの同一化を測定する項目に回答した後、次の実験ではサッカーの試合についてのビデオを見るため別の実験室を移動するように伝え、1 人でその実験室へ向かうよう指示する。その道中に膝を怪我してしまい痛がっているサクラに遭遇する。サクラは条件ごとの T シャツを来ており、そのサクラに対してどのような援助行動を行うかを複数の実験者が観察・評定した。実験の結果、マンチェスターユナイテッドの T シャツを着たサクラには、援助行動を取る頻度が最も高くなる内集団ひいきが生じた。しかし、援助前の同一化の強さと援助行動には関連性がなかった。この研究から同じチームを応援するファンであれば、援助行動の頻度が高くなることが示された。スポーツに関係ない日常的な場面でも、ファン同士ということが分かれば、積極的な援助を行うか否かの指標になる可能性があった。

また、Platow et al. (1999) の研究では、アメリカンフットボールのファンを対象に 3 タイプ（自分の応援チーム [内集団] / ライバルのチーム [外集団] / 不特定）の実験者を設定し、集団所属性によって寄付行動に差がみられるかを検討した。寄付金に特別な使用用途があるわけではなく、単なる募金活動と称して実施された。実験デザインは 2（試合前 / 試合後）×

3 (内集団／外集団／統制) である。実験者は集団所属性をチーム名とチームカラーで示したスカーフを巻くことで提示した。統制条件ではニュートラルな灰色のスカーフを使用した。試合の1時間前から開始まで、試合終了10分前から終了30分後まで募金活動が行われた。その結果、外集団よりも内集団のスカーフを巻いた実験者に対して多くの寄付が集まった。また、試合に勝利したファンの方が内集団に寄付をする頻度が多くなった。このように、同じチームを応援するファンであれば、協力的に振る舞う現象は様々な場面で起こっている。

さらに、Wann & Grieve (2005) はバスケットボールチームのファン148名を対象に、試合結果と同一化 (Sports Spectator Identification Scale; Wann & Branscombe, 1993) の強さ、内集団ひいきとの関連を検討した。互いにライバルである3つの大学バスケットチームで試合 (ホーム／ビジター観戦) が行われた (Murry State University, Austin Peay State University, Western Kentucky University)。1ゲーム目は76対74 (ホーム)、2ゲーム目は再延長戦の結果100対95 (ビジター) で全てMurry State Universityが勝利した。実験の結果、同一化が強いファンはホームで勝利した時に、最も強く内集団ひいきが生じた。ただし、ビジターとして観戦したファン ($M = 45.04$) の方がホーム ($M = 37.66$) よりも同一化の程度が強かった。

イングランド人の子ども476名 (5-11歳) を対象とした実験 (Abrams et al., 2003) でもスポーツファン同士の内集団ひいきが生じることが示されている。ただし、同一化そのものは年齢を重ねるごとに強くなる傾向にあった。Abrams et al. (2003) の実験では集団間の競争状態を認識させるためワールドカップの開催時 (2002年) に行われた。イングランド／ドイツのファンである男性2名が登場する文章によって内／外

集団条件が設定された。実験者は「アレックスとマークが来月行われる W 杯の最終決戦でプレーしていることを想像してください」と教示した。その結果、参加者は内集団条件のみでターゲットを高く評価していた。

国籍 幼児期の早い段階から、集団を区別し内集団を好む傾向は複数の研究で示されている。5 歳から 6 歳ですでに内集団を好む傾向 (Yu, Zhu, & Leslie, 2016) がみられ、7 歳になると MGP (Moghaddam & Stringer, 1986) や実在集団 (Tajfel, Jahoda, Nemeth, Campbell, & Johnson, 1970) で内集団ひいきが生じるようになる。また、同一化の発達過程と内集団ひいきとの関連を明らかにするため、Bennett et al. (1998) はイギリスの子ども 459 名 (スコットランド人 220 名, イングランド人 239 名) を対象とした内集団ひいきを検討した。子どもの年齢は 6 歳, 9 歳, 12 歳, 15 歳であった。スコットランド／イングランド (内集団) との同一化を測定した。お互いの国同士とその他の国 (ドイツなど中立的立場の国) が外集団となる。まず、同一化を測定するため各国 (スコットランド, イングランド, フランスなど) に関する記述が書かれた 15 枚のカードを提示した。この中から自分のことが書いてあると思うカードを選択するように求め、自国と同一化しているかを確認した。その次に、判断基準が書かれたカードを使用し (4 件法), 内／外集団との同一化の程度を測定した。同一化の測定後, 12 枚のカード (汚い, 綺麗, フレンドリーなどの単語が記載) が準備された。これらのカードと国を結びつけることによって, スコットランド, イングランド, 外集団の国に関する評定を行わせ, ○○ (国) の人はどの程度好きか嫌いかを尋ねた。その結果, 年齢を重ねるにつれて同一化が強くなり, イングランド／スコットランド人ともに同一化と内集団ひいきの間に正相

関が見られた ($r = .20$)。

さらに, Mummendey, Klink, & Brown (2001) は約 100 名ずつのドイツとイングランドの学生を対象に 4 つの研究を行い, 同一化と内集団ひいきの関連を検討した。内集団の評価は, 「どの程度自国にプライドを持っているか」, 「技術・科学的な成功を思うか」などで測定された。外集団に対する差別は, 「もし仕事がなかったらドイツ人は自国に帰るべきだ」, 「私は外国人と結婚したくない」などで測定された。また, 実験では集団間を比較させる／させない条件と統制条件が設けられた。集団間を比較させる条件では, 「他国と比べて自国に住みたいと思う理由を教えてください」などと尋ねられた。4 つの研究はいずれも, 両集団ともに自国に同一化するほど内集団を好意的に評価していた (range $r = .37-.67$)。さらに, 外集団差別は集団間を比較させる条件のみで生じた。このことから, 集団間の関係性を強調することが同一化を強め, SIT の心理過程を引き出すのに効果的であることが示唆された。

また, Reizábal & Ortiz (2011) の研究から元々の統治領の違いによって統合した今でも地域ごとの同一化が生じることが示されている。Reizábal & Ortiz (2011) は 7 歳から 11 歳のバスクとバスク-スパニッシュ (元スペイン領) の子ども 101 名を対象に同一化と内集団ひいきを検討した。その結果, バスクの子どもで内集団ひいきが生じており同一化項目の一部 (自国へのプライドなど) ととも正相関があった。ただし, バスク-スパニッシュの子どもではスペインとの同一化と内集団ひいきの程度がバスクの子どもより弱かった。

国籍に関連する研究から, 人は幼い頃から国に同一化して内集団ひいきを行うことが確認された。また, 外集団の国に対しては内集団協力だけではなく, 歴史的な背景から外集団差

別が生じる傾向にあった。また，地域統合が多いヨーロッパ近辺では，国に同一化するよりも元々の統治領の地域に同一化する傾向にあることが示された。つまり，国籍という集団カテゴリーはこれまでの歴史的な背景が参照されやすいといえる。

使用言語 同じ国に住んでいても使用言語が違えば，それらの違いで集団を区別し同一化することがある。例えば，Reizábal, Valencia, & Barrett (2004) はバスクでは三つの言語が使用されることに着目し，使用言語ごとに分けられた集団と同一化して内集団ひいきを行うかを検討した。バスクの子ども 246 名（6 歳から 15 歳）を各言語の集団に分類した（スペイン語 97 名，バスク語 87 名，バイリンガル 62 名）。外集団は違う言語を話す人たちである。その結果，スペイン語，バスク語の集団ともに内集団ひいきが見られ，同一化と正相関が得られた（スペイン： $r = .35$ ，バスク： $r = .19$ ）。バイリンガル（交差カテゴリー）の集団では内集団ひいきは生じなかった。

さらに，使用言語が国民の少数派か多数派かに着目してスウェーデン語を話すフィンランド人の内集団ひいきを検討した研究がある（Liebkind, Henning-Lindblom, & Solheim, 2006）。スウェーデン語を話すフィンランド人は国民全体の 5% しかおらず，元々は上位階級の人々であった。そのため，Liebkind et al. (2006) はスウェーデン語を話す人たちの間には，内集団のポジティブなステレオタイプが根強く存在すると考えた。実験ではスウェーデン語話者 563 名を対象とし，スウェーデン語話者（内集団）とフィンランド語話者（外集団）をどう思うかを評定させた。そして，内集団評価から外集団評価を引いたものを内集団ひいきの指標に用いた。その結果，同一化による内集団ひいきが生じていた。

宗教 使用言語と同じく宗教の違いが同一化と関連深いと

いう研究が存在する (Gallagher & Cairns, 2011)。Gallagher & Cairns (2011) は北アイルランドに住むカトリック 73 名とプロテスタント 75 名の子ども (7 歳と 11 歳) を対象に内集団ひいきを検討した。各宗教の集団で内集団ひいきが生じ、特にプロテスタントの子どもは同一化と内集団ひいきに強い正の相関関係見られた ($r = .41$)。同一化と外集団に対するネガティブな評価は負相関がみられた (カトリック: $r = -.28$, プロテスタント: $r = -.23$)。上記の研究から同じ国内に住んでいても個人が同一化する対象が必ずしも国であるとは限らず、歴史的な背景を含めた使用言語や宗教の違いによって集団が区別される可能性があることが明らかになった。

医療従事者 国や地域などの相対的に大きい集団カテゴリーだけではなく、職場の集団などの小集団である方が内集団ひいきは起こりやすい。Hennessy & West (1999) の研究では、イギリスの病院で働く 112 名 (17 部署) を対象に部署ごとの内集団ひいき (評価と資源分配) を検討した。部署はそれぞれ 2 名から 24 名 (平均 9 名) で構成され、看護師、看護補助、ソーシャルワーカー、臨床心理士、精神科医などが実験に参加した。それぞれの部署のリーダーが、ミーティング時に質問紙を配布した。質問紙には部署との同一化、内集団ひいき (評価)、自分の部署にはどのくらいのお金が必要と思うか (資源獲得による葛藤の知覚を測定)、報酬分配課題 (行動) のシナリオで構成された。シナリオ 1 は参加者に £60,000 (約 892 万円) 与えて 3 部署 (内集団; 精神保健科, 高齢者科, 学習困難者科) と本社 (外集団) に分配を行う内容だった。シナリオ 2 はいくつかある部署の中から、£12,000 (約 178 万円) をどの部署に与えるかを定める内容だった。実験の結果、他の部署より内集団 (部署) の評価を高くする内集団ひいきが生じた。報酬分配

でも自分の部署に多くのお金を割り当てる内集団ひいきがみられた。しかし、シナリオ 1 の 3 部署を対象とした時には内集団ひいきが生じなかった。また、部署との同一化と内集団評価には正の相関がみられた ($r = .34$) が、報酬分配課題の提供とは有意な関連がなかった。

先行研究の問題点

上記に紹介した通り、SIT に基づく内集団ひいきを示した研究は数多く存在する。しかし、これらの研究に限界点が 3 つある。1 つ目は、SIT の先行要因である同一化のみで協力的行動が検討されていることである。すなわち、SIT の反証である BGR の妥当性を検証する指標（互惠性の期待）が測定されていない状況では、SIT の心理過程の働きのみで内集団ひいきが生じたかは明らかではない。2 つ目は、実験対象者が子どもであることも多く成人を対象とした場合でも再現されるか否かが検討されていないことである。3 つ目は、内集団に対する好意などの評価指標でしか内集団ひいきが検討されていないため、実際の行動との関連が不明なことである。つまり、実在集団において SIT/BGR の妥当性を同時に検討できる実験デザインを用い内集団ひいきの検討を行なった研究はほぼ存在しない。

また、実在集団においても同一化に基づく内集団ひいきが生じなかった研究もある。簡易的な業務／専門的な業務に従事する看護師それぞれ 40 名を対象に、同一化と内集団ひいきを検討した研究 (Oaker & Brown, 1986) では、同一化の強さと内集団ひいきに関連はなく、むしろ負の関連 ($\beta = -.14$) があった (30 分から 40 分の半構造化式インタビュー)。この結果を Oaker & Brown (1986) は「看護師である」という同一化が強くなると、お互いが協力をして患者を助けるという上位目標

や公平規範に対するコミットメントも強くなるからであると解釈している（看護師を対象とした Skevington (1981) も同じく SIT が支持されなかった）。

その他，Brown & Williams (1984) のパン工場で働く 55 名を対象とした実験では自分の部署を他の部署よりもポジティブに評価していたが，同一化の強さとは関連がなかった。ただし，パン職人だけ（専門性が低く待遇も悪い）同一化と内集団ひいきに関連があった。すなわち，各部署の待遇によって SIT に基づく内集団ひいきが生じるか否かが左右されていた。その後の製紙工場で働く 177 名を対象とした実験（Brown, Condor, Mathews, Wade, & Williams, 1986）も部署によって同一化と内集団ひいきの関連が一貫しなかった。これまで実在集団を対象として得られた結果を Table 3-5 に示す。

Table 3-5

実在集団を対象とした研究結果のまとめ

文献名	対象	指標	SIT 支持
Levine et al. (2005)	サッカーファン	援助行動	不明
Platow et al. (1999)	フットボールファン	寄付行動	不明
Wan & Grieve (2005)	バスケットボールファン	評価	○
Abrams et al. (2003)	サッカーファン	評価	○
Bennett et al. (1998)		評価	○
Mummendy et al. (2001)	国籍	評価	○
Reizábal & Ortiz (2011)		評価	○
Reizábal et al. (2004)		評価	○
Liebkind et al. (2006)	使用言語	評価	○
Gallagher & Cairns (2011)	宗教	評価	○
Hennessy & West (1999)		評価	○
Hennessy & West (1999)		報酬分配	×
Oaker & Brown (1986)	医療従事者	評価	×
Skevington (1981)		評価	×
Brown & Williams (1984)	パン工場の従業員	評価	×
Brown et al. (1986)	製紙工場の従業員	評価	×

両理論の妥当性を同時に検証した研究

一方で SIT と BGR の妥当性を同時に検証した研究は非常に数少ない。その中の一つが牧村・山岸（2003a）である。牧村・山岸（2003a）は大学生 29 名（双方向条件 15 名，一方向条件 14 名）を MGP ではなく授業中の実習班によって集団に分類した。実習班は A 集団と B 集団があり，「北海道の経済活性化」についてのレポートを集団で作成するという名目で分けられた。授業ではそれぞれの集団が発表した内容にもう一方の集団が意見する形式の討論が行われ，集団内の凝集性と対抗意識が高められた。

彼らの実験では，500 円を内／外集団成員それぞれ 1 名にいくらか分配する報酬分配課題によって内集団ひいきを検討した。そして，SIT／BGR のどちらに基づく内集団ひいきが生じたかを判断するため，報酬分配がお互い（自己／他者）の報酬に影響し合う双方向条件と，報酬額が一定（300 円）の一方向条件を設定した。SIT が支持されるなら，両条件で同程度の内集団ひいきが生じるはずであり，BGR が支持されるなら，双方向条件のみで内集団ひいきが生じるはずである。同一化は，「自分がどちらの集団の一員であると感じたか」，「どちらの集団と一体感を感じたかなど」などで測定した。その結果，参加者は内集団と同一化していたが，条件間での内集団ひいきに有意差はなかった（双方向：約 133 円，一方向：約 116 円）。この結果は，一見すると SIT が支持されたように見えるが，内集団ひいきは差の最大化動機（ $r = .28$, ns ）ではなく自集団優遇動機（ $r = .64$, $p < .01$ ）から生じていた。SIT に基づく内集団ひいきは集団間の差を拡大する動機から生じるとの前提を踏まえると，この結果から SIT が支持されたとはいえない。この結果は内集団成員同士で直接的な交流があったため，愛着

や親しみを感じた人に個人的な好意を示した結果であると考えられる（牧村・山岸，2003a）。また，参加者間配置の条件では，個人内の心理過程に変化が起きたか否かを検討することは困難であった。

その後，牧村・山岸（2003b）は集団対象を国に変え，集団所属性の知識操作（神・山岸，1997）をした1回限りの囚人のジレンマ（PD）ゲームにて内集団ひいきを検討した。日本人122名を対象にオーストラリア／韓国人を外集団²に設定した。参加者は元手の100円の中から10円刻みで相手に提供する金額を決定するように求められた。知識操作では，互いに相手が日本人とわかる内集団相互条件，参加者のみ相手が日本人と分かる内集団一方条件，互いに相手がオーストラリア／韓国人（外集団）と分かる外集団相互条件，参加者のみ相手が外集団と分かる外集団一方条件，お互いに誰かわからない相互不明条件が設けられた（計5条件）。

PDゲームの結果，内集団よりも外集団に多くの金額を提供する外集団ひいき行動が見られた。また，オーストラリア人は日本人の時に多く提供してくれると期待していた。韓国人では内集団の時と期待の程度にほぼ差がなかった。また，事後質問紙により日本人は一般的にオーストラリア人に対して好意的なステレオタイプを持っていることが分かった。外集団ひいきは，SITとBGRのどちらの予測にも当てはまらない行動である。SITから説明される外集団ひいきの理由の一つに，内集団が低地位であると認識して肯定的な同一化の獲得が妨げられた（Ellemers, Doosje, Van Knippenberg, & Wilke, 1992）ことが挙げられるが，日本人の類似性知覚が外集団よりも高か

² 外集団に2つの国を用いた理由は，個々の国に対するステレオタイプや規範によって結果が異なる可能性を排除するためである。

ったことから上記の説明は当てはまらない。この実験では、両理論の説明力を超えて外集団に対するステレオタイプが協力的行動に影響した可能性が高い。日本人にとって国という集団カテゴリーは両理論の心理過程が働きにくいといえる。

さらに、牧村・山岸（2003b）の追試である三船他（2007）でも外集団ひいき（オーストラリア／韓国人）が生じた。三船他（2007）は新たに外集団成員からの評価懸念を測定した。外集団からの評価懸念とは、外集団から内集団に対する悪い評判を立てられることを懸念する程度を指す。外集団ひいきと外集団からの評価懸念には強い正相関がみられた（ $r = .38$ ）。また、条件ごとの検討では外集団相互条件のみで有意な相関が得られた（ $r = .31$ ）。つまり、外国人から日本人が悪く評価されることを懸念して外集団ひいきが生じたといえる。この追試ではオーストラリア人に対する好意的なステレオタイプは形成されていなかった。

日本人のみならずオーストラリア人を対象として内集団ひいきを検討した Yamagishi et al.（2005）でも外集団ひいきが生じた。オーストラリア人 49 名と日本人 56 名を対象に、集団所属性の知識（神・山岸，1997）を操作した 1 回限りの PD ゲームを行なった。参加者の元手は 100 円または 1 オーストラリアドル（当時のレートで約 65 円）であった。その結果、オーストラリア人は日本人よりも公平動機が強く、全条件において提供金額が日本人より約 1.6 倍高かった。しかし、条件間に提供金額の差はなかった。日本人はオーストラリア人に対して好意的なステレオタイプを持っていたが、外集団ひいきとは関連していなかった。これまで国や大学の実習班という実在集団を対象に SIT と BGR の妥当性を同時に検討した研究では MGP の結果に反する外集団ひいきが生じていた（Table

3-6)。このことから，国という集団カテゴリーには，外集団に対する評価懸念，ステレオタイプや規範など様々な要因が交絡しやすいと考えられる。第4章では，実在集団を対象とした内集団ひいき研究における具体的な限界・問題点を指摘する。

Table 3-6

PD ゲームにて SIT／BGR の妥当性を検討した研究の協力率

			内 集 団			外 集 団		
	文 献 名	N	元 手	相 互	一 方	不 明	相 互	一 方
MGP	神・山岸 (1997)	70	500	31	24	21	21	19
	清成 (2002)	73	200	41	26	28	-	-
	Yamagishi et al. (1999) 実験5	88	200	50	-	46	40	-
	Yamagishi et al. (1999) 実験7	72	200	40	25	28	-	-
	Yamagishi & Kiyonari (2000)	91	300	40	-	-	30	-
実在 集団	牧村・山岸 (2003b)	122	100	25	22	26	31	29
	三船他 (2007)	122	100	25	23	26	31	29
	Yamagishi et al. (2005) Japanese	49	100	28	24	25	32	29
	Yamagishi et al. (2005) Australian	56	1	48	42	41	46	44

注) 元手は日本円／オーストラリアドル，協力率は%で表記。神・山岸 (1997) では，500円を元手に0-100円の間で提供金額を決定した。それ以外の研究では，全額提供することが可能であった。

第 4 章

実在集団を対象とした研究 の問題点と改善策

第 3 章では MGP と実在集団で得られる結果に齟齬があることに着目し，実在集団における内集団ひいき研究のレビューを行った。現段階までの研究では MGP では BGR，実在集団では SIT が支持される傾向にある。しかし，実在集団の場合，両理論の妥当性を同時に検討するための実験デザインが精緻化されていない限界点がある。第 4 章では実在集団を対象とした研究の実験デザインや手続き上の問題点を挙げ，本論文で紹介する一連の研究 (Table 4-2) ではどのような改善と検討を試みるかを説明する。その検討に合わせた両理論における内集団ひいきのモデル図を Figure 4-1 に示す。

交絡要因の影響

実在集団において両理論の妥当性を同時に検証した研究ではいずれの理論も支持されない結果が得られた。しかしながら，そこで扱われてきた実在集団の対象は国（牧村・山岸，2003b；三船他，2007；Yamagishi et al., 2005）や大学の実習班（牧村・山岸，2003a）に限られており，両理論が説明力をもたないと結論づけるのは尚早である。

大学の実習班を用いた実験（牧村・山岸，2003a）では内集団と外集団が直接交流する機会があり，匿名性が保たれていなかった。この状況では，報酬分配課題は匿名で行われるが，今後内集団成員に自分の取った行動が知られてしまうという評価懸念が生じやすかった。MGP では内／外集団に対して非協力であっても実験後に他の内／外集団成員から咎められる可能性は低い。それに対して顔見知りの内集団成員に対して非協力をすれば，成員同士の交流の中で発覚する場合がある。牧村・山岸（2003a）のように集団関係が維持される大学の実習班では，他の内集団成員から評価されるかもしれないとの評

評価懸念が協力行動に影響したと考えられる。内集団成員からの評価懸念が生じた結果、SITとBGRで説明される範囲を超え、特定の個人に対する愛着や親しみから内集団ひいきが生じた（牧村・山岸，2003a）。

また、国を対象とした場合には歴史的な背景、文化、人種などから様々なステレオタイプや規範といった交絡要因が協力行動に影響を与える。例えば、外集団への好意的なステレオタイプ（牧村・山岸，2003b）や外集団成員からの評価懸念（三船他，2007）が内集団ひいきの生起を阻害していた。実在集団の中でも国という集団カテゴリーは、外集団の存在が顕現化されることで交絡要因が生じやすいといえる。実在集団の内集団ひいきにおいて交絡要因は大きく二つ挙げられる。それは、直接的な交流があることで生じる内集団成員からの評価懸念である。もう一つは、外集団の存在が顕現化されることで生じる評価懸念やステレオタイプ及び規範である。

交絡要因を統制する実験デザイン 先行研究の実験デザインでは実在集団の交絡要因が内集団ひいきの生起を阻害したという問題を踏まえ、本論文では実験デザインを改良することで交絡要因を適切に統制した。まず、予備的研究によって両理論の妥当性を検討するための集団所属性の知識操作（清成，2002）は実在集団が対象であっても機能するか否かを検討した。予備的研究の結果を踏まえて、研究1（中川他，2015）では交絡要因を適切に統制する実験デザインを構築した。その後の研究でも基本的には研究1の実験デザインを踏襲している。交絡要因の統制に関する具体的な説明は研究1で行う。

実在集団の選定

本論文ではMGPと実在集団の性質が異なることを議論して

きた。しかしその一方で、Moghaddam & Stringer (1986) は MGP と実在集団には社会的カテゴリーとして相違がないとの反対の意見を述べている。つまり、MGP も実在集団と同様に参加者によって重要な価値を持つカテゴリーであると考え、SIT に基づく内集団ひいきが生じると主張した。Moghaddam & Stringer (1986) はイギリスの男子小学生 66 名 (10 歳から 12 歳) を MGP の分類と実在集団の時における内集団ひいきを検討した。実在集団はハウスシステムで分けられたものでイギリスの富裕層の子どもが通う学校に設置された寮である。学校生活はクラスごとではなくハウスシステムごとに統括されるため、ハウス同士のライバル意識は常に高い。その後、報酬分配マトリクスを使用し、いくら与えるかを測定した。

実験の結果、MGP でも実在集団でも内集団ひいきの傾向が変わることはなかった。しかし、この結果のみで MGP と実在集団が意味する集団カテゴリーに違いがないとは言い切れない。なぜなら、富裕層の男子児童は普段から競争的な環境³に身を置かれており、MGP においても自動的に競争性が高まる可能性があったからである。その他に実在集団の対象とされている国、使用言語、宗教では、前述の通り集団の規模が大きく歴史的背景が参照されやすい。また、看護師などの上位目標が明確化されている集団も両理論の妥当性を検討する上では、不適当な集団と考えられる。

実在集団の対象を野球ファンに変更　そこで本論文で紹介する研究では、全て野球チームのファンを実在集団の対象として採用した。野球チームのファンは集団の規模が国と比べて相対的に小さくコミットしやすい (Yoshida et al., 2015) と

³ イギリスのハウスシステムでは、良い仕事をしたり先生や他の生徒の手伝いをしたりすれば、ハウスごとにポイントがもらえる。ハウス対抗でスポーツイベント、合唱祭なども開催されることもある。

いう特徴があり，歴史的背景が考慮される可能性も低い。本論文では一貫して，SIT と BGR それぞれの心理過程の働きがどちらも内集団ひいきに寄与するという立場から野球チームのファンを採用した。応援チームのあるファンは，ライバルチームのファンと常に勝敗を競い合うゼロサム関係にある。ゼロサム関係とは限りある資源を奪い合う状況のことであり，一方の集団が資源を得た場合，もう一方の集団は資源を得られなくなる。野球ファンは Rabbie (1982) が主張する集団間競争を構成する要素 (Table 4-1) を満たしており，集団間の競争関係から集団との同一化が促進されていると考えられる (Berendt & Uhrich, 2016)。また，アメリカにおける野球チームのファンの集団内には，互惠的な関係が成立することも示唆されている (Kenny et al., 2015)。日本でもファン同士が交流する機会が多い (Yoshida et al., 2015) ことから集団内の互惠的な関係が想起されやすいと考えられる。すなわち，野球ファンは SIT と BGR の心理過程がどちらも働くと仮定できる妥当な集団といえる。

Table 4-1
集団間競争を構成する要素

変数	内容
所属	異なる集団への所属
共有経験	内集団成員間での共通運命性の共有経験
相互作用	集団内での相互作用またはその予期
競争と協力	集団間競争／協力の予期
欲求不満	集団間競争において相互に欲求不満が生じる
勝敗	集団間の相互作用 外集団との勝敗の経験やその予期

同一化の測定方法

子どもを対象とした先行研究では、十分に文章を読み取れない年齢（5歳から6歳）を対象としたことから、実験者が直接問いかけるインタビュー形式（Abrams et al., 2003; Reizábal et al., 2004）、自分の気持ちや考えに合うカードを選択する形式（Bennett et al., 1998）で同一化と内集団ひいきが測定された。例えば、カードの選択手続きでは「このカードを見てあなたについて記述されているというものを選んでね。」といったように実験者が直接語りかける形式で行われた。参加者の年齢を考慮すると、こうした手続きで同一化や内集団ひいきを測定することが妥当であると考えられるが、成人を対象とした質問紙調査や実験室実験とは異なる可能性があることを考慮すべきであろう。また、実験者と子どもの相互作用に影響され、子どもが大人の望むべき回答を察知して答えた可能性も否定できない。

また、質問紙で同一化が測定された場合でも「あなたは〇〇集団に同一化（一体化）していますか？」など直接的な数項目で測定された研究もあった（Brown & Williams, 1984; Reysen, Stephan, Plante, Roberts, & Gerbasi, 2015; Struch & Schwartz, 1989）。SITでは集団同一化さえ起これば内集団ひいきが生じると説明される（Tajfel & Turner, 1986）。SITに関連した自己カテゴリー化理論（self-categorization theory; Turner & Oakes, 1986）によると、同一化が生じると没個性化によって自分が集団内の中で典型的な存在であると認知するようになる。また、同一化によって個人的な感情反応や意味のある価値づけが生じることが言及されている（Turner & Reynolds, 2012）。これらの主張を踏まえると、同一化を数項目で測定する手続きでは、十分に自己と集団の存在を同じものと見なし、認知と感情が融合した同一化であるとはいえない。

同一化尺度の導入 本論文の一連の研究では、13項目から

なる同一化尺度 (Hogg et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009) を導入することでこの問題を改善した。尺度の中には集団に対して好きという感情があるか、集団の一員であるとの自覚があるかなど同一化に関わる内容を広く尋ねている。また、尺度の内的整合性は全ての研究においても十分に高い結果が得られている。

同一化の程度の違い

集団カテゴリーに特別な意味のない MGP では BGR, 意味のある実在集団では SIT が支持される傾向にある。ただし、実在集団において SIT と BGR の妥当性を同時に検討した場合、両理論がともに支持されなかった。MGP と実在集団では同一化の程度が異なり、MGP では SIT の心理過程の働きが十分に引き出されていると考えにくい。つまり、MGP では BGR の説明力が優勢であるとしても同一化の強い実在集団では SIT が適用される可能性も残されている。

同一化の促進 この問題を踏まえ、実在集団においても集団間関係を明確にし、SIT の心理過程が働きやすい状況では両理論の心理過程がどのような影響を受けるのかを検討する必要がある。本論文では同一化を促進するため、研究 5 において集団間地位の提示と外集団の提示という 2 パターンの実験手続きをとり検討を行なった。まず、野球ファンにとっての地位とはチーム間の順位であり、他の球団のファンとの明確な区別化につながる。また、野球ファンには栄光浴 (Cialdini et al., 1976) を得たい動機づけが備わっており応援チームの勝敗を意識しやすい (Billings et al., 2016; Wann & Branscombe, 1990)。チームが勝てる状況では、集団に同一化して栄光浴を得たいとの動機づけが高まる。したがって、研究 5-1 では地位を顕現

化させることで集団間関係を明確にし、SITの心理過程が強く働く状況での内集団協力を検討した。また、同一化の促進には外集団の存在を提示する方法がある。SITに基づく内集団ひいきの前提は内集団と類似した外集団と比較することであり、外集団を設定することで内集団との同一化が生じやすくなる。したがって、研究5-2及び研究5-3では外集団を設定した状況における内集団ひいきを検討した。

内集団ひいきの行動と評価

SITの妥当性を検討する研究者たちの間では差別や偏見の解決に向けて、内／外集団成員に対する評価が内集団ひいきの指標に用いられることが多かった。神他（1996）はこのことに着目して内集団を物質的（金銭や資源など）に優遇する行為を内集団ひいき、内集団を好意的に知覚することを内集団評価と呼び、それぞれ異なる心理過程（SIT／BGR）が働くことで生じると主張した。実験の結果、報酬分配課題における内集団ひいきではBGRが支持され、内集団への好意的な評価ではSITが支持された。内集団ひいきの行動はBGRの心理過程から、内集団ひいきの評価はSITの心理過程から生じることが示された。すなわち、内集団ひいきの中でも行動と評価の2種類があり、それぞれ異なる心理過程が適用されることが明らかになった。

協力行動にかかるコストの明示 神他（1996）の主張を踏まえ、研究2では参加者が協力をした際にかかるコストを明示して両理論の妥当性を検討した。研究1では協力のコストを明示していないため、内集団協力が評価の文脈で捉えられた可能性があった。研究1と研究2はともに場面想定法であり、日常場面での協力には何らかのコストがかかることが想

定される。そこで、研究 2 ではコストを明示することで現実的な行動として内集団協力を検討した。

しかし、研究 1 と 2 は場面想定法であるため、そこで測定されたものは真の協力行動とはいえない問題がある。特に BGR の先行要因である互惠性 (Trivers, 1971) の期待が働く一般交換関係の成立には自己の投資 (協力) を上回る返報があるとの前提が必要であり、自分の行動が真の損得と関係しない場面想定法の状況では交換感覚が十分に引き出されない可能性がある。すなわち、実際に参加者が金銭を得たり失ったりするシビアな実験状況でなければ、本当に協力にコストがかかる場合に内集団協力が BGR によって説明されるかは検討されていない。金銭のやり取りを通じて内集団協力行動を測定する必要がある。Kiyonari et al. (2000) によれば、参加者と相手の決定が互いの結果に影響し合うと認識する社会的交換の感覚が十分に高まれば、BGR の心理過程の働きが強くなるという。場面想定法実験では現実的な交換関係の感覚が十分に引き出されなかった可能性がある。

金銭提供のコスト したがって、研究 3 では場面想定法の研究 2 を踏まえ、実際の報酬に影響する 1 回限りの PD ゲームを用いることで内集団ひいきを行動レベルで検討した。すなわち、研究 2 と研究 3 の大きな目的は、協力行動にコストがかかり非協力の誘因があるとしても内集団ひいきが生じるかを検討することである。その上で、協力行動のコストが BGR の心理過程の働きを強める状況要因の一つになりうるか否かを検討した。研究 4 では協力行動にコストがかからないことを明示すれば BGR の心理過程の働きが弱まり、SIT の説明力が優勢になるか否かを検討した。しかし、研究 4 の参加者は野球ファンではないため研究 3 とは直接比較ができない。

Table 4-2

本論文内の一連の研究内容

研究	方法	コスト	地位／外集団	状況
予備				
1	場面想定法	明示なし		BGR 有利
2				
3-1		コストあり		
3-2	PD ゲーム	を明示	なし	BGR 有利
3-3				
4		コストなし を明示		BGR 不利
5-1	場面想定法	コストあり を明示	地位提示	
5-2				SIT 有利
5-3		明示なし	外集団設定	

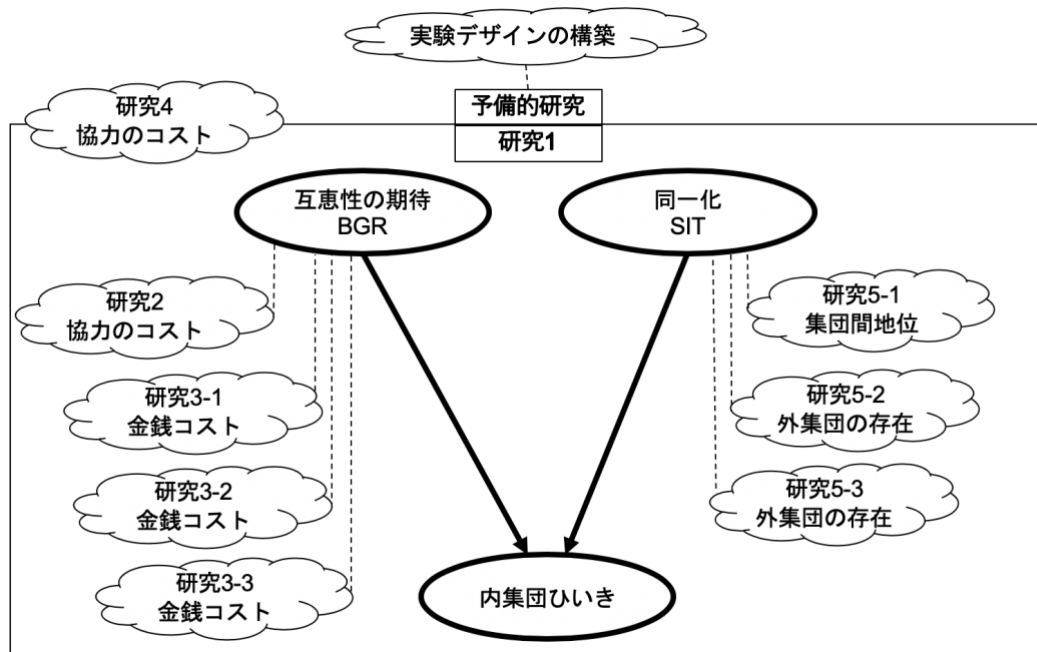


Figure 4-1. 本論文における内集団ひいきの予測モデル

第 5 章

協力のコストを明示しない
場面想定法実験
－ 予備的研究／研究 1 －

第 1 節 実験デザインの構築（予備的研究）

広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験⁴

第 3 章及び第 4 章で述べたとおり，実在集団を対象に内集団ひいきを検討した研究では集団対象が限られており，交絡要因を統制した上で SIT と BGR の妥当性を同時に検討できる実験デザインも構築されていなかった。両理論の妥当性を検討した研究（牧村・山岸，2003b；三船他，2007；Yamagishi et al., 2005）では 1 回限りの PD ゲームにおいて集団所属性の知識操作（神・山岸，1997）を行い，互惠性の期待の有無を操作していた。本論文においても集団所属性の知識操作（清成，2002）を導入し両理論それぞれの心理過程が働く内集団協力が生じているか否かを判断する。清成（2002）は神・山岸（1997）の知識操作とほぼ同じであるが，外集団を設定した条件を除いたものである。

本論文の目的である「実在集団を対象として SIT と BGR に基づく内集団協力／内集団ひいきが生じるのか否か，さらにそれらの心理過程がどのような状況下で働きやすくなるのか」を検討した研究はほぼ存在しなかった。そこで，本論文でまず実在集団の交絡要因を適切に統制し両理論の妥当性を同時に検討できる実験デザインを構築する必要がある。その実験デザインを構築する上で基礎となった予備的研究を以下で紹介する。ただし，予備的研究を実施した際の目的は本論文と多少異なる。予備的研究の結果を踏まえ，研究 1 では実験手続きや方法を改善した実験パラダイムを構築した。

⁴ 予備的研究は 2012 年度に広島修道大学に提出した卒業論文（相互依存性をもたらす援助期待と内集団ひいきの関係について－広島東洋カープファンを対象とした研究－）の内容を一部加筆修正したものである。また「2012 年日本人間行動進化学会第 5 回大会（広島カープファンの内集団ひいき：場面想定法実験による検討）」で発表を行なった。

目 的

広島県には至る所に広島東洋カープにまつわる商品や展示が点在している。例えば，商業施設ではカープの応援歌が流されたり，カープのマスコットキャラクターが電車にラッピングされたりしている。広島県民にとって「カープ」は日常生活で目につきやすい身近な存在といえる。その一方で，予備的研究を実施した 2012 年の段階ではカープの勝率はかなり低く，1991 年の優勝を最後に下位の順位にとどまっていた⁵。当時のカープの順位は低迷していたにもかかわらず，毎年の観客動員数は県人口の約 30% から 40%（延べ数）を占めており比較的安定した値を保っていた（広島県，2012；日本野球機構，2012）。このように，順位の高低にかかわらずカープを応援するファンは一定数存在する。なぜ勝率が低いカープを常に応援し続けるファンが存在するのだろうか？ 予備的研究ではこの問いに対してカープファンのコア性に着目し，コアなファンはカープが負けても応援し続け，その行為が内集団協力にもつながると予測した。具体的には，ファンのコア性の違いによって内集団協力⁶を引き起こす心理過程の働き（SIT／BGR）が異なるか否かを検討した。

コア性の違い 予備的研究ではカープファンの中にも同一化が強く個人的に応援し続けるコアなファンと，同一化はそれほど強くなく周囲との良好な関係を保つためにファンを装う非コアな（にわか）ファンがいると仮定した。カープが負けても応援し続ける点では，コアファンと非コアファンに違いはないが，同一化の強さの違いによって内集団協力の心理過程の働きが異なる可能性はある。例えば，コアファンは 1 人でも

⁵ 近年（2015 年から 2018 年）ではカープの勝率は上昇しつつある。

⁶ 予備的研究から研究 5-1 までは外集団を設定していないため，外集団差別は測定していない。

球場に足を運ぶ，TV観戦をするなど他者の存在に影響されることなく個人的に応援すると考えられる。一方，非コアファンは同じカープファンの友人や同僚と一緒に観戦するなど他者の影響を受けやすいと考えられる。つまり，コアファンは同一化が強く無条件で応援するのに対して，非コアファンは他者との良好な関係維持を重要視した集団内の互惠性の期待からカープを応援すると予測した。毎年の観客動員数が安定していることから広島県民はカープに対する関心が高く，同じカープファンであれば援助し合うという互惠関係が成立する可能性は十分にある。したがって，予備的研究では集団所属性の知識操作（清成，2002）を行い，コアファンがSITに基づく内集団協力を行い，非コアファンがBGRに基づく内集団協力を行うか否かを検討した。

さらに，コア性に関連して非コアな野球ファンには女性が多いという研究（Dietz-Uhler, Harrick, End, & Jacquemotte, 2000）がある。Dietz-Uhler et al. (2000)によると女性は男性よりも自分が同じチームを応援するファンであることを積極的に周囲の人に伝え，家族や友達と共有した楽しみを見出す傾向にあるという。一方で，男性は応援するスポーツや選手に関する知識を深めたり，TV観戦の時間が長いといったコアなファン行動がよくみられる。この研究からコアなカープファンには男性が多く，非コアなカープファンには女性が多く存在すると考えられる。よって，予備的研究ではコア性と内集団協力の検討に合わせて男女差も検討した。

仮説 コアファンはSITに基づく内集団協力が生じるだろう（仮説1）。非コアファンはBGRに基づく内集団協力が生じるだろう（仮説2）。また，コアファンには男性が多く，非コアファンには女性が多く存在するだろう（仮説3）。

方法

実験日時・参加者 実験は 2012 年 10 月 2 日から 10 月 24 日にかけて行われ，広島市内の大学に通う学生 233 名（男性 120 名，女性 109 名，不明 4 名）が実験に参加した。Table 5-1 に応援チーム別のファンとファンではないと回答した参加者数を示す。カープファンの平均年齢は 19.18 ($SD = 1.30$) 歳であった。

Table 5-1
チーム別のファンの人数

チーム名	人数
1. 中日ドラゴンズ	2
2. 東京ヤクルトスワローズ	1
3. 読売ジャイアンツ	9
4. 阪神タイガース	6
5. 広島東洋カープ	109
6. 横浜 DeNA ベイスターズ	0
7. 福岡ソフトバンクホークス	2
8. 北海道日本ハムファイターズ	3
9. 埼玉西武ライオンズ	4
10. オリックス・バファローズ	1
11. 東北楽天ゴールデンイーグルス	3
12. 千葉ロッテマリーンズ	0
13. どのチームでもない / 野球に全く興味がない	93

質問紙の構成および条件 予備的研究の質問紙は 10 項目で構成された (Table 5-2)。援助期待／援助行動／罰行動のシナリオでは自己と相手の集団所属性を共有できるか否かの知識 (清成, 2002) を操作した (参加者間配置)。参加者には自分が応援するチームを「A チームである」と仮定し，シナリオに登場する B さんが A チームのユニフォームを着ているか否かで 4 つの条件 (内集団相互／内集団一方／不明内集団／相互不明) を設定した。B さんは参加者と面識のない第 3 者として位置づけた。内集団相互条件では「お互いが同じチームのファン」

であると分かる」，内集団一方条件では「参加者のみ相手が同じチームのファンであると分かる」，不明内集団条件では「相手のみ参加者が同じチームのファンであると分かる」，相互不明（統制）条件では「参加者と相手が互いにどこのチームのファンであるか分からない」と教示された。シナリオの上部に，集団所属性の知識を操作する教示文を提示した。援助を行う相手（状況）を条件操作するが，どの条件であっても回答するシナリオの内容は同じである。

Table 5-2
質問紙の構成

-
1. 応援チームの特定
 2. ファンのコア性の測定
 3. 援助期待に関するシナリオ
 4. 援助行動に関するシナリオ
 5. 罰行動に関するシナリオ
 6. 操作チェック
 7. カープクイズ
 8. 同一化項目
 9. Fear of negative evaluation
 10. フェイスシート
-

質問項目 まず，参加者に日本野球機構の定める12球団の中から最も応援するチーム1つを尋ね，応援するチームがなければどこのファンでもない／野球に全く興味がないを選択するよう求めた。ファンのコア性の測定（Table 5-3）には応援するチームがある参加者のみが回答し，ないと回答した参加者はとばすように指示をした。全ての項目に，はい／いいえの2択で回答し，「はい」を選択した場合には回数を記入するように求めた。ただし，項目4と項目6は2択のみを行なった。

Table 5-3

ファンのコア性を測る質問項目

1.	応援しているチームの試合を球場でこの1年間で観戦しましたか？
2.	応援しているチームのグッズをこれまでに購入したことがありますか？
3.	応援しているチーム選手のサイン会やトークショーなどのイベントにこれまで参加したことがありますか？
4.	応援しているチームのファンクラブにこれまで入会したことがありますか？
5.	応援しているチームのファン感謝デーにこれまで参加したことがありますか？
6.	応援しているチームが優勝すると金利が上がる金融商品をこれまで購入（契約）しましたか？（例．応援するチームが優勝すると定期預金の金利が0.3%上乘せされるなど）
7.	応援しているチームのカードを持っていますか？（例．チームのロゴが入ったクレジットカードやチームのマスコットキャラクターの絵が入っているポイントカードなど）
8.	応援しているチームの練習キャンプに，これまで見学またはサインをもらいに行ったことがありますか？

援助行動のシナリオでは日常場面で困っている B さんが登場し，その B さんを参加者が助けるとするか否かが測定された（Table 5-4）。シナリオでは9つの場면을想定させ，それぞれの場面に対する援助行動と援助期待が5件法で測定された（「1：全くそう思わない - 5：非常にそう思う」）。援助期待は援助行動と同じシナリオを用いあなたが B さんから助けてもらえたと期待する程度が5件法で測定された。

Table 5-4

援助期待／援助行動のシナリオ

1.	あなたは、道を歩いていると突然おなかが痛くなりその場にうずくまってしまいました。たまたま通りかかった B さんは、あなたを介抱してくれると思いますか？
2.	あなたは、交通事故で大ケガをしてしまいその場で輸血が必要になりました。その場に居合わせた、B さんがたまたまあなたと同じ血液型だったとしたら、あなたに献血してくれると思いますか？
3.	あなたは、募金活動を行っています。たまたま通りかかった B さんは、寄付をしてくれると思いますか？
4.	あなたは、電車の乗り継ぎの仕方が分からずに困っています。B さんは、乗り継ぎの仕方を教えてくれると思いますか？
5.	あなたは買い物をして、街を歩いていました。すると袋の底が抜け中身が散乱しました。たまたま通りかかった B さんは拾ってくれると思いますか？
6.	あなたは、バスの中で 5000 円札しか持っていないことに気づきました。運転手の人には、5000 円札は両替できないと断られました。たまたま乗り合わせた B さんは、両替してくれると思いますか？
7.	あなたはケガをして、松葉づえをついてバスに乗りこみました。バスは全座席が埋まっています。あなたの目の前に座っている B さんはあなたに座席を譲ってくれると思いますか？
8.	あなたは、道を歩いている途中で転んでしまい、その拍子に車のカギを排水溝に落としてしまいました。開けようとしても排水溝のふたは重くてびくともしません。たまたま一部始終を見ていた B さんは排水溝のふたを開けるのを手伝ってくれると思いますか？
9.	あなたは、ラーメン屋の行列に並んでいます。店員が、順番を間違えたため、あなたは B さんより先に並んでいたのに、B さんより後ろになってしまいました。B さんは順番が違うと言ってくれると思いますか？

罰行動のシナリオでは集団内での互惠関係を妨げるようなマナー違反、モラルに反する行動に対してどの程度罰を与えたいかが 5 件法で測定された (Table 5-5)。罰行動は集団内での互惠関係の維持が重要視されているかを検討するために測定した。また、集団所属性の知識操作が成功したかをチェックする 3 項目 (Table 5-6) を設け「1: 思っていた、2: 思っていなかった、3: B さんには分からなかった」のどれかを選択す

るように求めた。カープクイズ (Table 5-6) は記述形式でファンのコア性を判定する補助的な尺度として用いた。クイズは応援チームのない参加者も回答した。同一化項目 (Hogg et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009) では自己と集団の存在を同じとみなす程度が測定され、得点が高いほど集団と強く同一化していることを表す (13 項目 5 件法; Table 5-7)。また、互恵性の期待に関連して集団内で悪い評判が立つことを気にする程度を測定するため Fear of Negative Evaluation (以下, FNE とする; 石川・佐々木・福井, 1992) を導入した (12 項目 5 件法; Table 5-8)。

Table 5-4

罰行動に関するシナリオ

-
1. B さんが居酒屋で酔っぱらって大騒ぎして周囲の人に迷惑をかけていました。あなたは、B さんに注意をすると思いますか？
 2. B さんは、バスの優先席に座っていました。お年寄りが目の前で荷物を持って立っています。あなたは、B さんに席を譲るよう注意すると思いますか？
 3. B さんは、電車の中で通話をしていました。その車両は、電子機器の使用を禁止しています。あなたは、B さんに注意すると思いますか？
 4. B さんは、野菜の無人発売所でお金を払わずにキャベツをとっていきましました。その現場を見ていたあなたは、B さんに注意すると思いますか？
 5. B さんが、清涼飲料水のペットボトルを道ばたにポイ捨てしているところを目撃しました。あなたは、B さんに注意すると思いますか？
-

Table 5-5

操作チェックの質問項目

-
1. 今まで出てきた A チームはどのチームだと思っていましたか？
 2. B さんはあなたのことを自分と同じチームのファンだと思っていましたか？
 3. あなたは B さんのことを自分と同じチームのファンだと思っていましたか？
-

Table 5-6

カープクイズ項目

-
1. 2010 年 8 月 4 日，横浜対広島戦でホームラン性の打球をフェンスによじ登って背面捕球し，スパイダーマンキャッチを成し遂げた選手は？
A. 赤松真人
 2. 2012 年 4 月 6 日，ノーヒットノーランを達成した投手は？
A. 前田健太
 3. 1950 年にカープが経営難に陥った際に，市民球場に置かれた募金の名前は？
A. たる募金
 4. 創建ホームの CM に起用されている選手を 1 人お答えください(誰でも可)？
A. 前田健太，栗原健太，梵英心
 5. カープのマスコットキャラクターであり，セサミストリートを手がけた会社によってデザインされたキャラクターは？
A. スライリー
 6. カープの若きエースで，「鯉のプリンス」と称されるイケメン選手は？
A. 堂林翔太
 7. 赤イチローと称されている選手は？
A. 末永真史
 8. ○○さんの△△がおみくじ引いて申すには今日のカープは勝ち！勝ち！勝ち！勝ち！万歳！万歳！万歳！
○○と△△に当てはまる言葉を書いてください。
A. ○○宮島，△△神主
 9. カープ OB 講師陣が直接指導し，小学 4 年生から中学 3 年生までを対象に，少人数制で野球技術の向上をめざしている活動の名前は？
A. カープ野球クリニックまたはカープ野球塾
 10. マツダスタジアムには動物の親子像がありますが，その動物は何でしょう？
A. カバ
-

Table 5-7

同一化項目

-
1. 自分が典型的なカープファンであるとされたら，気分がいい。
 2. カープに深く関わっていると思う。
 3. 自分がカープファンであるという事実がわかると，幸せだと思う。
 4. 自分は，他のカープファンと似ている。
 5. カープが好きだ。
 6. 自分はカープに合っていると思う。
 7. 他のカープファンとの一体感を感じている。
 8. 自分にとって，カープは重要だ。
 9. 自分を定義する上で，カープファンであることは重要だ。
 10. 自分はカープファンの中の一人である。
 11. カープファンであることに満足している。
 12. カープファンであることが心地よい。
 13. カープファンであることは自信になる。
-

Table 5-8

FNE の質問項目

-
1. 人がなんと思おうとどういうことはないと分かっているけど，自分のことを人がどう思うか気になる。
 2. 他の人が私の欠点に気づくのではないかとしばしば心配する。
 3. 他の人が自分のことを認めてくれなくても，あまり気にならない（逆転項目）。
 4. どんな印象を人に与えているか，ほとんど気にしない（逆転項目）。
 5. 人に自分の欠点を，見つけられるのではないかと心配だ。
 6. 誰かと話しているとき，その人が自分のことをどう思っているか心配だ。
 7. 自分がどんな印象を与えているのかいつも気になる。
 8. 他の人が私のことを価値がないと思うのではないかと心配だ。
 9. 他の人が私をどう思うかはほとんど気にならない（逆転項目）。
 10. 他の人が私のことをどう思っているか，気にしすぎると思うことがときどきある。
 11. 他の人が私をどう思っているか気にかけないほうである（逆転項目）。
 12. 私の友達が自分をどう思っているかをあれこれ考えてしまう。
-

予測 SIT が支持されるならば，内集団成員であると一方的に分かる内集団相互・一方条件で相互不明条件よりも協力的になるだろう。BGR が支持されるならば，お互いに内集団成員であると分かる内集団相互条件で他 2 条件⁷よりも協力的になるだろう。

結果

予備的研究の目的は，カープファンを対象にファンのコア性によって内集団協力の心理過程の働きが異なるかを検討することであった。まず，以下に基本データをまとめる⁸。

基本データ 応援するチームごとのファンの数を Table 5-9 に示す。援助期待 ($\alpha = .74$) / 援助行動 ($\alpha = .79$) / 罰行動 ($\alpha = .87$) のシナリオ，同一化 ($\alpha = .97$)，FNE 項目 ($\alpha = .91$) はそれぞれ十分な内的整合性が示されたため，それぞれの値を合算して分析を行なった。カープファンとファンではないと回答した非ファンにおける各シナリオ及び項目それぞれの平均値を Table 5-9 に示す。カープファンの方が非ファンよりも有意に集団との同一化 ($t(218) = 11.36, p < .01, d = 1.48$) が強く，クイズの正答率も高かった ($t(222) = 9.03, p < .01$)。しかし，クイズは未回答者が多く分散も大きかった。罰行動や FNE 項目ではファンと非ファンの間に有意な差はなかった。以後の分析はカープファン 109 名を対象として行なった。内集団相互条件に 26 名 (男性 15 名，女性 11 名)，内集団一方条件に 36 名 (男性 19 名，女性 17 名)，不明内集団条件に 24 名 (男性 16 名，女性 8 名)，相互不明条件に 23 名 (男性 13 名，女性 9 名，不明 1 名) のカープファンが割り当てられていた。

⁷ 不明内集団条件は，仮説の検討には直接関係がない条件である。

⁸ 本論文の分析は全て HAD 16_050 (清水，2016) と R3.5.0 (R Core Team, 2018) を使用している。

Table 5-9

各シナリオと項目の平均値（標準偏差）

	カープファン	非ファン
罰行動	12.37 (4.30)	11.58 (3.79)
同一化	39.37 (10.58)	22.78 (9.87)
FNE	41.75 (8.67)	41.68 (9.27)
クイズ得点（11点満点）	3.95 (2.87)	1.01 (1.47)

コアと非コアの分類 コア尺度の合計得点（Figure 5-1）は1点以下が50名，2点以上が59名であった。1点と2点を境に非コア／コアファンを約同数に分けることが可能であったため，コア尺度の合計得点が1点以下の者を非コアファン，2点以上の者をコアファンと定めた。各条件のファンの内訳を Table 5-10 に示す。

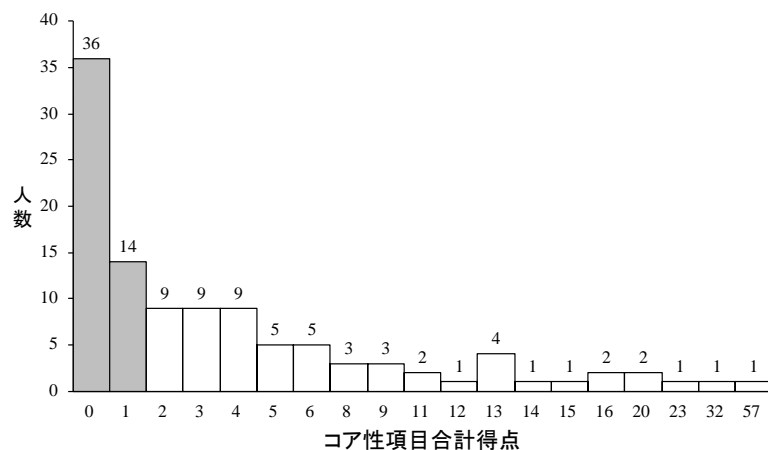


Figure 5-1. カープファンのコア性項目合計得点

Table 5-10

条件ごとの非コア／コアファンの人数

条件名	非コア	コア
内集団相互条件	12	14
内集団一方条件	13	23
不明内集団条件	13	11
相互不明条件	12	11

援助期待 集団所属性の知識操作（清成，2002）により互惠性の期待の有無の操作が成功したか否かを確認するため，援助期待を従属変数として集団所属性の知識条件を独立変数とした一要因分散分析（実験参加者間）を行った。その結果，条件間の援助期待には有意な差がみられなかった（全体： $F(3, 105) = 1.06, p = .37$ ，非コアファン： $F(3, 47) = 1.38, p = .26$ ，コアファン： $F(3, 55) = 2.24, p = .09$ ）。この結果は，集団所属性の知識操作が失敗したことを意味する（Figure 5-1）。

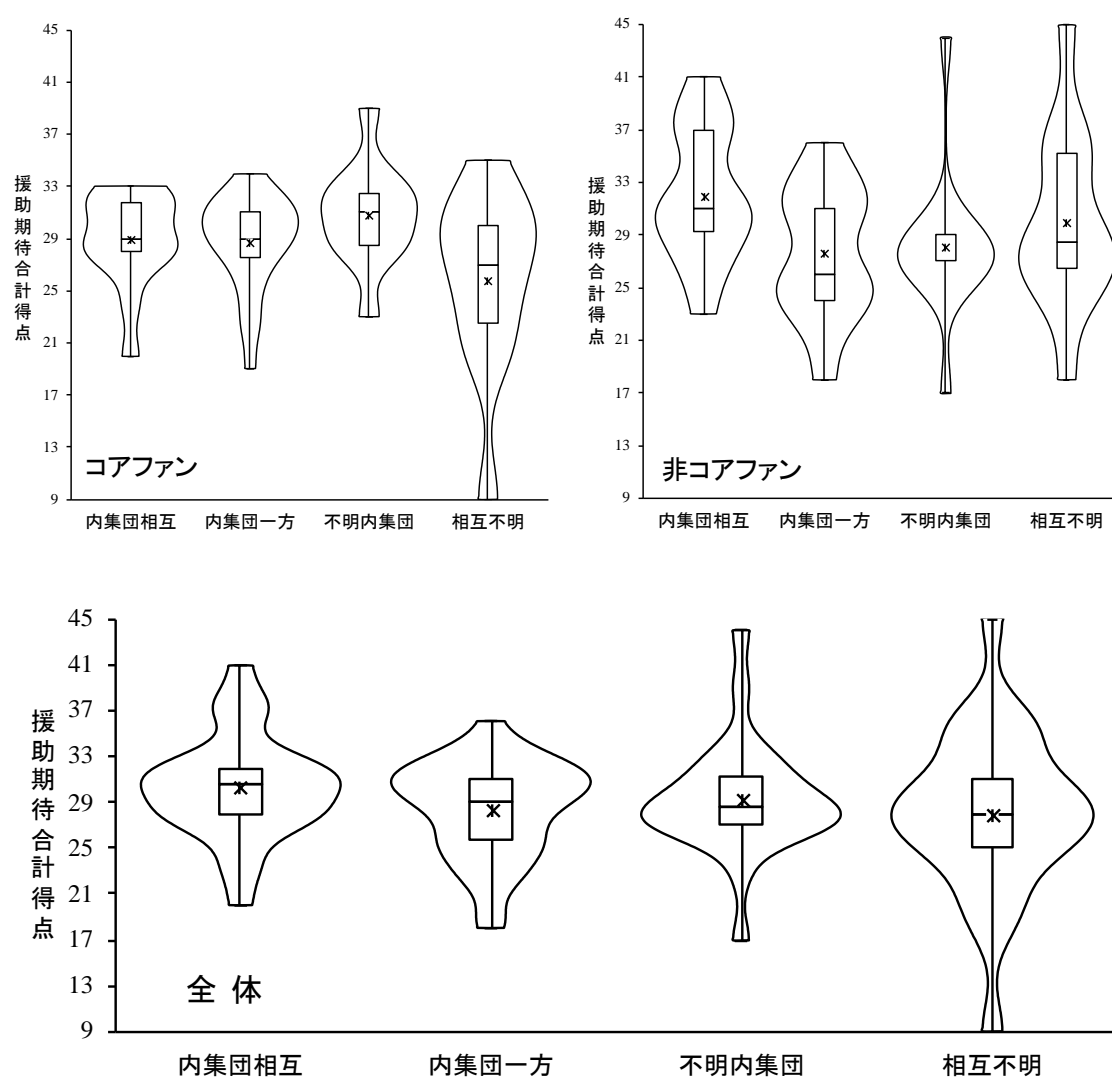


Figure 5-1. 援助期待のヴァイオリンプロット。

注) * は平均値，エラーバーは標準偏差，両脇の線は分布を示す（以後同じ）。

仮説 1 と仮説 2 の検証 コアファンは SIT, 非コアファンは BGR に基づく内集団協力が生じるという仮説 1 と仮説 2 を検証した。カープファンの援助行動⁹ (Figure 5-2) について, コア性と条件を独立変数とした分散分析を行ったところ, コア性の主効果 ($F(1, 102) = 0.27, p = .61$), 条件の主効果 ($F(3, 102) = 0.20, p = .90$) とともに有意差がなく交互作用効果も得られなかった。どの条件間の協力行動にも差がなく仮説 1 および仮説 2 は支持されなかった。

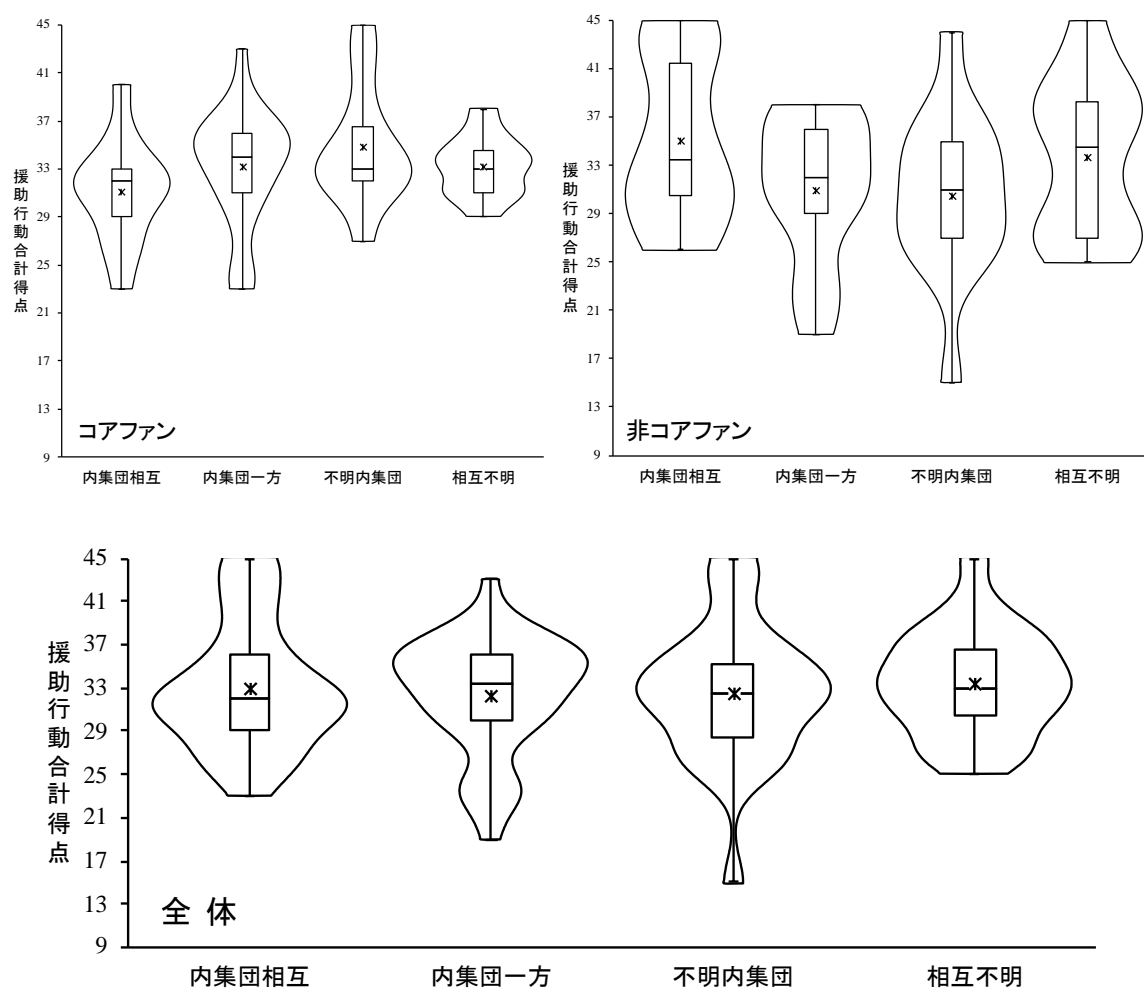


Figure 5-2. 援助行動のヴァイオリンプロット。

⁹ 内集団相互条件の援助行動に回答していない 1 名を削除した。

仮説 3 の検証 次にコアファンには男性，非コアファンには女性が多いという仮説 3 を検証した。コアなファンは男性が 33 名，女性が 25 名（不明 1 名），非コアファンは男性が 30 名，女性が 20 名であった。コア性得点の合計平均に性差があるか否かを検討した結果，男性（ $M = 4.62$, $SD = 8.78$ ）と女性（ $M = 4.16$, $SD = 5.73$ ）の間に有意な差はなく（ $t(105) = 0.31$, $p = .76$ ），仮説 3 は支持されなかった。

相関分析 援助行動に条件間の差は得られなかったが，各項目と協力行動の相関分析を行った。その結果，罰行動のみ内集団相互・一方条件における協力行動と正相関がみられた（Table 5-11）。

Table 5-11

援助行動と各項目間の相関（ r ）

	同一化	FNE	罰行動
内集団相互	-.01	.10	.48*
内集団一方	.33	-.25	.53*
不明内集団	.21	.25	.32
相互不明	-.05	.36	.32

* $p < .05$

操作チェック 条件間の協力行動に差がなかったことが，参加者の行動パターンの反映ではなく知識操作の失敗によるものかを確認するため，操作チェック項目を検討した。まず，チェック 1 の「今まで出てきた A チームはどこのファンだと思ったか」では，参加者の応援するチームと同じものを選択するのが正しい。チェック 1 で同じチームを選択した回答者は 68%であり，32%の回答者は違うチームを選択していた。チェック 2 の「B さんはあなたのことを自分と同じチームのファンだと思っていましたか」では，内集団相互と不明内集団条件

では「思っていた」、内集団一方と相互不明条件では「思っていなかった／Bさんにはわからなかった」を選択することが正しい。各条件における正答率は、内集団相互条件では81%、不明内集団条件では4%、内集団一方条件では86%、相互不明条件では83%であった。チェック3の「あなたはBさんのことを自分と同じチームのファンだと思っていましたか」では、内集団相互と内集団一方条件では「思っていた」、不明内集団と相互不明条件では「思っていなかった」の選択が正しい。各条件における正答率は、内集団相互条件では85%、内集団一方条件では61%、不明内集団条件では63%、相互不明条件では48%であった。

考 察

予備的研究の目的は、カープファンのコア性の違いによって内集団協力の心理過程の働きが異なるか否かを検討することであった。しかし、条件操作に失敗し、集団所属性の知識を共有できるか否かという状況が参加者に正しく認識されていなかった。コア性にも性差はなく、仮説は全て支持されなかった。操作チェックの正答率が高かった条件も一部あるが、チェック2の不明内集団条件やチェック3の相互不明条件では、正答率が極端に低かった。また、チェック2における「思っていなかった」という選択肢は、「(分からなかったため／本当に)思っていなかった」という二重の意味を含んでおり(ダブルバーレル質問)、回答者を混乱させた可能性がある。また、内集団相互、内集団一方条件における協力行動と罰行動の間に正相関が見られたが、この結果も知識操作が失敗したことから、積極的な解釈をすることは困難であった。

予 備 的 研 究 の 問 題 予備的研究の問題点に以下の3点が挙

げられる。一つ目に、集団所属性の知識操作を文章のみで教示したことから、お互いの所属性を直感的に認識するようなインパクトが弱かったことがある。二つ目に、質問紙で尋ねる項目数が多く回答に約 20 分程度の時間がかかるため、参加者が質問項目の読み飛ばしを行なった可能性もある。三つ目に、集団所属性の知識操作を実験参加者間で行ったことにより、操作の理解や協力行動において個人差が生じやすいことが挙げられる。予備的研究で得られた結果を踏まえ、研究 1 では上記の問題点を改善した実験デザインを構築した。

第 2 節 研究 1

広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験¹⁰

研究 1 (中川他, 2015) では SIT と BGR の心理過程がそれぞれ独立して働くという立場から, 野球ファンを対象に両理論に基づく内集団協力が生じるか否かを検討した。研究 1 で使用する実験デザインは, 予備的研究から得られた結果を基に構築された。研究 1 の内容を紹介する前に予備的研究から実験デザインをどのように改変したかについて説明する。

実験デザインと質問紙の改善

予備的研究の結果を踏まえ, 研究 1 では実験手続きと質問紙の改善を行った。まず, 集団所属性の知識操作の理解を容易にするため, 教示文とともに参加者と相手が応援する同じチームのユニフォームを着ているか否かを示す図を挿入した (Figure 5-3 から 5-6)。さらに, 知識操作を参加者内配置にすることで協力行動の個人差が反映しないようにした。質問紙に関して参加者の負担を軽減し乱雑な回答を避けるため, 罰行動／カープクイズ／操作チェックを削除した。予備的研究で使った援助期待／援助行動の 9 つのシナリオの因子分析を行い, 因子負荷量が高く分散が小さい 4 つのシナリオ (シナリオ 4・5・7・8) に絞った (Table 5-12)。シナリオ 1 の因子負荷量が高かったが, 「突然おなかが痛くなりその場にうずくまる」という内容は緊急性が高く一般的な援助行動といえないため, 採用しなかった。

¹⁰ 研究 1 は「中川他 (2015). 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討: 広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験」として社会心理学研究第 30 巻 3 号 (pp.153-163) に公刊済である。また, 研究 1 は 2013 年日本社会心理学会第 54 回大会で発表を行なった (「相互依存性と内集団協力ー広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験ー」)。

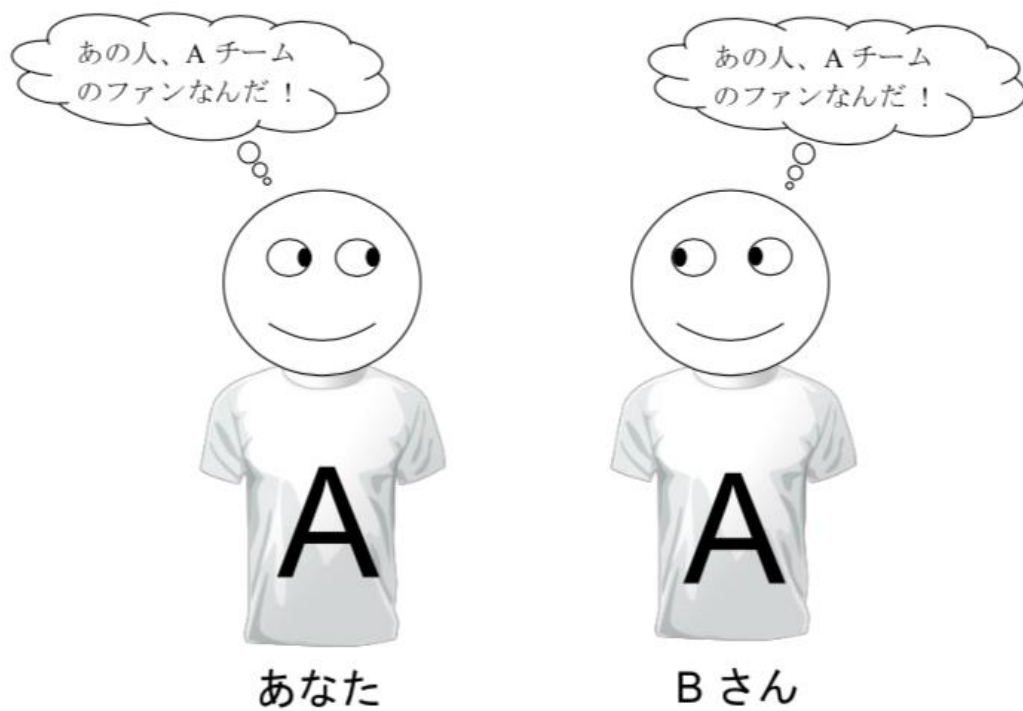


Figure 5-3. 内集団相互条件の図

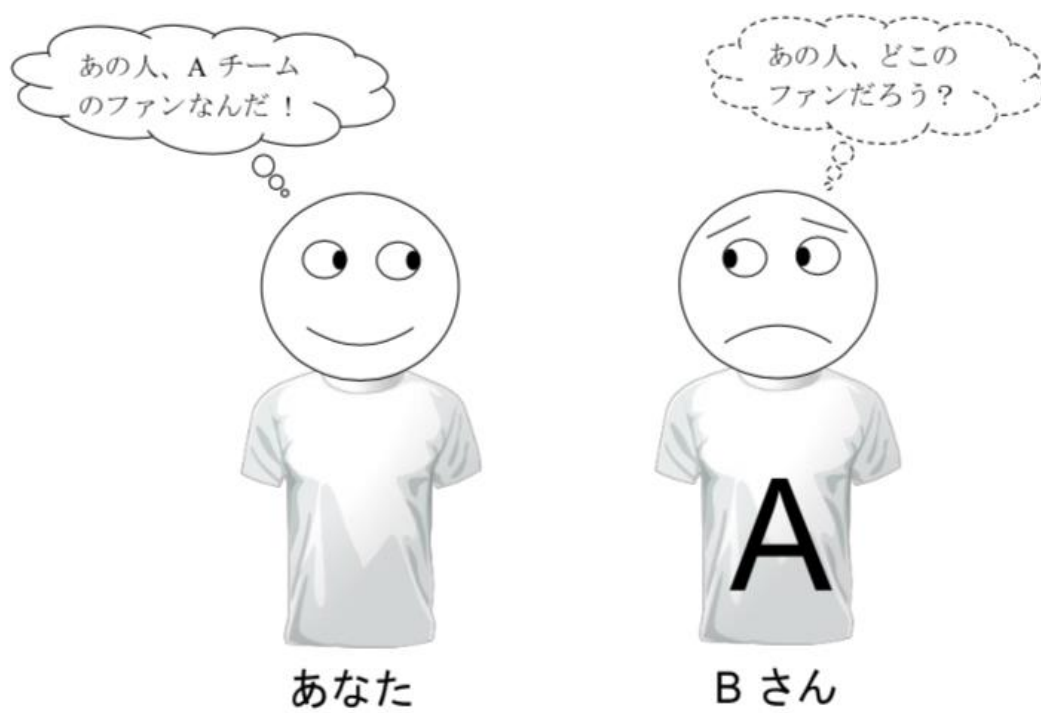


Figure 5-4. 内集団一方条件の図

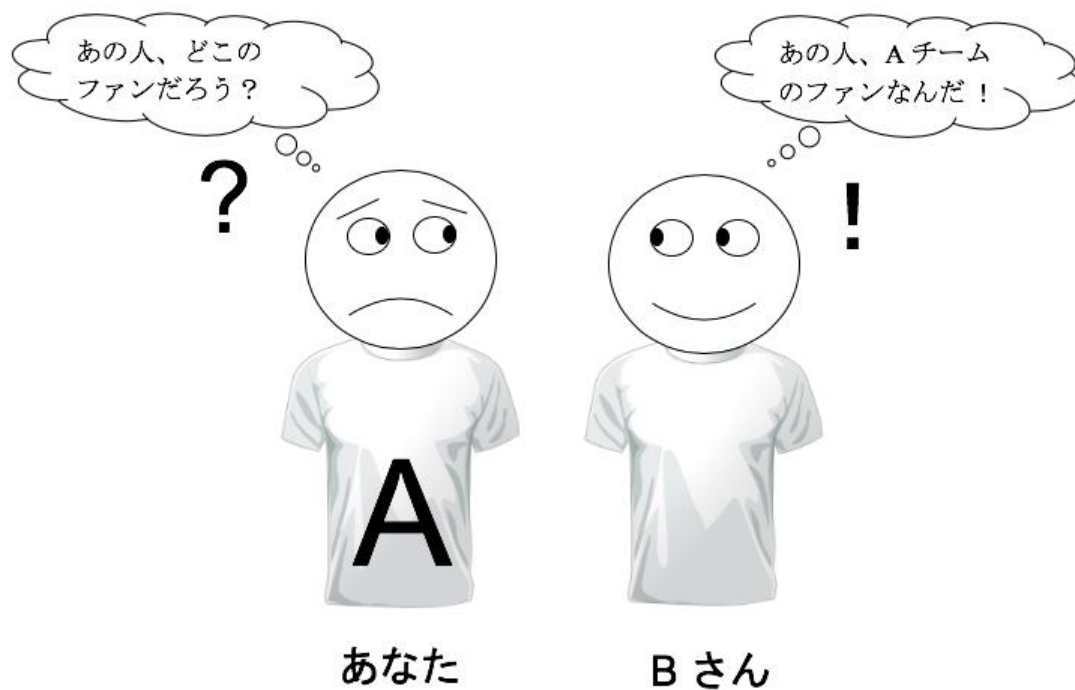


Figure 5-5. 不明内集団条件の図

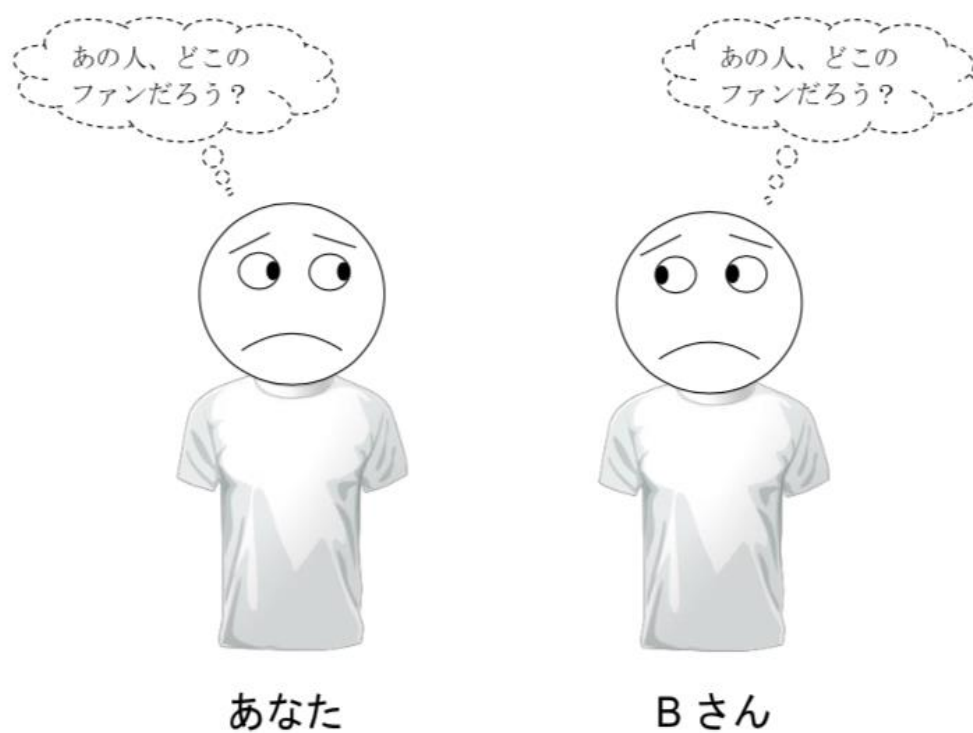


Figure 5-6. 相互不明条件の図

Table 5-12

予備的研究のシナリオの因子分析 ($N = 231$)

	因子負荷量	共通性	M	SD
シナリオ 1	.75	.55	3.73	0.89
シナリオ 8*	.66	.44	3.57	1.02
シナリオ 4*	.58	.34	3.74	1.03
シナリオ 7*	.56	.31	4.06	0.94
シナリオ 9	.56	.31	3.60	1.14
シナリオ 2	.53	.28	3.50	1.10
シナリオ 5*	.48	.24	4.29	0.71
シナリオ 6	.43	.19	3.14	1.07
シナリオ 3	.33	.18	2.97	1.06

注) * は研究 1 で採用したシナリオである。

目的

これまでの MGP を用いた先行研究では, SIT 及び BGR は相互背反の理論としてその妥当性が検討されてきた (Brewer, 1979; 神・山岸, 1997; 清成, 2002; Tajfel et al., 1971; Tajfel & Turner, 1979, 1986; Yamagishi & Mifune, 2008, 2009)。しかし, 近年では SIT と BGR の心理過程はそれぞれが独立して働き, 内集団協力を引き起こすという主張が存在する (Stroebe et al., 2005; 横田・結城, 2009)。研究 1 では, 両理論の心理過程がどちらも働くという立場から野球ファンを対象に両理論の妥当性を検討する。また, 実在集団と MGP では得られる結果が一致しないことがある。その原因の一つに, 交絡要因の影響が挙げられる。研究 1 ではシナリオによる場面想定法という手法を用いることで参加者の匿名性を保ち, 内集団成員からの評価懸念が生じないようにした。さらに, シナリオ内に特定の外集団を設定しないことで外集団成員からの評価懸念とステレオタイプ・規範の影響を抑制した。研究 1 の目的は, 集団

所属性の知識操作（清成，2002）を行い，実在集団の交絡要因を可能な限り統制した実験デザインを用いれば両理論に基づく内集団協力が生じるか否かを検討することである。

実験デザインの改変 従来の研究では内集団ひいきの説明原理として SIT と BGR のいずれが妥当であるかを検証するデザインが用いられることが多かった。SIT の妥当性を検証した研究では，BGR の妥当性を検証できる集団所属性の知識操作（清成，2002）が行われていなかった。研究 1 では MGP の研究と同様に，両理論の妥当性を同時に検証できる集団所属性の知識操作（清成，2002）を導入する。第 3 章で紹介した通り，本研究で対象とする野球ファンには集団間の競争関係が喚起されやすい。このことを踏まえると特定の外集団の存在を明示しなくとも，デフォルトで外集団を想定している可能性は高い。そうした集団で特定の外集団を設定すると必要以上の敵意や葛藤が生じ，協力行動に影響を及ぼす交絡要因になる危険性がある。したがって，研究 1 では外集団との利害葛藤のある集団を用いた上で外集団を明示しないことにより，外集団の存在を意識する程度を調整した。上記の改変により，先行研究における交絡要因を統制し，内 SIT と BGR の妥当性を同時に検証する実験デザインの構築を試みた。

SIT に基づくなら相手の集団所属性が内集団である時，BGR に基づくなら他の内集団成員からの互惠性が期待できる時に内集団協力が生じると予測できる。つまり，仮説は次の通りである。相手が内集団だと認識出来る状況では SIT に基づき（仮説 1-1），互惠性の期待が成り立つ状況では BGR に基づき内集団協力が生じるだろう（仮説 1-2）。さらに，両理論が同時に説明力を持つという前提から内集団協力の背後にある心理過程の働きが異なることが予測される。内集団協力における心理

過程の働きを明らかにするためには、SITの先行要因である同一化、BGRの先行要因である互惠性の期待それぞれが内集団協力の生起に寄与しているか否かを検討する必要がある。もし、SITの心理過程が働くならば参加者が相手を内集団成員だと分かる状況で同一化と内集団協力に関連があるだろう（仮説 2-1）。一方で、BGRの心理過程が働く場合、お互いに相手が内集団成員だと分かる状況で互惠性の期待と内集団協力に関連があるだろう（仮説 2-2）

方法

実験日時・参加者 実験は2012年11月と2013年4月に行われた。広島市内の大学に通う学生262名（男性116名，女性145名，不明1名）が参加した。参加者のうち，カープファンが117名（男性52名，女性65名），他球団ファンが29名（男性19名，女性10名），野球ファン以外の人113名（男性44名，女性67名），無回答が2名であった。以後の分析にはカープファン117名を対象とした。カープファンの平均年齢は19.04 ($SD = 1.15$) 歳であった。

実験デザインおよび条件 研究1の質問紙は7項目で構成された（Table 5-13）。集団所属性の知識（清成，2002）を操作では，参加者の応援チームをAチームであると仮定して，シナリオに登場するBさんがAチームのユニフォームを着ているか否かで4つの条件（内集団相互／内集団一方／不明内集団／相互不明）が設定された¹¹。内集団相互条件では「お互いが同じチームのファンであると分かる」，内集団一方条件では「参加者のみ相手が同じチームのファンであると分かる」，不明内集団条件では「相手のみ参加者が同じチームのファンで

¹¹ 予備的研究以後の研究では条件操作を全て参加者内配置で行なった。

あると分かる」，相互不明（統制）条件では「参加者と相手がお互いにどこのチームのファンであるか分からない」という状況が設定された。集団所属性を共有できるか否かに関する教示文と自己と相手の集団所属性を推測している図を条件ごとに提示した。条件ごとのシナリオを回答する順番は，カウンターバランスがとられた。援助行動／援助期待のシナリオは，全条件で同じ内容である。

全条件において参加者と Bさんは同じチームを応援するファンであることを告げた後，集団所属性の知識を操作した。つまり全ての条件で同一化を促した後知識操作を行い，もし自分または相手が内集団成員であるとの状況が分からなければ（あるいは分かれば）どのように行動するかを尋ねている。この教示には，参加者に混乱を与える可能性が含まれるものの，内集団成員同士であると伝えることによって参加者が相手の集団所属性を勝手に推測する可能性（清成，2002）を排除することができる。

Table 5-13

質問紙の構成

- | |
|--------------------------------|
| 1. 応援チームの特定 |
| 2. ファンのコア性の測定 |
| 3. 援助期待に関するシナリオ |
| 4. 援助行動に関するシナリオ |
| 5. 同一化項目 |
| 6. Fear of negative evaluation |
| 7. フェイスシート |

測定項目 まず，参加者は日本野球機構が定める12球団の中から最も応援するチームを1つ選ぶ，もしくは「どこのファンでもない／野球に全く興味が無い」を選択するように求められた。シナリオの内容は日常生活で起こる困難な場面に直

面したとき、あなたが B さんを助けると思う程度（援助行動）、B さんがあなたを助けてくれると思う程度（援助期待）が測定された。それぞれ 4 つのシナリオが提示され（Table 5-14）、5 件法（1: 全くそう思わない - 5: 非常にそう思う）による評定が行われた。援助期待はシナリオ内の文章中にある「B さん」と「あなた」を入れ替えて測定した。

Table 5-14

援助期待／援助行動のシナリオ

1.	あなたは、電車の乗り継ぎの仕方が分からずに困っています。B さんは、乗り継ぎの仕方を教えてくれると思いますか？
2.	あなたは買い物をして、街を歩いていました。すると袋の底が抜け中身が散乱しました。たまたま通りかかった B さんは拾ってくれると思いますか？
3.	あなたはケガをして、松葉づえをついてバスに乗りこみました。バスは全座席が埋まっています。あなたの目の前に座っている B さんはあなたに座席を譲ってくれると思いますか？
4.	あなたは、道を歩いている途中で転んでしまい、その拍子に車のカギを排水溝に落としてしまいました。開けようとしても排水溝のふたは重くてびくともしません。たまたま一部始終を見ていた B さんは排水溝のふたを開けるのを手伝ってくれると思いますか？

同一化項目（Hogg et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009）では自己と集団の存在を同じとみなす程度を 5 件法で測定した（Table 5-7）。ファンのコア性項目には応援するチームがある参加者のみが回答し、それ以外の者は回答しなかった。他人からの評判を気にする程度を FNE（石川他，1992）で測定した。同一化／コア性／FNE の測定には予備的研究と同じ尺度を使用した。

予測 SIT に基づく内集団協力は、自身と同じ集団に相手も所属することが分かることが重要である。そのため、同じ集団成員であることが分かる内集団相互・一方条件における協力

の程度が相互不明条件よりも高くなるだろう。また，互惠性を期待できる内集団相互条件では，BGR に基づき期待ができない他 2 条件よりも協力的になるだろう。また，BGR のモデルでは互惠性の期待が同一化および内集団ひいきを規定すると主張している (Yamagishi & Kiyonari, 2000)。同一化と援助行動との関連において互惠性の期待（援助期待）を統制した場合，BGR の心理過程が働くなればその関連が消失し，SIT の心理過程が働くなれば同一化と援助行動との関連は残存すると予測される。よって，内集団相互条件では援助期待を統制すると同一化と援助行動の正相関が消失し，内集団一方条件ではその関連が残存するだろう。

結果

研究 1 で使用した援助行動のシナリオ 4 場面の信頼性係数（クロンバックの α ）を求めたところ，内集団相互条件（ $\alpha = .84$ ），内集団一方条件（ $\alpha = .83$ ），不明内集団条件（ $\alpha = .84$ ），相互不明条件（ $\alpha = .87$ ）で妥当な内的整合性が得られたため全項目を合算し，援助行動得点とした。同様に，援助期待のシナリオにおいても内集団相互条件（ $\alpha = .84$ ），内集団一方条件（ $\alpha = .83$ ），不明内集団条件（ $\alpha = .82$ ），相互不明条件（ $\alpha = .85$ ）で妥当な内的整合性が得られたため全項目を合算し，援助期待得点とした。また，同一化項目（ $\alpha = .96$ ）の合計の最高得点は 75 点，最低得点は 13 点，中央値は 39 点であった。カープファンの同一化項目の合計平均は 40.55 ($SD = 11.58$) であり，応援するチームがない人は 24.84 ($SD = 9.70$) であった。カープファンと野球ファン以外の人との同一化を比べると，カープファンの方が有意に同一化の程度が強いことが示された ($t(228) = 11.13, p < .01, d = 1.47$)。

研究 1 では，SIT と BGR が両方とも内集団協力の発生に寄

与するとの立場から、内集団一方向条件と相互不明条件（統制条件）の差を検討することが重要である。これら2つの条件は「相手は参加者の集団所属性を知らない」という部分は同じだが、「参加者が相手を内集団だと知っている」という点で異なる。もし、参加者が相手を内集団成員だと知るだけで協力行動が生起すれば、それはSITの予測と合致する。2（自分の知識：相手を内集団成員と分かる／分からない）×2（相手の知識：参加者を内集団成員と分かる／分からない）の二元配置の分散分析を行うことも可能だが、その分析では知識の非対称性を明確に示すことが難しい。したがって、研究1及び本論文では繰り返しのある一元配置の分散分析を採用した検討を行った。

援助期待 互惠性の期待の操作が成功していたかを確認するため、援助期待（Figure 5-7）を従属変数、知識条件を独立変数として一要因分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意であった（ $F(3, 348) = 67.07, p < .01, \eta^2 = .12$ ）。Holm法によって条件間の下位検定を行ったところ、援助期待では内集団相互条件（ $M = 16.12, SD = 3.20$ ）の値が、不明内集団条件（ $M = 14.93, SD = 3.10$ ）、内集団一方条件（ $M = 13.24, SD = 3.58$ ）、相互不明条件（ $M = 12.99, SD = 3.69$ ）よりも高かった（ $p < .01$ ）。不明内集団条件は、内集団一方条件、相互不明条件よりも高かった（ $p < .01$ ）。内集団一方条件と相互不明条件の間に有意な差は見られなかった（ $p = .27$ ）。この結果は、清成（2002）の結果と一致しており、互惠性の期待の操作は成功したといえる。

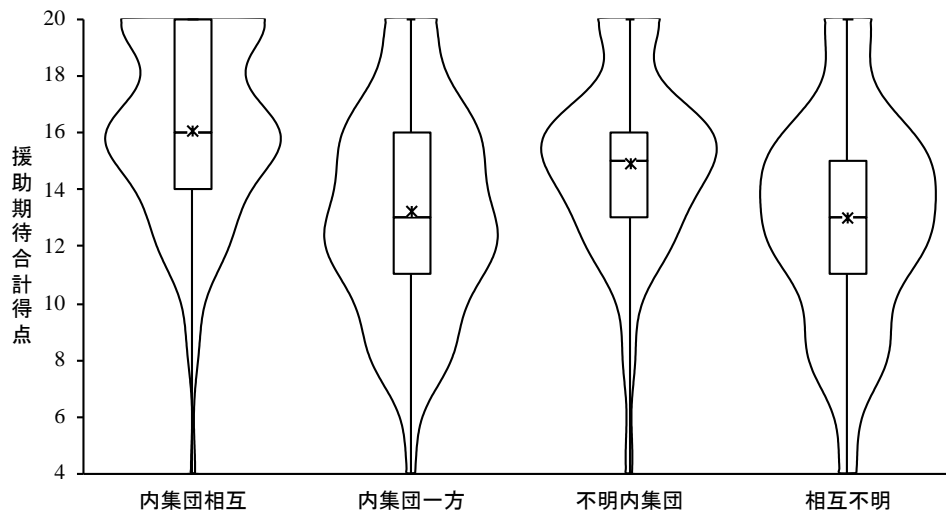


Figure 5-7. 援助期待のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 次に，援助行動（Figure 5-8）も同様に条件の主効果が有意であった（ $F(3, 348) = 32.39, p < .01, \eta^2 = .05$ ）。条件間の下位検定（Holm 法）を行った結果，内集団相互条件（ $M = 16.64, SD = 2.96$ ）の値が，内集団一方条件（ $M = 15.79, SD = 3.16$ ），不明内集団条件（ $M = 15.00, SD = 3.42$ ），相互不明条件（ $M = 14.56, SD = 3.73$ ）よりも有意に高かった（ $p < .01$ ）。内集団一方条件は，不明内集団条件，相互不明条件よりも高く（ $p < .01$ ），不明内集団条件は相互不明条件よりも高かった（ $p < .05$ ）。他の条件よりも内集団相互条件における協力の程度が高かったことは，内集団成員からの互惠性の期待によるものであり，BGR に基づく仮説 1-1 を支持する結果である。さらに，互惠性の期待ができない内集団一方条件においても，相互不明条件より協力的であったことは SIT に基づく仮説 1-2 を支持する結果である。

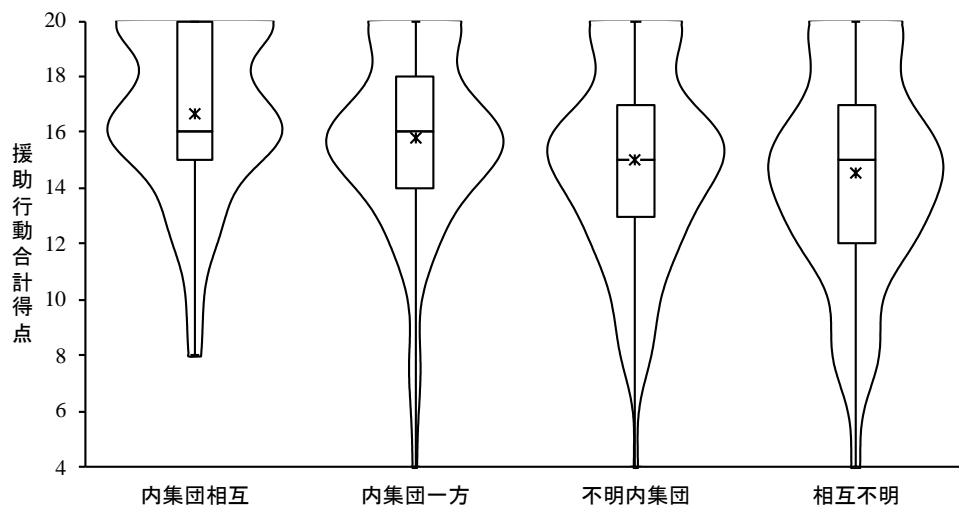


Figure 5-8. 援助行動のヴァイオリンプロット。

さらに，内集団協力の背後にある心理過程を明らかにするため，同一化と援助行動の相関・偏相関係数を算出した。BGRに基づくなら互惠性の期待である援助期待が内集団協力の生起要因となり（仮説 2-1），SITに基づくなら同一化が内集団協力の生起要因となるだろう（仮説 2-2）。分析の結果，内集団相互条件（ $r = .24, p < .01$ ）と内集団一方条件（ $r = .18, p < .10$ ）で同一化と援助行動に正相関が見られた。さらに，BGR の効果を検討するため，Yamagishi & Kiyonari (2000) のモデルに従い，援助期待を統制した偏相関分析を行った（Table 5-15）。BGR では，同一化と援助行動の関連は疑似相関であり，援助期待，すなわち互惠性の期待が両変数を規定すると仮定している。もし BGR のモデルが妥当であれば，援助期待を統制することで同一化と援助行動との関連は消失するだろう。分析の結果，内集団一方条件（ $r = .20, p < .05$ ）と相互不明条件（ $r = .19, p < .05$ ）では有意な正の偏相関が得られたが，内集団相互条件で同一化と援助行動の相関関係が得られなくなった（ $r = .07, p = .43$ ）。

Table 5-15

援助行動と同一化の相関／援助期待を統制した偏相関係数 (r)

条件名	相関	偏相関
内集団相互条件	.24**	.07
内集団一方条件	.18 [†]	.20*
不明内集団条件	.13	.14
相互不明条件	.07	.19*

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

内集団相互条件で同一化と援助行動との間の相関が消失したことは, Yamagishi & Kiyonari (2000) のモデルを再現しており BGR に基づく仮説 2-1 を支持する結果である。一方, 内集団一方条件において同一化と援助行動との間の相関が残存したことは, SIT に基づく仮説 2-2 を支持する結果である。

補足的分析 仮説の検証に使用しなかった項目と援助行動との相関分析を補足として行った (Table 5-16)。コア性と FNE に有意な相関は見られず ($r = -.11$, $p = .25$), 協力行動の性差 (男性 52 名, 女性 65 名) は, 不明内集団条件のみで女性が協力的になっていた (Table 5-17)。ただし, 不明内集団条件は仮説の検証に関わる条件ではない。

Table 5-16

援助行動と各項目間の相関 (r)

	コア性	FNE
内集団相互	.18 [†]	.05
内集団一方	.16 [†]	-.00
不明内集団	.11	.04
相互不明	.10	-.05

[†] $p < .10$

Table 5-17

援助行動の男女差

条件名	男性	女性	<i>t</i>	<i>p</i>
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)		
内集団相互条件	16.37 (3.42)	16.86 (2.53)	0.90	.37
内集団一方条件	15.40 (3.47)	16.09 (2.88)	1.17	.24
不明内集団条件	14.23 (3.86)	15.62 (2.92)	2.21	.03
相互不明条件	14.04 (4.03)	14.97 (3.45)	1.34	.18

 $(d = 0.41)$

考察

研究 1 の目的は，実在集団を対象とした場面想定法実験を通じて SIT と BGR の妥当性及びそれらの理論が両立しうるかを検証することであった。SIT と BGR の心理過程が引き出されやすい集団として野球ファンを採用した。実験では，集団所属性の知識操作を導入することで SIT と BGR の妥当性を同時に検証することが可能となった。場面想定法により匿名性を高めることで内集団成員からの評価懸念を統制した。また，シナリオ内に特定の外集団を明示しないことによって評価懸念やステレオタイプ・規範を統制した。

実験の結果，SIT と BGR がそれぞれ記述する心理過程に基づく内集団協力が生じた。内集団成員からの互惠性の期待ができる状況（内集団相互条件）では，他の条件と比べ最も協力的になり BGR が支持された。また，参加者のみ相手を内集団成員だと分かる状況（内集団一方条件）でも互いに所属性の分からない状況（相互不明条件）よりも協力的になり SIT が支持された。さらに，同一化と協力行動の関連を見ると，互いに内集団成員と分かる状況で，援助の期待を統制変数として投入すると BGR が予測するように同一化と協力行動との関連が消失した。つまり，同一化と協力行動との関連は疑似相関で

あり、先行要因は互惠性の期待（援助の期待）であったといえる。一方、参加者のみが相手を内集団成員と認識している状況では援助期待を投入しても、同一化と協力行動の関連は変化しなかった。よって、互惠性の期待ができない状況において同一化を先行要因とした内集団協力の心理過程が働くといえる。以上より、SITとBGRの妥当性がそれぞれ示された。また、互惠性が成り立たない状況ではSIT、互惠性の成り立つ状況ではBGRが記述する心理過程に切り替わり働いたことからStroebe et al. (2005)の主張と一貫し、二つの心理過程が加算的に機能する可能性は低かった。

しかし、研究1ではSITからもBGRからも予測されない結果が得られた。第1に不明内集団条件と相互不明条件における協力は同程度であったにもかかわらず、協力の期待では不明内集団条件の方が高くなった。この結果は、自身は協力的にならないが、相手は協力してくれるだろうと考えていたことを表している。それは、自身は相手が同じ集団と分かれば協力するように、相手も同じ状況であれば自身に協力してくれるだろうという期待と行動の裏返しであり、自身と相手の行動や考えを同一視していることを示している。

第2に相互不明条件において同一化と協力行動に関連がみられず、この関連は協力の期待を統制するとみられるようになった。この結果は、相互不明条件では「相手から搾取されるかもしれない」との恐怖が同一化の効果に対して調整変数として働いたと解釈できる。相互不明条件とは互惠性が期待できない状況であり、その場合に同一化が援助行動に効果を持つ。研究1では、相互不明条件においてもBさんが実際にはカープファンだと伝えたため、同一化と援助行動との関連が生じる可能性はある。しかし、同時に相互不明条件は社会的不

確実性の高い状況である。その場合、援助期待において「相手から搾取されるかもしれない」という期待（搾取への恐怖）の側面が強くなったと考えられる。以上より、この搾取への恐怖が調整変数として同一化の効果を弱めた可能性がある。

研究 1 の課題（集団対象） 研究 1 より、実在集団における内集団協力には SIT と BGR の心理過程がどちらも成立し得ることが明らかになった。ただし、いずれの理論からも導かれない結果も得られた。相手から一方的に内集団成員だと知られる不明内集団条件では、相手に協力しない行動傾向が見られた。さらに、互いに集団所属性が分からず相互依存性が存在しないデフォルトの状況（相互不明条件）では、協力の期待を統制した場合に同一化と協力行動に関連がみられた。

これらの結果には二つの解釈が考えられる。一つは、あくまでデフォルトの内集団協力の規定因が互惠性の期待であるとの解釈と、もう一つは他の参加者が同じ広島市民であると考え、別の集団としてのカテゴリー化が生じたという解釈である。カープファンに同一化している参加者ほど広島市民にも同一化する傾向があるために、それが援助を促進している可能性がある。ただし、カープファンと広島市民という二つのカテゴリーへの同一化間の相関が不明なため、この解釈は検証困難であった。つまり、B さんが実際にはカープファンだと伝えた実験操作が協力行動に影響しているのか、参加者が広島市内にある大学生であったことの効果なのかは特定できないため、今後の検討が必要である。したがって、他地域の野球チームのファンを用いてカープファンで得られた結果と比較する必要があるだろう。

研究 1 の課題（非協力の誘因） 研究 1 では内集団協力の指標として援助行動を測定した。しかし、研究 1 で用いたシナリ

オには参加者が援助をした際にかかる負担（コスト）が明示されていなかった。協力行動にかかるコストが曖昧な状況では、非協力の誘引が弱く、実際の行動につながらない可能性がある。例えば、シナリオ 1 では電車の乗り継ぎの仕方がわからない B さんを助けるか否かが尋ねられていたが、現実では援助によって自分に何らかの不利益を被るコストが伴うはずである。この状況では電車の乗り継ぎの仕方を教えるのに時間がかかり、何かの予定に遅れてしまうなどがコストになるとして考えられる。つまり、コストが明示されていない場合、援助する相手が誰かにかかわらず協力的になる可能性があった。

研究 1 の課題解決 次の第 6 章では研究 1 の集団対象が限られている点と協力行動にかかるコストが明示されず非協力の誘因が弱いという点を踏まえた検討を試みる。集団対象に関しては、全国から一般人の野球ファンを対象とした Web 実験（研究 2）と別の地域の野球ファンを対象とした実験（研究 3-3）を行うことで応援するチームや年齢による影響があるか否かを検討する。また、研究 2 では研究 1 のシナリオに協力行動にかかるコストの内容を明示して非協力の誘因を高める。研究 3 では実際に協力のコストがかかる行動実験を行い、場面想定法による行動意図ではなく行動レベルの内集団協力を検討する。さらに、Kiyonari et al. (2002) の主張を踏まえ、協力行動にかかるコストが BGR の心理過程の働きを活性化させる状況要因となるか否かを検討する。

これまでの MGP を用いた検討では SIT と BGR がそれぞれ独立に検討されてきたため、それらの両立性を検討した実在集団の研究はほぼ存在しなかった。研究 1 の結果から交絡要因を統制した実験デザインであれば、実在集団でも両理論の妥当性が保証されることが示された。

第 6 章

協力にコストがかかる
場面想定法実験と行動実験
- 研究 2／研究 3 -

第 1 節 研究 2

Web 調査による一般人の野球ファンを対象とした場面想定法実験¹²

目的

研究 2 (中川他, 2019) の目的は, 協力行動にかかるコストを明示して非協力の誘因を高めた追試を行うことである。研究 1 の場面想定法実験では, 両理論の心理過程それぞれが働く内集団協力が生じた。研究 2 は研究 1 の実験デザインを踏襲し, 援助行動にコストがかかることを明示した状況で内集団協力を検討する。また, 全国 Web 調査により実在集団の対象を大学生のカープファンから一般人の野球ファン (全 12 チーム) に拡大した。

協力行動のコスト 研究 1 のシナリオには援助行動にかかるコスト (協力の負担) が明示されていなかった。コストには非協力の誘引を高め, 参加者の社会的な交換の感覚を引き出す効果がある。社会的交換の感覚を引き出すことは, BGR の心理過程の働きを促進することが知られている (Kiyonari et al., 2000)。そのため, BGR の心理過程を活性化する条件の一つに協力行動のコストが影響している可能性がある。BGR に基づく互惠性の期待は, コストを明示することでより一層高まると考えられる。なぜなら, 互惠性の期待が働く集団内の一般交換関係は, 自己の投資 (協力) を上回る (あるいは投資に見合った) 返報があるとの前提から成り立っているからである。コストが明示された場合, 好意の返報性である互惠性の期待が高まりやすく BGR の心理過程の働きが強くなる。これら

¹² 研究 2 は「中川他 (2019). 野球チームのファンにおける内集団ひいきに関する場面想定法実験」として心理学研究第 90 巻 1 号に掲載予定である。また, 研究 2 は 2014 年日本社会心理学会第 55 回大会で発表を行なった (「相互依存性と内集団協力: 野球ファンを対象とした場面想定法実験」)。

を踏まえると，協力行動のコストが明示された状況では BGR の心理過程が強く働く内集団協力が生じるだろう（仮説 1）。

互惠性の期待の信念 研究 1 では相手からの援助期待を互惠性の期待をみなしていた。ただし，互惠性の期待は実験状況の一時的な期待に限られているわけではない。実在集団において日常的に BGR の心理過程が働くならば，先行要因である互惠性の期待がシナリオで設定された 1 回限りの状況だけではなく，信念として形成されているはずである。互惠性の期待の信念とは，「人々が長期的な一般交換関係が続くと想定した集団で日常的に抱く恒久的な構え」である。そのため，実験内で生じた一時的な期待のみならず，恒久的な互惠性の期待の信念に置き換えたとしても，同様の結果が得られることが予測される。以上より，この信念の程度を測定するため研究 2 では集団内の相互依存認知尺度（神・篠塚，1996）を導入した。この尺度を導入する目的は，恒久的な互惠性の期待の信念が内集団協力に対して影響するか否かを確認することで実在集団における BGR の予測精度を高めることである。

研究 1 では同一化と援助行動にみられた正相関が，援助期待を統制する（Yamagishi & Kiyonari, 2000）と内集団相互条件では有意ではなくなり（BGR 支持），内集団一方条件では残存すること（SIT 支持）が明らかになった。そこで，研究 2 では個人差変数としての互惠性の期待の信念を実験で操作された援助期待の代わりに統制変数として投入しても，研究 1 の結果が再現されるか分析を行った。内集団協力の背後にある心理過程は互惠性の期待（BGR）が前提であるため，同一化と援助行動において援助期待（互惠性の期待）を統制すれば，有意な関連がなくなるだろう（仮説 2）。

方法

実験日時・参加者 実験は2014年2月13日から16日にかけて実施された。Web調査会社のマクロミルに登録されたアンケートモニタから3,096名（男性1,488名、女性1,608名）をランダムにサンプリングした。参加者のうち応援チームのある野球チームのファン1,635名（男性937名、女性698名）を主な分析に用いた。ファンではないが比較的好きなチームを選択した野球チームのファン以外の1,461名（男性551名、女性910名）はファンとの比較に使用した。野球ファンの平均年齢は50.93 ($SD = 15.57$) 歳であった。回答の謝礼には金券や現金に交換できるポイントが付与された。

実験デザインおよび条件 研究2では研究1において参加者ごとの分散が大きかったコア性を測定する項目を削除し、互惠性の期待に関連する相互依存の認知（神・篠塚, 1996）を測定する項目を新たに導入した。研究1と同様の教示と図を用いて互惠性の期待の有無を集団所属性の知識（清成, 2002）によって操作した。互いに相手が同じチームを応援するファンと分かる内集団相互条件、参加者のみ相手が同じチームを応援するファンと分かる内集団一方条件、相手のみ参加者が同じチームを応援するファンと分かる不明内集団条件、互いに所属集団が分からない相互不明条件の4条件を設定した。研究2では条件を提示する順序のみを変更し、デフォルトの協力である相互不明条件を最初に提示した後の内集団相互／内集団一方／相互不明条件の提示順序をランダムに設定した。

協力にかかるコストの内容 援助期待／援助行動のシナリオでは他者または自身が困っている日常場面を想定させ、あなたがBさんを助けると思う程度（援助行動）と主語を反転させBさんがあなたを助けてくれると思う程度（援助期待）

を測定した（5件法）。研究1の4つのシナリオを使用し，それぞれの場面の協力にかかるコスト（下線部太字）を具体的に明示した（Table 6-1）。順序効果をなくすため，援助期待と援助行動のシナリオのどちらを先に回答するかを参加者半数ごとに入れ替えた。

Table 6-1

コストを明示した援助期待／援助行動のシナリオ

1. Bさんは，電車の乗り継ぎの仕方が分からずに困っています。そこにあなたが通りかかりました。 <u>もし，あなたがBさんに道を教えると，あなたは乗車するはずのバスに乗れず，大事な仕事に遅れてしまうかもしれません。</u> あなたは，Bさんに乗り継ぎの仕方を教えてあげると思いますか？
2. Bさんは買い物をして，街を歩いていました。Bさんはつまずいてしまい，袋の中身が散乱しました。そこに限定のお惣菜を買うために急いでいるあなたが通りかかりました。 <u>もし，あなたが拾うのを手伝うと，あなたの欲しかったお惣菜は売り切れてしまい買えなくなります。</u> あなたは，Bさんを手伝ってあげると思いますか？
3. Bさんはケガをして，松葉杖をついてバスに乗りこみました。バスは全座席が埋まっています。そこには徹夜明けで疲れきっているあなたが座っています。 <u>もし，あなたが席を立つと，その後あなたは40分間立ちっぱなしになります。</u> Bさんの目の前に座っているあなたは，Bさんに座席を譲ってあげると思いますか？
4. Bさんは，道を歩いている途中で転んでしまい，その拍子に家のカギを排水溝に落としてしまいました。開けようとしても，排水溝のふたは重くてびくともしません。そこに友達との待ち合わせ場所に行くあなたが通りかかりました。 <u>もし，あなたがふたを開けるのを手伝うと，あなたは友達とドライブに行くために早起したにもかかわらず，出発に遅れてしまいます。</u> たまたま一部始終を見ていたあなたは，排水溝のふたを開けるのを手伝ってあげると思いますか？

質問項目と手続き 参加者に応援する野球チームがあるか
はい／いいえで尋ねた後，はいと回答した者には日本野球機構が定める12球団を提示し，その中で最も応援するチーム

を 1 つ選択するページ，いいえと回答した者には比較的好きなチームを 1 つ選択するページに移動した。応援するチームの有無にかかわらず，参加者は全て同じ質問項目に回答した。研究 1 と同様の同一化項目 (Hogg, et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009) 及び援助行動／援助期待のシナリオ内にある「〇〇ファン」の〇〇には，選択したチーム名を当てはめ回答するように教示された。好きなチームを選択した者はファンではないが，好きなチーム名を当てはめ同じ項目に回答した。同一化は 13 項目 5 件法，相互依存認知 (神・篠塚, 1996) は 4 項目 5 件法¹³で測定された (Table 6-2; 「1: 全くそう思わない - 5: 非常に強くそう思う)。同一化，相互依存認知，去年 1 年で試合を見に行った回数を測定した後，援助行動／援助期待のシナリオで内集団協力を測定し，最後に FNE (石川他, 1992) を測定した。

Table 6-2
相互依存認知尺度

-
1. 〇〇ファンであれば，ファンの人に親切にすれば必ず自分のためになる。
 2. 〇〇ファンの間では，自分だけ得をしようとして行動すると結局は損をしてしまうことが多い。
 3. 〇〇ファンは，お互い持ちつ持たれつである。
 4. 〇〇ファンとしてうまくやっていくためには，他のファンと助け合わなければならない。
-

結果

まず，援助行動におけるシナリオ 4 場面のクロンバックの α 係数を求めたところ，内集団相互条件 ($\alpha = .80$)，内集団一方条件 ($\alpha = .78$)，不明内集団条件 ($\alpha = .79$)，相互不明条件 ($\alpha = .73$) で十分な内的整合性が得られたため，全項目を合算し

¹³ 元の尺度は 7 件法であるが，ここでは 5 件法で使用した。

援助行動得点とした。同様に，援助期待も内集団相互条件 ($\alpha = .87$)，内集団一方条件 ($\alpha = .85$)，不明内集団条件 ($\alpha = .86$)，相互不明条件 ($\alpha = .79$) で十分な内的整合性が得られたため，全項目を合算し援助期待得点とした。さらに，応援するチームによる援助期待／援助行動の違いを検討するため，援助期待／援助行動を従属変数，集団所属性の知識条件と応援チームを独立変数とした分散分析を行ったところ，援助期待 ($F(11, 1623) = 1.04, p = .41$)，援助行動 ($F(11, 1623) = 0.70, p = .74$) ともに有意なチームの主効果は得られなかった。したがって，以下ではチームを区別しない野球ファン全体での分析を行う。

同一化項目 ($\alpha = .93$) の合計平均は，野球チームのファン ($M = 42.15, SD = 8.16$) の方がファン以外 ($M = 28.24, SD = 10.15$) より高く，野球チームのファンは内集団への同一化がより強いことが分かる ($t(3094) = 42.20, p < .01, d = 1.52$)。同じく，相互依存認知 ($\alpha = .82$) の合計平均は，野球ファン ($M = 12.61, SD = 8.16$) が，野球ファン以外の人 ($M = 9.44, SD = 3.62$) よりも高かった ($t(3094) = 28.14, p < .01, d = 1.01$)。したがって，ファンはファン以外の人よりも同一化と相互依存認知の程度が高いことが明らかになった。FNE ではファン ($M = 34.64, SD = 8.00$) とファン以外 ($M = 35.16, SD = 8.39$) で有意な差は得られなかった。

援助期待 互惠性の期待の操作を確認するため，援助期待 (Figure 6-1) を従属変数，集団所属性の知識条件を独立変数とした分散分析を行ったところ，条件の主効果が有意であった ($F(3, 4902) = 202.46, p < .01, \eta^2 = .02$)。援助期待では内集団相互条件 ($M = 12.97, SD = 3.00$) が，不明内集団条件 ($M = 12.44, SD = 2.87$)，内集団一方条件 ($M = 11.99, SD = 2.83$)，相互不明条件 ($M = 11.87, SD = 2.76$) よりも高かった ($p < .01$)。

不明内集団条件は内集団一方条件，相互不明条件よりも高く，内集団一方条件は相互不明条件よりも高かった ($p < .01$)。内集団相互条件で援助期待が最も高いとの結果は，清成（2002）の結果と一致しており互惠性の期待の操作は成功した。

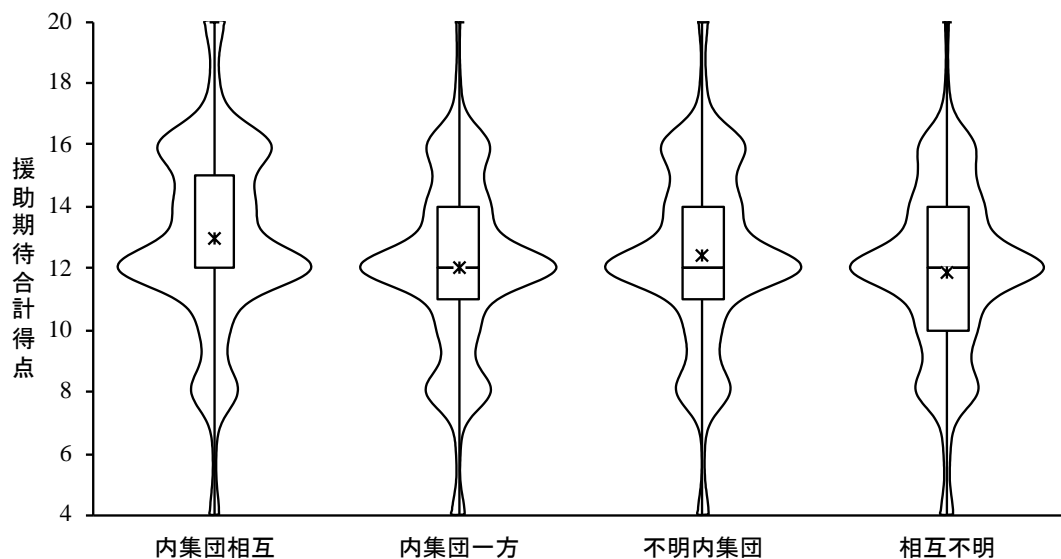


Figure 6-1. 援助期待のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 次に，援助行動（Figure 6-2）を従属変数とし集団所属性の知識条件を独立変数として分散分析を行ったところ，条件の主効果が有意であった ($F(3, 4902) = 76.44, p < .01, \eta^2 = .01$)。条件間の下位検定（Holm法）により，援助行動において内集団相互条件 ($M = 14.17, SD = 2.82$) の値が，内集団一方条件 ($M = 13.77, SD = 2.77$)，不明内集団条件 ($M = 13.56, SD = 2.82$)，相互不明条件 ($M = 13.76, SD = 2.70$) よりも有意に高いという結果が示された ($p < .01$)。内集団一方／相互不明条件の間に有意差はなく，これらはいずれも不明内集団条件より高かった ($p < .01$)。研究1と同じく，内集団相互条件で最も協力的になり，内集団一方／相互不明条件における協力行動に差がなかったことから，仮説1が支持された。

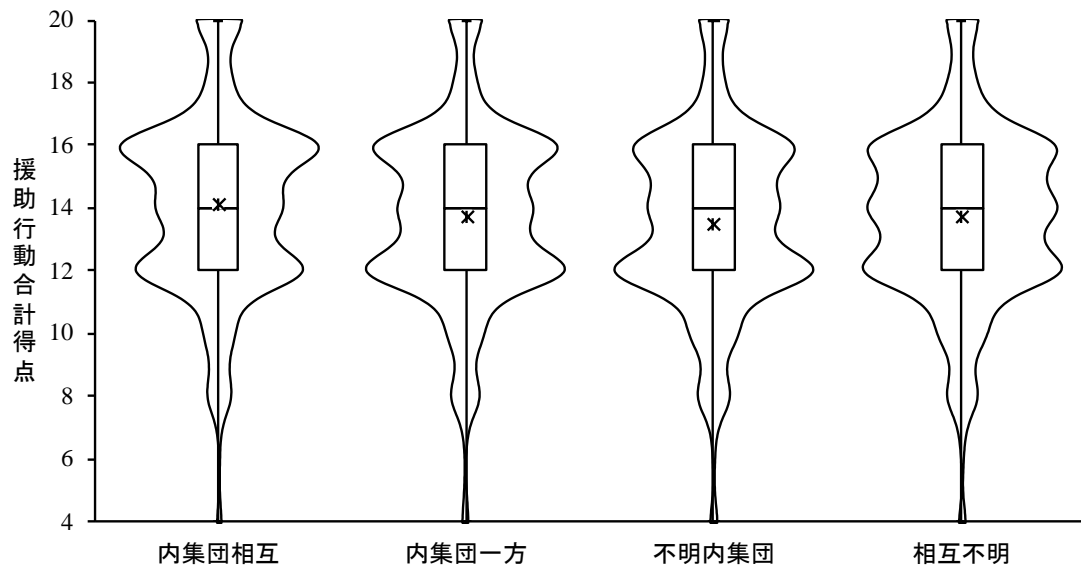


Figure 6-2. 援助行動のヴァイオリンプロット。

さらに，内集団協力の背後にある心理過程を明らかにするため，同一化と各条件における援助行動の相関係数を算出した後，援助期待を統制した偏相関係数を算出した。同一化と援助行動の関連が疑似相関であるとの主張（Yamagishi & Kiyonari, 2000）に基づけば，研究1と同様に援助期待（互惠性の期待の信念）を統制すると，同一化と協力行動の相関関係が消失するはずである。Table 6-3 に同一化と援助行動の相関，援助期待／相互依存認知尺度で測定した互惠性の期待の信念を統制した偏相関分析を示す。同一化と援助行動は，全ての条件で有意な正相関が得られた。さらに，援助期待／互惠性の期待の信念を統制した偏相関分析では，全条件で同一化と援助行動の関連（ $r_s \leq .13$ ）が弱まった。各条件の相関・偏相関係数との差を検討（ z 検定）した結果，全条件で相関係数より偏相関係数の値が有意に低かった（内集団相互： $z = 3.82$, $p < .01$ ，内集団一方： $z = 2.35$, $p < .05$ ，不明内集団： $z = 2.90$, $p < .01$ ，相互不明： $z = 2.34$, $p < .05$ ）。内集団相互条件で見られた相関

係数の差が最も大きく，他 3 条件での差はその条件より小さかった。すなわち，内集団相互条件では援助期待が援助行動に与える効果が強かったといえる。ただし，同一化と援助行動の関連は援助期待を統制しても弱い正相関が残存した。

Table 6-3

援助行動と同一化の相関係数及び

援助期待／互惠性の期待の信念を統制した偏相関係数

条件名	相関	偏相関 (援助期待)	偏相関 (互惠性の期待)
内集団相互条件	.23**	.10** (-.13)	.10** (-.13)
内集団一方条件	.21**	.13** (-.09)	.11** (-.10)
不明内集団条件	.18**	.08** (-.10)	.11** (-.07)
相互不明条件	.19**	.11** (-.08)	.12** (-.07)

** $p < .01$ 注) () の値は相関係数との差分

互惠性の期待の信念 シナリオによる援助期待と相互依存の認知尺度で測定した互惠性の期待の信念が同様の効果を持つか否かを検討した。Table 6-4 に互惠性の期待の信念と援助期待／援助行動の相関係数を示す。互惠性の期待の信念と援助期待の相関は，内集団相互，不明内集団，内集団一方／相互不明条件（同値）の順に高い正の相関係数を示した。互惠性の期待の信念と援助行動の相関は，内集団相互，内集団一方，不明内集団，相互不明条件の順に高い正の相関係数を示した。各条件間の相関・偏相関係数の差を検討（z 検定）したところ，援助期待において内集団相互／不明内集団条件が他条件よりも有意に高い相関係数を示した（Table 6-5）。したがって，内集団相互／不明内集団条件における援助期待は，互惠性の期待の信念と関連が強いことが明らかになった。ただし，援助行

動と互惠性の期待の信念では内集団相互／内集団一方／不明内集団条件それぞれ，相互不明条件との間で相関係数に差がみられなかった。

Table 6-4

互惠性の期待の信念と援助期待／援助行動の相関係数

条件名	援助期待	援助行動
内集団相互条件	.26**	.23**
内集団一方条件	.16**	.19**
不明内集団条件	.21**	.16**
相互不明条件	.16**	.15**

** $p < .01$

Table 6-5

互惠性の期待と援助期待／援助行動の相関係数の差の検定 (z)

条件の組み合わせ	援助期待	援助行動
内集団相互×内集団一方	5.44**	2.32*
内集団相互×不明内集団	1.25	4.09**
内集団相互×相互不明	3.86**	1.44
内集団一方×不明内集団	5.48**	6.00**
内集団一方×相互不明	0.17	1.83
不明内集団×相互不明	2.86**	0.06

* $p < .05$, ** $p < .01$

研究 1 との比較 研究 1 の結果と比較するため，カープファン 90 名を抽出した分析を行った。カープファンの援助期待は内集団相互条件で最も高く ($M = 12.50$, $SD = 3.26$)，全チームの野球ファンを対象とした結果と一貫していた。援助行動でも内集団相互条件 ($M = 14.00$, $SD = 2.71$) は相互不明条件 ($M = 13.64$, $SD = 2.75$) よりも高く BGR が支持される傾向で

あったが、有意差はみられなかった。

補足的分析 補足的分析として研究 2 のメインの分析には使用しなかった項目と援助行動との相関分析を行った (Table 6-6)。FNE および観戦回数と援助行動にさほど強い関連はなかった。内集団相互／相互不明条件において女性の方が協力的であった (Table 6-7; 男性 937 名, 女性 698 名)。

Table 6-6

援助行動と各項目間の相関 (r)

条件名	FNE	観戦回数
内集団相互条件	-.01	.11**
内集団一方条件	-.03	.10**
不明内集団条件	-.06*	.09**
相互不明条件	-.07**	.09**

** $p < .01$

Table 6-7

援助行動の男女差

条件名	男性	女性	t	p
	$M (SD)$	$M (SD)$		
内集団相互条件	14.06 (2.90)	14.33 (2.70)	1.92	.05
内集団一方条件	13.69 (2.82)	13.87 (2.69)	1.27	.21
不明内集団条件	13.47 (2.89)	13.66 (2.76)	1.33	.18
相互不明条件	13.62 (2.77)	13.95 (2.60)	2.43	.02

考察

研究 1 では, SIT と BGR 両方の心理過程の働きによって内集団ひいきが生じていた。互惠性を期待できる内集団相互条件で統制条件よりも協力的になり (BGR 支持), 続いて互惠性を期待できず相手が内集団成員と分かるだけの内集団一方条

件でも統制条件より協力的になっていた (SIT 支持)。研究 2 では Web 調査により全 12 球団それぞれの野球チームのファンを対象とし、研究 1 のシナリオに協力行動にかかるコストを明示した場面想定法実験を行った。その結果、研究 2 では研究 1 と同じく BGR が支持され、互惠性の期待できる内集団相互条件で最も協力的になった。この結果は、メタ分析から BGR の心理過程が優勢であると結論づけた Balliet, Wu, & De Dreu (2014) の主張と一貫している。しかし、SIT は支持されず、相手を内集団成員であると認識できる内集団一方条件と統制条件の間の協力行動に差がなくなった。条件ごとの協力行動のパターンから、協力行動のコストが明示されると SIT より BGR の心理過程が強く働くことが示唆された。

さらに、内集団協力の背後にある心理過程を解明するため、同一化と援助行動の関連を検討した。援助期待を統制変数として投入すると同一化と援助行動の関連は全条件で弱まり、その程度は内集団相互条件で最も大きかった。ただし、援助期待を統制しても同一化と援助行動の関連は弱く残存した。以上から、協力行動のコストによって相対的に BGR が説明する心理過程の効果を高めたと示唆されるが、同一化の効果が残存したことから SIT が説明する心理過程も同時に働いた可能性がある。

また、研究 2 では研究 1 と同じく両理論から予測されない結果が得られた。相手のみ参加者の集団所属性を知っている不明内集団条件では、デフォルトの協力である統制条件よりも協力しなかったにもかかわらず、相手に対する援助の期待は統制条件よりも高くなった。このようなパターンは、清成 (2002) の不明内集団条件でも見られている。この一見不可解なパターンについて、清成 (2002) は相手の所属集団の知識の

欠如が，相互協力のヒューリスティックの発動を抑制すると解釈した。不明内集団条件では「集団所属性の知識が共有されていないために，集団内での相互協力達成のためには協力には協力を返した方がいいという主観的な構造変換が阻害され，協力行動へは結びつかなかった（p. 8, 1.48-51）」と考えられる。すなわち，一般交換関係が想定されにくい不明内集団状況では相手の期待を裏切ったとしても，その後報復される可能性はないため，自身の利益を最大化するという合理的な行動を取る傾向にある。研究2の結果も清成（2002）の解釈が妥当であると考えられる。

研究2の課題（Web調査） 研究2で測定した援助行動／援助期待の値は，条件間で差が小さく効果量も小さかった。その理由の一つに，Web調査に関して指摘されているような教示を読み飛ばす不誠実な回答者がいた可能性が挙げられる（三浦・小林，2015）。このことから，今後の実験ではWeb調査には一定の限界があることを考慮し，集団所属性の知識を直観的に想定できる測定方法（映像など）に改善する必要がある。

研究2の課題（ゲーム構造） 研究2ではシナリオ内に協力行動のコストを明示することで非協力の誘因を高めた。しかし，BGRの妥当性を検討する研究ではPD構造のゲームが用いられることが多い（神・山岸，1997；清成，2002；牧村・山岸，2003b；三船他，2007；Yamagishi et al., 2005）のに対して，研究2の場面想定法はギビング・ゲームの構造となっている。ギビング・ゲームの構造では，受け手の相手に対して一方的に資源（援助）を提供するか否か決めるだけである（真島・高橋，2005）が，PDゲームは自分が相手に資源を提供する金額を決定し，提供金額が何倍かになって相手に渡る。相手も同様の決定を行い，相手からの提供金額が何倍かになって返報される。

このように、PD ゲームは資源を自分と特定の他者という二者間で取引するのに対し、ギビング・ゲームは特定の相手と直接的に資源のやり取りをする状況ではないため、集団内の一般交換関係が示唆されやすい状況であった。

PD ゲームとギビング・ゲームのもう一つの重要な差異は、自身の利得が何によって決定されるかが異なることである。PD ゲームでは相手の行動が自身の利得に影響するが、ギビング・ゲームでは影響しない。この特徴から PD ゲームの方が資源を提供した際に相手の裏切りに対して恐れが生じ、非協力の誘因が大きくなるため協力行動が生起しにくい。MGP を用いた清成（2002）の PD ゲームでは BGR が支持される結果が示されたが、実在集団では再現されていない（牧村・山岸，2003b；三船他，2007；Yamagishi et al., 2005）。

研究 2 の課題解決 協力行動の生起がより厳しい状況において追試を行うことは、BGR の説明力と実在集団における結果の再現性を妨げる要因を特定するという意味で非常に重要である。したがって、次の研究 3 では先行研究の結果との比較ができ、非協力の誘因が高い 1 回限りの PD ゲームを用いて内集団協力を検討する。また、参加者の実験に対する動機づけを高めるために Web 調査ではなく金銭報酬を強調した実験室実験を行う。研究 2 の結果から、協力行動のコストが BGR の心理過程の働きを強くすることが示唆された。研究 3 では場面想定法で測定した行動意図が、実際の行動として検出されるか否かも検討する。協力にコストがかかる内集団協力行動においても BGR が適用されやすいことが予測される。

第 2 節 研究 3-1

広島東洋カープファンを対象とした囚人のジレンマゲーム

目的

研究 3-1 の目的は、研究 2 の場面想定法実験で得られた結果が行動実験でも再現されるかを検討することである。集団所属性の知識操作（清成，2002）を行った上で広島東洋カープファンを対象とした 1 回限りの囚人のジレンマ（PD）ゲームで内集団協力行動を測定した。研究 1 では SIT と BGR の心理過程が両立して働く可能性が示され、研究 2 では協力のコストによって BGR の心理過程が強く働くことが示された。しかし、この 2 つの研究のみから両理論の妥当性及び状況要因を主張するには早計である。また、SIT が支持された先行研究でも内集団成員に対する直接的な協力行動を測定したものは少ない。したがって、研究 3 では先行研究の蓄積が多く協力行動を測定するのに一般的に用いられてきた（Velez, 2015; Wilson, 1971）1 回限りの PD ゲームにて内集団協力行動を検討する。

実在集団を対象に SIT／BGR それぞれの立場から内集団ひいきを検討した従来の研究の問題点（第 4 章）を再度まとめると、a) 両理論の妥当性が同時に検証できる実験デザインではない、b) 混交要因が適切に統制されていない、c) 行動指標を用いた研究が少ないことの 3 点であった。研究 1 により a と b の改善はすでに試みられている。したがって、研究 3-1 で新たに検討する必要があるのは、c の内集団協力を行動指標で測定することである。研究 1 及び研究 2 は場面想定法であるため、そこで測定されたものは真の協力行動とはいえない問題がある。特に、BGR の先行要因である互惠性（Trivers, 1971）

の期待が働く一般交換関係の成立には自己の投資（協力）を上回る返報があるとの前提が必要であり，自分の行動が真の損得と関係しない場面想定法の状況では交換感覚が十分に引き出されない可能性がある。すなわち，実際にコストがかかり参加者が金銭を得たり失ったりするシビアな状況である PD ゲーム¹⁴で内集団協力を測定した場合，BGR の心理過程に基づく内集団協力が生じるだろう（仮説）。

方法

実験日時・参加者 実験は 2017 年 1 月 16 日から 20 日にかけて広島市内の大学に通う学生を対象に行った。参加者 45 名のうちカープファンが 19 名（男性 2 名，女性 17 名），ファンではないがカープを好きな人が 22 名（男性 5 名，女性 17 名），ジャイアンツファン 2 名（男性 1 名，女性 1 名），ジャイアンツを好きな男性 1 名，ベイスターズを好きな女性 1 名であった。45 名のうち 8 名には，「実験では色々な人と何回かお金のやり取りをします。野球チームを応援しているか否かによって皆さんの行動パターンが変わるかどうかを調べています。」という教示を行っていなかった¹⁵。分析にはカープファンのみを使用し，平均年齢は 20.05 ($SD = 1.03$) 歳であった。参加者には PD ゲームの結果に応じた報酬（最低 1000 円）が謝礼になることを強調したリクルートを行った。

実験デザイン及び条件 互惠性の期待の有無を集団所属性の知識（清成，2002）によって操作した。参加者はそれぞれ個室のブースに案内され，他の参加者の行動が参照できない匿

¹⁴ 第 4 章で述べた通り，内集団協力は行動と評価の 2 種類に区別され，それぞれの背後で働く心理過程が異なること（神他，1996）や社会的交換の感覚を十分に高める（Kiyonari et al., 2000）上で行動実験の実施が重要になる。

¹⁵ 8 名を除外しても結果は変わらなかったため，除外しない分析を行った。

名状況下で実験が実施された。参加者その他のブースにいる取引相手が同じ野球チームを応援するファンと分かるか否かによって集団所属性の知識を操作した。互いに相手が同じ野球チームのファンと分かる内集団相互条件，参加者のみ相手が同じ野球チームのファンと分かる内集団一方条件，互いに集団所属性が分からない相互不明条件の3条件¹⁶を設定した。

PDゲームの内容 参加者は同じ実験に参加する他のブースの相手とランダムにペアを組み，相手を変えてお金の取引を複数回行くと教示された。参加者は実験者から1回の取引ごとに元手として200円が渡され，取引状況（集団所属性の知識操作）を確認した上で，相手への提供金額を10円単位で決めるよう求められた（条件ごとに1回ずつ計3回）。提供した金額は2倍にされて相手に渡り，同時に決定を行った相手からの提供金額が参加者の報酬になると教示された。相手に提供しないお金は，手元に報酬として残ると教示された。各条件で提供した金額を協力行動の指標として用いた。相互不明条件が初回に行われ，その後の内集団相互／一方条件における決定順序はカウンターバランスがとられた。取引の相手は実際には存在しなかったが，参加者の報酬は，毎回全額提供されたものとして計算した。実験終了後，参加者にWeb経由でディブリーフィングを行い，事後の承諾を得た。

手続き 実験は約60分を要し1セッションに8名前後（最低4名）が参加した。受付でID番号を渡し，互いに顔を合わせない個室ブースへ案内することで匿名性が保持された。まず，最初の質問紙で参加者が最も応援するチーム／応援していない場合は比較的好きなチームを1つ，全12球団の中から

¹⁶ 研究1と2では相手のみ参加者が内集団成員であることが分かる不明内集団条件を設けていたが，両理論の妥当性を検証するにあたり直接関連しない条件であるため，削除した。

選択した後，研究 2 と同様にそのチームとの同一化 (Hogg et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009)，相互依存認知 (神・篠塚，1996) への回答を求めた。質問項目内に記載されてある「〇〇ファン」の「〇〇」には選択したチーム名が入っていた。また，好きなチームを選択した人には「ファン」の部分を「好き」に変更した質問紙を使用した。

次に，PD ゲームの説明を読んだ後，実験報酬の仕組みについての確認テストを 4 問行った。その間に，実験者は参加者が選択したチーム名を確認し，集団所属性の知識操作 (Appendix 2) と決定金額を記入する用紙を封筒にセットした。参加者は取引のつど自分と相手の集団所属性を示した用紙と提供金額を記入する用紙が入った封筒を渡された。その取引状況を確認した上で，参加者は相手に提供する金額を 10 円単位で記入した。集団所属性の用紙には各条件に共通して互いに相手の所属性を推測している図が掲載され，条件ごとに相手と自分の関係性が説明された。参加者は PD ゲームが終わった後に事後質問紙を回答した。質問紙では相手からの提供を期待した金額，提供金額を決定する際の動機，実験後の同一化 (事前質問紙と同様)，操作チェック項目の測定を行なった。質問紙回答後，参加者には「今回の実験が全て完了しましたら後日 Web 上で実験内容をお知らせします」と教示し，事後の同意を得た。その後，報酬の支払いに関する書類に記入が終わった人から実験室を退出した。

提供動機 内集団協力がどのような動機づけから生じたのかを検討するため「相手がどの球団のファンであるかにかかわらず，同じように提供すること (公平動機)」，「同じ球団のファンである人と協力し合うこと (相互協力動機)」を測定した (7 件法)。公平動機は内集団協力と相反する動機であり，相

互協力動機は BGR の心理過程が働いていることを示唆する動機である。また，報酬に関する感受性を検討するため「自分の損失を最小にすること」，「自分の利益を最大にすること」をどの程度気にしたかも 7 件法で尋ねた（「1 = 全く気にしなかった」から「7 = 非常に気にした」）。

操作チェック 実験で金銭報酬を重要視したか否かの操作チェックとして「今回の実験によって，お金を稼ぐことができることは，あなたをどの程度やる気にさせましたか」を 5 件法で尋ねた（「1 = 全く関係ない」から「5 = 非常に強く関係がある」）。実験内容の理解に関する操作チェックとして「先ほど行っていただいたお金のやり取りの実験の報酬金額はどのように決まりますか？以下の中から当てはまる数字に○をつけてください」と提示した。1 番は「やり取りの結果に関わらず一定の金額が実験報酬となる」，2 番は「3 回のやり取りで獲得した金額が全て合計されて実験報酬となる」，3 番は「3 回行なったやり取りのなかのどれか 1 回分のやり取りで獲得した金額が実験報酬となる」という選択肢であった。なお，正解は 2 番である。

予測 SIT の心理過程が働く場合，内集団相互／一方条件で相互不明条件よりも提供金額が高くなり，BGR の心理過程が働く場合，内集団相互条件で最も提供金額が高くなると予測される。

結果

操作チェック 金銭報酬の重要性（ $M = 3.68$ ， $SD = 1.34$ ）の値は中点 3.00 を上回っていた。実験内容の理解では 1 を選択した者が 2 名，3 を選択した者が 2 名いたが，残り 15 名は 2 を選択しており，参加者の大多数は報酬の構造を理解してい

たといえる。野球ファン及びファン以外の実験前後の同一化と相互依存認知の合計平均を比べると、ファンの同一化はファン以外よりも強いことが確認されたが、相互依存認知には差がみられなかった (Table 6-8)。

Table 6-8

ファンとファン以外の同一化と相互依存認知

変数名	ファン		ファン以外		<i>t</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
	<i>M (SD)</i>	α	<i>M (SD)</i>	α			
実験前同一化	41.90 (9.34)	.92	29.86 (10.20)	.95	3.86	.05	1.19
実験後同一化	40.63 (10.76)	.96	34.18 (12.04)	.97	1.74	.09	0.54
相互依存認知	17.11 (4.27)	.61	17.71 (4.10)	.78	0.46	.65	0.14

相手からの期待金額 集団所属性の知識によって互惠性の期待の操作が成功したかを確認するため、各条件で相手からの提供を期待した金額 (Figure 6-3) を従属変数、集団所属性の知識を独立変数として一元配置の分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意であった ($F(2, 36) = 22.58, p < .01, \eta^2 = .15$)。条件間の下位検定 (Holm 法) の結果、期待金額は内集団相互条件 ($M = 102.63, SD = 12.47$) が最も高く、次に内集団一方条件 ($M = 56.32, SD = 11.98$) と相互不明条件 ($M = 59.47, SD = 10.77$) が同程度に高かった ($p < .01$)。内集団相互条件で期待金額が最も高く、互惠性の期待の操作は成功した。

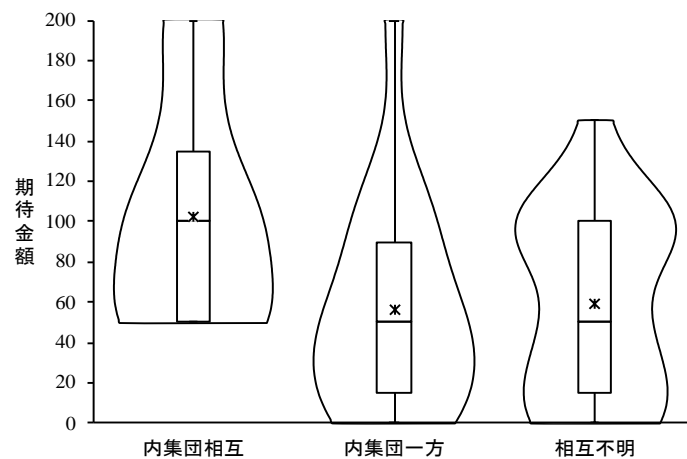


Figure 6-3. 期待金額のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 仮説の検証のため，提供金額 (Figure 6-4) を従属変数とした一元配置の分散分析を行ったところ，条件の主効果に有意な差が得られなかった ($F(2, 36) = 2.26, p = .12, \eta^2 = .01$)。各条件における提供金額は，内集団相互条件 ($M = 85.79, SD = 14.93$)，内集団一方条件 ($M = 73.69, SD = 13.45$)，相互不明条件 ($M = 78.95, SD = 13.44$) であった。条件間の提供金額に差はなく，仮説は支持されなかった。

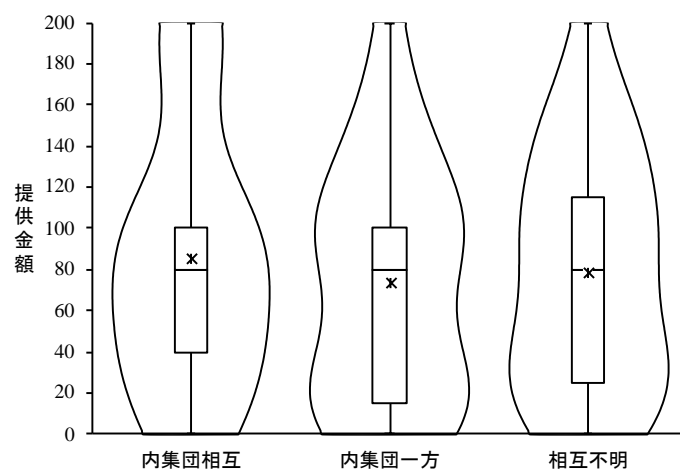


Figure 6-4. 提供金額のヴァイオリンプロット。

提供動機 提供金額と同一化，相互依存認知，提供動機，報酬の重大性それぞれとの相関係数を Table 6-9 に示す。全条件において提供金額と同一化に有意な相関関係が得られず，SIT は支持されなかった。相互協力動機とも相関が見られず，BGR の心理過程も働いていないことが示唆された。全条件における損失を最小にする動機，相互不明条件のみで利益を最大化する動機の間に負の相関関係が得られた。

Table 6-9

提供金額と各項目の相関係数

	内集団 相互	内集団 一方	相互 不明
実験前同一化	-.07	-.07	-.23
実験後同一化	-.04	-.07	-.18
相互依存認知	.03	-.05	-.15
公平動機	.24	.36	.33
相互協力動機	.01	.04	-.12
損失最小	-.65**	-.66**	-.71**
利益最大	-.43	-.28	-.48*
報酬の重大性	-.26	-.18	-.32

* $p < .05$, ** $p < .01$

考察

研究 3-1 の目的は，1 回限りの PD ゲームを用いて内集団協力行動を測定し，SIT と BGR の妥当性を検討することであった。実験の結果，相手に対する期待金額では集団所属性の知識操作の成功が確認されたものの，条件間の提供金額には差がなく仮説が支持されなかった。しかし，Figure 6-4 に示す通り，分布には若干条件間で異なるパターンがみられ，PD ゲームでは両理論が支持されないとはいいきれない。したがって，研究 3-2 では実験内の教示や手続きを精緻化して PD ゲームを行う。

第 4 節 研究 3-2

広島在住の野球ファンを対象とした四人のジレンマゲーム¹⁷

目的

研究 3-2 の目的は、研究 3-1 の実験手続きを改善して 1 回限りの PD ゲームを行い、内集団協力行動を検討することである。また、協力行動にかかるコストが BGR の心理過程の働きを活性化するか否かを確認する。

手続きの改善点 実験手続きの改善点は以下の 5 点である。まず、一つ目は「野球を応援するか否かで行動パターンが変わるかを調べる研究である」という教示を強調することである。具体的には、実験説明を行う中で上記の教示部分はゆっくりと大きな声で伝えるように実験者が配慮した。二つ目は、神他（1996）を参照して実験開始を 5 分遅らせ参加者を個室ブース内で待たせる時間を設けた。参加者の負担が少ない状況では内集団協力を正当化することが困難になり、公平動機が働きやすい（神他，1996）。研究 3-2 では内集団協力を正当化できるように参加者を待たせる時間を設けた。三つ目に、実際に 8 名全員が揃うことがないセッションであっても、扉の開閉や声かけによって 8 名が参加しているように振る舞うことを心がけた。四つ目は、相互不明条件でも集団所属性の知識操作の用紙を使用したことである。研究 3-1 では何も告げずに PD ゲームを行ったが、条件ごとの整合性を取るため「あなたと Bさんは互いにどこのファンかは分かりません」という説明と図の書かれた用紙を使用した。最後に、事後質問紙の操作チェックである「実験内容について理解し

¹⁷ 研究 3-2 及び研究 3-3 は 2017 年日本社会心理学会第 58 回大会で発表を行なった（「野球ファンの内集団ひいき—社会的アイデンティティ理論と閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討—」）。

ていたか」と「実験で報酬が決まることを信じていたか」を分けて尋ねる項目に変更した。

方法

実験概要 実験は2017年4月10日から21日にかけて広島市内の大学に通う学生を対象に行った。参加者109名のうち特定の野球チームを応援するファンが38名（男性19名，女性19名），応援するチームがないファン以外が71名（男性35名，女性36名）であった。分析対象は野球ファンであり，平均年齢は18.62 ($SD = 0.79$) 歳であった。参加者にはPDゲームの結果に応じた報酬（最低1000円）が謝礼になることを強調してリクルートを行った。操作チェック以外は研究3-1と全て同じ質問項目を使用した。

予測 研究3-1と同様にSITの心理過程が働く場合，内集団相互／一方条件で提供金額が高くなり，BGRの心理過程が働く場合，内集団相互条件で最も提供金額が高くなると予測される。

結果

操作チェック 金銭報酬の重要性 ($M = 3.18$, $SD = 1.18$)，実験内容の理解 ($M = 4.21$, $SD = 0.96$)，実験で報酬が決まると信じる程度 ($M = 3.21$, $SD = 1.23$) の値はいずれも中点3.00を越えていた。野球ファン及びファン以外の実験前後の同一化¹⁸と相互依存認知の合計平均を比べると，ファンの同一化と相互依存認知はファン以外よりも強いことが確認された (Table 6-10)。

¹⁸ 事後同一化項目の未回答者が2名いた。

Table 6-10

ファンとファン以外の同一化と相互依存認知

変数名	ファン			ファン以外			<i>t</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	α		<i>M</i> (<i>SD</i>)	α				
実験前同一化	45.45 (10.31)	.93		31.11 (11.06)	.95	6.60	.00	1.32	
実験後同一化	45.57 (10.60)	.95		32.24 (12.27)	.96	5.59	.00	1.13	
相互依存認知	18.66 (4.61)	.75		16.56 (4.95)	.78	2.15	.03	0.43	

相手からの期待金額 集団所属性の知識による互惠性の期待の操作が成功したかを確認する。各条件で相手からの提供を期待した金額 (Figure 6-5) を従属変数, 集団所属性の知識を独立変数として一元配置の分散分析を行ったところ, 条件の主効果が有意であった ($F(2, 74) = 25.13, p < .01, \eta^2 = .16$)。条件間の下位検定 (Holm 法) の結果, 期待金額は内集団相互条件 ($M = 116.84, SD = 60.85$), 内集団一方条件 ($M = 74.74, SD = 51.71$), 相互不明条件 ($M = 61.58, SD = 56.69$) の順に高かった ($p < .01$)。内集団相互条件で期待金額が最も高いという結果は研究 3-1 と同じであり, 互惠性の期待の操作が成功した。

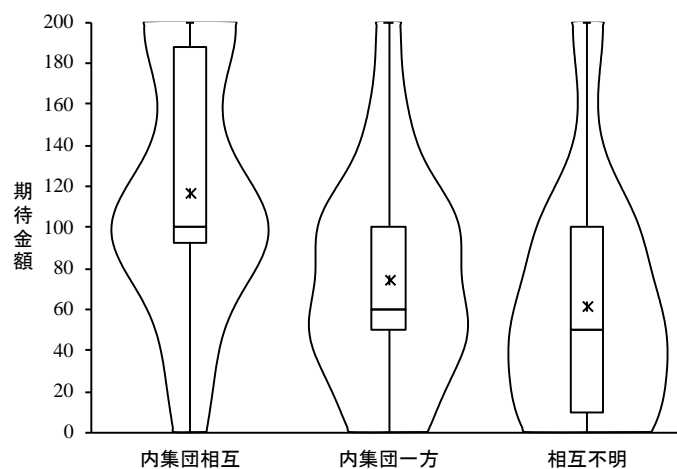


Figure 6-5. 期待金額のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 仮説の検証のため，提供金額（Figure 6-6）を従属変数とした一元配置の分散分析を行ったところ，条件の主効果が有意であった（ $F(2, 74) = 12.75, p < .01, \eta^2 = .06$ ）。条件間の下位検定（Holm 法）の結果，提供金額は内集団相互条件（ $M = 118.68, SD = 70.37$ ），内集団一方条件（ $M = 105.26, SD = 68.17$ ），相互不明条件（ $M = 80.26, SD = 60.87$ ）の順に高かった（ $p < .01$ ）。内集団相互条件における提供金額が最も高く，仮説が支持された。しかし，内集団相互条件より低い値ではあるが，内集団一方条件でも相互不明条件より多く提供されていた。これは，BGR と SIT の両方の心理過程が働いたことを示す。そこで，以下では同一化，相互依存の認知，提供動機，報酬の重大性に関する追加の分析を行った。

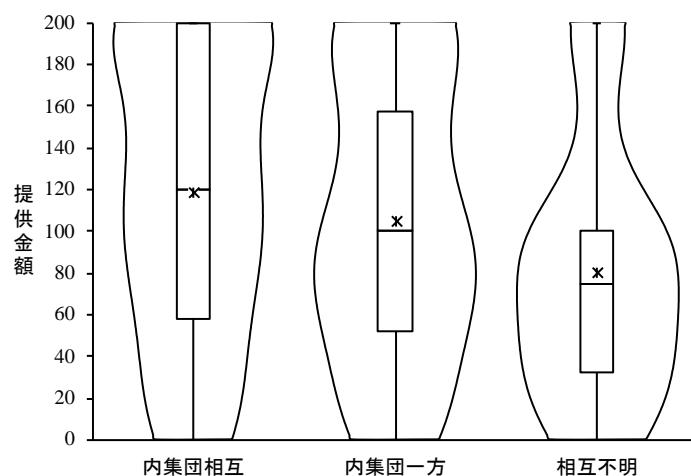


Figure 6-6. 提供金額のヴァイオリンプロット。

提供動機 提供金額と同一化，相互依存の認知，提供動機，報酬の重大性それぞれとの相関係数を Table 6-11 に示す。全条件において提供金額と同一化に有意な相関関係が得られず，SIT は支持されなかった。内集団相互条件のみで提供金額と相互協力動機に有意な正の相関関係が得られ，BGR の心理過程

が働いていることが示唆された。

Table 6-11
提供金額と各項目の相関係数

	内 集 団 相 互	内 集 団 一 方	相 互 不 明
実 験 前 同 一 化	.23	.20	-.09
実 験 後 同 一 化	.23	.23	-.03
相 互 依 存 認 知	.23	.19	.06
公 平 動 機	-.11	-.00	.19
相 互 協 力 動 機	.43**	.29	.09
損 失 の 最 小	-.69**	-.66**	-.75**
利 益 の 最 大	-.30	-.29	-.16
報 酬 の 重 大 性	-.11	-.16	.04

** $p < .01$

考 察

研究 3-2 の目的は，1 回限りの PD ゲームを用いて内集団協力行動を測定し，SIT と BGR の妥当性を検討することであった。実験の結果，BGR を支持するように他の内集団成員からの互惠性を期待できる状況で最も多くの金額が提供された。一方，参加者だけが相手を内集団成員だと分かる状況でも互いの集団所属性が分からない状況より提供金額が高くなった。しかし，全条件における提供金額と同一化の間に有意な相関関係はみられず，SIT は支持されなかった。以上より，明確な協力行動のコスト（金銭）が存在すると BGR の心理過程が強く働く内集団協力が生じることが明らかになった。

研究 3-2 の課題 研究 3-2 から場面想定法の結果を再現し，実際にコストのかかる内集団協力でも BGR の心理過程が強く働くことが示された。しかし，互惠性を期待できない内集団一

方条件でも統制条件よりは提供金額が高くなった。この結果は、両理論から直接的な説明をすることが困難であった。また、38名のうち30名がカープファンであり、結果の外的妥当性には限界がある。つまり、カープファン特有の規範やステレオタイプに従った協力行動であるという可能性を否定できない。そこで、研究3-3では研究3-2の実験方法を踏襲した上で兵庫県に在住する野球チームのファンを対象とした追試を行う。

第 5 節 研究 3-3

兵庫在住の野球ファンを対象とした囚人のジレンマゲーム

方法

実験概要 実験は 2017 年 6 月 12 日から 16 日にかけて神戸市内の大学に通う学生を対象に行った。参加者 108 名のうち野球チームのファンが 94 名（男性 53 名，女性 41 名），ファン以外が 14 名（男性 7 名，女性 7 名）であった。分析にはファンを使用し，平均年齢は 18.96 ($SD = 0.97$) 歳であった。参加者には PD ゲームの結果に応じた報酬（最低 1000 円）が謝礼になることを強調してリクルートを行った。研究 3-2 との相違点¹⁹はリクルート時にファンのみを募集したことと 1 セッションを 5 名以下（最低 4 名）で行ったことである（Appendix 1 にブース配置を示す）。

結果

操作チェック 金銭報酬の重要性 ($M = 3.44$, $SD = 1.16$)，実験内容の理解 ($M = 4.36$, $SD = 0.91$)，実験で報酬が決まると信じる程度 ($M = 3.29$, $SD = 1.27$) はいずれも中点の 3.00 を越えていた。実験前後の同一化（前： $\alpha = .90$, $M = 46.31$, $SD = 7.87$ ，後： $\alpha = .91$, $M = 45.64$, $SD = 8.13$ ）や相互依存の認知 ($\alpha = .80$, $M = 18.32$, $SD = 4.57$) の合計得点の平均は，研究 3-2 の野球ファンと同程度に高かった。

相手からの期待金額 集団所属性の知識による互惠性の期待の操作が成功したかを確認する。各条件で相手からの提供を期待した金額（Figure 6-7）を従属変数，集団所属性の知識を独立変数として一元配置の分散分析を行ったところ，条件

¹⁹ 実験スケジュールや実験室の都合上，多少の手続きの違いは生じたものの，実験結果に大きな影響を及ぼす違いではなかった。

の主効果が有意であった ($F(2, 186) = 117.38, p < .01, \eta^2 = .25$)。条件間の下位検定 (Holm 法) の結果, 期待金額は内集団相互条件 ($M = 129.68, SD = 59.99$), 内集団一方条件 ($M = 70.53, SD = 46.03$), 相互不明条件 ($M = 61.91, SD = 48.86$) の順に高く ($p < .01$), 互惠性の期待の操作は成功した。

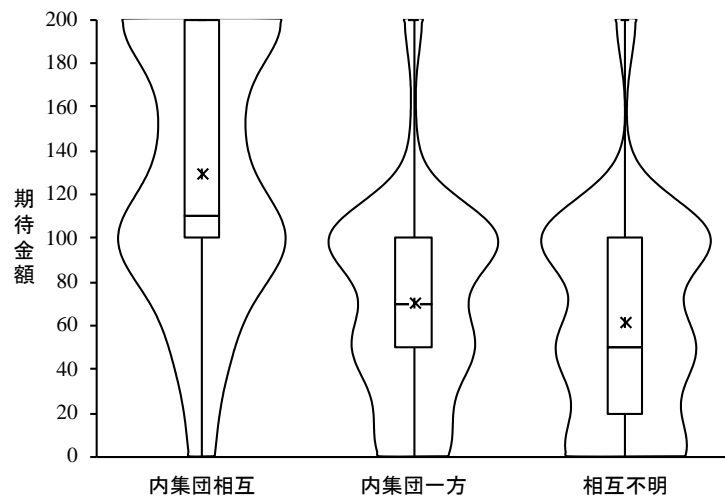


Figure 6-7. 期待金額のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 仮説の検証のため, 提供金額 (Figure 6-8) を従属変数とした一元配置の分散分析を行ったところ, 条件の主効果が有意であった ($F(2, 186) = 28.94, p < .01, \eta^2 = .07$)。条件間の下位検定 (Holm 法) の結果, 提供金額は内集団相互条件 ($M = 119.04, SD = 65.30$), 内集団一方条件 ($M = 95.85, SD = 66.87$), 相互不明条件 ($M = 76.28, SD = 60.87$) の順に高かった ($p < .01$)。内集団相互条件で提供金額が最も高く, 仮説が支持された。さらに, 研究 3-2 と同じく内集団一方条件で相互不明条件より多くの金額が提供された。そこで, 提供金額と同一化, 相互依存認知, 提供動機, 報酬の重大性それぞれとの関連を検討した。

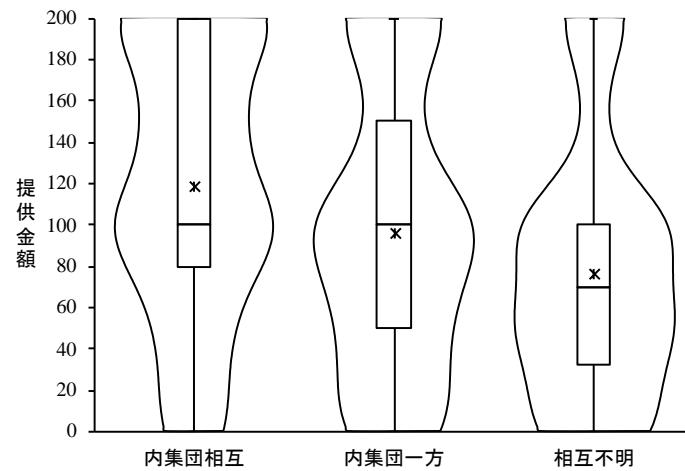


Figure 6-8. 提供金額のヴァイオリンプロット。

提供動機 研究 3-2 と同じく全条件で提供金額と同一化には有意な相関関係はみられなかった。その一方で、内集団相互条件のみで提供金額と相互協力動機の間には正相関がみられた (Table 6-12)。これらの結果から、SIT が支持されず BGR が支持されたことがいえる。

Table 6-12
提供金額と各項目の相関係数

	内集団 相互	内集団 一方	相互 不明
実験前同一化	.06	-.12	-.19
実験後同一化	.16	-.05	-.13
相互依存認知	.01	.00	.03
公平動機	-.05	.05	.25*
相互協力動機	.49**	.19	.04
損失の最小	-.51**	-.52**	-.51**
利益の最大	-.41**	-.37**	-.34**
報酬の重大性	-.12	-.04	-.03

* $p < .05$, ** $p < .01$

両理論以外の観点からの分析 内集団一方条件で統制条件よりは協力的になったという結果は，両理論から直接的な説明をすることができない。そこで，互惠性を考慮しない一方的な内集団協力には性差があるという Yamagishi & Mifune (2009) の主張から，性差を検討できる人数を確保できた研究 3-3 では補足的な分析として提供金額の性差を検討した。従属変数は彼らの分析方法を踏襲し，内集団相互／一方条件の提供金額からそれぞれ，相互不明条件の提供金額（デフォルトの協力）を減算した値を使用した（Figure 6-9）。条件と性別を独立変数とする二要因分散分析を行ったところ，条件の主効果が有意（ $F(1, 92) = 23.88, p < .01, \eta^2 = .05$ ）で性別の主効果は有意ではなかった（ $F(1, 92) = 1.27, p = .26$ ）。しかし，交互作用効果が得られた（ $F(1, 92) = 7.54, p < .01, \eta^2 = .01$ ）ため，条件間の下位検定（Holm 法）を行った。その結果，男性は内集団相互条件（ $M = 31.51, SD = 68.65$ ）と内集団一方条件（ $M = 20.56, SD = 38.70$ ）で提供金額に差はなかったが，女性は内集団相互条件（ $M = 57.32, SD = 51.14$ ）で内集団一方条件（ $M = 18.29, SD = 60.62$ ）より多くのお金を提供していた（ $p < .01$ ）。

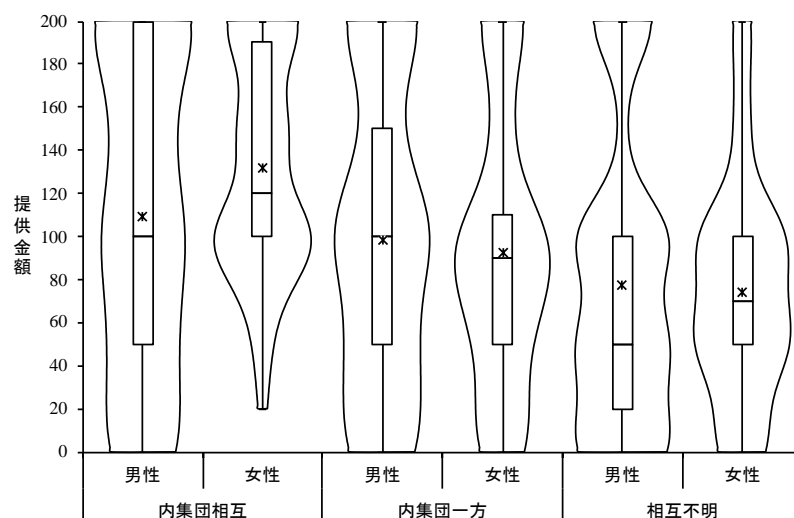


Figure 6-9. 男女別の提供金額のヴァイオリンプロット。

考 察

兵庫在住の野球ファンを対象とした研究 3-3 でも研究 3-2 とほぼ一貫した結果が得られた。まず，研究 3-2 と同様に互惠性を期待できる状況で最も多くの金額が提供され，BGR が支持された。次に，参加者だけが相手を内集団成員だと分かる状況でも統制条件より提供金額が高くなった。しかし，全条件における提供金額と同一化の間に有意な相関はみられず，SIT は支持されなかった。すなわち，研究 3-3 でも金銭のように明確なコストがかかる場合，BGR の心理過程が活性化されて内集団協力が生じた。

総 合 考 察

第 6 章で紹介してきた研究 2 及び研究 3 の目的は，非協力の誘因を高めた状況で内集団協力が生じるかを確認することと協力行動にコストがかかる場合，BGR の心理過程が強く働くか否かを検討することであった。その結果，場面想定法と行動指標どちらにおいても互惠性を期待できる状況で内集団協力が生じ，BGR の心理過程が強く働くことが示された。また，研究 3-2 と研究 3-3 の PD ゲームは MGP の結果と類似しており，全体的に高い協力率になっただけであった（研究 3-2：相互 60%，一方 53%，不明 40%，研究 3-3：相互 60%，一方 48%，不明 38%）。これらの結果から，実在集団において BGR の心理過程の働きを活性化する状況要因の一つが，協力行動のコストであることが示唆された。

しかし，場面想定法の研究 2 と PD ゲームの研究 3 では異なる結果も得られた。PD ゲームでは，互惠性が期待できない内集団一方条件で提供金額が統制条件より高く，SIT が支持されるような協力行動が見られた。しかし，提供金額と同一

化に有意な正相関がなく SIT は支持されていない。なぜ，行動指標では一方的な協力を行なったのかについては，今後の検討課題である。

この点に関連して，内集団一方条件の協力に性差があったことを踏まえると一つの代替説明として Yamagishi & Mifune (2009) の結束の誇示仮説が挙げられる。この仮説によると，男性同士の集団では互惠性の期待に関係なく内集団に対して協力的になるという。進化史上，集団間葛藤における闘争を担ってきたのは男性であり，そのため男性には集団間葛藤という刺激に反応する適応的心理過程を備え持っている可能性が高いからである。集団間葛藤状況では外集団から受ける身体的なダメージや資源の搾取によって多大なコストを被る。そうした葛藤状況に陥ることを防ぐため，互惠性を期待できなくても内集団成員へ協力的に振る舞い，集団内の協力率を上げることで結束の強さを外集団に誇示しようとするという説明である。

研究 3-3 では男性が女性よりも内集団に対して一方的な協力を示したことから結束の誇示仮説が支持された。結束の誇示仮説が妥当である場合，男性の参加者が取引相手を同じ男性だと認識していたことが前提となるが，研究 3-3 の参加者には女性のファンも含まれており，相手の内集団成員を男性と認識したか否かを測定していなかった。したがって，今後は男性同士の集団や集団間葛藤が想起されにくい他の集団を対象とした検討を行う必要があると考えられる。

研究 3 の課題 研究 3 の課題は，コストの有無を操作していなかったことである。例えば，Kiyonari et al. (2000) は報酬が一定でコストがかからないが，元手のポイントを最大化にするように求める PD ゲームを行った。研究 2 及び研究 3 で

は、協力のコストが BGR の説明力を規定する状況要因であることが示唆されたが、コストがかからない状況では SIT の心理過程の働きに何らかの変化があるか否かを検討するべきだろう。

研究 3 の課題解決 そこで、まずは行動実験との比較を行う前にコストの有無をシナリオの内容によって操作し、内集団協力の心理過程の働きが変化するか否かを検討すべきだろう。研究 1 では協力行動にかかるコストを明示していないため、参加者がデフォルトでコストを感じていたのかあるいはさほど感じていなかったのかは定かではない。つまり、研究 1 で得られた BGR に基づく内集団協力はコストがかからないことを強調されると生じなくなるのかを検討する必要がある。そして、このコストの有無によって SIT の心理過程の働きが強くなる可能性があるのかを検討する必要がある。したがって、研究 4 では協力行動のコストがかからないことを明示した場面想定法実験を行い、両理論の妥当性を検討する。第 7 章全体では、SIT の心理過程の働きを活性化する状況要因を探索的に検討する。

第 7 章

SIT の心理過程の働きを
活性化する状況要因の検討
－ 研究 4／研究 5 －

第 1 節 研究 4

協力にコストがかからないことを強調した場面想定法実験²⁰

目的

研究 4 の目的は、協力行動のコストがかからない状況では BGR の心理過程が働かなくなり SIT の心理過程が強く働くか否かを検討することである。研究 2 及び研究 3 により、場面想定法や行動指標においても協力行動にコストがかかると BGR の心理過程が強く働いて内集団協力が引き起こされていた。しかし、上記の研究ではコストがかからない状況との比較検討がなされていなかった。また、研究 1 では協力行動のコストをシナリオ内で明示していないため、参加者が自分にかかる負担をどのように見積もって協力行動をしたのか分からない。すなわち、研究 1 では研究 2 よりも相対的にコストが低く見積もられると考えられるが、実際に参加者が協力行動にかかるコストをデフォルトで推測したのかあるいは全く感じていなかったのかは不明である。したがって、まずは場面想定法の研究 1 を踏襲しコストがかからない状況であることを強調した場合、両理論の心理過程に影響を与えるか否かを検討する必要がある。

研究 4 (中川, 2018b) では好きな野球チームを集団カテゴリーに用いて研究 1 のシナリオに「協力行動のコストがかからないことを強調」した場面想定法実験を行う。研究 1 と同じ実験デザインと手続きを取り、シナリオによる援助期待／援助行動にて内集団協力を測定した。しかし、野球ファンであると回答した参加者が極端に少なかったため、広島東洋カープの

²⁰ 研究 4 は「中川 (2018b). 好きな野球チームを集団カテゴリーに用いた内集団協力の検討-協力のコストがかからないシナリオによる場面想定法実験-」として修大論集第 59 巻 1 号 (pp.33-47) に公刊済である。

ファンではないが比較的好きと回答した参加者を対象とした分析を行った。Kiyonari et al. (2000) の主張を踏まえると、協力行動のコストがかからないことが明確な状況であれば BGR の説明力が弱まることが予測される。よって、仮説は以下の通りである。協力行動にコストがかからないことが明確ならば、互惠性の期待が十分に高まらず、SIT のみが支持される。

方法

実験日時・参加者 実験は 2017 年の 9 月と 12 月に行われ、広島市内の大学に通う学生 57 名（男性 32 名、女性 25 名）が参加した。そのうち、カープファンが 3 名（男性 2 名、女性 1 名）、ファンではないが比較的好きなチームにカープを選択した者が 42 名（男性 21 名、女性 20 名、不明 1 名）、それ以外のチームを応援する／比較的好きな人が 7 名（男性 5 名、女性 2 名）、無回答者が 5 名いた。研究 4 では野球ファンが参加対象であることを前提として質問項目やシナリオを作成した。ただし、応援するチームがないと回答した者でも比較的好きなチームを一つ選択した後、ファンと同じように全ての項目に回答することが可能な形式であった。研究 4 ではカープファンの人数が極端に少なかったため、以下の分析では好きなチームにカープを選んだ参加者（以下、カープ好き）で検討を行った。カープ好きの平均年齢は 19.81 ($SD = 1.12$) 歳であった。

質問紙の構成とシナリオの内容 参加者は始めに日本野球機構が定める 12 球団の中から応援する／比較的好きなチームを選択した。その選択したチームとの同一化と相互依存の認知を測定した。その後、協力行動にコストがかからないことを明示したシナリオ (Table 7-1) で相手 (B さん) が日常で困っている場面を想定させ、援助行動を測定した。援助行動のシ

ナリオ内に出てくる「Bさん」と「あなた」を逆転させ、Bさんが参加者を助けてくれると思う程度（援助期待）も測定した。内容が異なる4つのシナリオを提示し、5件法（1. 全くそう思わない - 5. 非常にそう思う）による評定を求めた。

Table 7-1

シナリオの内容

1. Bさんは、電車の乗り継ぎの仕方が分からずに困っています。そこにあなたが通りかかりました。 <u>もし、あなたがBさんに道を教えてあげても、時間があるので支障はありません。</u> あなたは、Bさんに乗り継ぎの仕方を教えてあげると思いますか？
2. Bさんは買い物をして、街を歩いていました。Bさんはつまずいてしまい、袋の中身が散乱しました。そこにお惣菜を買おうとしたあなたが通りかかりました。 <u>もし、あなたが拾うのを手伝っても、欲しかったお惣菜が売り切れることはありません。</u> あなたは、Bさんを手伝ってあげると思いますか？
3. Bさんはケガをして、松葉杖をついてバスに乗りこみました。バスは全座席が埋まっています。 <u>もし、あなたが席を立っても次の停留所で降りるため、長い時間立ちっぱなしになることはありません。</u> Bさんの目の前に座っているあなたは、Bさんに座席を譲ってあげると思いますか？
4. Bさんは、道を歩いている途中で転んでしまい、その拍子に車のカギを排水溝に落としてしまいました。開けようとしても、排水溝のフタは重くてびくともしません。そこに友達との待ち合わせ場所に行くあなたが通りかかりました。あなたは、早起きしたため、 <u>もし、フタを開けるのを手伝っても、友人との待ち合わせ時間までは十分余裕があります。</u> たまたま一部始終を見ていたあなたは、排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？

結果

まず、援助行動における4つのシナリオ場面のクロンバックの α 係数を求めたところ、内集団相互条件（ $\alpha = .86$ ）、内集団一方条件（ $\alpha = .88$ ）、相互不明条件（ $\alpha = .88$ ）で十分な内的整合性が得られたため、全項目を合算し援助行動得点とした。

同様に，援助期待も内集団相互条件 ($\alpha = .82$)，内集団一方条件 ($\alpha = .80$)，相互不明条件 ($\alpha = .83$) で十分な内的整合性が得られたため，全項目を合算し援助期待得点とした。同一化項目 ($\alpha = .94$) および相互依存認知 ($\alpha = .76$) も合計して平均得点を算出した。カープ好きの同一化 ($M = 35.22, SD = 10.55$) は，5件法の中点3点 (どちらでもない) \times 13項目の39点より低いことから，チームへの同一化は弱いことが明らかである。相互依存認知 ($M = 16.46, SD = 4.51$) は7件法の中点4点 \times 4項目の16点よりやや高い値であった。

援助期待 互惠性の期待の操作が成功したか確認するため，援助期待 (Figure 7-1) を従属変数，集団所属性の知識条件を独立変数とした分散分析を行ったところ，条件の主効果が有意であった ($F(2, 82) = 9.97, p < .01, \eta^2 = .06$)。Holm法にて条件間の下位検定を行うと，内集団相互条件が内集団一方条件，相互不明条件よりも高かった ($p < .05$)。内集団一方条件と相互不明条件における協力行動に差はみられなかった。内集団相互条件で援助期待が最も高いという結果から，互惠性の期待の操作は成功した。

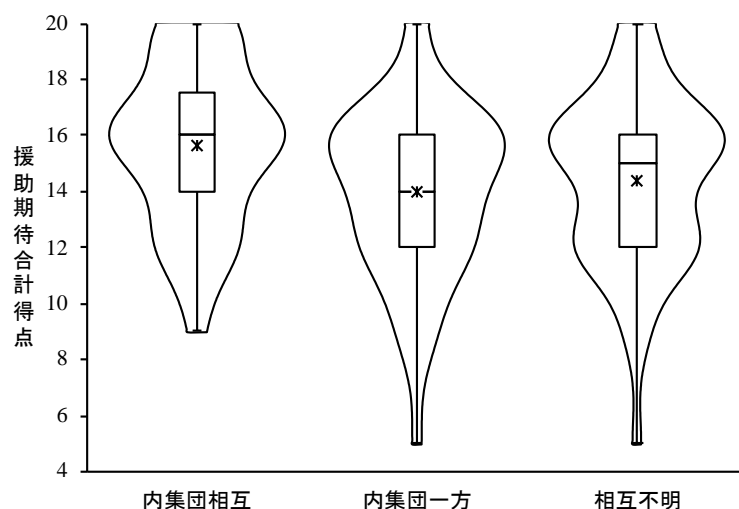


Figure 7-1. 援助期待のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 次に仮説を検証するため、援助行動 (Figure 7-2) を従属変数とし集団所属性の知識条件を独立変数として分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意であった ($F(2, 82) = 7.02, p < .01, \eta^2 = .03$)。条件間の下位検定 (Holm 法) を行くと、内集団相互条件が内集団一方条件より高く ($p < .05$)、また相互不明条件よりも高かった ($p < .01$)。内集団一方条件と相互不明条件の協力行動に有意差はなかった。上記の結果から、仮説は支持されず、コストがかからない状況でも BGR が支持された。

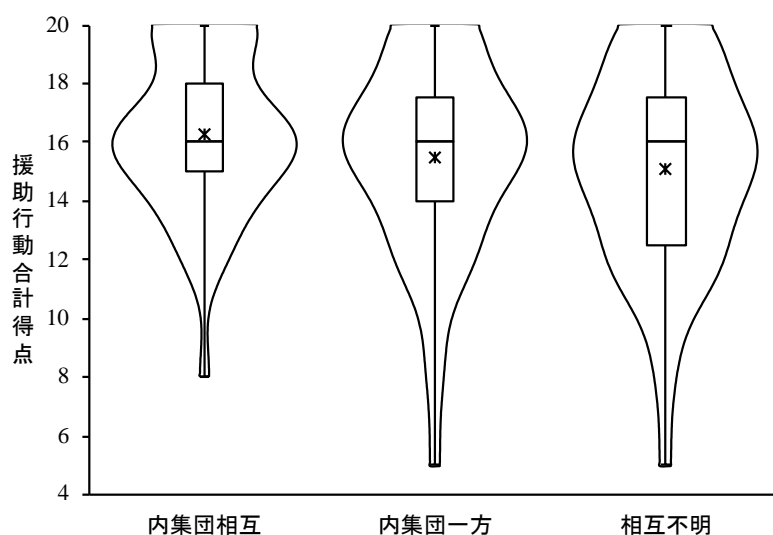


Figure 7-2. 援助行動のヴァイオリンプロット。

さらに、コストがどの程度協力行動に影響を与えたのかを検討するため、研究 4 の援助行動／援助期待のシナリオ得点から研究 1 で対象とした野球ファンではなかった人 (112 名) の得点を減算した値を算出した²¹。援助行動における増減値は、内集団相互条件が -0.11、内集団一方条件が -0.20、相互不明条

²¹ 研究 1 の実験では参加者が好きなチームを選択するのではなく、野球ファンであると仮定した上で全ての回答を行うように教示しているおり研究 4 の手続きとは異なる。

件が+0.83であった。援助期待では内集団相互条件が+0.16，内集団一方条件が+2.37，相互不明条件が+1.51であった。研究4では全ての条件で援助期待の得点が高くなったが，援助行動では統制条件のみわずかに得点が高くなっただけであった。

相 関 分 析 さらに，各条件における援助行動／援助期待と同一化及び相互依存認知との間の相関分析を行った結果，内集団相互条件における援助行動は，相互依存認知との間に有意な正の相関関係が認められた。このことから，内集団相互条件における協力は互惠性の期待に関連することが示唆された (Table 7-2)。

Table 7-2
カープ好きの全項目とシナリオの相関係数

		援助行動			援助期待			同一化
		相互	一方	不明	相互	一方	不明	
援助行動	相互	-						
	一方	.64**	-					
	不明	.55**	.89**	-				
援助期待	相互	.30 [†]	.39*	.32*	-			
	一方	.40**	.62**	.70**	.25	-		
	不明	.16	.64**	.69**	.52**	.83**	-	
同一化		-.17	-.12	-.12	.16	.09	.18	-
相互依存認知		.37*	.20	.13	.27 [†]	.12	.09	.35*

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

研究4の目的は，協力行動にコストがかからないことを強調する状況で内集団協力の心理過程を検討することであった。これまでの先行研究から，協力行動のコストがかからない状況ではBGRの心理過程が弱まりSITが支持されると予測した。しかし，研究4では予定よりも野球ファンの人数が少なく，分

析が困難であった。したがって、ファンではなく比較的好きなチームにカープを選んだ参加者を分析対象とした。実験の結果、協力行動にコストがかからない場合でも BGR に基づく内集団協力が生じた。コストがかからなくとも BGR の心理過程が働いたことから、些細な協力であっても人々は互惠性を期待して内集団協力を行う傾向が非常に強いことが示唆された。しかし、野球ファンとは異なりチームへの同一化の程度は、研究 1 で対象としたカープファン ($M = 40.55$, $SD = 11.58$) に比べ低かった。つまり、研究 4 で用いた「カープが好き」という集団カテゴリーは、些細な基準で集団を分類する MGP と類似していたと考えられる。そのため、協力行動のベースラインの指標にはなり得るが、実在集団としてのカテゴリーの意味はなく同一化の効果が十分に引き出されていなかった可能性が高い。

研究 4 の課題 研究 4 は研究 1 のシナリオを踏襲し、協力行動のコストがかからないことを強調した場面想定法実験を行なった。協力行動のコストが内集団協력에及ぼす影響を検討するため、研究 1 と研究 4 の援助行動と援助期待の値を知識条件ごとに比較した。もし、コストがかからないことが十分に認識されていれば研究 4 の協力行動の値は研究 1 よりも高くなるはずであるだが、ほとんど同値であった。このことから、参加者にコストがかからないことが十分に認識されていなかった可能性もある。ただし、自分を助けてくれる相手に対しては「コストがかからないなら協力してくれるだろう」という期待が高まる傾向にあった。このことは、自分と相手の負担を同等に扱っていないことを示唆しているが、この相違を両理論から説明することは難しい。したがって、今後は操作チェックとしてコストによって協力行動をためらう程度を測定したり、

実験的に全くコストがかからない状況 (Kiyonari et al., 2000) を設定したりする必要があるだろう。

研究 4 の改善 研究 4 の課題を解決するには、同一化の効果が強い野球ファンを対象にコストがかからない状況における内集団協力の心理過程を検討することである。コストの有無を操作して BGR の説明力に影響があるか否かを検討することは重要であるが、コストと協利行動の関連について SIT からは明確な予測が存在しない。したがって、研究 5 からはまだ明らかにされていない SIT の心理過程の働きを規定する状況要因を検討する。具体的には、外集団の存在を意識させ同一化の効果をより高めた状況では SIT の心理過程が強く働くか否かを検討する。研究 3 ではギビング・ゲーム構造よりも非協力の誘引が強い PD ゲームで内集団協力を検討した。研究 3 と同様に行動指標で内集団協力を検討する方が、両理論の生態学的妥当性を保証するには適切であると考えられる。しかしながら、外集団を設定した PD ゲームでは両理論が支持された研究がほとんどないという背景を踏まえ、研究 5 ではまず行動実験に先立って場面想定法実験で予測が支持されるか否かを検討する。

第 2 節 研究 5-1

集団間地位を提示した場面想定法実験²²

目的

研究 5-1 (中川, 2018a) の目的は SIT の心理過程の働きを引き出す状況要因を検討することである。研究 1 から研究 3 までは実在集団における SIT と BGR の妥当性, BGR の心理過程の働きを強くする状況要因を明らかにした。協力行動にコストがかかると SIT よりも BGR の心理過程がより強く働くことが示された。この知見を踏まえ, 研究 5-1 では協力行動のコストを明示した研究 2 のシナリオを用い, 集団間の地位が SIT の心理過程の働きを活性化すると仮定し内集団協力との関連を検討する。すなわち, 協力行動のコストと集団間地位という 2 つの状況要因がある状況では, SIT と BGR の心理過程のどちらがより強く働くのかという相対的な効果を検討する。

研究 1 から研究 4 の実験では, 外集団の存在を顕現化させると評価懸念, ステレオタイプや規範の影響が出る可能性から特定の外集団を設定しなかった。このような状況では集団間の関係性が曖昧で SIT の心理過程が十分に引き出されない可能性があった。そこで, 研究 5-1 (中川, 2018a) では特定の外集団を設定するのではなく, 地位によって集団間関係を明確にすることで SIT の心理過程が引き出されやすい状況を設定し, SIT の心理過程が強く働くか否かを検討する。

集団間地位と SIT との関連 実在集団に存在する地位は集団間の関係性を明瞭にする働きを持っており, 全面的に他者

²² 研究 5-1 は「中川 (2018a). 野球ファンの内集団協力が集団間地位が及ぼす影響」として対人社会心理学研究第 18 巻 (pp.61-69) に公刊済である。また, 研究 5-1 は 2016 年日本社会心理学会第 57 回大会にて発表された (「カープを応援し続けるのはなぜか? —野球ファンを対象とした集団地位の効果の検討—」)。

からの評価によって決定される（坂田・三沢，2016）。野球ファンの地位は，チーム間の勝敗により決まり各球団を応援するファン同士の明確な相対評価につながる。そのため，チームの勝敗がファン集団の地位として機能する可能性は十分にある。また，野球ファンには栄光浴（Cialdini et al., 1976）を得たいという動機づけが備わっておりチームの勝敗の影響を受けやすい（Billings et al., 2016; Wann & Branscombe, 1990）。チームが勝てる状況では，個人が集団に同一化して栄光浴を得たいとの動機づけも高まる。したがって，チーム間の順位で決定される地位は栄光浴の観点からも SIT の心理過程が引き出される状況要因として有効であると考えられる。

さらに，SIT は地位格差のある集団間行動も予測する。地位が顕現化すると同一化が促されるが，それは高地位集団と低地位集団で一様ではない。相対的に資源量の多いので高地位集団は，低地位集団よりも同一化及び内集団協力傾向が高い（Doosje, Spears, & Ellemers, 2002）。一方，低地位集団は資源量に限りがあるため，同一化による協力が生じにくい。しかし，地位が変動的であれば，高地位集団は地位によって安定した同一化が脅威にさらされ，低地位集団は同一化が強まるきっかけとなる（Liebe & Tutic, 2010; Scheepers, Spears, Doosje, & Manstead, 2006; Vezzali, Andrighetto, Trifiletti, & Visintin, 2012）。以上より，地位格差を顕現化させることで SIT が予測する心理過程が強く働くと考えられる。

野球ファンの地位 野球ファンの地位は毎年チームの勝敗によって決まる。これまでの戦績の推移から，平均的に勝率が高いチーム（高地位），低いチーム（低地位）のファンがすでに現在の地位を推測している可能性もある。そこでこの可能性を排除するために，ペナントレースの序盤であり，参加者が

応援するチームの勝敗を予測できる段階ではない時に研究 5-1 を実施する。さらに、研究 5-1 で対象としたカープの 2000 年から 2015 年の戦績を見ると、前年度と比較して順位に変動があった確率は 53% と非常に高い（日本野球機構，2016）。したがって、野球ファンの地位は変動的で低地位／高地位集団ともに内集団協力が生じると予測した。

社会支配志向性 研究 5-1 では野球ファンの地位が変動的であると仮定したが、その階層関係を容認する程度には個人差があると考えられる。また、地位（高地位／低地位／統制）の刺激は参加者ごとに提示するため、個人差が地位提示に与える影響を検討する必要がある。そのため、社会支配志向性尺度（Social Dominance Orientation: 以下、SDO とする；Sidanius & Pratto, 1999 日本語版：黒石・森口，2003）を用いて階層関係を容認する程度を測定する。SDO とは、集団間の平等または階層的な関係性についての個人の志向性を指す（杉浦・坂田・清水，2014）。SDO によると個人は以下の二つのイデオロギーいずれかに関連して行動を決断するという。SDO が高いと、集団間の階層関係は正当なものであるというイデオロギーに従って差別的な行動（内集団協力）をする。SDO が低いと、集団間の不平等さを改善しようとするイデオロギーに従って平等主義的な行動をする。研究 5-1 では SDO を測定することによって、地位の条件間で SDO が過度に高いまたは低い参加者を確認するとともに、高地位／低地位条件の参加者が内集団協力の動機につながる SDO 得点が高いかを検討する。

仮説 地位（高地位／低地位）を提示すると SIT に基づく内集団協力が生じるであろう（仮説 1）。地位を提示しない統制条件では、協力行動のコストの効果から BGR に基づく内集団協力が生じるであろう（仮説 2）。

方法

実験日時・参加者 実験は2016年の4月から6月にかけて行われ、広島市内の大学に通う学生292名（男性145名、女性140名、不明7名）が参加した。未回答が多かった1名を削除した291名のうち、カープを応援するファンは81名（男性47名、女性33名、不明1名）、ファンではないが比較的カープが好きな人は126名（男性42名、女性84名）、その他の球団を応援する／比較的好きな人は84名（男性56名、女性23名、不明5名）であった。分析にはカープファンを用い、高地位条件に33名（男性22名、女性10名、不明1名）、低地位条件に22名（男性12名、女性10名）、統制条件に26名（男性13名、女性13名）が割り当てられた（参加者間配置）。ファンの平均年齢は19.18歳（ $SD = 1.10$ ）だった。

実験デザインと条件 実験デザインおよび集団所属性の知識操作は研究2と同じである。互いに相手が同じ野球チームのファンだと分かる内集団相互条件、参加者のみ相手が同じチームのファンだと分かる内集団一方条件、互いに集団所属性が分からない相互不明条件の3条件を設定した（参加者内配置）。初めに相互不明条件（デフォルトの協力行動）への回答を求め、その後、内集団相互・一方条件の回答順序はカウンターバランスがとられた。研究2と同様の援助行動と援助期待のシナリオでは回答順序がランダムに設定された。

集団間地位の刺激 高地位条件では、参加者に「カープの成績の上昇による高地位の獲得」に関連した見出し、選手の写真（スポーツニッポン、2016）や2000年から2015年度の中で順位が上昇した年を強調したグラフ（日本野球機構、2016）を一読するよう求めた（Figure 7-3）。その後、成績が上昇した原因をいくつか載せてある350字程度の記事を読ませ「この記事

の中から，成績が上昇した原因としてあなたが最も重要だと思う部分に下線を引いてください（複数可）」と「あなた自身はカープの成績が上昇した原因はどこにあると思いますか？あなたの意見を簡潔に述べてください（自由記述）」と尋ねた。

低地位条件では，高地位条件と同じ写真，グラフを用い，強調する文を一部変更した（Figure 7-4）。低地位条件では，「カープの成績の低迷による低地位の獲得」に関連した見出し，順位が下降した年を強調したグラフ（成澤・持木，2014）を使用し，同じく成績が低迷した原因を記載した記事を読ませた。質問項目は「成績が上昇した」の部分を「成績が低迷した」に変更して尋ねた。

統制条件では，カープの地位に関係ない毎年開催される広島のお祭り（とうかさん）に関連した見出し，写真，記事（クリシェ株式会社，2014）を用いた（Figure 7-5）。見出しと写真を一読した後，「この記事の中から，とうかさんの起源のうち，あなたが最も重要だと思う部分に下線を引いてください（複数可）」と「あなた自身はとうかさんが400年近く続いている理由はどこにあると思いますか？あなたの意見を簡潔に述べてください（自由記述）」と尋ねた。これらの課題は記事を念入りに読ませるために設けられた（Table 7-3）。



Figure 7-3. 高地位条件で使した図と見出し



Figure 7-4. 低地位条件で使⽤した図と見出し



Figure 7-5. 統制条件で使 用した図と見出し

Table 7-3

地位別の記事全文

内 容
<p>高地位条件</p> <p>2013年、広島東洋カープは16年ぶりにクライマックスシリーズの出場を決めた。球団歴代5位の21試合連続安打を達成した菊池涼介と、12試合連続得点を記録した丸佳浩の“キクマルコンビ”の働きは目覚ましくカープはますます強くなってきている。年間最大37本塁打を打っているエルドレッドの破壊力はカープを優勝へと近づけていく。また、2012年には野村祐輔が新人王を獲得し、防御率1点台と好成績を残している。広島のプリンスこと堂林翔太も、満塁機会にめっぽう強く満塁機会には打率5割という快挙を成し遂げた。カープを古巣として帰ってきた2000安打間近の新井貴浩や通算1000奪三振を成し遂げた黒田博樹はチームの起爆剤とも言え、さらに強く飛躍していくカープにはかせない。</p>
<p>低地位条件</p> <p>1998年から15年間（2012年まで）、広島東洋カープはクライマックスシリーズに出場できず、万年下位に低迷している。1991年から2015年まで優勝からも遠ざかっている。昨年度は、菊池涼介の両膝のケガと丸佳浩の打率低下により得点源のはずの“キクマルコンビ”の働きも不振に陥り、カープはますます貧打から抜け出せずにいる。同じく頼みのエルドレッドは右膝を故障し、本塁打は過去の37本から19本にまで半減した。また、2012年の新人王である野村祐輔も、防御率1点台から4点台に成績が急降下している。広島のプリンスこと堂林翔太も、2013年からは成績が急下降し、昨季は1軍デビュー以降最少の33試合出場にとどまった。カープを古巣として帰ってきた黒田博樹は、年齢とともにケガに泣く場面も多くカープを支える主要選手となるのが難しいところである。</p>
<p>統制条件</p> <p>毎年6月第1週から3日間にわたり行われる夏祭り「とうかさん」。とうかさんは広島市中区の三川町円隆寺の境内に祭られている稲荷大明神のことを指している。「とうか」というのは「稲荷」を音読みで読んだことが始まりといわれている。とうかさんの行われる圓陸寺は、1619年（元和5年）に広島藩初代藩主であった浅野長晟が建立した。その建立時以来約397年間とうかさんは続いている。開催日時は、1954年までは旧暦の端午の節句（こどもの日）に行われていたが、新暦では1カ月ほどのずれが生じる事があるので、「とうか」を「十日」にかけて、そして6月10日頃が旧暦の端午の節句の近くになることから1955年から旧暦の6月9日、10日に行われた。現在の日時になったのは1998年からである。</p>

測定項目 研究 2 と同様の同一化項目 (Hogg et al., 2006; Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009) 及び援助行動／援助期待のシナリオを使用した。さらに、地位課題の後に現在のカープの強さを感じるか (統制条件では「とうかさんの魅力をどう感じますか」) と SDO (黒石・森口, 2003) を測定した。

手続き 参加者は応援する野球チームを日本野球機構が定める全 12 球団の中からチームを選択し、同一化項目に回答した。地位課題の最後の項目で「現在 (2016 年 4 月) のカープの強さはどう思いますか」と 5 件法 (1: 非常に弱いと思う -5: 非常に強いと思う) で尋ね、統制条件では「現在 (2016 年 4 月) のとうかさんの魅力をどう思いますか」と 5 件法 (1: 全く魅力がない -5: 非常に魅力がある) で尋ねた。地位課題が終了した後、研究 2 の援助行動／援助期待のシナリオをも用いて内集団協力を測定した (4 項目 5 件法)。また、SDO (黒石・森口, 2003) により集団間の平等または階層的な関係性についての個人の志向性を測定した。この SDO は 16 項目 (7 件法: 1. 全く同意しない／反対する -7. 完全に同意する／賛成する) で構成され、数値が高いほど個人の志向性として階層的な社会構造を強く望むことを示す (Table 7-4)。

予測 地位が変動的な場合、高地位／低地位集団の成員はそれぞれ、自集団を他集団から分離しようとする。そのため、地位を顕現化すると SIT の心理過程が強く働き、内集団相互／一方条件で協力的になるだろう。一方、地位を提示していない統制条件では研究 2 の結果が再現され、内集団相互条件で協力的になるだろう。

Table 7-4

社会的支配志向性尺度 (SDO)

-
1. ある種の人たちは他の集団の人たちよりも良い扱いを受けるに値する
 2. 自分たちが欲しいものを手に入れるためには、他の集団に対して力をふるわなければならないこともある
 3. ある種の人たちが他の集団と比べて人生のチャンスに恵まれているとしても、それはそれでかまわない
 4. 人生で成功するためには、時として他の集団の人たちを踏み台にすることが必要だ
 5. ある種の人たちの集団が身のほどをわきまえていたら、世の中の色々な問題は起こらないで済むだろう
 6. ある種の人たちが上に立って、他の集団が下にいるのは、おそらくよいことだ
 7. 劣った人たちの集団は、自分たちの立場をわきまえるべきである
 8. 他の集団の人たちを現状に押しとどめておくべき場合がある
 9. 全ての集団が平等になれば良い*
 10. 私たちは集団間の平等を理想とすべきだ*
 11. すべての人たちの集団は人生のチャンスを等しく与えられるべきだ*
 12. 色々な集団が置かれた条件を等しくするために、私達はできるだけのことをすべきである*
 13. 私たちは社会的平等を目指すべきである*
 14. もし私たちが色々な集団をもっと平等に扱ってきたら、私たちの問題はもっと少なくなるだろう*
 15. 私たちは収入の平等をさらに目指すべきである*
 16. どんな集団も社会において支配的地位を独占するべきではない*
-

注) ※は逆転項目

結果

援助行動のシナリオ 4 項目について信頼性係数 (クロンバックの α 係数) を求めたところ、内集団相互条件 ($\alpha = .68$)、内集団一方条件 ($\alpha = .67$)、相互不明条件 ($\alpha = .54$) であった。相互不明条件の α 係数が比較的低いことから、シナリオ間の

相関分析を行った。その結果，肉体的な労力（Bさんに座席を譲ると40分間立ちっぱなしになる）のかかるコストでは他の項目との相関が見られなかった（ $r = -.01$, $p = .93$ ）。しかし，条件間のパターンは，労力のシナリオを除いても（ $\alpha = .56$ ），全項目を合算しても大きく違いはなかった。そのため， α 係数は比較的低い値であるが，研究2との整合性を考慮し全項目を合算して援助行動得点とした。同じく援助期待のシナリオ4項目についても信頼性係数を求めたところ，内集団相互条件（ $\alpha = .76$ ），内集団一方条件（ $\alpha = .81$ ），相互不明条件（ $\alpha = .72$ ）で十分な内的整合性が見られたため，全項目を合算して援助期待得点とした。同一化尺度（ $\alpha = .95$ ）とSDO（ $\alpha = .79$ ）についてもそれぞれ高い内的整合性が見られた。カープファンの同一化項目の合計平均（ $M = 41.99$, $SD = 10.23$ ）は，比較的カープが好きな人（ $M = 28.22$, $SD = 9.41$ ）より同一化の程度が高かった（ $t(204) = 9.89$, $p < .01$, $d = 1.41$ ）。したがって，カープファンは単にカープが好きな人よりも内集団に強く同一化していることが確認された。

操作チェック はじめに「実際のカープの強さ（自己評価）」の項目により地位の操作から実際の地位を認識したか操作チェックを行なった。カープファンは高地位条件（ $M = 3.81$, $SD = 0.79$ ）で低地位条件（ $M = 3.23$, $SD = 0.75$ ）よりもカープを強いと評価した（ $t(51) = 2.68$, $p < .01$, $d = 0.74$ ）。しかし，高地位条件（ $M = 62.48$, $SD = 12.15$ ），低地位条件（ $M = 58.09$, $SD = 12.43$ ），統制条件（ $M = 58.73$, $SD = 10.72$ ）のいずれの間でもSDOの程度に有意な差は得られなかった（ $F(2, 78) = 1.17$, $p = .32$, $\eta^2 = .00$ ）。

援助期待 それぞれの地位条件で，互惠性の期待の操作が成功したかを確認するため，援助期待（Figure 7-6）に従属変

数，集団所属性の知識と地位を独立変数とした分散分析を行なった。その結果，集団所属性の知識の主効果は得られた ($F(2, 152) = 14.10, p < .01, \eta^2 = .04$) が，地位の主効果 ($F(2, 76) = 0.54, p = .59, \eta^2 = .00$) と交互作用効果 ($F(4, 152) = 0.44, p = .70, \eta^2 = .00$) はいずれも得られなかった。地位の効果が得られなかったことから，地位を無視し研究 2 の分析方法と同じく参加者を合算して分析を行なった結果，集団所属性の主効果がみられた ($F(2, 156) = 14.51, p < .01, \eta^2 = .04$)。Holm 法の多重比較を行なったところ内集団相互条件 ($M = 12.71, SD = 3.09$) で最も援助期待が高く ($p < .01$)，内集団一方条件 ($M = 11.41, SD = 3.20$) と相互不明条件 ($M = 11.30, SD = 3.10$) は内集団相互条件より低く同程度の値であった ($p < .01$)。地位をプールしたカープファンの分析では互惠性の期待の操作は成功した (清成，2002)。

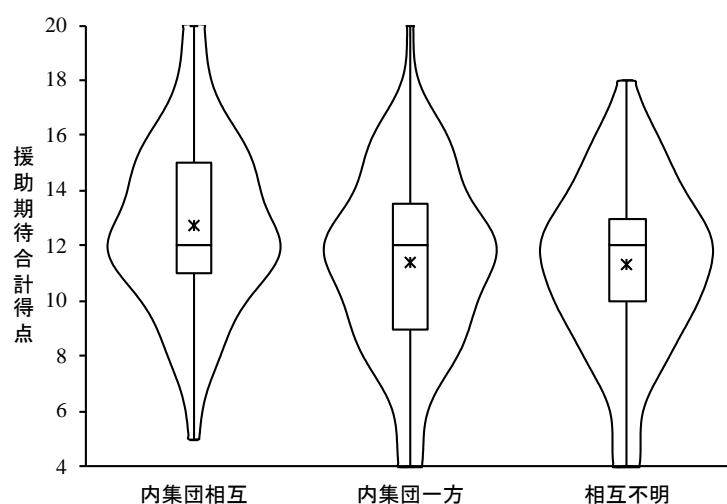


Figure 7-6. 援助期待のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 地位条件ごとに援助行動 (Figure 7-7) を従属変数，集団所属性の知識と地位を独立変数とした分散分析を行なった。その結果，集団所属性の知識の主効果は得られた

($F(2, 152) = 6.80, p < .01, \eta^2 = .01$) が，地位の主効果 ($F(2, 76) = 0.88, p = .42, \eta^2 = .00$) と交互作用効果 ($F(4, 152) = 1.17, p = .33, \eta^2 = .00$) はいずれも得られなかった。そこで，地位条件をプールした分析を行なった結果，集団所属性の主効果が得られた ($F(2, 156) = 7.56, p < .01, \eta^2 = .01$)。Holm 法の多重比較を行なったところ，内集団相互条件 ($M = 14.05, SD = 2.82$) と内集団一方条件 ($M = 13.89, SD = 2.71$) における援助行動は同程度の値を示し，ともに相互不明条件 ($M = 13.38, SD = 2.64$) より高かった (内集団相互／一方条件間: $p < .01$, 内集団一方／相互不明条件間: $p < .05$)。以上の分析より，地位の効果が得られなかったため全ての仮説が支持されなかった。地位の効果を除くと SIT を支持する傾向であった。

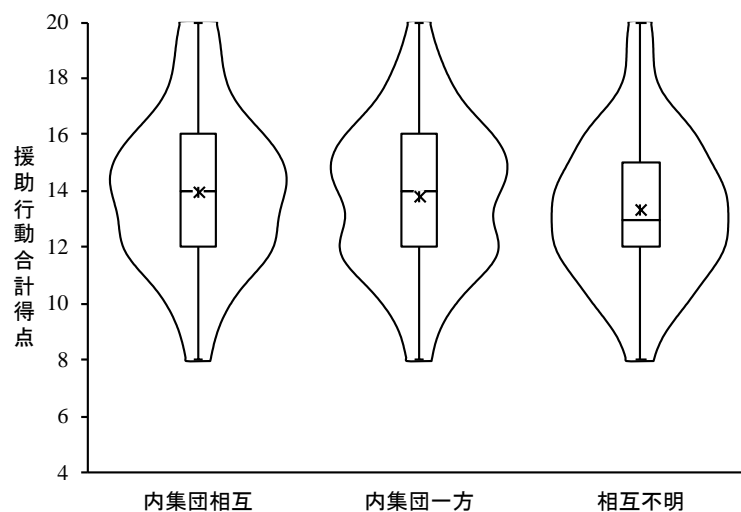


Figure 7-7. 援助行動のヴァイオリンプロット。

同一化と援助行動／SDO との関係 SIT が支持される傾向であったことから，同一化と援助行動との相関分析を行った。また，SDO が高いほど SIT の心理過程が強く働き，内集団相互／一方条件で協力的になるか否かを検討した (Table 7-5)。地位条件全てのカープファンを対象に相関分析を行った結果，

同一化と内集団相互／一方条件の援助行動，同一化とSDOに関連はなくSITは支持されなかった。高地位条件では同一化及びSDOは各条件の援助行動に影響しなかった。低地位条件ではSDOが高いほど全条件で協力の程度が低くなった ($p < .01$)。統制条件ではSDOが高いほど相互不明条件 ($p < .05$)で協力の程度が高くなった。また，SDOの分布を確認したところ，過度にSDOの高い／低い参加者は数名しかいなかった (Figure 7-8)。さらに，内集団一方条件でデフォルトの互惠性の期待を抱き，援助行動を行った可能性を考慮し期待を統制した偏相関分析を行った。その結果，互惠性の期待を統制しても同一化と援助行動に有意な相関関係はなかった (Table 7-6)。

Table 7-5

援助行動と測定項目それぞれとの間の相関係数 (r)

		高地位	低地位	統制	全員
同一化と援助行動	内集団相互	.15	.34	.04	.14
	内集団一方	.18	.37	.21	.20 [†]
	相互不明	.21	.12	.07	.12
SDOと援助行動	内集団相互	-.26	-.51**	.24	-.21
	内集団一方	-.23	-.55**	.36	-.17
	相互不明	-.22	-.63**	.43*	-.16
同一化とSDO		-.10	-.40	-.03	-.14

[†] $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$ 注) 全員は地位条件全てのカーブファン

Table 7-6

互惠性の期待を統制した同一化と援助行動の偏相関係数 (r)

		高地位	低地位	統制	全員
同一化と援助行動	内集団相互	.09	.31	-.04	.06
	内集団一方	.13	.41 [†]	.28	.21 [†]
	相互不明	.11	.14	.07	.09

[†] $p < .10$

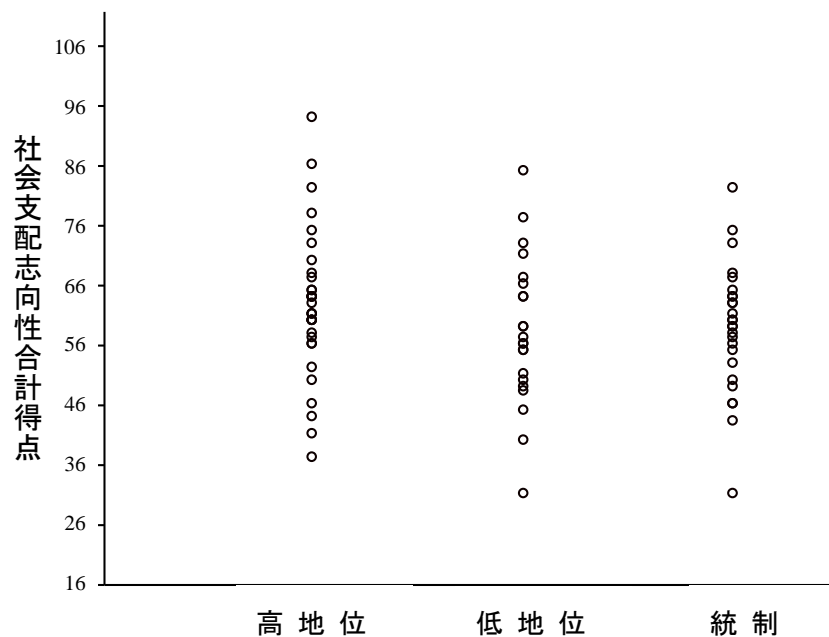


Figure 7-8. 地位条件ごとの SDO 分布

考察

研究 5-1 の目的は協力行動にコストがかかる状況で地位を提示した場合、SIT が支持されるか否かを検討することであった。しかし、地位の効果が見られず、条件間で援助行動と援助期待に差はみられなかった。そのため、地位条件をプールして研究 2 の分析方法と同じく集団所属性の知識条件ごとに援助行動と援助期待を検討した。その結果、援助期待では BGR が支持された。援助行動では SIT を支持するような平均値のパターンが示されたが、同一化と援助行動には関連がみられず SIT は支持されなかった。すなわち、地位の高低に関係なく内集団成員からの互惠性を期待しながら、自身では両理論から説明できない内集団協力を行っていた。上記の結果から、地位を提示すると、両理論の説明力を阻害する何らかの要因が生じることが明らかとなった。したがって、地位格差があるような実在集団の内集団協力には、SIT および BGR の効果が限

定的である可能性がある。この結果は相関分析からも明らかで、カープファンの同一化と援助行動には関連がなく、剰余変数になり得る互惠性の期待を統制しても関連はなかった。

また、SDO との関連についても地位の効果がみられなかったことから積極的な解釈を行うことは難しい。低地位条件では SDO が高いほど、全条件で協力せず同一化が弱まったが、地位の操作と関係ない単なる個人差とも考えられる。統制条件では SDO が高いほど相互不明条件で協力的になった。Liebe & Tutić (2010) では、SDO が高い高地位集団の成員は集団レベルでは内集団協力を示したが、個人レベルでの分析では外集団協力を示した参加者の割合も多いことが明らかになった。つまり、統制条件の結果は SDO の高い個人が単に利他的な行動を示しただけという可能性がある。

研究 5-1 の課題 研究 5-1 では集団間地位を操作したが、その効果は見られなかった。研究 5-1 の結果から、有意ではないものの統制条件で内集団一方条件における協力傾向が高かった。統制条件では地位に関係ない広島のお祭りの内容を提示したため、野球ファンではなく広島県民としての同一化が強まった可能性がある。すなわち、内集団のカテゴリーが野球ファンから広島県民に移行して同一化が強まったことにより、他の広島県民に協力的になったと考えられる。近年ではプライミング操作により得られた結果の再現性は低いとの主張も存在する（藤島・樋口，2016）ことから、地位を提示する手法そのものが適切でなかったといえる。また、地位の提示により集団間の競争関係以外に様々な状況を想定させた可能性がある。例えば、低地位集団の成員には内集団協力をして地位を逆転させる以外に、集団状況が変わりそうになれば集団を離脱し他の集団に所属するという選択肢もある（Ellemers,

1993)。研究 5-1 では低地位集団の野球ファンがどの程度、自身の協力によって集団状況を変えることができるか、内集団から離脱（ファンを辞めること）できると思うかなど測定していなかった。すなわち、実験手法そのものが外集団の存在を認識させる効果が弱く、地位によって集団境界性や凝集性などの新たな交絡要因が協力行動を阻害したといえる。

研究 5-1 の課題解決 この結果を踏まえ、今後の研究 5-2 及び研究 5-3 では地位を提示する操作ではなく、実際に外集団を提示した状況における内集団ひいきを検討する。実在集団の交絡要因を統制するため、特定の外集団名を提示しない形式で実験を行う。また、外集団を提示することによってこれまで得られた内集団協力の結果が内集団ひいきであっても再現されるのかを検討する。

第 3 節 研究 5-2

Web 調査による外集団を設定した場面想定法実験

目的

特定の外集団が設定されていない研究 1 においても SIT が支持された理由は、参加者が集団間関係を暗に意識して協力的になったことにあると考えられる。しかし、内／外集団を比較することで自己肯定感を獲得することを前提に置く SIT の妥当性を厳密に検討するには、実際に外集団を設定する必要がある。Balliet et al. (2014) も SIT に基づく協力行動が生じる前提には外集団の存在が不可欠で、内集団と見知らぬ他者との比較では協力の程度に差があっても意味がないと言及している。

研究 5-1 では外集団を設定するのではなく集団間地位を提示することによって同一化の効果を高めようと試みたが、地位によって協力行動のパターンが変わることはなかった。そのため、地位と協力行動のコストとの相対的な影響を検討することが困難であり、コストが SIT に基づく内集団協力に影響したか否かも明らかではない。この結果を踏まえると、外集団の存在が顕現化されることで SIT の心理過程が BGR よりも強く働く可能性を検討するためには、実際に外集団を設定する必要がある。したがって、研究 5-2 の目的はコストが明示されない研究 1 のシナリオを使用し外集団を設定した場合、SIT の心理過程が強く働く内集団ひいきが生じるか否かを検討することである。ただし、これまでの先行研究では外集団の存在が顕現化されることによって評価懸念、ステレオタイプや規範が生じ、外集団ひいきが生じていた。そのため、研究 5-2 では集団所属性の知識操作は行わず、コストの影響が少ない状

況で内／外集団への援助行動を測定し野球ファンにおいて外集団を設定することが交絡要因になるか否かを探索的に検討した。具体的には参加者が応援するチームのファンを内集団とし、それ以外のチームのファンを外集団とした。

方法

実験日時・参加者 実験は2013年7月にWeb調査会社の株式会社クロス・マーケティングに依頼し行われた。参加者500名のうち野球チームのファンが251名（男性154名、女性97名）、どこのチームのファンでもない者が249名（男性96名、女性153名）であった。分析にはファンを使用し平均年齢は42.59 ($SD = 18.02$) 歳であった。

質問項目 参加者ははじめに日本野球機構が定める12球団の中から応援するチームを選択した。応援するチームがない人は「どこのファンでもない／野球に全く興味が無い」を選択するように求められ、FNE項目（石川他, 1992）のみの回答で終了した。応援するチームがあるファンは同一化を測定した。研究1のシナリオを使用して、第三者のAさんを参加者と同じチームを応援するファン（「Aさんはあなたが好きなチーム【〇〇】のユニフォームを着ているものとします」と教示）、Bさんを異なるチームを応援するファン（「Bさんはあなたが好きなチーム【〇〇】と違うユニフォームを着ているものとします」と教示）であると仮定して、内／外集団に対する援助行動と援助期待を測定した。SITとBGRの妥当性を同時に検証できる集団所属性の知識操作は行わなかった。

結果

内集団に対する援助期待 ($\alpha = .78$)／援助行動 ($\alpha = .86$)、外

集団に対する援助期待 ($\alpha = .85$) / 援助行動 ($\alpha = .86$), 同一化項目 ($\alpha = .94$), FNE 項目 ($\alpha = .94$) は十分な内的整合性が確認されたため, それぞれの項目は全て合計得点で分析を行った。同一化項目の平均は 38.94 ($SD = 10.53$) であり, FNE 項目の平均は 36.02 ($SD = 9.76$) であった。同一化得点は中点 3×13 項目 = 39 点よりも下回る値であり, 同一化の程度は弱かった。FNE 得点は中点 3×12 項目 = 36 点と同程度の値であった。

応援するチーム (Table 7-7) による援助期待 / 援助行動の違いを検討するため, 内・外集団に対する援助期待 / 援助行動を従属変数, 応援チームを独立変数とした一要因分散分析を行ったところ, 援助期待 ($F(11, 239) = 1.13, p = .34$), 援助行動 ($F(11, 239) = 1.35, p = .19$) とともに有意なチームの主効果は得られなかった。したがって, 以後の分析はチームを区別せず行った。

Table 7-7

野球チーム別の人数

チーム名	人数
1. 中日ドラゴンズ	26
2. 東京ヤクルトスワローズ	9
3. 読売ジャイアンツ	58
4. 阪神タイガース	55
5. 広島東洋カープ	13
6. 横浜 DeNA ベイスターズ	12
7. 福岡ソフトバンクホークス	30
8. 北海道日本ハムファイターズ	20
9. 埼玉西武ライオンズ	6
10. オリックスバファローズ	4
11. 東北楽天ゴールデンイーグルス	12
12. 千葉ロッテマリーンズ	6

援助期待・援助行動 相手が内 / 外集団かによって援助期待 (Figure 7-9) や援助行動 (Figure 7-10) の傾向が異なるか

否かを検討したところ，援助期待 ($t(250) = 3.46, p < .01, d = 0.10$)，援助行動 ($t(250) = 1.97, p < .05, d = 0.05$) は内／外集団の間に有意な差が得られた。ただし，援助期待（内集団： $M = 13.75, SD = 2.78$ ，外集団： $M = 13.46, SD = 2.87$ ）と援助行動（内集団： $M = 15.42, SD = 2.95$ ，外集団： $M = 15.27, SD = 2.99$ ）はいずれも内／外集団の間に大きな得点の差は見られなかった。

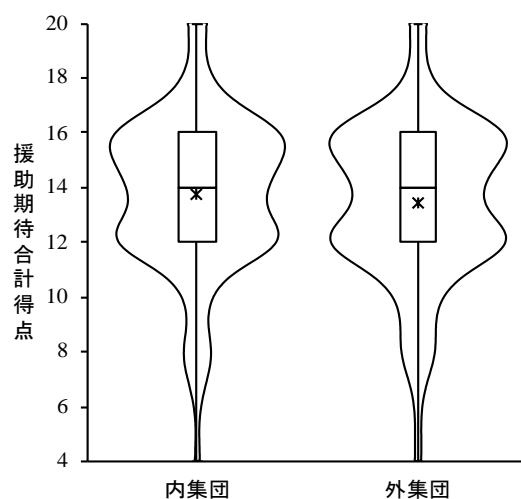


Figure 7-9. 援助期待のヴァイオリンプロット。

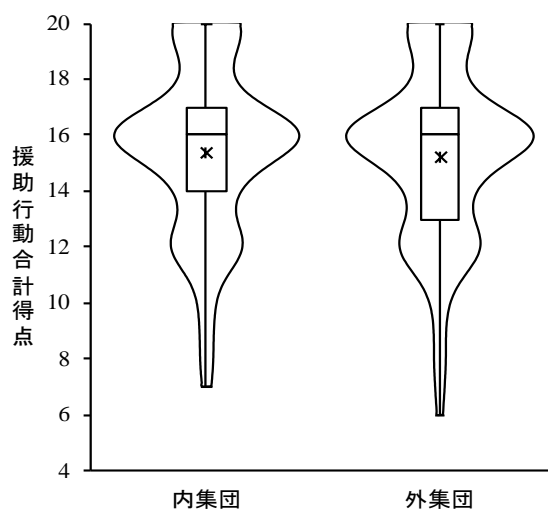


Figure 7-10. 援助行動のヴァイオリンプロット。

相 関 分 析 内集団協力の背後にある心理過程を検討するため、全ての測定項目と援助期待／援助行動の相関分析を行った (Table 7-8)。同一化と内集団 ($r = .18, p < .01$)／外集団 ($r = .16, p < .05$) に対する援助行動に有意な正の相関関係が得られた。さらに、援助期待を統制した偏相関分析を行ったところ、内集団 ($r = .07, p = .25$)／外集団 ($r = .05, p = .45$) の両方で同一化と援助行動の関連が消失した。つまり、内／外集団成員のどちらかにかかわらず、同一化は互惠性の期待を媒介して協力行動を引き起こすことが示された。

Table 7-8

全測定項目とシナリオの相関

	援助期待 (内集団)	援助期待 (外集団)	援助行動 (内集団)	援助行動 (外集団)	同一化
援助期待 (内集団)	-	-	-	-	-
援助期待 (外集団)	.90**	-	-	-	-
援助行動 (内集団)	.69**	.66**	-	-	-
援助行動 (外集団)	.66**	.70**	.91**	-	-
同一化	.19**	.18**	.18**	.16*	-
FNE	-.17**	-.16*	-.13*	-.14*	-.09

* $p < .05$, ** $p < .01$

補 足 的 分 析 内／外集団に対する援助行動が援助期待を媒介して生じたことを踏まえ、期待および行動に性差があるか否かを検討した。Figure 7-11 に男女別の援助期待／行動のヴァイオリンプロットを示す。内集団に対する援助期待 ($t(249)$

= 1.86, $p = .07$), 外集団に対する援助期待 ($t(249) = 1.18$, $p = .24$) はいずれも男女間で有意な差は得られなかった。一方で, 内集団に対する援助行動 ($t(249) = 2.48$, $p < .05$, $d = 0.32$), 外集団に対する援助行動 ($t(249) = 2.06$, $p < .05$, $d = 0.27$) はともに女性の方が高い傾向にあった。

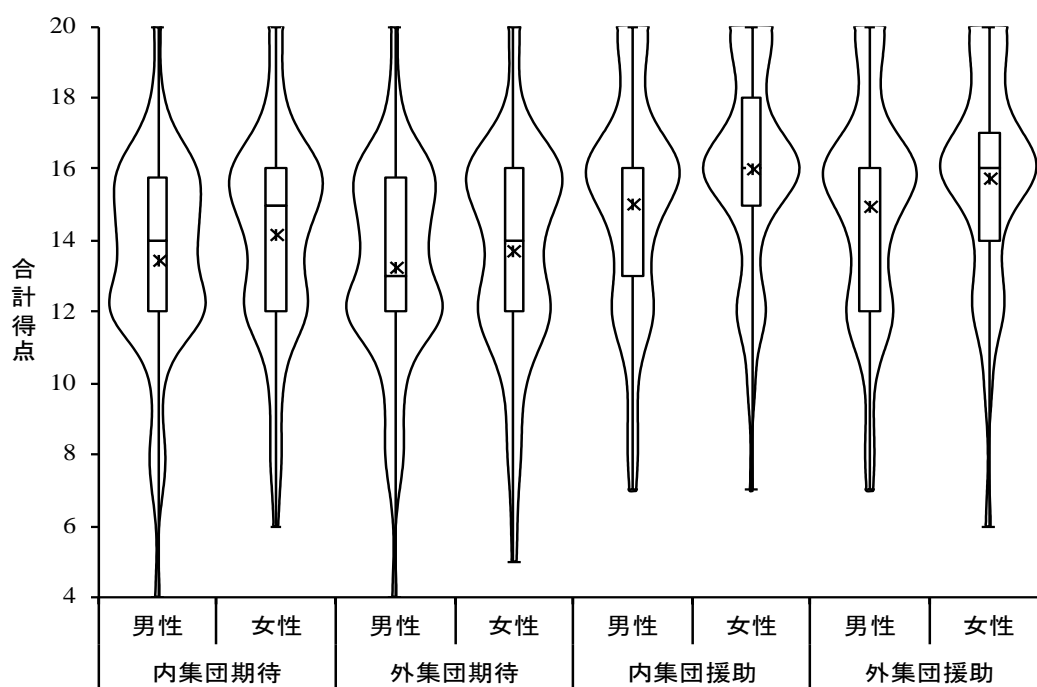


Figure 7-11. 男女別の援助期待／援助行動のヴァイオリンプロット。

考察

研究 5-2 では研究 1 のコストが明示されていないシナリオを用いて, 内／外集団に対する援助期待と援助行動を測定した。外集団の存在そのものが協力行動を阻害する交絡要因になるか否かを検討した結果, 効果量はわずかではあるものの外集団よりも内集団に対して好意的に振る舞う内集団ひいきが生じていた。このことは外集団が提示されたとしても交絡

要因によって内集団協力が妨げられる可能性が低いことを意味する。

研究 5-2 の課題 しかし，相関分析では内集団と外集団の援助期待及び援助行動はそれぞれ強い正の相関関係を示していたことから集団間の区別がされていなかった可能性が高い。また，この結果は偏相関分析からも明らかに相手が内／外集団であるかにかかわらず，同一化は援助期待を媒介して援助行動を引き起こした。したがって，内／外集団成員のどちらに対しても期待を媒介した協力傾向が見られた。少なくとも，研究 5-2 では国籍集団を対象とした先行研究で見られたような外集団ひいきは生じなかった。このことから，特定の外集団を設定しなければ協力行動を阻害する規範やステレオタイプは生じないことが示唆された。

研究 5-2 の課題解決 次の研究 5-3 では外集団を提示して集団所属性の知識操作を行った上で，両理論の妥当性を検討する。研究 5-3 の目的は，SIT の心理過程の働きを強くする状況要因が外集団の存在の顕現化であるか否かを確認することと，内集団協力の説明を内集団ひいきにまで拡大することである。協力にかかるコストと外集団の存在という 2 つの状況要因の相対的な効果をみる前に，まずは協力のコストが明示されていない研究 1 のシナリオを用いて SIT の心理過程が働きやすい状況で検討を行う。

第 4 節 研究 5-3

Web 調査による外集団を設定した場面想定法実験²³

目的

研究 1 から研究 4 までは、交絡要因の影響を懸念して外集団を設定しない実験デザインを使用していた。しかし、SIT に基づく協力行動の前提には内／外集団の比較があり、厳密な内集団ひいきとして検討するには外集団よりも内集団に対して協力的になっているか否かを確認しなければならない。国籍を集団カテゴリーに使用した先行研究（牧村・山岸，2003b；三船他，2007；Yamagishi et al., 2005）では、特定の国を外集団に設定したため、歴史的な背景を含めたステレオタイプや規範の影響が強くなったと考えられる。特定の外集団を設定しなかった研究 5-2 では少なくとも交絡要因の影響はみられなかった。したがって、研究 5-3 の目的は研究 1 のシナリオ（コスト非明示）を使用して特定のチーム名を明示しない形式で外集団を設定し、研究 1 と異なる結果が得られるかを検討することである。協力のコストが相対的に小さく見積もられる状況で外集団の存在が顕現化されれば、BGR よりも SIT の心理過程が強く働く内集団ひいきが生じるだろう（仮説）。

方法

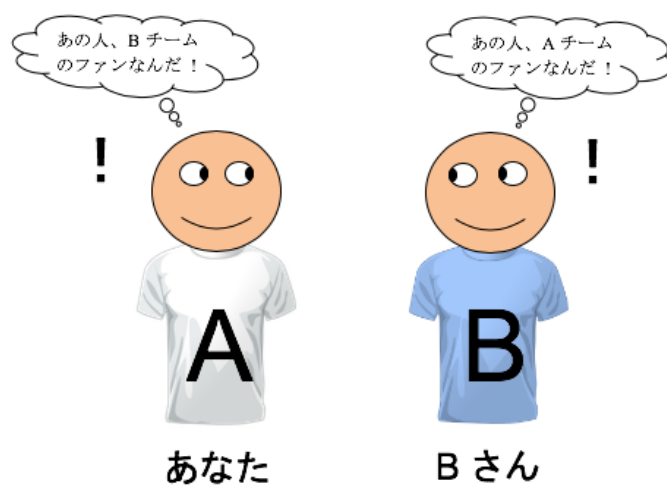
実験日時・参加者 マクロミル株式会社が実施する Web 調査により 2018 年 2 月 27 日と 28 日に実験が行われた。全国から 2,080 名（男性 1,038 名，女性 1,042 名）が参加し，そのうち野球ファンは 931 名（男性 560 名，女性 371 名），ファン

²³ 研究 5-3 は 2018 年日本社会心理学会第 59 回大会にて発表された（「外集団の存在は互惠性の効果を減じるか？」）。

以外が 1,149 名（男性 478 名，女性 671 名）であった。野球ファンを分析に使用し平均年齢は 44.48 ($SD = 14.13$) 歳であった。

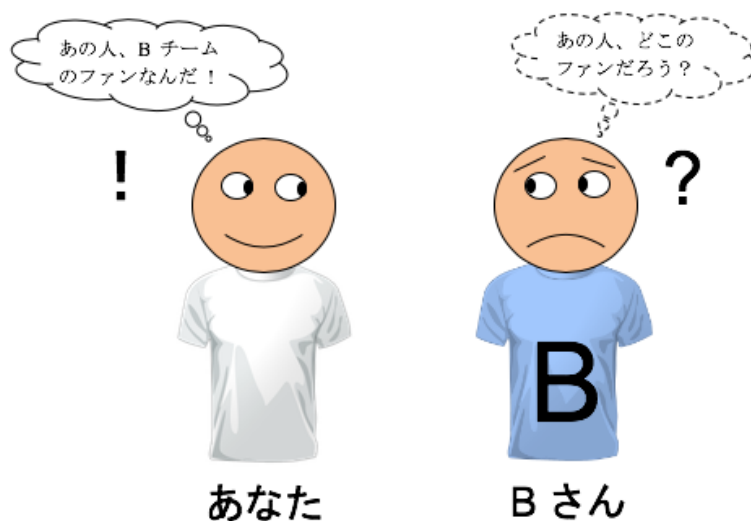
質問項目と追加の条件 参加者の応援するチームの特定，同一化，去年 1 年間で試合を見に行った回数，援助行動と援助期待，操作チェックとして協力をどの程度コストと感じたか（4 項目それぞれ 5 件法で評定）を測定した。これまでの内集団相互，内集団一方，相互不明条件に加えて，研究 5-3 では外集団を提示する 3 条件を設け合計で 6 条件とした。すなわち，お互いに外集団成員であると分かる外集団相互条件 (Figure 7-12)，参加者のみが相手を外集団成員であると分かる外集団一方条件 (Figure 7-13)，お互いにどこのファンかは分からない外集団不明条件である。外集団不明条件と内集団不明条件は，どちらも「お互いにどこのファンか分からない」という点で共通しているが，この教示の前に内集団条件では「あなたと相手の Bさんは実は内集団成員です」，外集団条件では「あなたと相手の Bさんは実は外集団成員です」と伝えているという点で異なる。今までと同様に援助行動と援助期待の解答順はカウンターバランスが取られ，条件の回答順序は，外集団不明条件を必ず一番はじめに回答し，その後外集団一方と外集団相互条件のどちらかを先に回答した。その次に，内集団不明条件に回答し，その後内集団相互と内集団一方の回答順序もランダムイズされた。

予測 外集団を提示した場合，SIT の心理過程が強く働き，内集団相互／一方条件で協力的になるだろう。BGR の心理過程も同時に働き，内集団相互条件で最も協力的になるだろう。



※ Tシャツの「A」は、あなたの応援するチームのロゴマーク、「B」はBさんの応援する別のチームのロゴマークです。

Figure 7-12. 外集団相互条件の図



※ Tシャツの「B」は、Bさんの応援する別のチームのロゴマークです。

Figure 7-13. 外集団一方条件の図

結果

援助行動における4つのシナリオ場面のクロンバックの α 係数を求めたところ、内集団相互条件 ($\alpha = .90$)、内集団一方条件 ($\alpha = .88$)、内集団不明条件 ($\alpha = .88$)、外集団相互条件 ($\alpha = .89$)、外集団一方条件 ($\alpha = .88$)、外集団不明条件 ($\alpha = .86$) で十分な内的整合性が得られたため、全項目を合算し援助行動得点とした。援助期待も内集団相互条件 ($\alpha = .92$)、内集団一方条件 ($\alpha = .90$)、内集団不明条件 ($\alpha = .89$)、外集団相互条件 ($\alpha = .90$)、外集団一方条件 ($\alpha = .89$)、外集団不明条件 ($\alpha = .85$) で十分な内的整合性が得られたため、全項目を合算し援助期待得点とした。同一化項目 ($\alpha = .94$) も合計して平均得点を算出した。

応援するチームによる援助期待／援助行動の違いを検討するため、援助期待／援助行動を従属変数、集団所属性の知識条件と応援チームを独立変数とした二要因分散分析を行ったところ、援助期待 ($F(11, 919) = 1.06, p = .40$)、援助行動 ($F(11, 919) = 1.76, p = .06$) とともに有意なチームの主効果は得られず、交互作用効果もなかった。したがって、以下の分析ではチームを区別せず検討を行う。

操作チェック 参加者が援助行動をどの程度コストと感じていたのかを確認した。研究1と同様に本実験では協力行動にかかるコストを明示していなかったため、参加者が協力行動に感じるコストは小さいと考えられる。Table 7-9 に示す通り、4場面それぞれでコストを感じる程度は中点 3.00 よりも下回っており、参加者は協力をさほどコストと感じていなかったことが示された。

Table 7-9

協力行動にコストを感じた程度

	ファン		ファン以外	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
援助行動（時間に遅れる）	2.38	1.03	2.51	1.04
援助行動（惣菜が買えない）	2.26	0.99	2.30	1.01
援助行動（バスで立つ）	2.27	1.03	2.32	1.03
援助行動（待ち合わせに遅刻）	2.83	1.18	2.93	1.19

援助期待 互惠性の期待の操作が成功したか確認するため、援助期待（Figure 7-14）を従属変数、集団所属性の知識条件を独立変数とした分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意だった（ $F(5, 4650) = 113.25, p < .01, \eta^2 = .02$ ）。Holm法にて条件間の下位検定を行うと、内集団相互条件（ $M = 14.59, SD = 3.32$ ）が最も高く、次に内集団一方条件（ $M = 13.62, SD = 3.20$ ）、内集団不明条件（ $M = 13.53, SD = 3.14$ ）、外集団相互条件（ $M = 13.54, SD = 3.16$ ）、外集団一方条件（ $M = 13.47, SD = 3.13$ ）の4条件が同列で高く、外集団不明条件（ $M = 13.24, SD = 3.02$ ）が最も低い値であった（ $p < .01$ ）。内集団相互条件で援助期待が最も高く互惠性の期待の操作は成功した。

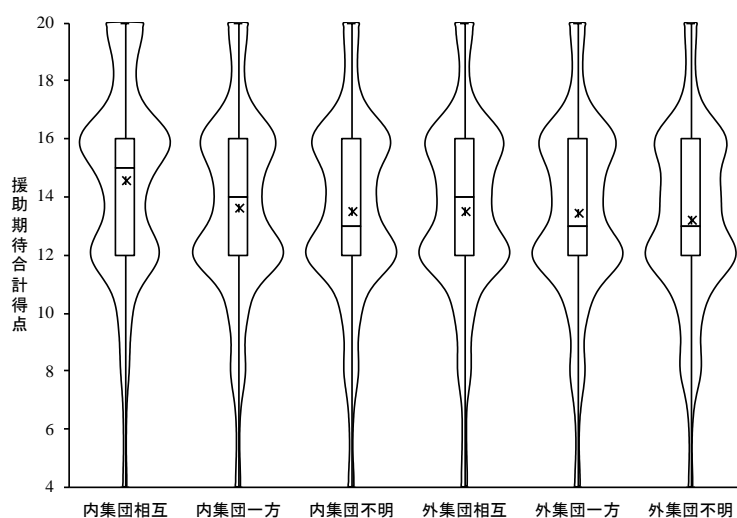


Figure 7-14. 援助期待のヴァイオリンプロット。

仮説の検証 次に仮説を検証するため、援助行動 (Figure 7-15) を従属変数とし集団所属性の知識条件を独立変数として分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意だった ($F(5, 4650) = 34.64, p < .01, \eta^2 = .00$)。条件間の下位検定 (Holm 法) を行くと、内集団相互条件 ($M = 15.79, SD = 3.15$) が最も高く、次に内集団一方条件 ($M = 15.41, SD = 3.13$) と外集団不明条件 ($M = 15.38, SD = 3.11$) が同等に高く、その次に内集団不明条件 ($M = 15.16, SD = 3.16$)、外集団相互条件 ($M = 15.20, SD = 3.19$)、外集団一方条件 ($M = 15.20, SD = 3.16$) の 3 条件は同列の値であった ($p < .01$)。内集団相互条件で最も協力的になり、内集団一方条件でも内集団不明条件よりは協力的になったことから SIT と BGR がともに支持された。

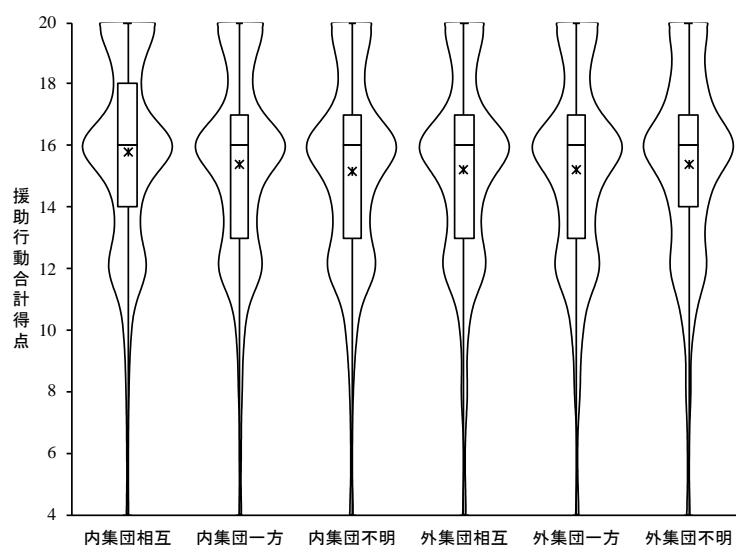


Figure 7-15. 援助行動のヴァイオリンプロット。

さらに、内／外集団への協力行動に差が見られるかを確認するため、内／外集団条件ともにデフォルトの協力行動である不明条件の値を相互条件、一方条件から除算した値を従属変数とした 2 (集団所属性：内集団／外集団) × 2 (条件：相互

条件／一方条件)の分散分析を行なった。その結果、集団所属性の主効果 ($F(1, 930) = 68.37, p < .01, \eta^2 = .03$)、条件の主効果 ($F(1, 930) = 26.78, p < .01, \eta^2 = .00$) が有意で交互作用効果 ($F(1, 930) = 36.18, p < .01, \eta^2 = .00$) も得られた。内集団相互 ($M = 0.63, SD = 1.83$)、内集団一方 ($M = 0.25, SD = 1.51$) 条件ともに外集団相互 ($M = -0.18, SD = 1.71$)、外集団一方 ($M = -0.18, SD = 1.66$) 条件とは異なる正の値を示しており、参加者は外集団より内集団に対して協力的になった。

内集団ひいきの背後にある心理過程 内集団ひいきの背後にある心理過程を明らかにするため、同一化と援助行動の相関分析と期待を統制した偏相関分析を行った (Table 7-10)。全ての条件で同一化と援助行動に正の相関関係が得られた。期待を統制してもその関連は残存した。相関係数と偏相関係数の間に差があるかを検討した結果 (z 検定)、内集団相互条件のみ 10%水準で期待によって同一化と援助行動の関連が弱まったことが示された (Table 7-11)。この同一化と援助行動の相関が弱いことから、SITの心理過程が強く働くという仮説は支持されなかった。

Table 7-10

同一化と援助行動の相関／期待を統制した後の偏相関係数

	内集団 相互	内集団 一方	内集団 不明	外集団 相互	外集団 一方	外集団 不明
相関	.18**	.15**	.15**	.14**	.14**	.19**
偏相関	.10**	.10**	.10**	.09**	.09**	.14**

** $p < .01$

Table 7-11

相 関 と 偏 相 関 の z 検 定

	内 集 団 相 互	内 集 団 一 方	内 集 団 不 明	外 集 団 相 互	外 集 団 一 方	外 集 団 不 明
z 値	1.78 [†]	1.12	1.18	1.07	1.15	1.20
増 減 値	-.08	-.05	-.05	-.05	-.05	-.05

[†] $p < .10$

補 足 的 分 析 SIT と BGR の 心 理 過 程 が 同 時 に 働 く 内 集 団 ひ
いきが生じたことを踏まえ，補足的な分析として性差の分析
を行った。援助行動を従属変数とし集団所属性の知識と性別
を独立変数とした二要因分散分析を行った結果，性別 ($F(1,$
 $929) = 30.90, p < .01, \eta^2 = .00$) と知識条件 ($F(5, 4645) = 33.58,$
 $p < .01, \eta^2 = .00$) の主効果が有意であった。交互作用効果は
得られなかった ($F(5, 4645) = 1.19, p = .31$)。条件間のパター
ンに違いはなく全体的に男性よりも女性の方が協力的になっ
た (Table 7-12)。

Table 7-12

男 女 間 の 援 助 行 動 の 平 均 値 と 標 準 偏 差

		内 相 互	内 一 方	内 不 明	外 相 互	外 一 方	外 不 明
フ ァ ン	男 性	15.33 (3.22)	15.03 (3.21)	14.75 (3.21)	14.77 (3.33)	14.73 (3.24)	14.94 (3.14)
	女 性	16.47 (2.91)	15.98 (2.91)	15.78 (2.98)	15.84 (2.86)	15.93 (2.90)	16.04 (2.96)
フ ァ ン 以 外	男 性	14.26 (3.64)	13.88 (3.56)	13.74 (3.55)	13.83 (3.58)	13.77 (3.56)	13.97 (3.50)
	女 性	15.80 (3.28)	15.44 (3.27)	15.29 (3.28)	15.25 (3.34)	15.26 (3.29)	15.36 (3.33)

考 察

研究 5-3 の 目 的 は ， 研 究 1 の シ ナ リ オ を 用 い て 外 集 団 を 設
定した状況では SIT の 心 理 過 程 が 強 く 働 く か 否 か を 検 討 す る

ことであった。実験の結果，研究 1 を再現するようにお互いに内集団成員であると分かる状況で最も協力的になり，続いて参加者が相手を内集団成員であると分かる状況でも統制条件より協力的になった。すなわち，SIT と BGR の両方が支持された。ただし，同一化と援助行動の相関はかなり弱く外集団を設定しても SIT の心理過程が強く働くことはなかった。

研究 5-3 では両理論の説明に当てはまらない結果も得られた。外集団不明条件で内集団一方条件と同程度の協力が見られたことである。外集団が登場する全ての条件では，「参加者と協力をする相手は実は外集団同士である」ということが教示された上で，もし，参加者と相手が外集団であると知っていれば／知らなければどのように行動するかを尋ねていた。この操作は，参加者がデフォルトで相手の所属性を勝手に推測する可能性を排除するために行われた。しかし，外集団同士であることが分かる状況よりも分からない状況で協力的になったことから，この操作自体が外集団に対するポジティブなステレオタイプや規範を生み出したとはいえない。

上記の結果の一つの解釈として，BGR に関連した内集団成員からの評価懸念が考えられる。相手を外集団であると分かる相互条件と一方条件では，たとえ協力をしなかったとしても内集団に対して優先的に協力を行ったと見なされ，評判を下げる行為であるとは限らない。しかし，相手が外集団であると分からない状況であるにもかかわらず，あからさまに協力をしなかった場合，自身の行動が公平性にかけるとして評判を下げるかもしれない。したがって，お互いに外集団であると分からない状況でより協力的になった可能性がある。ただし，この解釈はあくまで推測であるため，今後の追試によって同様の結果が得られるか否かを確認する必要がある。

研究 5-3 の課題 研究 5-3 では外集団への攻撃的な態度やステレオタイプ、実験後の同一化は測定していなかった。そのため、上記の解釈を検討することは困難であり、外集団脅威をどの程度感じていたかも明らかではない。横田・結城（2009）の主張によれば、SITの心理過程の働きを活性化させるには外集団脅威の知覚が重要となる。研究 5-3 で外集団がいない研究 1 よりも SIT の心理過程が強く働かなかったことから、外集団を設定するだけでは脅威が顕現化されないと考えられる。

研究 5-3 の課題解決 したがって、今後の研究ではライバルチームとの勝敗を提示したりするなど外集団脅威の手がかりを与えた上で、内／外集団への協力行動を測定する必要がある。今後は実在集団の対象を変えて集団同士を比較する検討が必要になるだろう。例えば、競争的であるが野球チームのファンと質的に異なる集団（ライバル関係の県）や競争が比較的少ないと思われる集団（音楽ファン）を対象とした比較が重要となる。本論文で得られた結果を踏まえ、さらなる研究で明らかにする必要があることは、SITの心理過程の働きを規定する状況要因として外集団脅威が適用されるか否かである。

第 8 章

総合考察

第 1 節 研究結果のまとめ

本論文の目的は，実在集団における SIT と BGR の妥当性を検討し両理論で説明される心理過程がどのような状況下で強く働くのかを明らかにすることであった。Table 8-1 に本論文の一連の研究結果のまとめを示す。

Table 8-1

一連の研究結果のまとめ

研究	方法	コスト	外 集 団 ／ 地 位	特 徴	結 果			
					SIT	BGR		
予 備	場 面 想 定 法	明 示 な し	な し	BGR 有 利	×	×		
1					○	○		
2		PD ゲ ー ム		コ ス ト あ り を 明 示	BGR 有 利	×	○	
3-1	×					×		
3-2	×					○		
3-3	×					○		
4	場 面 想 定 法	コ ス ト な し を 明 示		地 位 提 示	BGR 不 利	×	○	
5-1		コ ス ト あ り を 明 示	SIT 有 利			×	×	
5-2		明 示 な し				外 集 団 設 定	×	×
5-3							○	○

先行研究では実在集団の対象が国籍や大学の実習班に限られ，外集団の存在が顕現化により生じた交絡要因が内集団ひいきに影響していた。つまり，実在集団の性質を考慮した上で両理論の妥当性を同時に検討できる実験デザインはこれまで

に確立されていなかった。そこで、まずは交絡要因を統制する実験デザインを構築するための予備的研究を行なった。

予備的研究では、集団所属性の知識操作（清成，2002）を行い両理論の妥当性を同時に検討する手続きをとった。次に、匿名性が保持されていないことで生じる内集団成員からの評価懸念、特定の外集団の存在が顕現化され生じる評価懸念、ステレオタイプや規範という二つの交絡要因を統制した。具体的には場面想定法により匿名性を保持し、シナリオ内に外集団を設定しないことで統制を試みた。予備的研究で明らかになったことをまとめると、1) 大学生の間でファンのコア性を比較することは難しい（コアなファンが少ない）、2) 緊急性の高い援助行動や罰行動は個人差が反映されやすい、3) 罰行動、FNE、カープクイズと援助行動との関連は弱い、4) 集団所属性の知識操作を文章のみで行うのは難しい、5) 知識条件操作を実験参加者間で行うと個人の変化を検討できない。特に本論文における検討では4番目が非常に重要であり、自分と相手の状況（互いの集団所属性）を正しく認識できるような改善を行う必要があった。また、5番目についても協力行動の心理過程の変化を個人内で検討するため、条件を参加者内配置に変更する必要性があった。

研究1では上記の点を改善し、交絡要因を統制した上で両理論の妥当性を検討できる実験デザインを構築した。以下、改善点である。1) ファンのコア性ではなく自分がファンであるという認識でファンか否かを区別した、2) 因子分析を行い援助行動のシナリオ数を絞り、3) 罰行動のシナリオ／カープクイズ／FNEは援助行動との間に関連がなかったため、それらの項目は質問紙から削除した、4) 集団所属性の知識操作を明確にするため自分と相手の所属性を推測している図を使用し

た，5) 条件操作を参加者内配置にした。その後の研究で使用する実験デザインもほぼ研究1を踏襲している。

研究1では，場面想定法実験によって実在集団における内集団協力の心理過程の妥当性を検討した。その結果，SITとBGRの心理過程それぞれに基づく内集団ひいきが生じた。BGRに基づき内集団成員からの互惠性を期待できる状況で最も協力的になった。続いてSITに基づき相手が内集団成員であると分かるだけでも集団所属性が不明の相手よりは協力的になった。さらに，同一化と援助行動の関連を見ると Yamagishi & Kiyonari (2000) の主張する BGR のモデルに当てはまり，援助の期待を統制変数として投入すると内集団相互条件でのみ，同一化と援助行動の関連性が消失した。一方で，内集団一方条件では関連性は残存したままであった。よって，互惠性を期待できるか否かといった状況によって SIT と BGR いずれの心理過程が働くかが切り替わることが明らかになった。すなわち，実在集団でも MGP を用いた先行研究の Stroebe et al. (2005) の主張と一貫して，両理論の心理過程の働きがそれぞれ独立して内集団協力を引き起こすことが示唆された。

研究2では，研究1の追試を行った。研究1では SIT と BGR の心理過程が同時に独立して働くことが示されたが，この研究結果のみで両理論の妥当性が保証されると結論づけるのは早計である。また，参加者の対象が大学生のカープファンに限られていることや援助行動にどのくらい負担（コスト）がかかるのかを明示していなかったため非協力の誘引が弱い可能性があったという限界点があった。そこで，全国を対象とした Web 調査を行い一般人の野球ファン（全12チーム）に参加対象を拡大し，非協力の誘因を高めるため協力行動にかかるコストを明示した場面想定法実験を行った。協力行動のコスト

は BGR の心理過程の働きを促進するという主張 (Kiyonari et al., 2002) がある。協力行動のコストを明示した結果, 上記の主張通り, 互惠性を期待できる状況で最も内集団協力が生じ BGR が支持された。一方で, 相手を内集団であると分かるだけでは統制条件より協力的になることはなかった。すなわち, 協力行動のコストがかかる場合には SIT よりも BGR の心理過程が相対的に強く働くということが示唆された。

研究 3-1 では場面想定法である研究 2 の結果が, 行動実験でも再現されるか否かを検討した。研究 2 では協力行動にかかるコストをシナリオの内容によって明示したが, そこでのコストは参加者の損得には影響しないため真の協力行動であるとは断言できなかった。そこで, 協力行動を測定する指標として一般的な 1 回限りの PD ゲームを用いて行動レベルの内集団協力を検討した。その結果, 研究 3-1 では集団所属性の知識操作が成功せず条件間の提供金額に差がみられなかった。ただし, 参加者が少ないことと有意ではないものの協力行動のパターンや分布に違いがあったことから, 研究 3-2 では実験手続きを改良した上で同様の実験を行った。

研究 3-2 及び研究 3-3 では研究 3-1 の結果を受け, 実験手続きを以下のように改良した。1) 「野球チームを応援するか否かで行動パターンが変わるかを調べる研究であること」という教示を強調した。2) 神他 (1996) の手続きを参照して実験開始を 5 分遅らせ, 内集団協力を正当化できるようにした。3) 実際に 8 人揃わない場合でも, 8 人全員が揃っているように実験を実施した。4) 研究 3-1 の相互不明条件ではデフォルトの協力行動を見るために何も告げない状況で PD ゲームを行ったが, 他の条件の手続きと整合性を取るために集団所属性の知識用紙 (図) を使用し「互いにどこのファンか分からない」

ことを教示した。5) 操作チェックの項目を改良した。以上の改変を行ったところ、集団所属性の知識操作が成功し条件間で協力行動のパターンに違いが見られた。その結果、1回限りのPDゲームという行動指標を用いてもコストがかかる協力にはBGRの心理過程が強く働くことが明らかになった。その一方で、SITは支持されなかった。お金という明確なコストが存在する場合、BGRの心理過程が働く内集団協力が生じた。

研究4では、カープファンが極端に少なかったため、ファンではないがカープが好きな人を対象とした。研究3-2及び研究3-3では協力行動にコストがかかるとBGRの心理過程が強く働くことが明らかになった。しかし、コストのかからない状況との比較はされていなかった。そこで、研究4では協力行動にはコストがかからないことを明示した場面想定法実験を行い、両理論の妥当性を検討した。協力行動のコストがかからない場合には、集団内に互惠性を期待しにくくなりBGRの心理過程の働きが弱まると予測される。実験の結果、協力行動のコストがかからないことを明示してもBGRに基づく内集団協力が生じた。したがって、人々は些細な協力であっても互惠性を期待して協力的になることが示唆された。ただし、「カープが好き」と参加者は同一化の程度が弱く、実在集団としてのカテゴリーの意味を持たなかったと考えられる。同一化の強い野球ファンにおいて結果が再現されるかは今後の検討課題である。

研究5-1では外集団の存在を顕現化することによって、SITの心理過程が引き出されやすくなるかを検討した。これまでの研究では、協力行動のコストがBGRの心理過程の働きを強めることが明らかにされた。一方で、SITの心理過程の働きを強くする状況要因が明らかになっていない。特定の外集団の存在が顕現化されることで交絡要因が生じた（牧村・山岸，

2003b; 三船他, 2007; Yamagishi et al., 2005) という背景から, 研究 5-1 では外集団を設定するのではなく地位を提示し集団関係の明確化を図った。地位によって集団間関係が明確になれば, SIT が支持されやすい状況になる。研究 2 の協力行動にかかるコストを明示したシナリオを使用した上で地位を提示し, SIT が支持されるか否かを検討した。その結果, 地位の効果はみられず, 両理論がともに支持されなかった。地位に関係ない協力行動のパターンでは, 互惠性が期待できるか否かにかかわらず内集団協力が生じた。しかし, 同一化と援助行動に有意な相関は得られず, そこで生じた内集団協力は SIT の心理過程が働いた結果ではなかった。

これまで交絡要因の影響を懸念して外集団を設定していなかったが, 研究 5-2 では特定の外集団名を出さない形式で SIT の心理過程の働きを引き出される状況を作り出した。ただし, 外集団を設定した場合には, 交絡要因の影響が生じる可能性もあった。そこで, まずは集団所属性の知識操作を行わず, 協力相手が内集団か外集団かのみを操作して内集団ひいきを検討した。実験の結果, 外集団よりも内集団をひいきする協力傾向がみられたものの, その差はかなり小さかった。この結果から「相手が内集団成員である又は外集団成員である」ことを文章のみで教示した場合, 条件操作の理解が不十分になる可能性が示された。また, この調査では複数の調査に対して回答を行わなければならなかったため, 参加者が教示文を読みとばして乱雑な回答を行なった可能性もあった。

研究 5-3 は, 研究 5-2 を踏まえ集団所属性の知識操作の図を使用した。特定のチームのファンを外集団として設定するのではなく, 自分の応援するチーム以外のファン (11 チームのうちのどれか) を外集団であると教示した。研究 5-3 では外集

団の存在による影響を検討するため、コストを明示していない研究 1 のシナリオによって内集団ひいきを測定した。その結果、外集団を設定しても SIT と BGR それぞれの心理過程に基づく内集団ひいきが生じ、研究 1 の結果が再現された。つまり、外集団を設定しても評価懸念、ステレオタイプや規範が内集団ひいきの生起を阻害することはなかったが、SIT の心理過程が活性化することはなかった。このことから、今後は外集団の存在を顕現化ではなく、横田・結城（2009）の主張を踏まえ「外集団からの脅威」が SIT の心理過程の働きを規定する状況要因になるか否かを検討する必要がある。

本論文で明らかとなったことは以下の 3 点である。一つ目は、SIT と BGR が相互背反の理論ではなく、それぞれの心理過程が状況に応じて独立に働くことによって内集団協力／内集団ひいきが生じることである。二つ目は、BGR の心理過程の働きを強める要因の一つが、協力行動のコストであるということである。ただし、協力行動のコストがかからないと強調した時でもカーブが好き人では BGR に基づく内集団協力が生じたことはこれと矛盾するものであり、今後の検討課題である。三つ目に、SIT の心理過程の働きを引き出すには外集団の存在を顕現化するだけでは難しいことである。単に外集団を設定しただけでは SIT の心理過程の働き活性化するには不十分であり、外集団脅威を知覚する必要があると考えられる。

実験手続き上の留意点 実在集団における内集団協力／内集団ひいきを検討する実験において、手続き上の重要な留意点を挙げる。まず、集団所属性の知識操作は自分と相手の所属を直感的に認識できる図を使用しないと理解することが難しい。次に、行動実験では内集団協力／内集団ひいきを正当化するために、参加者を待機させる時間を設けた方が良い。また、

行動実験では何を行う実験なのかを教示した方が参加者は集団所属性を意識しやすい。その際に参加者の報酬が相手に決められるという交換感覚のリアリティを保つため、他の参加者が全員そろっているように実験者が振る舞う必要がある。

第 2 節 状況に依存する SIT と BGR

Tajfel et al. (1971) が生み出した MGP は、内集団をひいきすべきと考えられる要因を可能な限り排除できる画期的な実験デザインであった。集団状況を統制できる利便性と結果の妥当性を高められるという利点から、社会心理学において内集団ひいきを検討する一般的な手法として用いられてきた。その MGP を用いた検討を通じて、SIT と BGR の妥当性がそれぞれ頑健に保証されてきた (Brewer, 1979; 神・山岸, 1997; 清成, 2002; Simpson, 2003, 2006; Tajfel et al., 1971; Tajfel & Turner, 1979, 1986; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi & Mifune, 2008)。

また、MGP で行う手続きは非常にシンプルで実験間の統一がとりやすい。このことは、メタ分析などの複数の研究間の比較を容易にすると考えられる。しかし、この MGP によって両理論の妥当性が頑健に保証されてきたが、現実場面でもその結果が再現されるかは不明である。なぜなら、実在集団を対象として内集団協力／内集団ひいきを検討する実験デザインは確立されておらず、MGP における先行研究との比較が難しいからである。例えば、実在集団の研究では SIT の先行要因である同一化が測定されていない、測定されていても直接的な数項目である場合も多い。自己と集団を同じ存在とみなす同一化を「〇〇集団と同一化しているか否か」といった項目のみで検討したとしても、その構成概念の妥当性及び信頼性は低いといえる。また、実験者が直接的にコミュニケーションをとる方法では、要求特性を反映した可能性を否定できない。内集団協力／内集団ひいきを行動指標で検討した研究の数が少ないことも、両集団間の比較を困難にする原因の一つである。

本論文の目的はすでに MGP では SIT と BGR の妥当性が保証されていることを踏まえ、「両理論で説明される内集団協力／内集団ひいきの心理過程が実在集団においても働くのか否か」を検討することであった。さらに、従来 SIT と BGR は相互背反の理論としてそれぞれの妥当性のみが検討されてきたが、本論文では SIT と BGR それぞれ独立した心理過程が働くことで内集団ひいきが生じるという近年の立場を採用した。この立場では、SIT と BGR の心理過程が働くか否かを規定する状況要因の存在が前提とされている。Stroebe et al. (2005) では相互依存性、横田・結城 (2009) では外集団脅威を両理論の心理過程の働きを左右する要因として挙げている。実在集団においても SIT か BGR のみの心理過程が働くとの根拠はなく、社会環境や状況が変動しやすい現実場面では人々は状況や場に応じた行動をとると仮定し両理論の妥当性を検討した。

一連の研究で実在集団として野球ファンを用いた理由は、それが両理論の心理過程がどちらも引き出されやすい集団であると考えたためである。既述の通り、野球ファンの集団の特徴として「自分の応援するチームとライバル関係にあるチームと勝敗を競い合うこと」と「ファン同士で日常的な交流がある」ことが挙げられる。まず、ライバルの存在によって外集団の認識が強化されやすく、それに伴って同一化が強くなる。集団間の勝敗が明確なスポーツ競技では、勝敗自体に物質的な利益がなくとも身体的な興奮を喚起させたり (Branscombe & Wann, 1992)、情動に関わる脳部位を賦活させたりする (Cikara et al., 2011) などの影響を与える。

先行研究でよく用いられてきた国籍という集団カテゴリーは、集団そのものにコミットしにくく複雑な集団構造を持つ。自国をひいきする選択をすれば、国内で他国よりも有利な制

度改革が行われたり，資源が潤沢になったりすることに結びつき，ひいては個人の利益になる合理的な決定である。一方で，野球ファンの集団で内集団協力／内集団ひいきを行うことに対して経済的な利益を増大させるといった合理的な理由はない。その意味で，本論文で明らかにしてきた野球ファンにおける内集団協力／内集団ひいきから，その他の実在集団にも当てはまる広義な説明が可能であると考えられる。例えば，経済的な利益を伴わない学級などで分けられた集団でも本論文の結果が適用される可能性は高いことが示唆される。

さらに，実在集団において SIT と BGR の心理過程がそれぞれ同時に働くことを示した本論文によって，内集団協力／内集団ひいきを説明する上で新たな知見を示した。先行研究では，MGP では BGR，実在集団は SIT に基づく内集団ひいきが生じる傾向にあった。しかし，本論文の一連の研究において実在集団における実験デザインを精緻化したことによって集団の性質で両理論の説明力が規定されるのではなく，両理論の心理過程がどちらも内集団ひいきの生起に寄与することが明らかになった。本論文の結果から，協力行動のコストによって BGR の心理過程が活性化して内集団協力が生じることが示唆された。しかし，Figure 8-1 に示す通り，SIT の心理過程の働きを強くする状況要因はまだ明らかになっていない。

SIT と BGR の心理過程が両方とも内集団ひいきの生起に寄与したという結果 (Figure 8-1) は，人々が状況に応じた適応課題を解決するために行動していることを意味している。そして，この適応課題の想起を顕現化させるのが状況要因であるといえる。さらなる検討が必要ではあるが，内集団の存在を脅かす外集団からの脅威がある場合，内集団を維持・存続するために行動することが適応課題となり，SIT の心理過程が働き

やすくなると予測される。一方で，外集団脅威が存在せず協力行動のコストなどにより社会的な交換関係が想起される場合には，集団内で長期的な利益を得ることが適応課題となり，BGRの心理過程が強く働くことが明らかになった。両理論の心理過程から内集団協力／内集団ひいきを引き起こすという結果は同じであるが，それぞれの状況に応じた適応課題によって心理過程の働きが規定されると考えられる。すなわち，両理論が同時に説明力を持つという前提に則った本論文の研究アプローチから「人々はいかなる状況下で適応課題に沿った心理過程が働き，内集団に対して協力的になるのか」を理解することが可能となった。

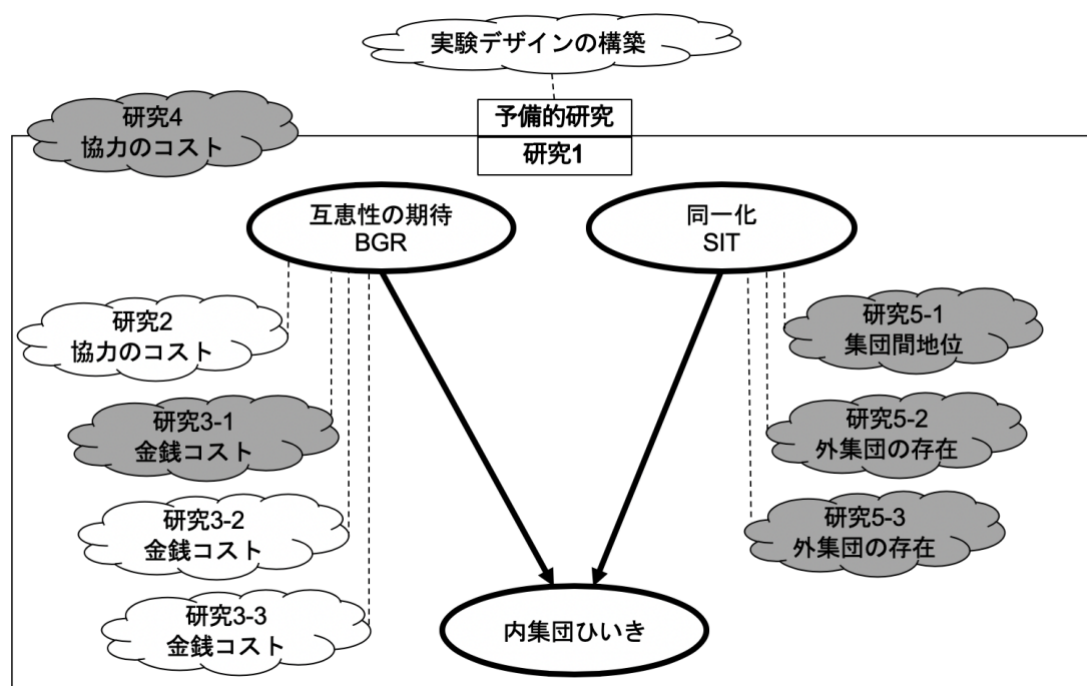


Figure 8-1. 本論文で明らかにされた状況要因

注) 白色部分が明らかにされた状況要因であり，灰色部分は明確な結果が得られなかった研究である。研究4は実験対象者が異なる。

第 3 節 今後の研究課題と展望

今後の研究課題の一つに、野球ファン以外の実在集団に応用できる可能性を検討することが挙げられる。先に野球ファンの集団は他の実在集団にも一般化できる可能性を述べたが、集団間の上位目標が存在する集団はこの限りでない。例えば、医療従事者には「患者の生命を維持し適切な世話をする」という医師や看護師同士が協力し合わなければ達成することができない上位目標が存在する。こうした集団では、内集団ひいきそのものが起こりにくく、SIT や BGR の説明力の範囲を超えた公平な行動が見られたことも明らかになっている。本論文で示した、協力行動のコストや外集団の存在といった状況要因が様々な実在集団の性質とどのような関わりや影響を及ぼすのかを検討し、両理論の説明力の範囲をさらに体系化する必要があるだろう。

次に、SIT の心理過程を活性化させると考えられる外集団脅威の影響についてさらなる検討が必要であろう。外集団の存在を提示し内集団ひいきを検討したのは研究 5-3 のみであり、その他の研究では内集団協力のみを検討してきた。研究 5-3 では内／外集団の間に相対的な差をつける内集団ひいきが生じたものの、条件間の援助行動の差はかなり小さいものであった。この結果は、研究 2 と同様に Web 調査における一定の限界点（三浦・小林，2015）であると考えられる。しかし、内集団協力と外集団差別が表裏一体であるのか、あるいは別々で生じる現象であるのかを検討するためには、条件間の差の小ささが実験状況に影響されたものなのか否かを検討する必要がある。特に、研究 5-3 では外集団に対するデフォルトの協力行動の値を引いた相互条件と一方条件では、有意にゼロより

も低い値になったものの、元の値では内集団の条件と比べてそれほど大きな差は得られなかった。外集団不明条件で内集団一方条件と同程度の協力がみられた結果は、本当は外集団成員同士であるにもかかわらず、その情報が分からなければ協力をすべきだという公平規範を反映した可能性がある。この結果から、実在集団では内／外集団成員からの評価懸念の影響を受け協力行動のパターンが変化することが示唆された。こうした MGP と実在集団における集団性質の違いを考慮しながら、慎重に両者を比較検討できる研究を行い、両理論の妥当性および状況要因をさらに詳細に検討できる実験スタイルを確立していく必要があるだろう。

また、研究 5-3 では外集団の存在を提示しても提示していない研究 1 と変わらず SIT と BGR が支持されるという結果が得られた。したがって、続く研究では外集団の存在を提示するだけではなく内集団の存在を脅かす外集団の脅威が認識されるような実験手法に改変を行なった検討をする必要がある。

さらに、近年では自己の基本的な欲求を内集団ひいきの原動力とする SIT の妥当性を検討するために身体的な反応や生理指標を同時に測定することも多い (Cikara et al., 2011) ことから、質問紙以外での心理過程の検討方法も考慮していく必要がある。なぜなら、SIT では自己の基本的な欲求を説明の前提とするため、説明そのものがトートロジーに陥っているとの批判を受けやすいからである。ここでのトートロジーとは、先行要因である同一化が強ければ内集団協力／内集団ひいきが生じるという説明に対して、内集団協力／内集団ひいきが生じれば同一化が高まると言い換えることができるという意味である。生理指標を測定することによって、このトートロジーが完全に解消されるわけではないが、少なくとも

BGR で説明されるヒューリスティックとは異なる反応が確認される場合、SIT の妥当性を保証することに役立つと考えられる。例えば、集団単位で生理指標を測定し反応が同期している現象が確認されたならば、SIT の先行要因である同一化をより説得力のある要因として捉えることができる。同じく外集団脅威の知覚を判断する際にも、身体的な反応は有用な指標になると期待される。

第 4 節 結 語

現実場面における内集団ひいきは SIT と BGR の心理過程で説明できるのか？実験室にて統制された状況下で明らかにされた現象は，日常場面でも再現されることが前提とされてきたため，上記の問いにはあまり着目されてこなかった。しかし，近年の社会心理学の研究領域では実験室にて統一された実験手法や手続きをとっていても，結果の再現可能性が全体的に低いことが注目されている（藤島・樋口，2016；池田・平石，2016）。再現性の低さには複数の研究間の実験手続きの相違だけではなく，分析を進捗する上での統計上の問題も含まれているものの，総じて結果の再現性を担保するには地道な追試が解決策の一つであると考えられる。その意味でも，実在集団を対象として MGP で得られた結果を確認することは，今後の内集団ひいき研究を展開して行く上で，非常に重要であるといえる。

SIT と BGR の心理過程がそれぞれ独立して働き内集団ひいきに寄与するとの本論文の知見は，従来の内集団ひいき研究にはなかった新たな視点を与えた。特に，実験デザインを精査することによって MGP では棄却されつつあった SIT，反対に実在集団で支持されなかった BGR のどちらも内集団協力／内集団ひいきの生起に寄与する理論として妥当であることを示したことが最も貢献を果たした点である。SIT では自己に焦点を当てて集団間の関係性を重視し，BGR では適応的な視点から集団内の関係性に焦点を当てていた。両理論は全てにおいて互いに対照的な説明を行っているが，いずれの関係性も個人にとって重要であることが示唆された。SIT の妥当性を検討する研究者たちが「葛藤がなくとも内集団ひいきは生じる」こ

とを示すために生み出した MGP は，両理論の妥当性や信頼性を検討するためには画期的な実験手法であった。しかし，MGP は同時に集団カテゴリーが個人にとってどういった意味を与え，内集団協力／内集団ひいきに影響するのかを検討する機会を奪ってしまった。人間の集団状況における行動を説明する上で，実在集団を対象とした研究は実験室で得られた基礎的な知見を応用するために必要不可欠である。

引用文献

- Abrams, D., Rutland, A., & Cameron, L. (2003). The development of subjective group dynamics: Children's judgments of normative and deviant in-group and out-group individuals. *Child Development*, 74, 1840-1856.
- Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., & Sanford, R. N. (1950). *The authoritarian personality*. New York: Harper and Brothers.
- (アドルノ, T. W., フランケル=ブランズウィック, E., レヴィンソン, D. J., サンフォード, R. N. 田中 義久・矢沢 修次郎・小林 修一 (監訳) (1980). 現代社会学体系第12巻 権威主義的パーソナリティ 青木書店)
- Balliet, D., Wu, J., & De Dreu, C. K. W. (2014). Ingroup favoritism in cooperation: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 140, 1556-1581.
- Banaji, M. R., Hardin, C., & Rothman, A. J. (1993). Implicit stereotyping in person judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 272-281.
- Bayton, J. A., Austin, L. J., & Burke, K. R. (1965). Negro perception of negro and white personality traits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 250-253.
- Bem, D. J., & McConnell, H. K. (1970). Testing the self-perception explanation of dissonance phenomena: On the salience of premanipulation attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 14, 23-31.
- Bennett, M., Lyons, E., Sani, F., & Barrett, M. (1998). Children's subjective identification with the group and in-

- group favoritism. *Developmental Psychology*, 34, 902-909.
- Berendt, J., & Uhrich, S. (2016). Enemies with benefits: The dual role of rivalry in shaping sports fans' identity. *European Sport Management Quarterly*, 16, 613-634.
- Bettelheim, B., & Janowitz, M. (1964). *Social change and prejudice*. New York: Free Press of Glencoe.
- Billig, M., & Tajfel, H. (1973). Social categorization and similarity in intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 3, 27-52.
- Billings, A. C., Devlin, M. B., & Brown, K. A. (2016). BIRGing with the best; CORFing for the country: Fan identification and nationalism during the 2014 FIFA World Cup. *Journal of Global Sport Management*, 1, 49-65.
- Blake, R. R., & Mouton, J. S. (1961). Competition, communication, and conformity. In I. A. Berg & B. M. Bass (Eds.), *Conformity and deviation* (pp. 199-229). New York: Harper and Brothers.
- Branscombe, N. R., & Wann, D. L. (1991). The positive social and self concept consequences of sports team identification. *Journal of Sport and Social Issues*, 15, 115-127.
- Branscombe, N. R., & Wann, D. L. (1992). Physiological arousal and reactions to outgroup members during competitions that implicate an important social identity. *Aggressive Behavior*, 18, 85-93.
- Branthwaite, A., Doyle, S., & Lightbown, N. (1979). The balance between fairness and discrimination. *European Journal of Social Psychology*, 9, 149-163.

- Brewer, M. B. (1979). In-group bias in the minimal intergroup situation: A cognitive-motivational analysis. *Psychological Bulletin*, 86, 307-324.
- Brewer, M. B. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love or outgroup hate? *Journal of Social Issues*, 55, 429-444.
- Brewer, M. B., Manzi, J. M., & Shaw, J. S. (1993). Ingroup identification as function of depersonalization, distinctiveness, and status. *Psychological Science*, 4, 88-92.
- Brewer, M. B., & Silver, M. (1978). Ingroup bias as a function of task characteristics. *European Journal of Social Psychology*, 8, 393-400.
- Brown, R., Condor, S., Mathews, A., Wade, G., & Williams, J. (1986). Explaining intergroup differentiation in an industrial organization. *Journal of Occupational Psychology*, 59, 273-286.
- Brown, R. J., Tajfel, H., & Turner, J. C. (1980). Minimal group situations and intergroup discrimination: Comments on the paper by Aschenbrenner and Schaefer. *European Journal of Social Psychology*, 10, 399-414.
- Brown, R. & Williams, J. (1984). Group identification: The same thing to all people? *Human Relations*, 37, 547-564.
- Buhl, T. (1999). Positive-negative asymmetry in social discrimination: Meta-analytical evidence, *Group Processes and Intergroup Relations*, 2, 51-58.

- Buss, A. H., & Durkee, A. (1957). An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 343-349.
- Campbell, D. T. (1965). Ethnocentric and other altruistic motives. In D. Levine (Ed.), *Nebraska symposium on motivation* (pp. 283-311). Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Sloan, L. R. (1976). Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 34, 366-375.
- Cikara, M., Botvinick, M. M., & Fiske, S. T. (2011). Us versus them: Social identity shapes neural responses to intergroup competition and harm. *Psychological Science*, 22, 306-313.
- クリシェ株式会社 (2014). とうかさん 広島 の 歴史
Retrieved from <http://hiroshima-mall.com/fes/toukasan.html>
(2018 年 12 月 20 日)
- Commins, B., & Lockwood, J. (1979). Social comparison and social inequality: An experimental investigation of intergroup behaviour. *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 18, 285-289.
- Crosby, F. (1976). A model of egoistical relative deprivation. *Psychological Review*, 83, 85-113.
- Diab, L. N. (1970). A study of intragroup and intergroup relations among experimentally produced small groups. *Genetic Psychology Monographs*, 82, 49-82.
- Dietz-Uhler, B., Harrick, E. A., End, C., & Jacquemotte, L. (2000). Sex differences in sport fan behavior and reasons

- for being a sport fan. *Journal of Sport Behavior*, 23, 219-231.
- Dollard, J., Miller, N. E., Doob, L. W., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. (1939). *Frustration and aggression*. New Haven, CT: Yale University Press.
- (ドラーズ, J., ミラー, N.E., ドーヴ, W., マウラー, O.H., シアズ, R.R. 宇津木 保 (監訳) (1959). 欲求不満と暴力 誠信書房)
- Doosje, B., Spears, R., & Ellemers, N. (2002). Social identity as both cause and effect: The development of group identification in response to anticipated and actual changes in the intergroup status hierarchy. *British Journal of Social Psychology*, 41, 57-76.
- Eagly, A. H., & Steffen, V. J. (1984). Gender stereotypes stem from the distribution of women and men into social roles. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 735-754.
- Ekeh, P. (1974). *Social exchange theory: The two traditions*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Ellemers, N. (1993). The influence of socio-structural variables on identity management strategies. *European Review of Social Psychology*, 4, 27-57.
- Ellemers, N., Doosje, B. J., Van Knippenberg, A., & Wilke, H. (1992). Status protection in high status minority groups. *European Journal of Social Psychology*, 22, 123-140.
- Ferguson, C. K., & Kelley, H. H. (1964). Significant factors in overevaluation of own-group's product. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 69, 223-228.

- Festinger, L. (1957). *A theory of cognitive dissonance*.
Stanford, CA: Stanford University Press.
- Foddy, M., Platow, M. J., & Yamagishi, T. (2009). Group-based trust in strangers: The role of stereotypes and expectations. *Psychological Science*, 20, 419-422.
- 藤島 喜嗣・樋口 匡貴 (2016). 社会心理学における “p-hacking” の実践例 心理学評論, 59, 84-97.
- Gaertner, L., & Insko, C. A. (2000). Intergroup discrimination in the minimal group paradigm: Categorization, reciprocation, or fear? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 77-94.
- Gallagher, E & Cairns, E (2011). National identity and in-group/out-group attitudes: Catholic and Protestant children in North Ireland. *European Journal of Developmental Psychology*, 8, 58-73.
- Gaunt, R., Sindic, D., & Leyens, J-P. (2005). Intergroup relations in soccer finals: People's forecasts of the duration of emotional reactions of in-group and out-group soccer fans. *Journal of Social Psychology*, 145, 117-126.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4-27.
- Grant, P. R. (2008). The protest intentions of skilled immigrants with credentialing problems: A test of a model integrating relative deprivation theory with social identity theory. *British Journal of Social Psychology*, 47, 687-705.
- Harrell, W. A. (1981). Verbal aggressiveness in spectators at professional hockey games: The effects of tolerance of

- violence and amount of exposure to hockey. *Human Relations*, 34, 643-655.
- Hartstone, M., & Augoustinos, M. (1995). The minimal group paradigm: Categorization into two versus three groups. *European Journal of Social Psychology*, 25, 179-193.
- Hayashi, N., Ostrom, E., Walker, J., & Yamagishi, T. (1999). Reciprocity, trust, and the sense of control: A cross-societal study. *Rationality and Society*, 11, 27-46.
- Hennessy, J., & West M. A. (1999). Intergroup behavior in organizations: A field test of social identity theory. *Small Group Research*, 30, 361-382.
- 広島県 (2012). 統計情報 人口移動統計調査 Retrieve from <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/toukei/jinkouidoutyosa.html> (2018 年 12 月 20 日)
- Hoffman, C., & Hurst, N. (1990). Gender stereotypes: Perception or rationalization? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 197-208.
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social identification: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.
- Hogg, M. A., Fielding, K. S., Johnson, D., Masser, B., Russell, E., & Svensson, A. (2006). Demographic category membership and leadership in small groups: A social identity analysis. *Leadership Quarterly*, 17, 335-350.
- Homans, G. C. (1958). Social behavior as exchange. *American Journal of Sociology*, 63, 597-606.
- 堀田 結孝・山岸 俊男 (2010). 集団内における互惠性の適応基盤 心理学研究, 81, 114-122.

- 池田 功毅・平石 界 (2016). 心理学における再現可能性危機
——問題の構造と改善策—— 心理学評論, 59, 3-14.
- 石田 淳一 (2015). 相対的剥奪の社会学——不平等と意識のパ
ラドックス—— 東京大学出版会
- 石川 利江・佐々木 和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度
FNE・SADS の日本版標準化の試み 行動療法研究, 18, 10-
17.
- 神 信人・篠塚 寛美 (1996). 相互依存認知と協力傾向 日本
社会心理学会第 37 回大会発表論文集, 154-155.
- 神 信人・山岸 俊男 (1997). 社会的ジレンマにおける集団協
力ヒューリスティクスの効果 社会心理学研究, 12, 190-
198.
- 神 信人・山岸 俊男・清成 透子 (1996). 双方向依存性と“最
小条件集団パラダイム” 心理学研究, 67, 77-85.
- Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in
system-justification and the production of false
consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33,
1-27.
- Kaiser, C. R., & Pratt-Hyatt, J. S. (2009). Distributing
prejudice unequally: Do whites direct their prejudice
toward strongly identified minorities? *Journal of
Personality and Social Psychology*, 96, 432-445.
- Karp, D., Jin, N., Yamagishi, T., & Shinotsuka, H. (1993).
Raising the minimum in the minimal group paradigm.
Japanese Journal of Experimental Social Psychology, 32,
231-240.

- Katz, D., & Braly, K. (1933). Racial stereotypes of one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 28, 280-290.
- Kenny, D. A., Gomes, S. B., & Kowal, C. (2015). The Intergroup Social Relations Model: ISRM. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, 19, 152-165.
- Kelly, B. R., & McCarthy, J. F. (1979). Personality dimensions of aggression: Its relationship to time and place of action in ice hockey. *Human Relations*, 32, 219-225.
- 清成 透子 (2002). 一般交換システムに対する期待と内集団ひいき——閉ざされた互酬性の期待に関する実験研究——*心理学研究*, 73, 1-9.
- Kiyonari, T., Tanida, S., & Yamagishi, T. (2000). Social exchange and reciprocity: Confusion or a heuristic? *Evolution and Human Behavior*, 21, 411-427.
- 黒石 憲洋・森口 和 (2003). 社会的支配志向 (SDO) 尺度日本語版作成の試み(1) ——項目得点および尺度得点の検討—— *日本心理学会第67回大会論文集*, 97.
- Leach, C. W., Mosquera, P. M.R., Vliek, M. L. W., & Hirt, E. (2010). Group devaluation and group identification. *Journal of Social Issues*, 66, 535-552.
- Levine, M., Prosser, A., Evans, D., & Reicher, S. (2005). Identity and emergency intervention: How social group membership and inclusiveness of group boundaries shape helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 443-453.
- Liebe, U., & Tutic, A. (2010). Status groups and altruistic behaviour in dictator games. *Rationality and Society*, 22,

353-380.

Liebkind, K., Henning-Lindblom, A., & Solheim, E. (2006). Ingroup favouritism and outgroup derogation among Swedish-speaking Finns. *Nordic Psychology*, 58, 262-278.

牧村 洋介・山岸 俊男 (2003a). 成員間に相互作用がある集団における集団間報酬分配に関する実験研究 心理学研究, 73, 488-493.

牧村 洋介・山岸 俊男 (2003b). 集団カテゴリーと集団間行動——国籍カテゴリーを用いた実験研究—— 21世紀 COE 「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No.19, 1-18.

真島 理恵・高橋 伸幸 (2005). 間接互惠性の成立——非寛容な選別主義に基づく利他行動の適応的基盤—— 心理学研究, 76, 436-444.

McCarthy, J. D., & Zald, M. N. (1977). Resource mobilization and social movements: A partial theory. *American Journal of Sociology*, 82, 1212-1241.

Medeiros, M. (2017). National frenemies: linguistic intergroup attitudes in Canada. *Ethnic and Racial Studies*. doi: 10.1080/01419870.2017.1406610

三浦 麻子・小林 哲郎 (2015). オンライン調査モニタの Satisfice はいかに実証的知見を毀損するか 社会心理学研究, 31, 120-127.

三船 恒裕・牧村 洋介・山岸 俊男 (2007). 国籍カテゴリーを用いた「閉ざされた一般的互酬性仮説」の検証 21世紀 COE 「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No.68, 1-10.

Miller, N. E., & Bugelski, R. (1948). Minor studies of

- aggression: II. The influence of frustrations imposed by the in-group on attitudes expressed toward out-groups. *Journal of Psychology*, 25, 437-442.
- Moghaddam, F. M., & Stringer, P. (1986). Trivial and important criteria for social categorization in the minimal group paradigm. *Journal of Social Psychology*, 126, 345-354.
- Mullen, B., Brown, R., & Smith, C. (1992). Ingroup bias as a function of salience, relevance, and status: An integration. *European Journal of Social Psychology*, 22, 103-122.
- Mummendey, A., Klink, A. & Brown, R. (2001). Nationalism and patriotism: National identification and out-group rejection. *British Journal of Social Psychology*, 40, 159-172.
- 中川 裕美 (2018a). 野球ファンの内集団協力が集団間地位が及ぼす影響 対人社会心理学研究, 18, 61-69.
- 中川 裕美 (2018b). 好きな野球チームを集団カテゴリーに用いた内集団協力の検討——協力のコストがかからないシナリオによる場面想定法実験—— 広島修大論集, 59, 33-47.
- 中川 裕美・横田 晋大・中西 大輔 (2015). 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討——広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験—— 社会心理学研究, 30, 153-163.
- 中川 裕美・横田 晋大・中西 大輔 (2019). 野球チームのファンの内集団協力に関する場面想定法実験 心理学研究 Advance online publication. doi.org/10.4992/jjpsy.90.17335
- 成澤 浩一・持木 秀仁 (編) (2014). 野球次郎 VOL.1 広島東洋

カープ大事典～「野球太郎」特別編集（廣済堂ベストムック 272 号）廣済堂出版

Newson, M., Bortolini, T., Buhrmester, M., Silva, S. R., Aquio, J. N. Q., & Whitehouse, H. (2018). Brazil's football warriors: Social bonding and inter-group violence. *Evolution and Human Behavior*, 39, 675-683.

日本野球機構 (2012, 2016). 広島東洋カープ年度別成績 (1957-2018)
Retrieved from http://npb.jp/bis/teams/yearly_c.html
(2018 年 12 月 20 日)

Oaker, G., & Brown, R. (1986). Intergroup relation in a hospital setting: A further test of social identity theory. *Human Relations*, 39, 767-778.

Olson, M. (1965). *The logic of collective action: Public goods and the theory of groups*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Pastore, N. (1950). A neglected factor in the frustration-aggression hypothesis: A comment. *Journal of Psychology*, 29, 271-279.

Platow, M. J., Durante, M., Williams, N., Garrett, M., Walshe, J., Cincotta, S., Lianos, G., & Barutchu, A. (1999). The contribution of sport fan social identity to the production of prosocial behavior. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, 3, 161-169.

Pratto, F., Sidanius, J., & Levin, S. (2006). Social dominance theory and the dynamics of intergroup relations: Taking stock and looking forward. *European Review of Social Psychology*, 17, 271-320.

- R Core Team (2018). *R: A language and environment for statistical computing*, R foundation for statistical computing, Vienna, Austria. Retrieved from <https://www.R-project.org/>. (December 20, 2018.)
- Rabbie, J. M. (1982). The effects of intergroup competition and cooperation on intragroup and intergroup relationships. In V. J. Derlega & J. Grzelak (Eds.), *Cooperation and helping behavior: Theories and research* (pp. 123-149). New York: Academic Press.
- Rabbie, J. M., & Horwitz, M. (1969). Arousal of ingroup-outgroup bias by a chance win or loss. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 269-277.
- Rabbie, J. M., Schot, J. C., & Visser, L. (1989). Social identity theory: A conceptual and empirical critique from the perspective of a behavioural interaction model. *European Journal of Social Psychology*, 19, 171-202.
- Rabbie, J. M., & Wilkens, G. (1971). Intergroup competition and its effect on intragroup and intergroup relations. *European Journal of Social Psychology*, 1, 215-234.
- Reizábal, L & Ortiz, G. (2011). National identity and ingroup/out-group attitudes with Basque and Basque-Spanish children growing up in the Basque country. *European Journal of Developmental Psychology*, 8, 98-115.
- Reizábal, L., Valencia, J., & Barrett, M. (2004). National identifications and attitudes to national ingroups and outgroups amongst children living in the Basque country. *Infant and Child Development*, 13, 1-20.

- Reysen, S., & Branscombe, N. R. (2010). Fanship and fandom: Comparisons between sport and non-sport fans. *Journal of Sport Behavior*, 33, 176-193.
- Reysen, S., Plante, C. N., Roberts, S. E., & Gerbasi, K. C. (2015). Ingroup bias and ingroup projection in the furry fandom. *International Journal of Psychological Studies*, 7, 49-58.
- Rosenthal, R., & Jacobson, L. (1968). Pygmalion in the classroom. *Urban Review*, 3, 16-20.
- Runciman, W. G. (1966). *Relative deprivation and social justice: A study of attitudes to social inequality in twentieth-century England*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Ryen, A. H., & Kahn, A. (1975). Effects of intergroup orientation on group attitudes and proxemic behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 302-310.
- Sachdev, I., & Bourhis, R. Y. (1991). Power and status differentials in minority and majority group relations. *European Journal of Social Psychology*, 21, 1-24.
- 坂田 桐子・三沢 良 (2016). 組織と集団メカニズム 北村 英哉・内田 由紀子 (編) 社会心理学概論 (pp.189-192) ナカニシヤ出版
- Scheepers, D., Spears, R., Doosje, B., & Manstead, A. S. R. (2006). Diversity in in-group bias: Structural factors, situational features, and social functions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 944-960.
- Shamir, M., & Sullivan, J. L. (1985). Jews and Arabs in Israel: Everybody hates somebody, sometime. *Journal of Conflict Resolution*, 29, 283-305.

- Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., & Sherif, C. W. (1961). *Intergroup conflict and cooperation: The Robbers Cave Experiment* Vol. 10. Norman, OK: University of Oklahoma.
- Sidanius, J. & Pratto, F. (1999). *Social dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression*. New York: Cambridge University Press.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- Simpson, B. (2003). Sex, Fear, and Greed: A social dilemma analysis of gender and cooperation. *Social Forces*, 82, 35-52.
- Simpson, B. (2006). Social identity and cooperation in social dilemmas. *Rationality and Society*, 18, 443-470.
- Skevington, S. M. (1981). Intergroup relations and nursing. *European Journal of Social Psychology*, 11, 43-59.
- Skrypnik, B. J., & Snyder, M. (1982). On the self-perpetuating nature of stereotypes about women and men. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 277-291.
- Snyder, C. R., Lassegard, M., & Ford, C. E. (1986). Distancing after group success and failure: Basking in reflected glory and cutting off reflected failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 382-388.
- Stroebe, K., Lodewijkx, H. F. M., & Spears, R. (2005). Do unto others as they do unto you: Reciprocity and social

- identification as determinants of ingroup favoritism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 831-845.
- Struch, N., & Schwartz, S. H. (1989). Intergroup aggression: Its predictors and distinctness from in-group bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 364-373.
- 杉浦 仁美・坂田 桐子・清水 裕士 (2014). 集団と個人の地位が社会的支配志向性に及ぼす影響 社会心理学研究, 30, 75-85.
- Sumner, W. G. (1906). *Folkways: A study of the sociological importance of usages, manners, customs, mores, and morals*. Boston, MA: Ginn and Company.
- (サムナー, W. G. 青柳 清孝・園田 恭一・山本 英治 (監訳) (2005). フォークウェイズ 現代社会学体系 3 青木書店)
- Sunar, D. G. (1978). Stereotypes of the powerless: A social psychological analysis. *Psychological Reports*, 43, 511-528.
- スポーツニッポン (2016). '16 広島カープ開幕特集号, 3月15日, 8-9, 20-21.
- 鈴木 直人・金野 祐介・山岸 俊男 (2007). 信頼行動の内集団バイアス——最小条件集団を用いた分配者選択実験——心理学研究, 78, 17-24.
- Tajfel, H. (1970). Experiments in intergroup discrimination. *Scientific American*, 223, 96-102.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.
- Tajfel, H., Jahoda, G., Nemeth, C., Campbell, J. D., & Johnson, N. (1970). The development of children's preference for

- their own country: A cross-national study. *International Journal of Psychology*, 5, 245-253.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W.G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks/Cole.
- Tajfel, H. (1982). Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, 33, 1-39.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W.G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations*. (pp. 7-24). Chicago: Nelson-Hall.
- Tooby, J., & Cosmides, L. (1988). The evolution of war and its cognitive foundations (Institute for Evolutionary Studies Technical Report 88-1). Retrieved from <https://www.cep.ucsb.edu/papers/Evolofwar.pdf> (December 20, 2018).
- Trivers, R. L. (1971). The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.
- Turner, J. C. (1975). Social comparison and social identity: Some prospects for intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 5, 5-34.
- Turner, J. C., & Oakes, P. J. (1986). The significance of the social identity concept for social psychology with reference to individualism, interactionism and social influence. *British Journal of Social Psychology*, 25, 237-252.
- Turner, J. C., & Reynolds, K. J., (2012). Social categorization theory. In P. A. M. van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology*

- (Vol. 2, pp. 399-417). Thousand Oaks, CA: SAGE.
- Van den Berghe, P. L. (1967). *Race and Racism: A Comparative Perspective*. New York: Wiley.
- Vázquez, J. J., Panadero, S., & Zúñiga, C. (2017). Content and uniformity of stereotypes and meta-stereotypes of homeless people in Madrid (Spain). *Journal of Community Psychology*, 45, 128-137.
- Velez, J. A. (2015). Extending the theory of bounded generalized reciprocity: An explanation of the social benefits of cooperative video game play. *Computers in Human Behavior*, 48, 481-491.
- Vezzali, L., Andrighetto, L., Trifiletti, E., & Visintin E. P. (2012). Perceiving status (in)stability in a low-status group: The effects of identification on explicit and implicit intergroup attitudes. *Social Psychology*, 43, 33-40.
- Wakefield, K. L., & Wann, D. L. (2006). An examination dysfunctional sport fans: Method of classification and relationship with problem behaviors. *Journal of Leisure Research*, 38, 168-186.
- Wann, D. L., & Branscombe, N. R. (1990). Die-hard and fair-weather fans: Effects of identification on BIRGing and CORFing tendencies. *Journal of Sport and Social Issues*, 14, 103-117.
- Wann, D. L., & Branscombe, N. R. (1993). Sports fans: Measuring degree of identification with their team. *International Journal of Sport Psychology*, 24, 1- 17.
- Wann, D. L., & Grieve, F. G. (2005). Biased evaluations of in-group and out-group spectator behavior at sporting events:

The importance of team identification and threats to social identity. *Journal of Social Psychology*, 145, 531-545.

渡部 幹・寺井 滋・林 直保子・山岸 俊男 (1996). 互酬性の期待にもとづく 1 回限りの囚人のジレンマにおける協力行動 実験社会心理学研究, 36, 183-196.

Wilson, W. (1971). Reciprocation and other techniques for inducing cooperation in the prisoner's dilemma game. *Journal of Conflict Resolution*, 15, 167-195.

Wilson, W., & Miller, N. (1961). Shifts in evaluations of participants following intergroup competition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 428-431.

Yamagishi, T., Jin, N., & Kiyonari, T. (1999). Bounded generalized reciprocity: Ingroup boasting and ingroup favoritism. *Advances in Group Processes*, 16, 161-197.

Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (2000). The group as the container of generalized reciprocity. *Social Psychology Quarterly*, 63, 116-132.

Yamagishi, T., Makimura, Y., Foddy, M., Matsuda, M., Kiyonari, T., & Platow, M. J. (2005). Comparisons of Australians and Japanese on group-based cooperation. *Asian Journal of Social Psychology*, 8, 173-190.

Yamagishi, T., & Mifune, N. (2008). Does shared group membership promote altruism?: Fear, greed and reputation. *Rationality and Society*, 20, 5-30.

Yamagishi, T., & Mifune, N. (2009). Social exchange and solidarity: in-group love or out-group hate? *Evolution and Human Behavior*, 30, 229-237.

Yamagishi, T., Mifune, N., Liu, J., & Pauling, J. (2008). Exchange of group-based favors: Ingroup bias in the

prisoner's dilemma game with minimal groups in Japan and New Zealand. *Asian Journal of Social Psychology*, 11, 196-207.

Yamagishi, T., Terai, S., Kiyonari, T., Mifune, N., & Kanazawa, S. (2007). The social exchange heuristic: Managing errors in social exchange. *Rationality and Society*, 19, 259-291.

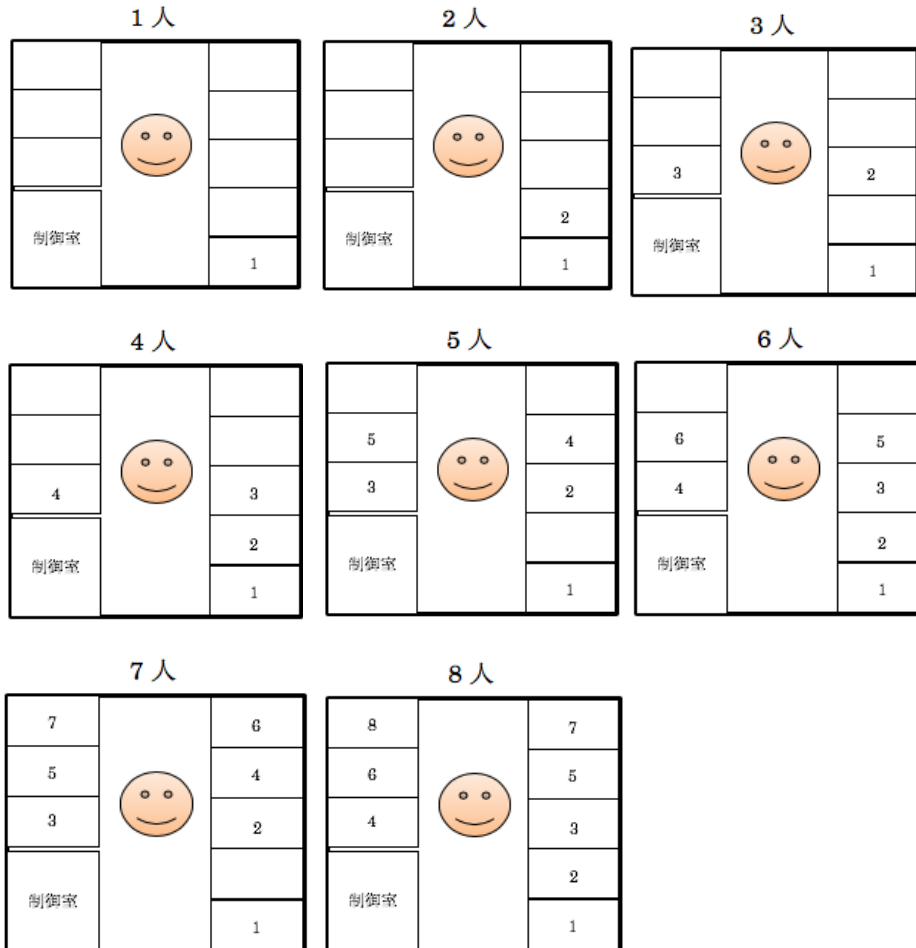
横田 晋大・結城 雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性——内集団ひいきの生起過程の多重性—— 心理学研究, 80, 246-251.

Yoshida, M., Gordon, B. S., Heere, B., & James, J. D. (2015). Fan community identification: An empirical examination of its outcomes in Japanese professional sport. *Sport Marketing Quarterly*, 24, 105-119.

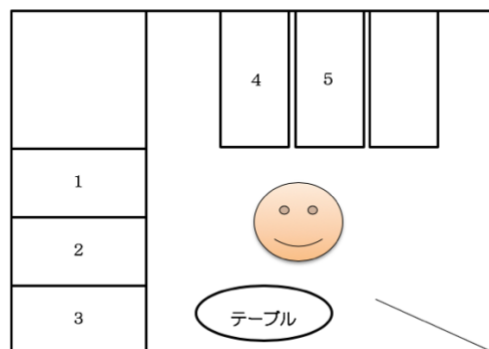
Yu, J., Zhu, L., & Leslie, A. M. (2016). Children's sharing behavior in mini-dictator games: The role of in-group favoritism and theory of mind. *Child Development*, 87, 1747-1757.

Appendix 1

実験参加者のブース配置（研究 3-1 及び 研究 3-2）

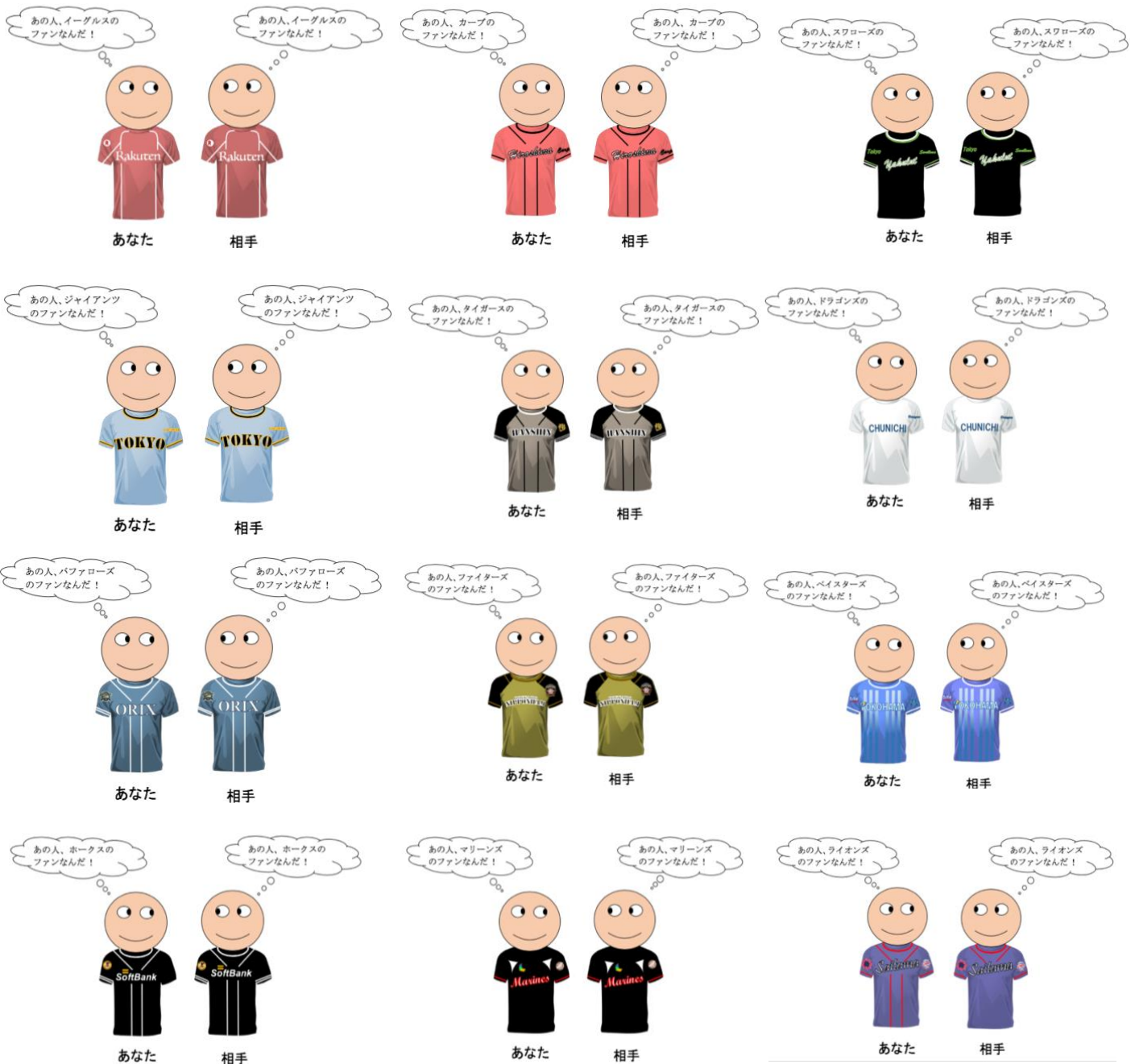


実験参加者のブース配置（研究 3-3）



Appendix 2

集団所属性の知識操作（研究3；12チーム）



謝 辞

博士論文を書きあげるにあたり，多くの方々にご協力していただきました。ここに記して感謝を申し上げます。まず，学部３年次よりご指導・ご鞭撻賜りました指導教員である中西大輔先生，同じく共同研究者である横田晋大先生に心より感謝いたします。中西先生，横田先生には，質問紙や質問項目の改良，投稿論文の添削，学会発表の練習，その他数々の申請書類やデータ収集の調整など長期にわたり多大なお時間を割いていただきました。また，実験費用や学会諸費用に関しても同様に支援していただいたため，一連の研究が充実したものとなりました。心より感謝申し上げます。

研究１（中川他，２０１５）を投稿する際には，清成透子先生（青山学院大学），三船恒裕先生（高知工科大学）に貴重なコメントをいただきました。清成先生からは実在集団を対象とした研究が陥る危険性やデメリットについてコメントいただき，三船先生には実験手法の妥当性や論文内での記述の不十分さについて丁寧な添削までしていただきました。内集団ひいきの研究に精通した両先生にいただいたご意見は，大変勉強になりました。心よりお礼申し上げます。

研究３-１と３-２では実験者として当時中西ゼミの４年生であった廣中龍一さん，３年生の友近桃葉さんにご協力していただきました。事前のミーティングを含め，かなりの時間を実験遂行に費やしていただき，ありがとうございました。研究３-３の追試は，神戸大学で実施されたものであり，実験には神戸大学の大坪庸介先生をはじめ，実験協力者として研究生の金欣さん，薛佳儀さん，学部生の皆様にご協力を賜りました。特に，大坪先生には Sona システムの都合上，

毎朝早くに名簿を作成していただく必要があり，毎回実験に合わせて準備していただきました。さらに，研究生のお二人にも午前中の実験準備を一緒にしていただいたり，細かい実験手続きを完璧に覚えていただいたり，多くの時間を割いていただきました。そのおかげで，1週間の間で実験をスムーズに進行することができました。ここに記して感謝申し上げます。

研究4は広島修道大学の中嶋 智史先生の授業内でデータを取らせていただきました。中嶋先生と実験に協力していただいた広島修道大学の学生に感謝いたします。研究5-1では広島大学の小宮 あすか先生の授業でデータを取らせていただきました。また，その際には同大学の上野 裕介さんに進行をお手伝いしていただきました。小宮先生，上野さん，協力していただいた広島大学の学生の方々に感謝いたします。

最後に，修士時代の同期である泉 愛さん，中島 壮さん，松岡 美輝さんには，私の実験が行われる前段階の構想を相談したり，質問紙に回答して矛盾した点がないか確認してもらったりなど研究活動を始めるにあたって遠慮なく意見が交換できる存在でした。心よりお礼申し上げます。博士後期過程に入り，初めて発表した院生リーグでも多くの方々と意見交換，交流することができました。同期のいない中でこの院生リーグが研究のモチベーションを高められる場でもありました。院生リーグで意見をくださった大学院生の方，歴代幹事（大阪大学：大工 泰裕さん，岡山大学：鉄川 大健さん，関西学院大学：中村 早希さん）に感謝を申し上げます。